

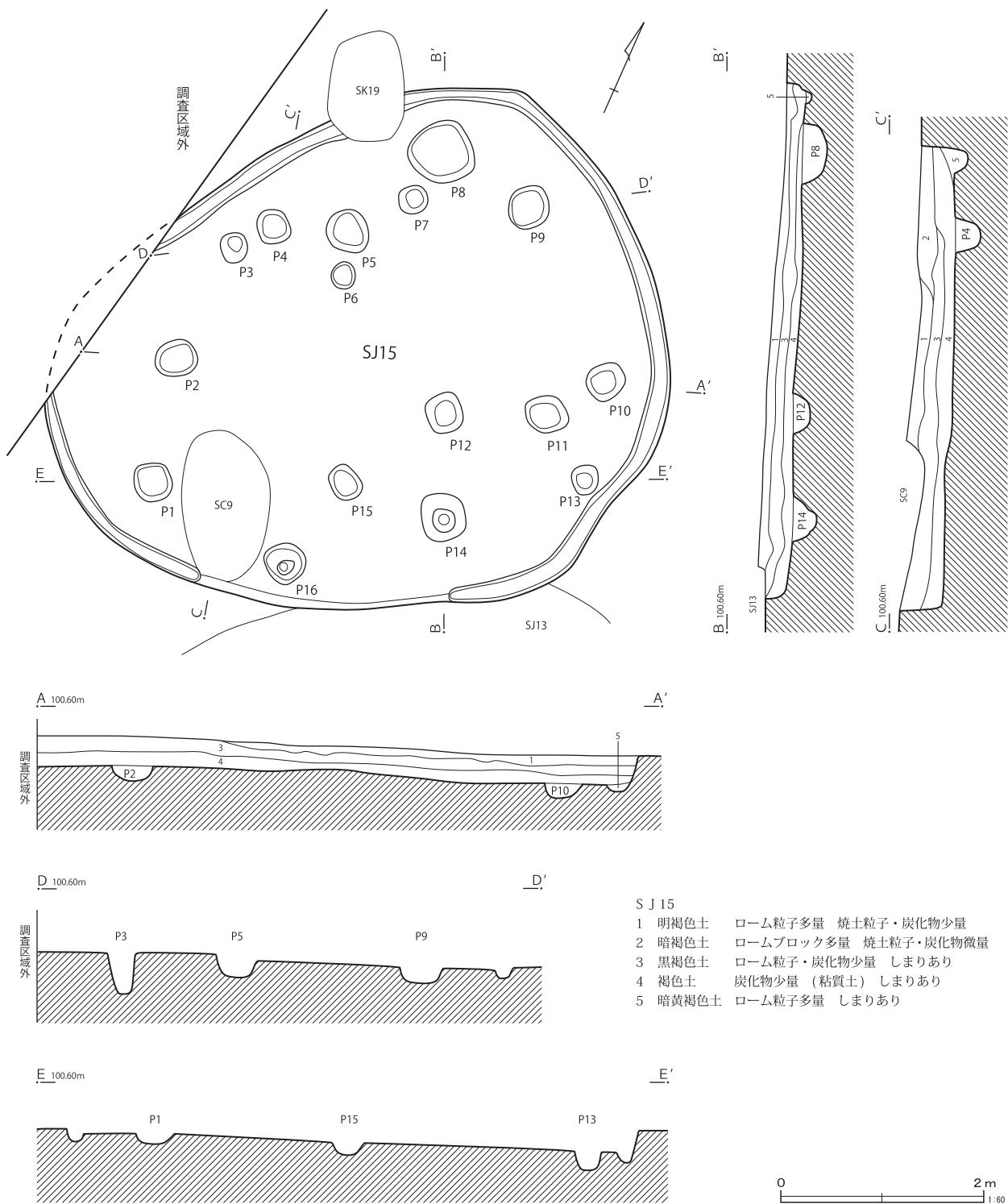
ことができなかつた。

炉跡は検出されなかった。

第150～153図は検出された遺物である。第149図の遺物出土状況から、多くの遺物が覆土上層から検出されている。下層から出土している第150

図4・5の土器が、住居跡の時期にほぼ伴うと考えられる。

第150図1はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部から胴上部が残存している。口縁部には大小の突起が貼付される。正面には眼鏡状突起が貼付さ



第148図 第15号住居跡

れる。側面には円形文を貼付した小突起を貼付している。突起を基準に口縁部は4単位に区画され、それぞれの突起から隆帯が垂下し、口縁部には隆帯で入れ子状のS字文などを施文している。隆帯で区画された内側は、短沈線文で充填している。狭い頸部は無文帯となっている。胴部とは隆帯で区画し、隆帯で施文される胴部の文様は不明である。隆帯上には刻みが施されている。推定口径44cmである。

第150図2は円筒形の深鉢形土器で、底部は欠損している。無文の口縁部と文様帯は沈線で区画し、胴部とは隆帯で区画している。文様帯には隆帯で逆C字状の文様などを貼付している。胴下半は無文である。口径13.8cmである。

第150図3は円筒形の深鉢形土器で、底部は欠損している。無文の口縁部とは沈線で区画し、胴部とは平行する2本の沈線で区画している。文様帯内も沈線文のみを使用している。文様の全容は不明だが、対向する渦巻文などを施文している。胴部は地文のみで、単節R Lの縄文で縦方向に施文している。推定口径は14cmである。

第150図4は口縁部から胴上部が失われている。胴部は隆帯による多段構成をとっている。文様帯内は隆帯で三角形状などに区画している。上段の隆帯脇にはキャタピラ状爪形文が施文され、爪形文に沿って三角押文状のペン先状結節沈線文や、小波状沈線文を施文している。下段では隆帯脇にキャタピラ状爪形文が施文される。文様帯間には上下2段の小波状沈線文を施文している。底径13.5cmである。

第150図5は口縁部のみ残存している。正面の

口唇部には、対になる隆帯が縦方向に貼付される。やや外反する口縁部と胴部は刺突文を施文する隆帯で区画している。口縁部、胴部ともに文様は隆帯で分割され、その内側に5本1組の条線で文様を施文している。推定口径16cmである。

第150図6は地文のみが残る胴下半部と底部のみが残存している。地文は多条R Lの縄文で、条が縦方向になるよう、斜め方向に施文している。推定底径10.4cmである。

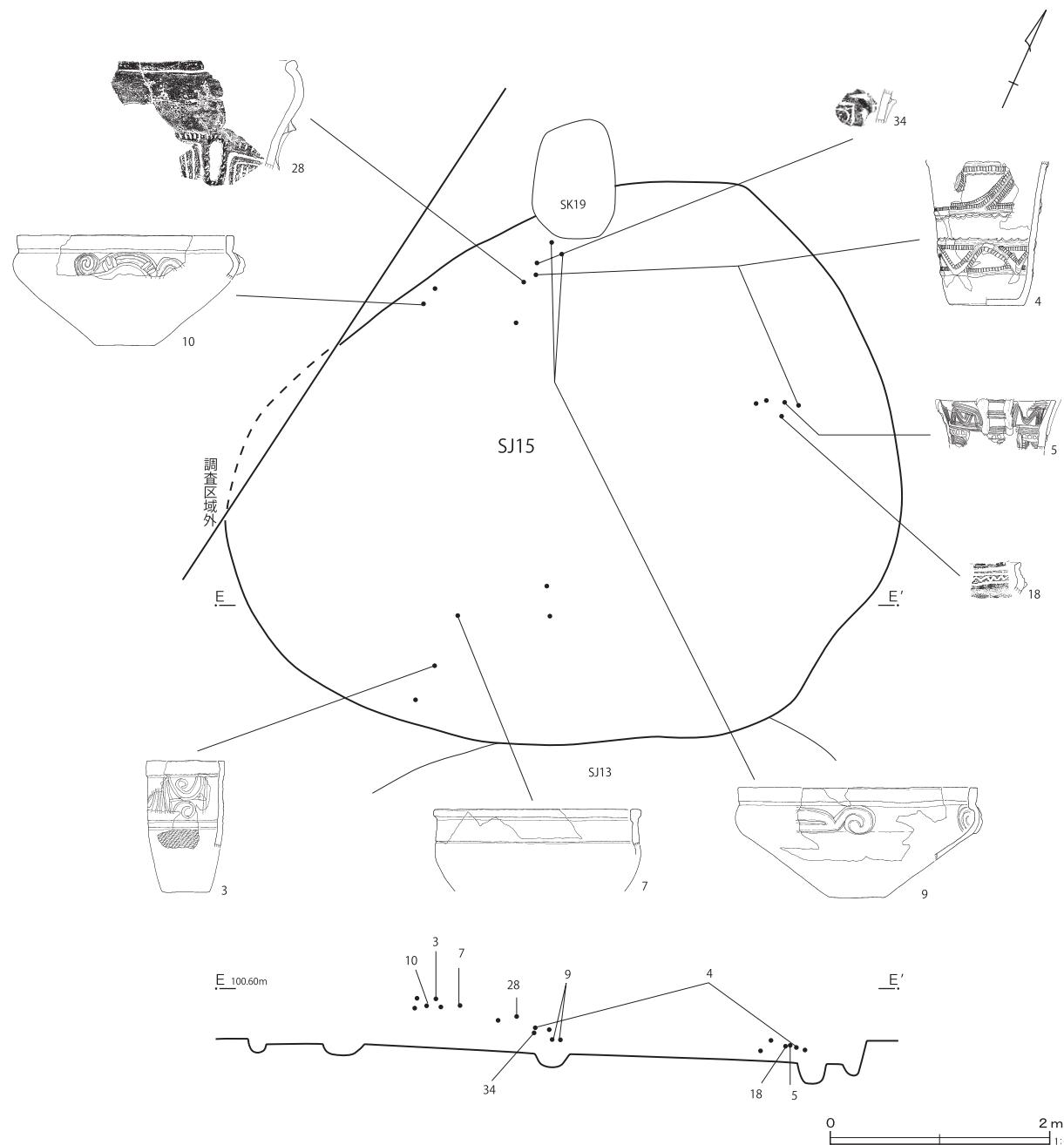
第151図7～14は鉢形・浅鉢形土器である。7の口縁部は無文で、無文の頸部と沈線文で区画している。頸部と胴部も沈線文で区画する。推定口径37.3cmである。8は小型の鉢形土器である。口径10.4cm、底径6.6cmである。9・10は無文の口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、屈曲する肩部に文様を施文するものである。偏平な隆帯で渦巻文などを施文している。推定口径は9が44cm、10が40cmである。11、13は口縁部が内屈するもので、器面は無文である。11の推定口径は30cm、推定底径は10.6cmである。13の推定口径は36cmである。12、14は底部で、いずれも無文である。推定底径は12が9.3cm、14が11cmである。

第152図15～42、第153図43～46は出土した土器片である。

第152図15～21は角押し状の結節沈線文などを施文する土器で、阿玉台系の土器を含んでいる。15～17は同一個体の土器で、口縁部には把手が貼付されると考えられる。隆帯で多段に文様帯が施文される。2段目には、楕円区画文を、3段目には三角区画文を隆帯で施している。文様帯には、3列の三角形状のペン先状結節沈線文を施文して

第16表 第15号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.37	0.36	0.10	P 7	0.29	0.27	0.18	P 12	0.37	0.35	0.16
P 2	0.41	0.35	0.15	P 8	0.62	0.60	0.23	P 13	0.30	0.26	0.20
P 3	0.30	0.26	0.40	P 9	0.46	0.41	0.15	P 14	0.47	0.42	0.24
P 4	0.32	0.31	0.22	P 10	0.37	0.34	0.23	P 15	0.34	0.27	0.15
P 5	0.45	0.39	0.20	P 11	0.40	0.36	0.11	P 16	0.41	0.39	0.15
P 6	0.26	0.24	0.13	—	—	—	—	—	—	—	—

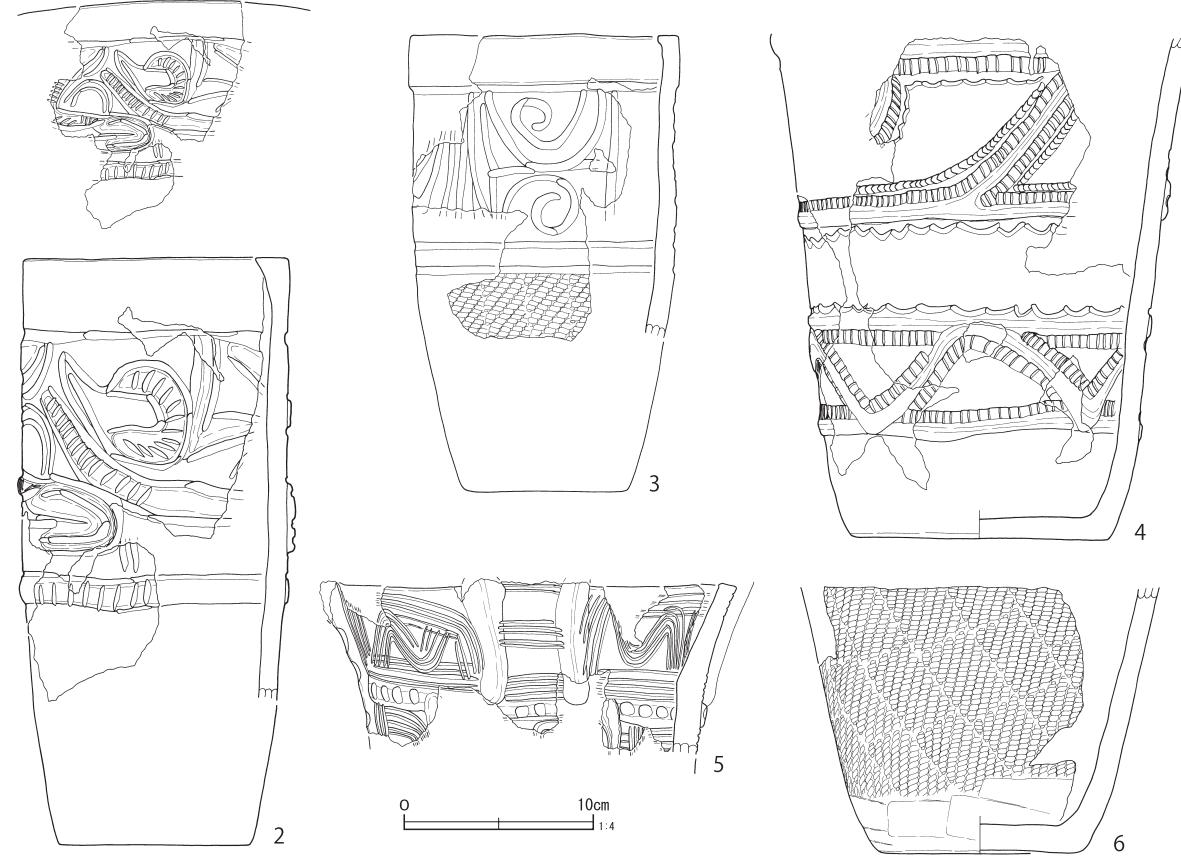


第149図 第15号住居跡遺物出土状況

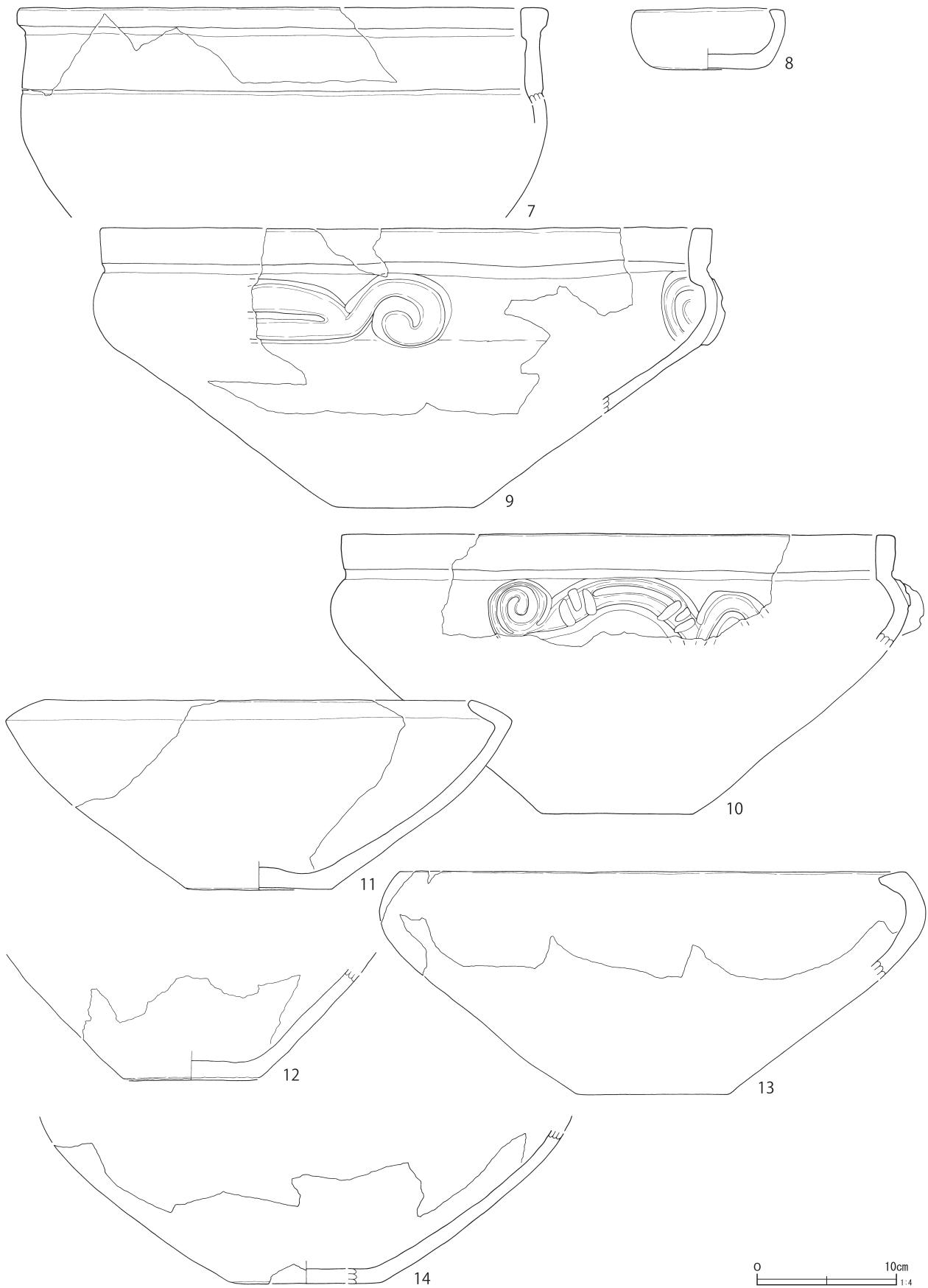
いる。1段目は斜方向に連続して施文し、2段目は隆帯脇に、3段目は隆帯脇と中央に縦方向に垂線を施文している。18・19は角押し状の結節沈線文を施文している。20・21は櫛歯状の条線を施文するものである。

第152図22～27は隆帯脇にキャタピラ状爪形文と、爪形文に沿って小波状沈線文や、三角押文状のペン先状結節沈線文を施文する勝坂系土器である。27は区画内を斜沈線文で充填している。

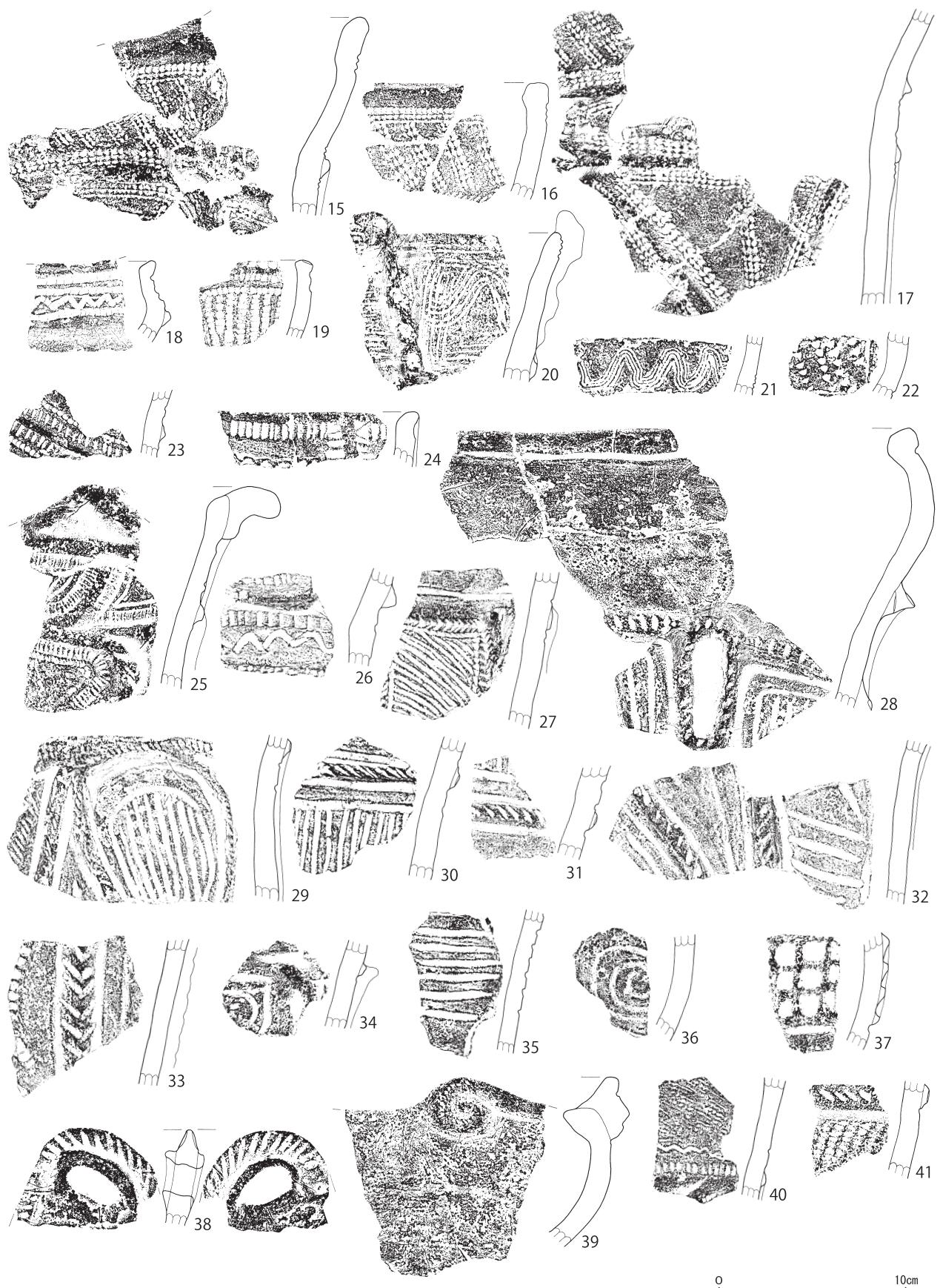
第152図28～36、38～41は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器である。28～32は刻みを持つ隆帯によって区画された文様内に短沈線文を充填している。33は隆帯上に交互刺突文を施している。35・36は沈線文のみが残存する。38は把手である。把手には円孔を穿いている。39は無文の口縁部の破片で、波頂部には隆帯を渦巻状に貼付している。40・41は地文のみが残



第150図 第15号住居跡出土遺物（1）



第151図 第15号住居跡出土遺物（2）



第152図 第15号住居跡出土遺物（3）



第153図 第15号住居跡出土遺物（4）

存する土器片である。

37は曾利系の深鉢形土器の、重弧文系土器の頸部分と考えられる。

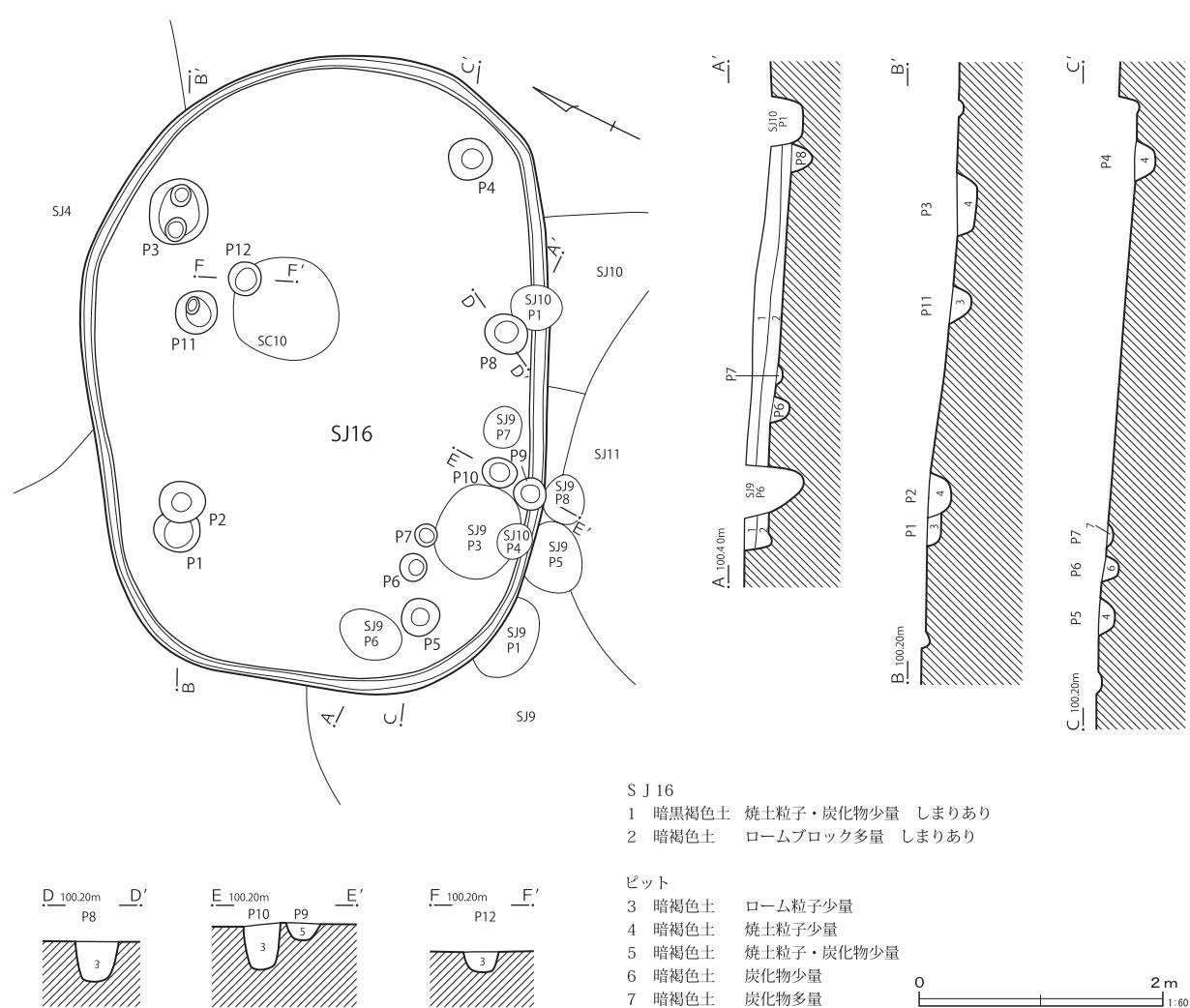
42は無文の底部である。

43は無文の鉢形土器、44は浅鉢形土器の口縁部の破片である。44は角頭状の口唇部を持つもので、肩部に偏平な隆帯で渦巻文などを施文している。

第153図45～54は出土した石器である。45は磨

製石斧で、刃部を欠損している。46～49、51は打製石斧である。46のみ完形で、他は基部や刃部が欠損するものである。50は敲石である。欠損した打製石斧の端部を使用している。52・53は磨石としたが、器面に敲打痕が認められる。54は砥石である。

出土遺物から、住居跡の時期は勝坂式終末と考えられる。



第154図 第16号住居跡

第17表 第16号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.38	0.24	0.13	P 5	0.31	0.30	0.12	P 9	0.28	0.25	0.15
P 2	0.37	0.34	0.18	P 6	0.23	0.21	0.13	P 10	0.28	0.25	0.38
P 3	0.53	0.48	0.12	P 7	0.18	0.16	0.03	P 11	0.35	0.35	0.23
P 4	0.35	0.35	0.14	P 8	0.36	0.31	0.31	P 12	0.26	0.26	0.16

第16号住居跡（第154～157図）

K-5グリッドに位置する。第4・9・10号住居跡、第10号集石土壙と重複する。出土遺物や、遺構の重複部分の土層断面より、第4・10号住居跡よりは新しく、第9号住居跡よりは古い時期に相当する。第10号集石土壙は住居跡の廃棄後に構築されており、覆土内に掘り込まれたものである。壁に沿って壁溝が巡って検出されている。平面形は隅丸方形で、住居跡の平面形状と柱穴を基準とした主軸方位は、N-67°-Eをとる。規模は長径5.16m、短径3.75m、深さ0.25mを測る。壁溝の最大幅0.15m、深さ0.03mである。

柱穴は12本が検出された。柱穴は細く、浅いものがほとんどであるが、その配置からP2～P5が主柱穴であったと考えられる。

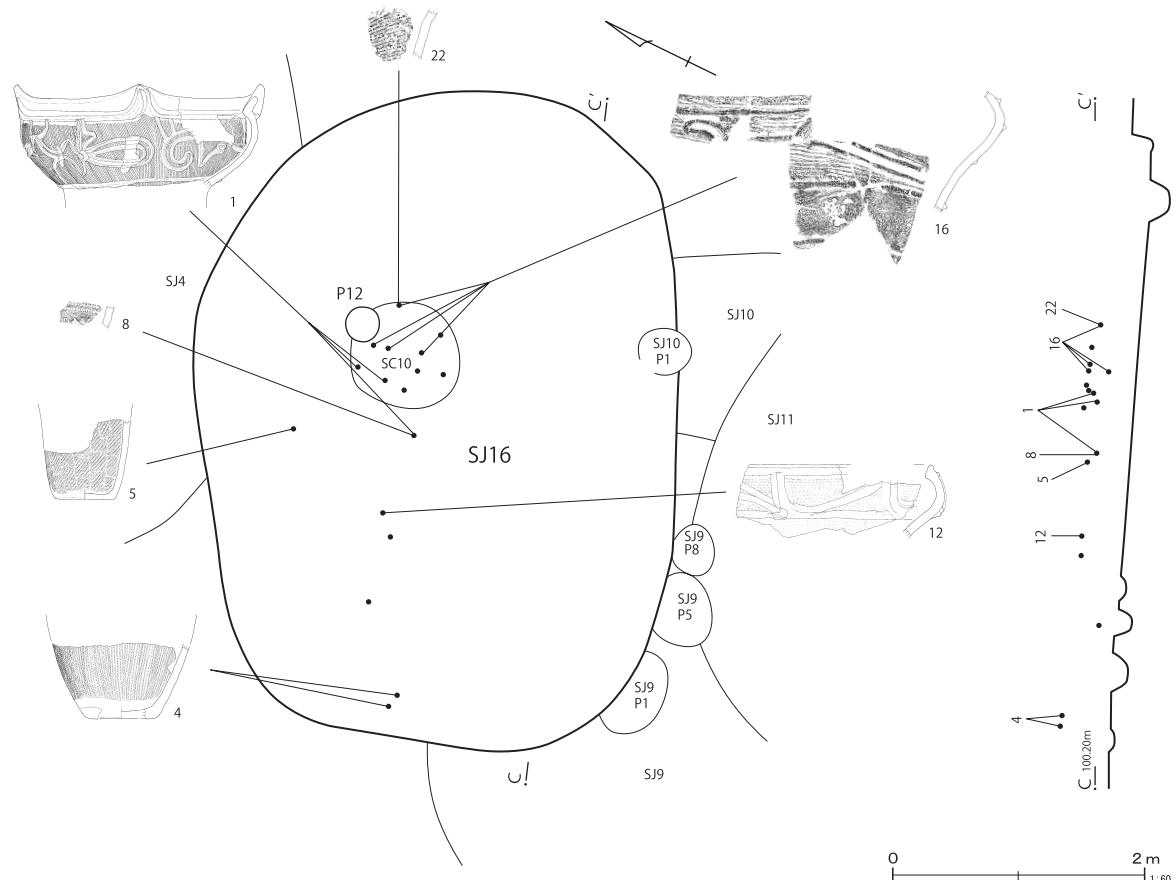
炉跡は検出されなかった。

第156・157図は出土した遺物である。第155図

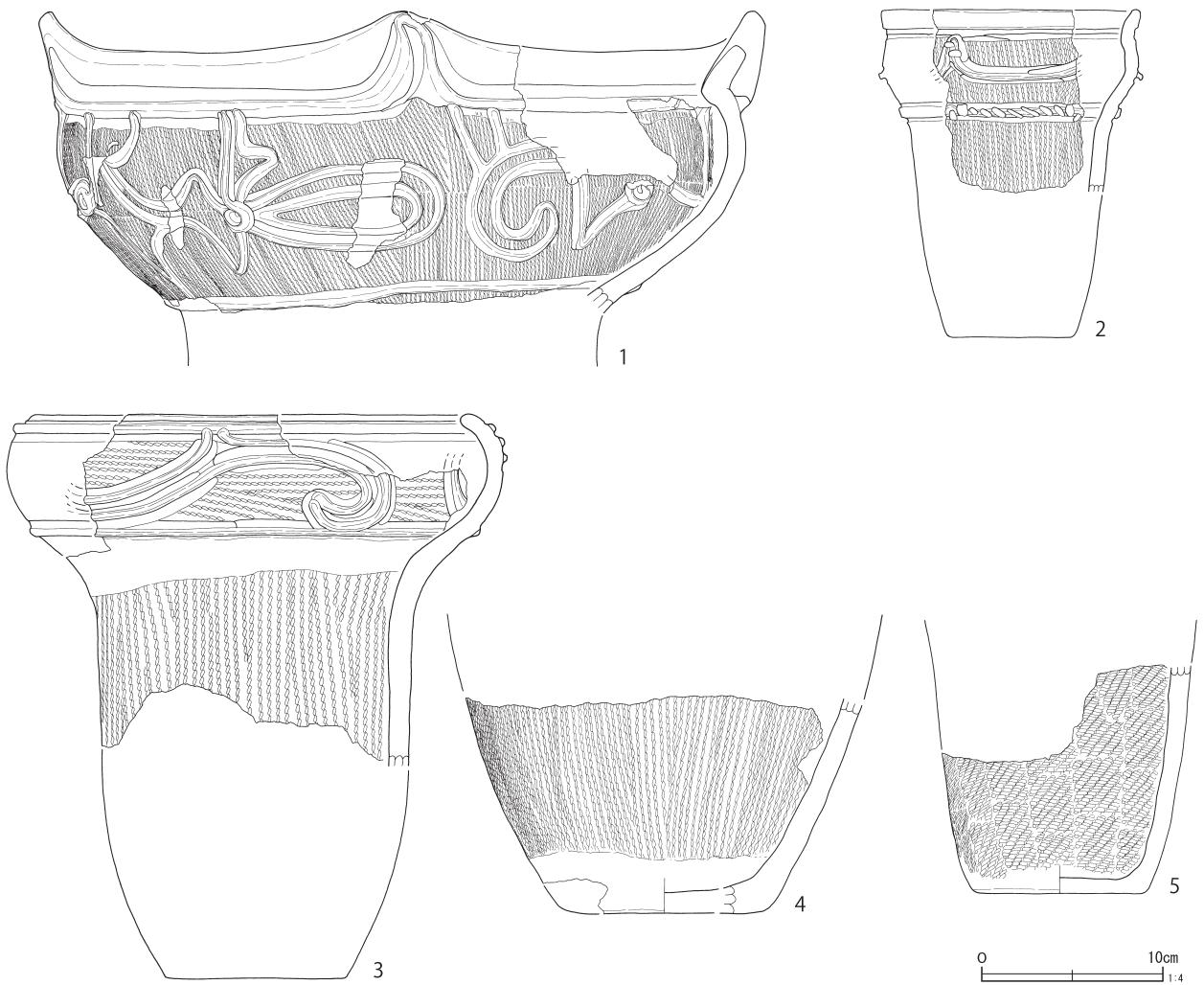
の遺物出土状況によると、遺物の多くが覆土上層から検出されており、床面直上のものは出土していない。

第156図1はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下には外反する無文部分を持ち、口縁部文様帶とは、沈線文を沿わす隆帯によって区画される。口縁部文様帶と区画する隆帯は、波頂部に向かい逆V字状に施文される。口縁部文様帶には、細い隆帯で文様が施文される。隆帯脇の沈線文は、部分的に施文される。文様は渦巻文や橢円形状や、抽象的な文様が施文されている。頸部に無文帶はなく、沈線を伴わない1本隆帯を巡らせ、胴部と区画している。地文は撲糸文Lである。推定口径39cmである。

第156図2はキャリパー形の小型の深鉢形土器の口縁部から胴部である。口唇部は外反し、狭い無文部を持ち、口縁部文様帶とは、沈線を巡らせ



第155図 第16号住居跡遺物出土状況



第156図 第16号住居跡出土遺物（1）

て無文部と区画している。口縁部文様帶には、連弧状に隆帯を貼付し、弧頂部には隆帯上に交互刺突を施文する。頸部には隆帯を巡らし、隆帯上には刺突文を施している。弧頂部直下に対応する隆帯上には、交互刺突が施されている。胴部は地文のみが施文され、撚糸文Lを縦方向に施文している。推定される口径は14cmである。

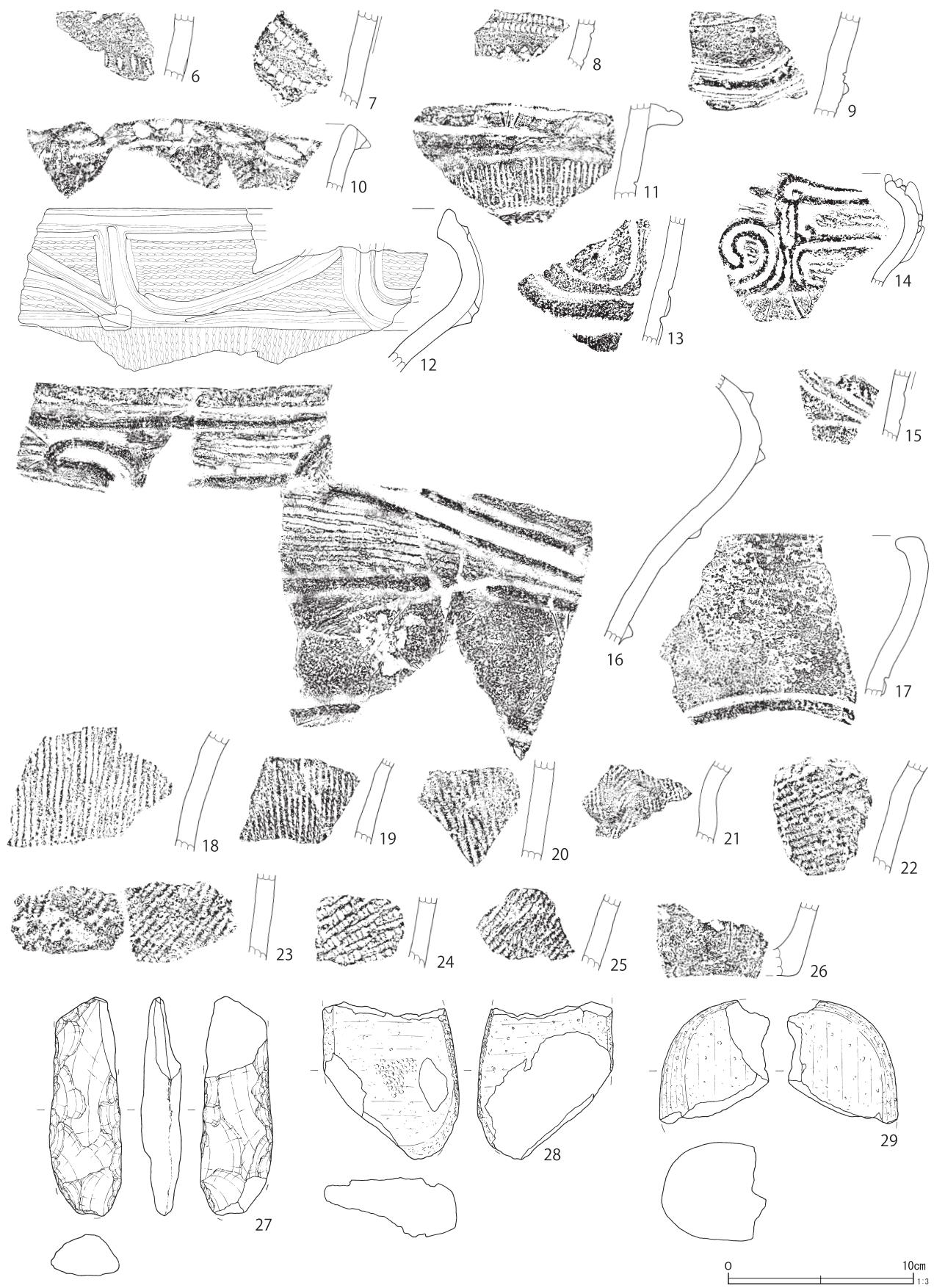
第156図3はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部から胴部で、底部は欠損している。強く内湾する口縁部には、隆帯によってS字文が施文される。隆帯脇には沈線を沿わせている。S字文は口唇部下で、一部途切れさせて口唇部を巡る隆帯と連結させている。胴部は地文のみが施文され、撚糸文Lを、口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文して

いる。頸部に区画はないが、地文を磨り消して無文部分を作り出す。推定口径は24.2cmである。

第156図4・5は深鉢形土器の底部である。地文のみが残されている。4の地文は、撚糸文Lである。推定される底径は11.4cmである。5の地文は多条R Lの縄文である。底径は9cmである。

第157図6・7、9は角押し状の結節沈線文などを施文する土器で、阿玉台系の土器を含む。いずれも、深鉢形土器の胴部の破片である。6は爪形文を横方向に施文する。9は隆帯脇に櫛齒状条線を施文している。

第157図8はキャタピラ状爪形文と、それに沿って、三角押文状のペン先状結節沈線文を施文する勝坂系土器である。



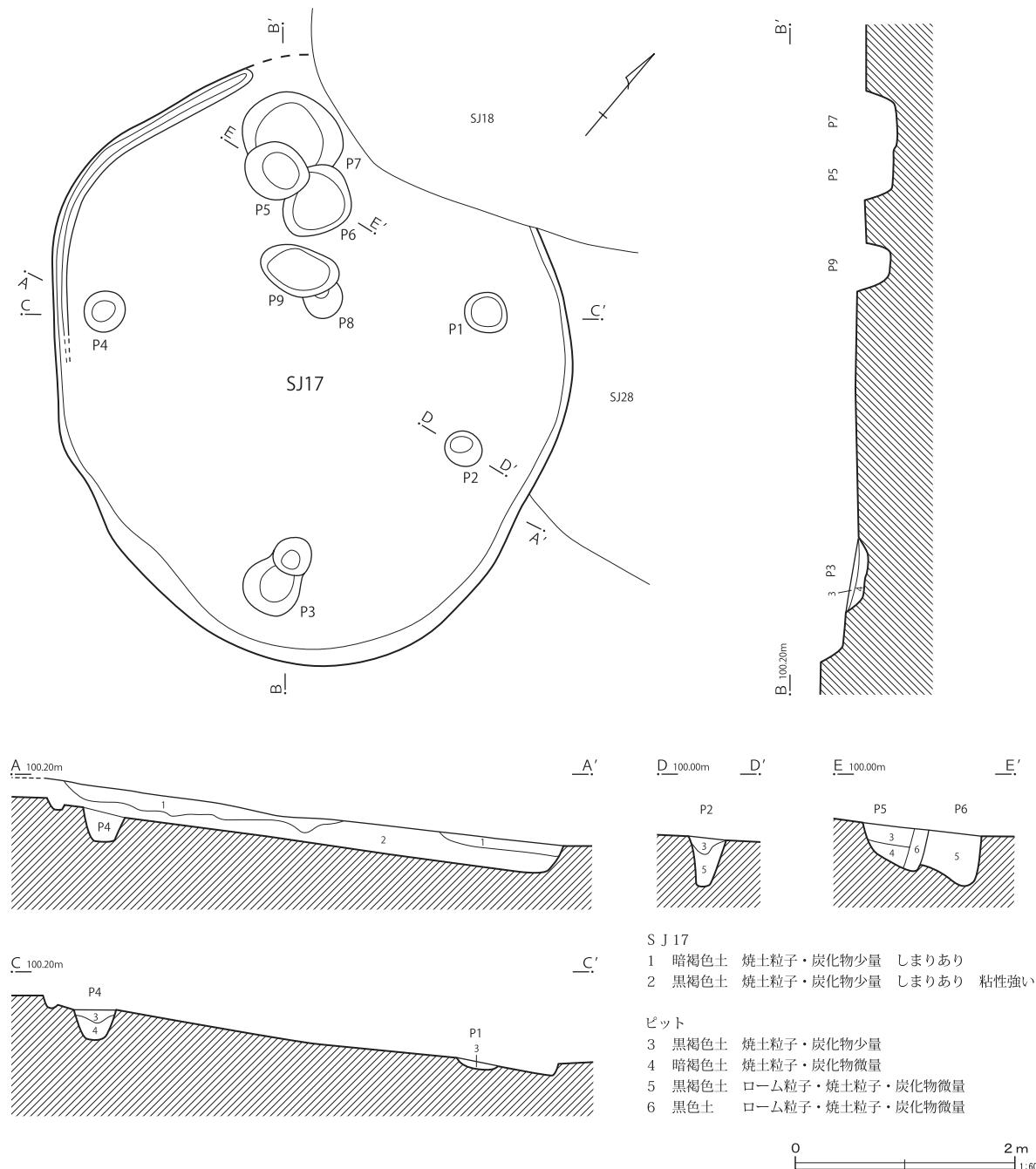
第157図 第16号住居跡出土遺物（2）

第157図13、15は隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器である。いずれも円筒形の深鉢形土器の破片である。

第157図10・11は大木系の土器である。口縁部が外反する土器で、10は口唇部に貼付した隆帯の端部を、圧痕状に押捺している。11は肥厚する口唇部に沈線文を施している。10の地文は縄文だが、

器面が荒れており、原体は不明である。11は撲糸文Lを施文している。

第157図12、14、16・17は、キャリバー形の深鉢形土器の口縁部片で、加曾利E系土器である。12、14、16は口縁部に文様帶を持つもので、口縁部は強く内湾している。隆帯で、S字文や渦巻文などを施文している。12は頸部に無文帶はなく、



第158図 第17号住居跡

第18表 第17号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.37	0.36	0.10	P 4	0.38	0.36	0.26	P 7	0.90	0.46	0.30
P 2	0.33	0.30	0.43	P 5	0.52	0.50	0.30	P 8	0.34	0.24	0.15
P 3	0.74	0.35	0.15	P 6	0.70	0.49	0.45	P 9	0.74	0.46	0.20

14、16の頸部は無文となっている。地文はいずれも撚糸文Lで、口縁部は横方向、胴部は縦方向である。17は口縁部が無文となる。

第157図18～25は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部の破片である。18は撚糸文L、19は撚糸文R、21、24・25は単節R Lの縄文、22・23は多条R Lの縄文を地文としている。

第157図26は底部の破片である。

第157図27～29は出土した石器である。27は打製石斧で、基部と刃部の一部を欠損している。28・29は磨石で、28は側縁と器面に敲打痕が認められる。

住居跡の時期は、出土遺物が加曽利E I式期であることからほぼ同時期と考えられる。

第17号住居跡（第158・159図）

L・M-6・7グリッドに位置する。第18・28号住居跡と重複する。本住居跡は、遺構の切り合い関係と、遺物の時期から第18号住居跡より古く、第28号住居跡よりは新しい。平面形は橢円形で、住居跡の平面形の長軸方向を基準とすれば、主軸方位はN-40°-Wである。規模は長径5.45m、短径4.64m、深さ0.28mを測る。部分的に壁溝が検出され、最大幅0.15m、深さ0.03mである。

柱穴は9本が検出された。P 1～P 5が主柱穴である可能性があるが、明確ではない。

炉跡は検出されなかった。

第159図1～27は出土した遺物である。遺物量は少なく、出土土器についてはそのほとんどが小破片であった。

1は円筒形の深鉢形土器の口縁部から胴部である。角頭状の口唇部を持つ口縁部は、無文である。口縁部の正面には橢円形の隆帯を貼付し、中央に

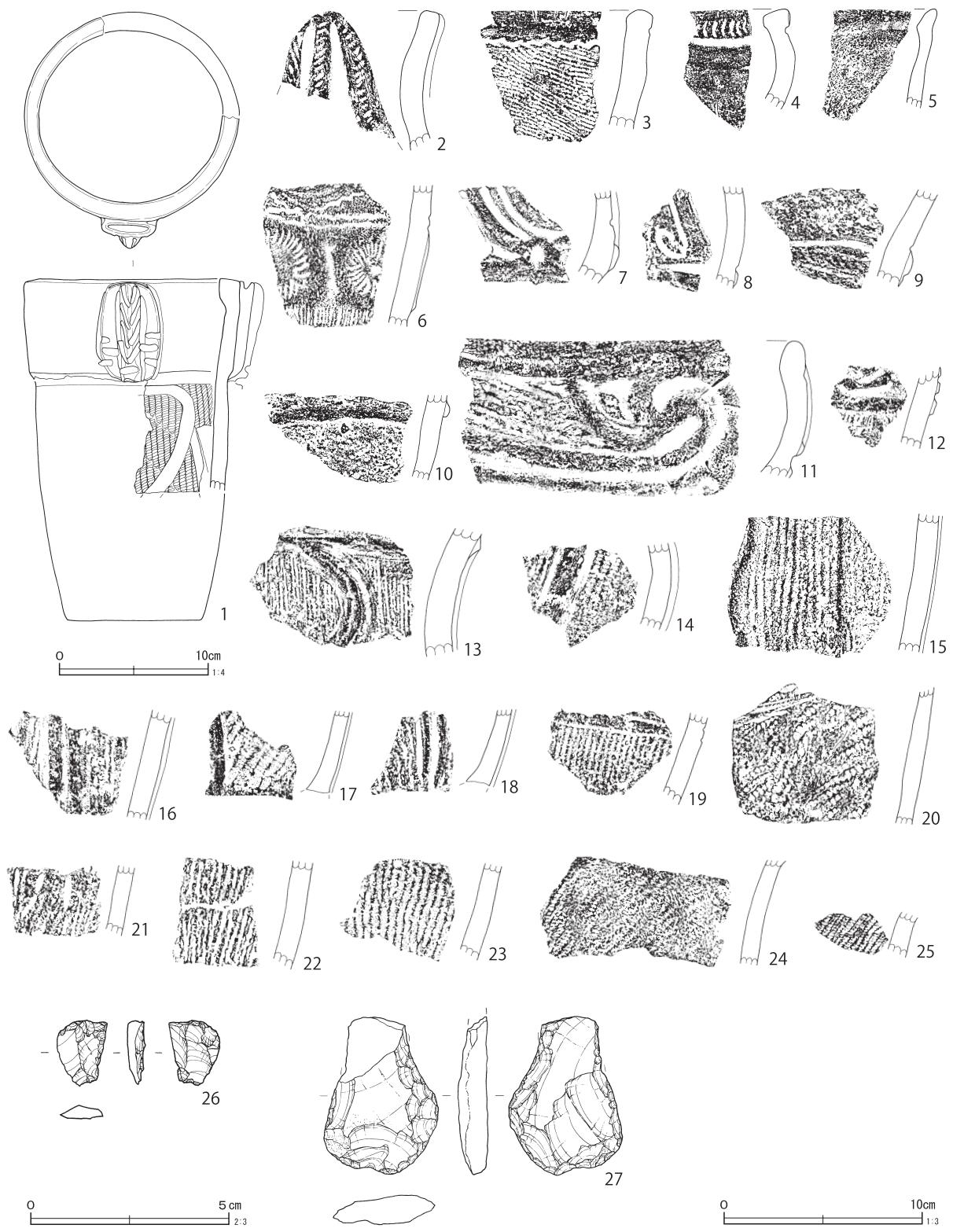
隆帯を口縁から垂下させている。隆帯上には、交互刺突文を施文している。口縁部と胴部は段差を持っており、胴部には幅広の浅い沈線文を施している。地文は多条R Lの縄文で、条線が縦方向に見えるよう、地文を斜め方向に施文している。口径は14.3cmである。

6は隆帯脇にキャタピラ状爪形文や、小波状沈線文を施文する勝坂系土器である。隆帯は橢円形状に施文されている。

2～5、7・8は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曽利E式初頭の土器である。2は把手部分である。3は口唇直下に小波状沈線文を施文する。5は無文の口縁部である。7・8はキャリパ一形の深鉢形土器の口縁部の破片で、8は隆帯上に刻みを持っている。

9～21は加曽利E式期の土器である。キャリパ一形の深鉢形土器の、口縁部から胴部の破片である。11・12、14は口縁部の破片で、口縁部には隆帯で渦巻文が施文されている。11・12の地文は撚糸文Lで、11は横方向に、12は胴部に縦方向に施文している。9は無文の頸部の破片である。10、13、15～18は胴部の破片で、隆帯によって直線的に垂下する懸垂文や、蛇行懸垂文を施文している。13、15・16は地文に撚糸文L、18は撚糸文Rを施文している。17、19・20は単節R Lの縄文を施文している。19～21は沈線で文様を施文している。19・20は頸部に沈線を巡らし、21は胴部に懸垂文を施している。19は多条R L、20は単節R Lの縄文、21は撚糸文Lを地文としている。

22～25は地文のみが施される胴部の破片である。22は撚糸文Rを、23、25は多条R Lの縄文を、24は単節R Lの縄文を地文としている。



第159図 第17号住居跡出土遺物

26・27は出土した石器である。26はくさび形石器である。黒曜石製で上端側からと下端側から調整を施している。27は打製石斧である。基部の一

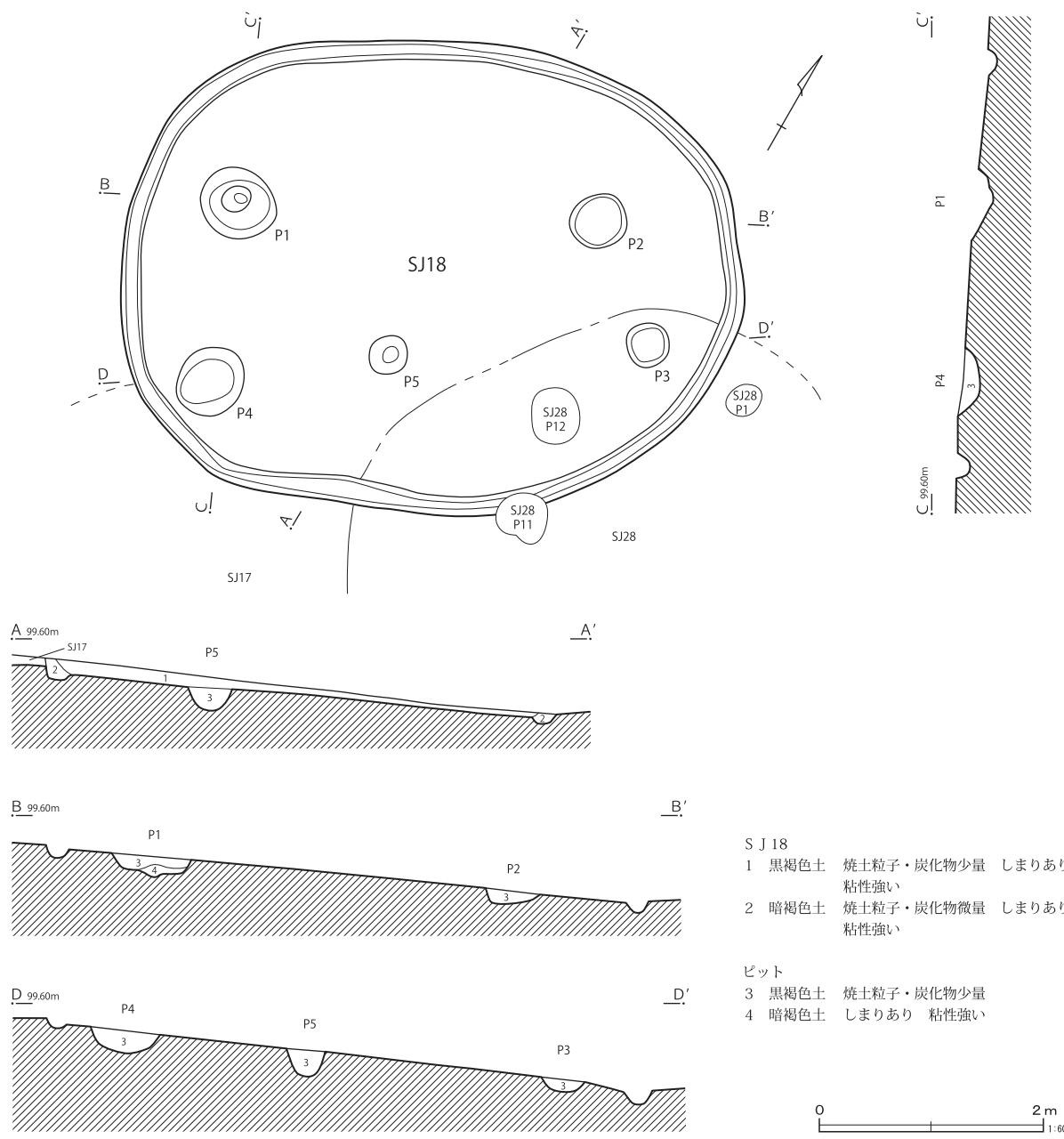
部を欠損している。

住居跡の時期は出土遺物から、加曾利E I式期と考えられる。

第18号住居跡（第160・161図）

L-6・7グリッドに位置する。住居跡は、北東方向に向かって緩やかに傾斜している。第17・28号住居跡と重複する。第17号住居跡との重複部分を通る、遺構断面図（AA'）から、本住居跡が第17号住居跡を掘り込んでいることがわかる。ま

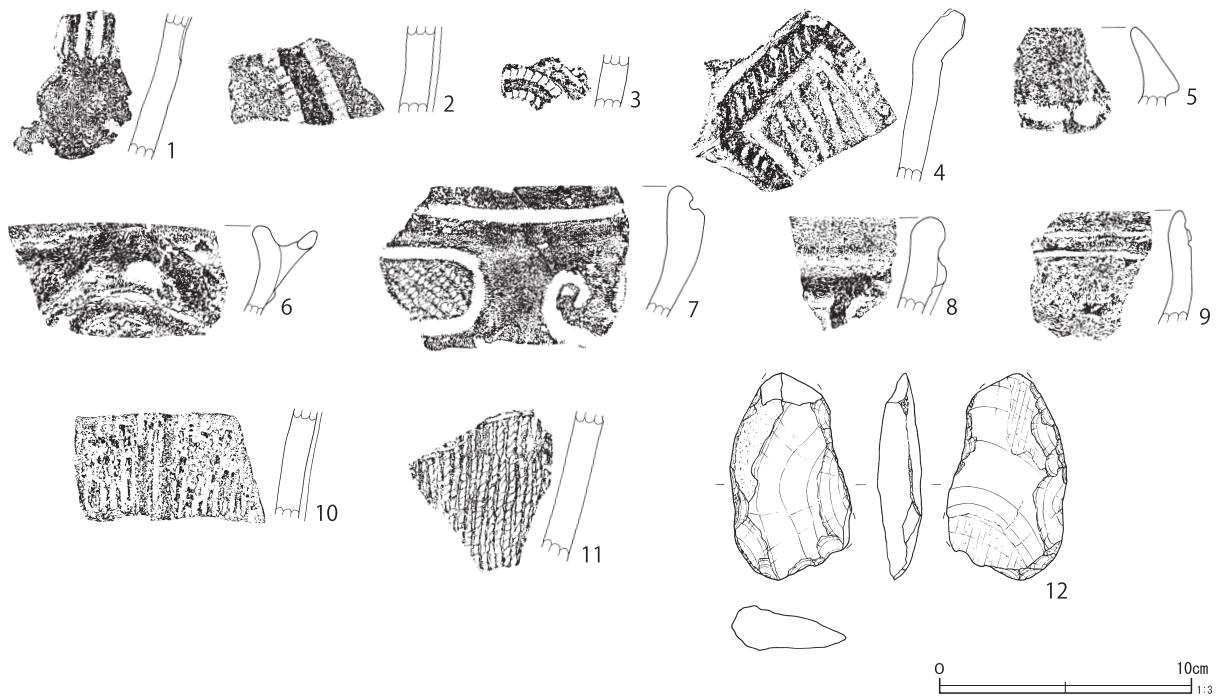
た、第28号住居跡が第17号住居跡よりも古いことから、本住居跡が重複する3軒の中で一番新しい時期となる。壁に沿って、壁溝が1条巡っている。平面形は隅丸方形だが、東西方向に細長くなっている。住居跡の形状と柱穴を基準とした主軸方位は、N-60°-Eをとるが、住居跡の向きは明確



第160図 第18号住居跡

第19表 第18号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.66	0.61	0.20	P 3	0.38	0.37	0.10	P 5	0.33	0.33	0.23
P 2	0.51	0.47	0.11	P 4	0.64	0.57	0.18	-	-	-	-



第161図 第18号住居跡出土遺物

ではない。規模は長径5.52m、短径4.22m、深さ0.14mを測る。壁溝の最大幅0.24m、深さ0.06mである。

柱穴は5本が検出された。P 1～P 4が主柱穴と考えられる。

炉跡は検出されなかった。

第161図1～12は検出された遺物である。遺物量はごく少ない。

1～11は出土した土器である。いずれも深鉢形土器の破片である。1～4は勝坂系の土器である。1は角押し状の結節沈線文を、隆帯脇に施文している胴部の破片である。2は隆帯脇にキャタピラ状爪形文を施文している。3は円筒形の深鉢形土器で、頸部文様帶に短沈線文を施文している。4は刻みを施す隆帯によって文様を施文する土器で、文様の内側に沈線文を施している。5～10は加曾利E系の土器である。5は無文の口縁部の破片である。6～9はキャリバー形の深鉢形土器の口縁部の破片である。6は大型の渦巻文を施文するもので、口縁部に橋状把手が貼付されている。7は口縁部に渦巻文を施文し、その間に楕円区画

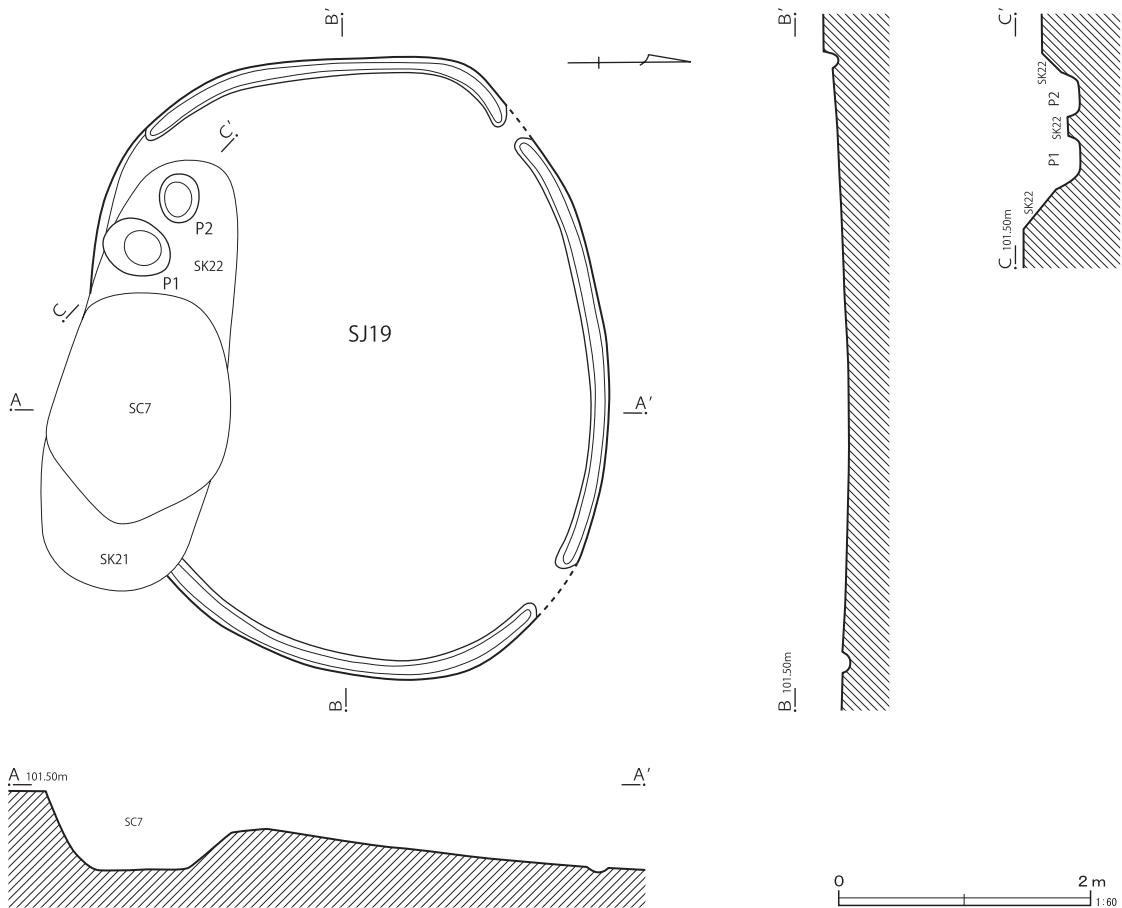
文を施文している。区画内には、単節R Lの縄文を横方向に施文している。8は口縁部に隆帯で文様を施文する土器であるが、小破片のため文様構成は不明である。9は口唇部下に隆帯を巡らす土器片だが、地文は器面が剥落しているため不明である。10は胴部の破片で、隆帯による懸垂文を施文している。11は地文のみを施文する胴部の破片である。地文として、撚糸文Lを縦方向に施文している。

12は打製石斧である。石器の出土量も少なく、図示できるものは12の1点のみであった。刃部に最大幅を持つものである。基部と刃部の一部を欠損する。裏面には擦痕が認められる。

住居跡の時期は遺物からは詳細な時期は断定できないが、出土土器の主体となる時期は、加曾利E式期である。

第19号住居跡（第162・163図）

M-5・6グリッドに位置する。北側方向に地山が傾斜している。覆土は残されておらず、壁溝の痕跡が認められるのみである。床面は失われて



第162図 第19号住居跡

第20表 第19号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.54	0.42	0.30	P 2	0.38	0.31	0.30	—	—	—	—

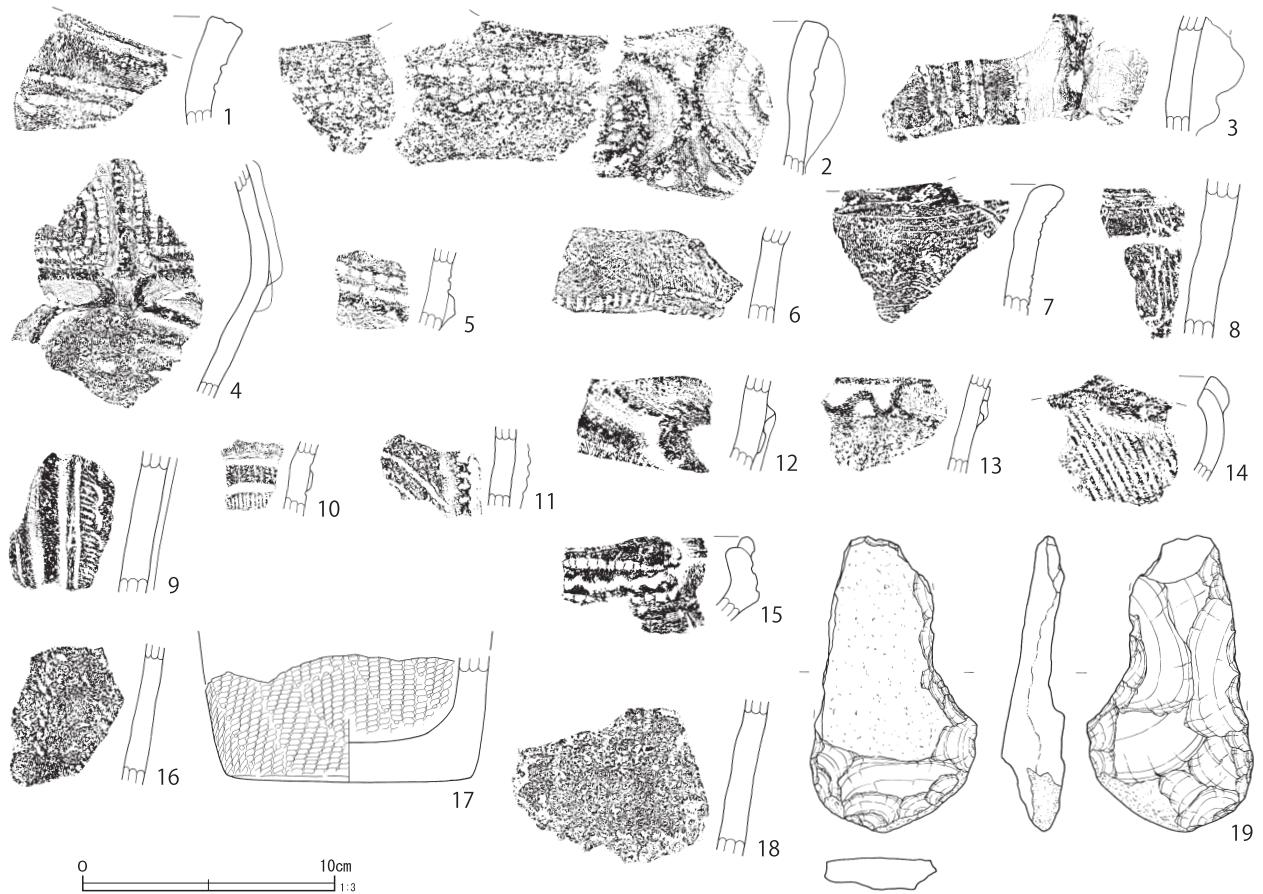
いると考えられ、そのため炉跡や柱穴のほとんどを検出することができなかった。第21・22号土壙、第7号集石土壙と重複する。土壙と集石土壙の断面図から、本住居跡が一番古い遺構であると推測される。平面形は楕円形であるが、炉跡はなく、また柱穴が検出されなかったことから、住居跡の長軸方向を主軸方位として計測した。主軸方位は、N-88°-Eをとる。規模は長径4.86m、短径4.04m、深さ0.13mを測る。壁溝の最大幅0.18m、深さ0.03mである。

柱穴は2本が検出された。

第163図1～19は検出された遺物である。遺物量は少なく、出土した土器も小破片がほとんどで

あった。

1～5、7・8は角押し状の結節沈線文などを施文する阿玉台系の土器である。1・2、5は同一個体で、胎土に金雲母を含む口縁部の破片である。隆帯によって、楕円形状の区画を施文し、区画内には、楕円形状に沿って2列の結節沈線文を施文している。3は立体的につまみ上げた隆帯の稜線上に、押圧状の刺突を加えている。方形に区画して施文した結節沈線文に沿って、3列の結節沈線文を施文している。4は口縁部に隆帯を垂下させ、対向する隆帯を胴部に施している。口縁部の区画内には3列の結節沈線文を施文している。7・8は櫛歯状の条線を施文している。



第163図 第19号住居跡出土遺物

6、9・10、12は勝坂系の深鉢形土器である。6はキャタピラ状爪形文と、それに沿って三角押文状のペン先状結節沈線文を施文している。9は隆帯脇に半截竹管による平行沈線を施文するもので、沈線に沿って爪形文や蓮華文を施文している。10、12は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する土器である。

13は口縁部に近い土器で、波状の隆帯を施文している大木系の土器である。

14は加曾利E系の土器である。キャリパー形の深鉢形土器の口縁部の破片である。

16～18は地文のみの施文や、無文の土器である。17は多条R Lの縄文を、条が縦方向に施文されるよう、斜め方向に施している。

15は浅鉢形土器の口縁部の破片である。

19は出土した打製石斧である。石器はこの1点のみが検出された。基部を欠損するもので、表面

には大きく自然面が残り、裏面の刃部にも自然面が残存している。右側縁のみに抉りが入っているため、刃部は偏刃である。

住居跡の時期は、出土遺物が少ないため明確ではないが、勝坂式後葉である。

第20号住居跡（第164・165図）

M-6グリッドに位置する。北から東方向へ、地山が傾斜している。第8号住居跡、第30・31・32号土壙と重複する。出土遺物から新旧関係は確定できないが、本住居跡が第8号住居跡の壁溝を壊していることから、第8号住居跡よりは新しいといえる。また第30・31・32号土壙の覆土中に、本住居跡の覆土が入っていないことから、土壙よりは古いといえる。壁に沿って壁溝が1条検出された。平面形は円形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-22°-Wをとる。規模は長径3.65

m、短径3.51m、深さ0.22mを測る。壁溝の最大幅は0.18m、深さ0.06mである。

柱穴は5本が検出された。P 1～P 4の4本が主柱穴と考えられる。

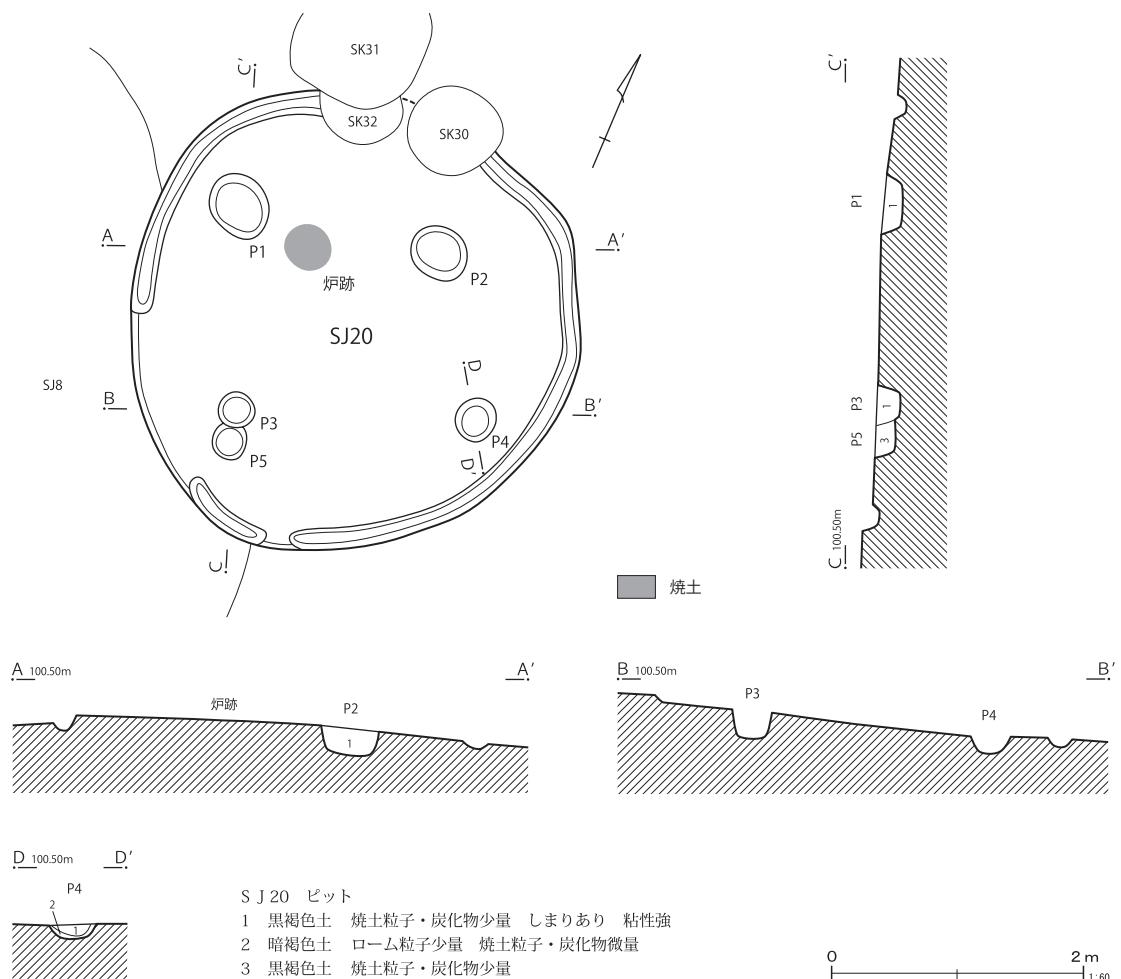
炉跡は中央よりやや北西側で検出された。焼土の範囲が確認されたのみで、炉跡の掘り込みは残存していなかった。

第165図は出土した遺物である。1～29が出土土器で、30・31は出土石器である。復元実測が可能な土器は第165図1の一個体のみである。

1はキャリバー形の深鉢形土器の口縁部から胴上部で、胴下半から底部は欠損している。肥厚す

る口唇部を持つ内湾する口縁部は無文である。頸部には刻みを持つ隆帶で、上下を区画した文様帯を施文する。楕円区画文は5単位施文すると考えられる。楕円区画文は隆帶で施し、楕円右側隆帶の稜線を鋭くするよう、摘まみ上げており、稜線を境に細かい刻みと長く深めに施文する刻みを隆帶に施文している。楕円区画内は、沈線で渦巻文を施文している。渦巻は左巻きと右巻きを区画ごとに変化をつけ、中央の楕円区画内には渦巻文に平行して沈線文を施文し、その内側に交互刺突文を施文している。推定口径は20.2cmである。

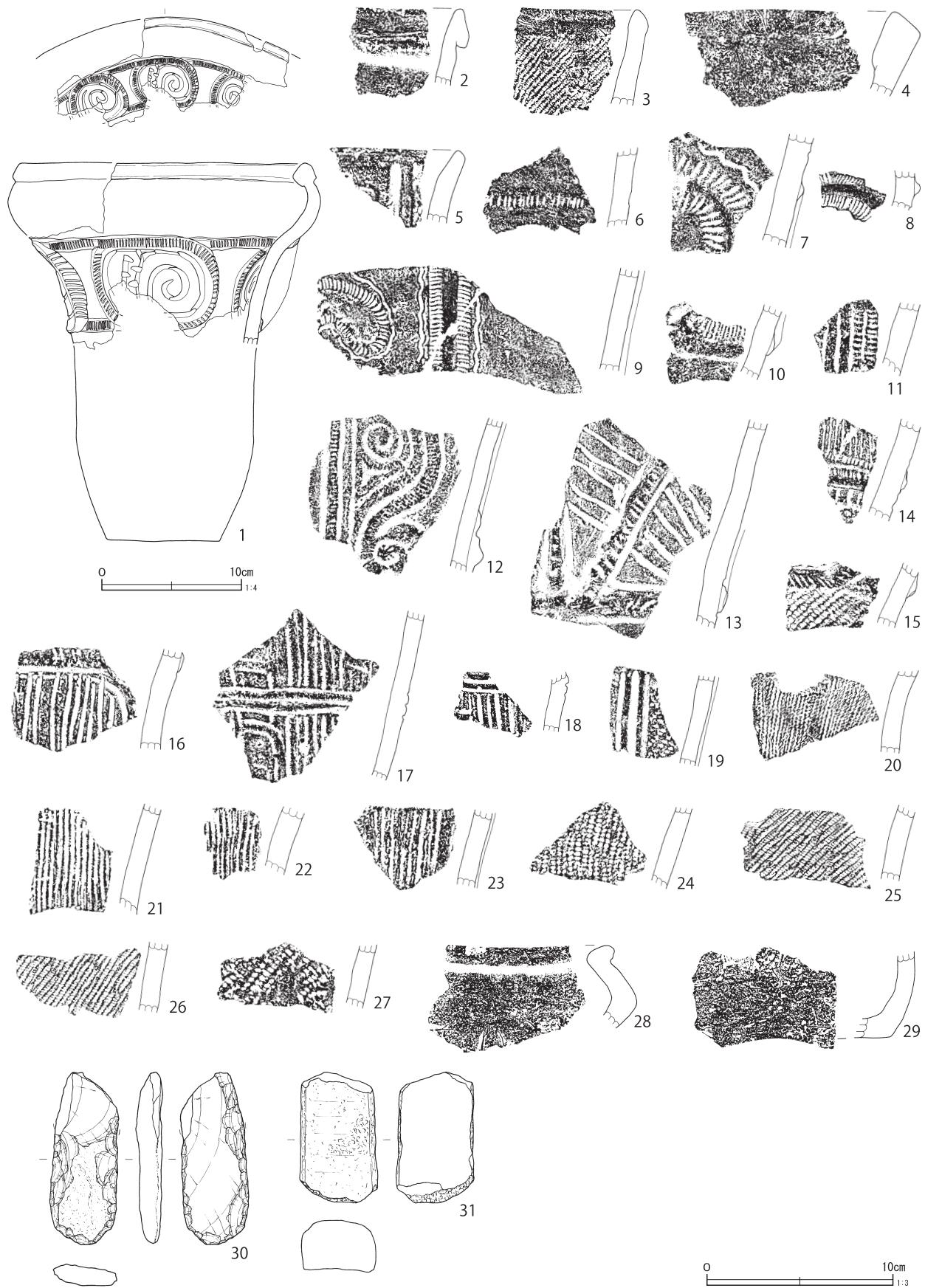
2～4は出土した深鉢形土器の口縁部の破片で



第164図 第20号住居跡

第21表 第20号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.54	0.45	0.15	P 3	0.29	0.29	0.16	P 5	0.27	0.26	0.17
P 2	0.46	0.40	0.22	P 4	0.34	0.30	0.14	—	—	—	—



第165図 第20号住居跡出土遺物

ある。2、4は無文で、3は地文のみ、5は沈線文が施文されている。3の地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文されている。

6～10は隆帯脇にキャタピラ状爪形文と、爪形文に沿って小波状沈線文を施文する勝坂系土器である。いずれも深鉢形土器の胴部片である。6は隆帯は施文されておらず、爪形文のみが横方向に施文される。8は隆帯の両脇に、10は隆帯の片側に爪形文を施している。

11～18は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器である。いずれも深鉢形土器の胴部破片である。11は沈線文のみを施文する土器片で、縦方向に施文された沈線文間に刻みを施している。12は隆帯脇に平行沈線文を施文し、区画された文様内には端部を渦巻く隆帯を施文し、空いた部分に沈線で渦巻文や三叉文を施文している。13・14、16は隆帯で区画した文様内は、短沈線で充填している。14は隆帯脇の沈線に沿って結節沈線文や、キャタピラ状の爪形文を施文している。15は刻みを持つ隆帯を巡らして、胴部に単節R Lの縄文を横方向に施文している。17・18に隆帯は施文されず、半截竹管による平行沈線文を施文している。

19は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器の胴部破片である。隆帯を懸垂文として垂下させている。地文は単節R Lの縄文である。

20～27は地文のみを施文する、深鉢形土器の胴部破片である。地文として20、22・23は撚糸文L、21は撚糸文R、24、27は単節R Lの縄文を、25は多条R Lの縄文を施文している。

28は無文の浅鉢形土器の破片である。

29は底部の破片である。

30・31は出土した石器である。30は打製石斧である。31は敲石で、端部の敲打痕が顕著である。

住居跡は遺物集中下にあり、出土遺物は遺物集中に伴うと考えられ、正確な時期は不明である。

第21号住居跡（第166・167図）

L・M-5・6グリッドに位置する。第8号住居跡、第3・4号集石土壙と重複する。第8号住居跡とは床面の高さも変わりなく、また出土遺物からの時期差も明確ではない。第3・4号集石土壙は本住居跡が埋まった跡の覆土中に営まれており、本住居跡よりも新しい。壁に沿って壁溝が1条検出されているが、第8号住居跡との重複部分は痕跡が認められたのみである。平面形は楕円形で、住居跡の形状の長軸を基準とすると、主軸方位は、N-70°-Wをとる。規模は長径5.18m、短径3.17m、深さ0.36mを測る。壁溝の最大幅0.36m、深さ0.04mである。

柱穴は5本が検出されたが、配置からP 1～3、P 5の4本が主柱穴と推定される。

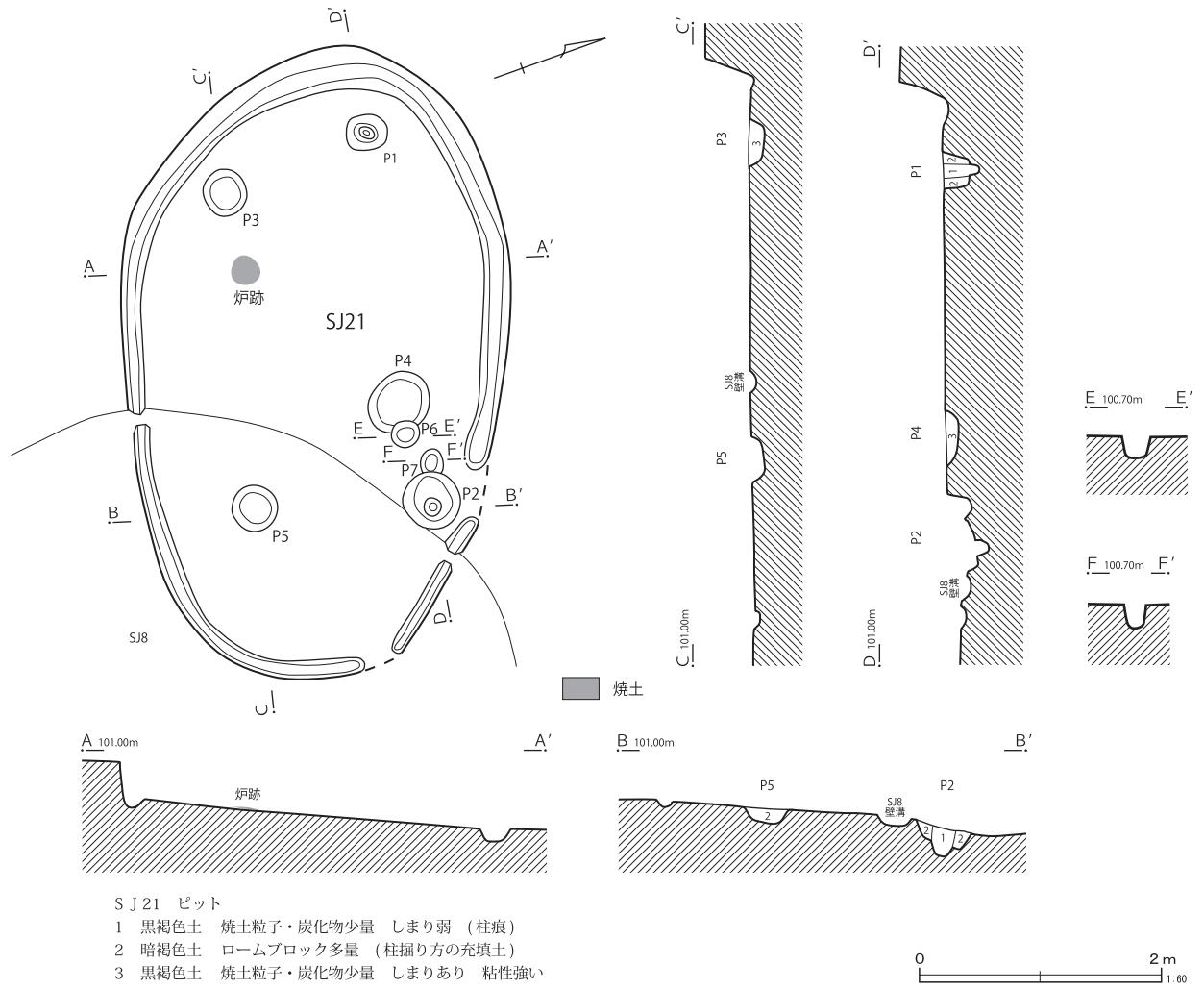
炉跡は中央よりやや北西側で検出された。径0.30m程の焼土範囲のみ捉えられ、炉跡の掘り込みはなかった。

第167図1～34は出土した土器で、第167図35・36は出土した石器である。出土土器は、いずれも破片である。

2・3は角押し状の結節沈線文を施文する深鉢形土器の胴部破片である。2は隆帯脇に2列の結節沈線文を施し、縦方向にも2列の結節沈線文を施している。3は縦方向に2列の結節沈線文を施している。

1、4～8、22は隆帯脇にキャタピラ状爪形文と、爪形文に沿って小波状沈線文や、三角押文状のペン先状結節沈線文を施文する勝坂系土器である。1は口縁部の破片で、ペン先状結節沈線文が2列施文されている。4は隆帯脇の爪形文が、三角形状となっている。結節縄文を地文として施文している。5は爪形文に沿って蓮華文が施文されている。6、8は爪形文に沿って、小波状沈線文が施文されている。22はペン先状結節沈線文を、小波状に施文している。

9～21、26・27は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に



第166図 第21号住居跡

第22表 第21号住居跡 柱穴計測表

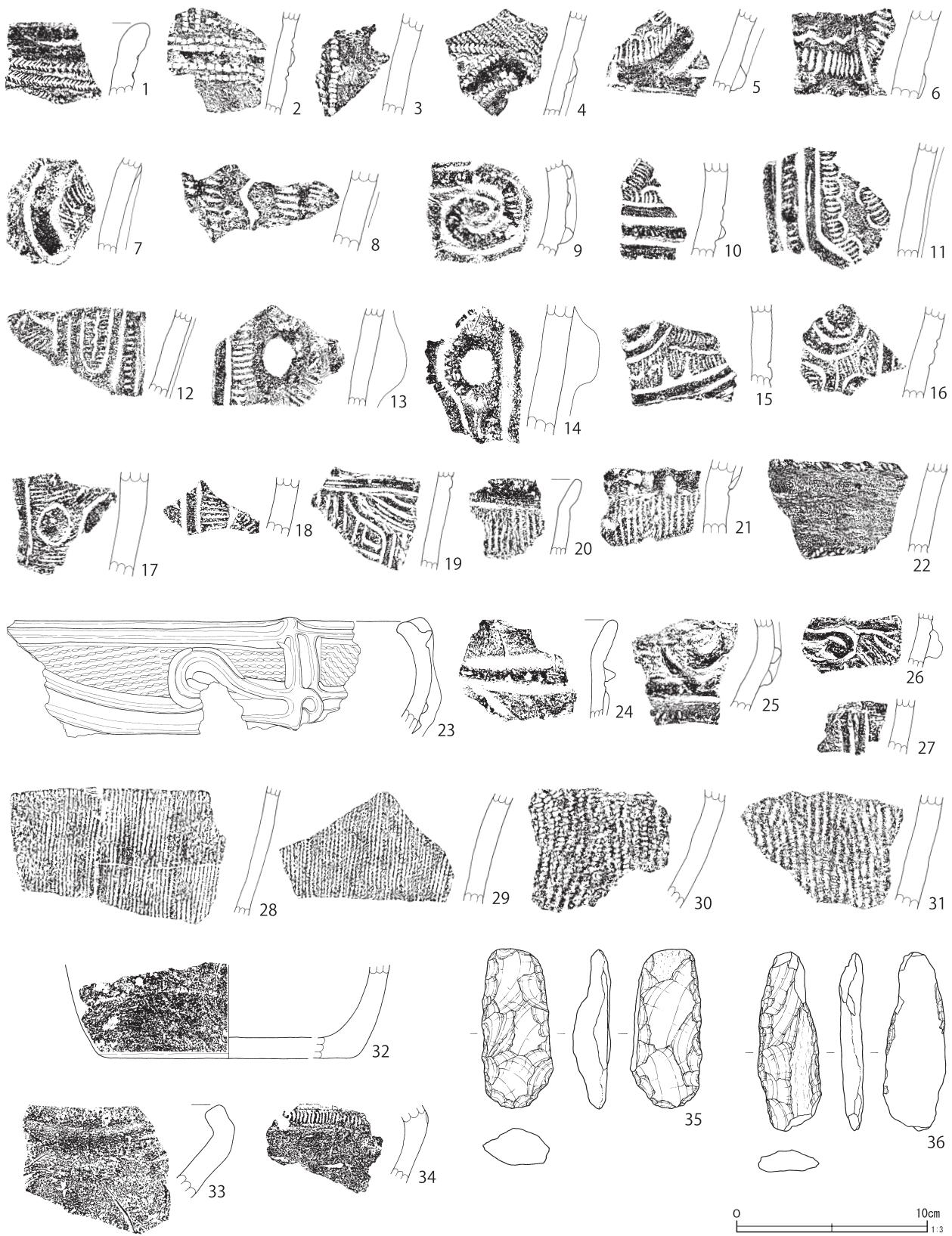
番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.33	0.29	0.30	P 4	0.52	0.47	0.10	P 6	0.23	0.21	0.18
P 2	0.47	0.44	0.32	P 5	0.37	0.37	0.10	P 7	0.21	0.19	0.18
P 3	0.39	0.36	0.09	—	—	—	—	—	—	—	—

沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器である。いずれも深鉢形土器の破片である。10・11は隆帶脇に平行沈線文を施文するもので、沈線に沿って爪形文を沿わせ、爪形文には蓮華文を沿わせている。12は隆帶による区画内に、平行沈線で文様を施文し、沈線文によって区画された内側に、爪形文や条線、小波状沈線文を施文している。13・14は突起を貼付している。15～19、27は隆帶が残存していない胴部破片である。15～18、27は平行沈線文で文様

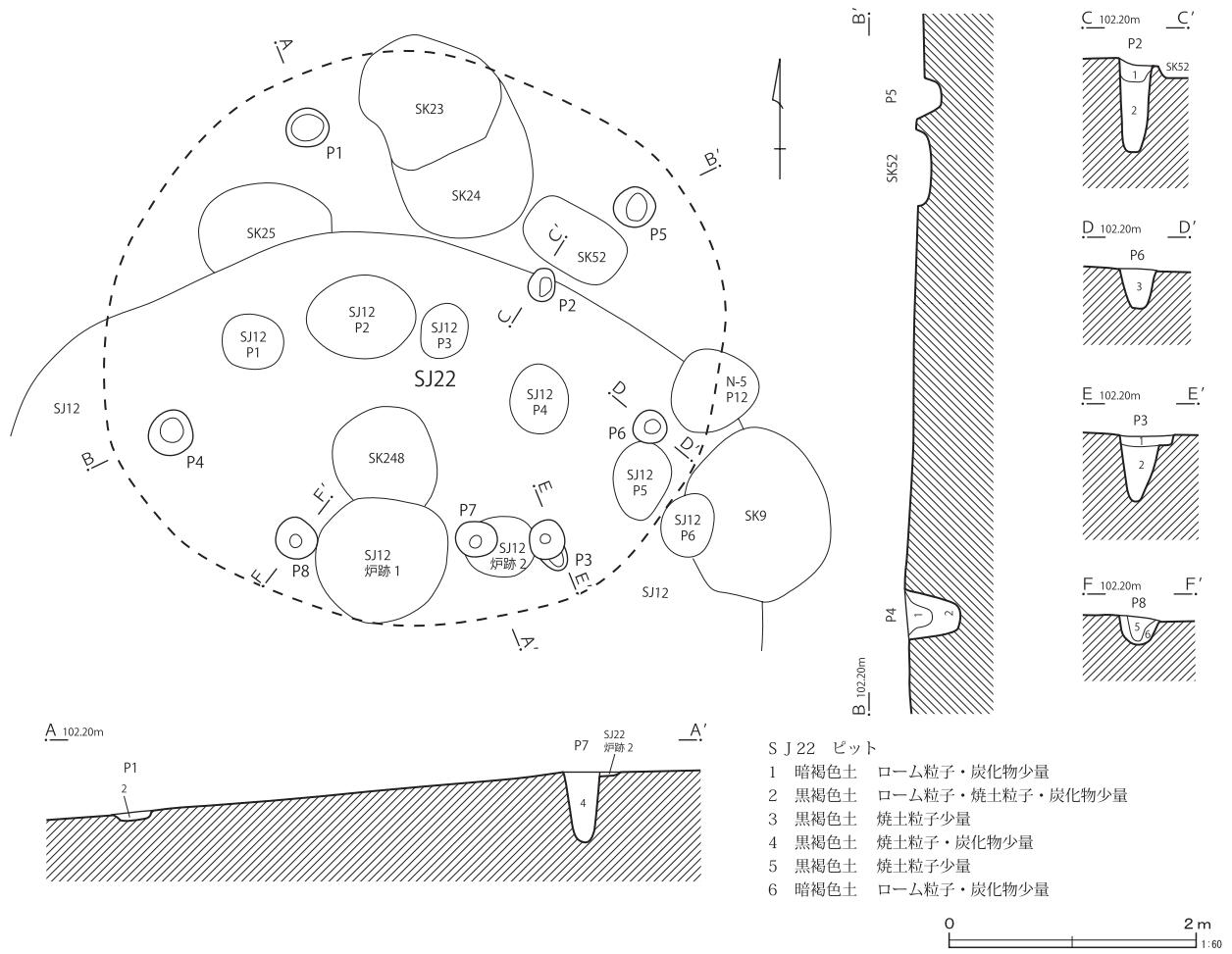
を施文し、文様区画内に爪形文や条線、三叉文などを施文している。19は平行する沈線文のみを密に施文している。

26は隆帶による渦巻文を貼付するもので、沈線文で文様を施している。

23～25は加曾利E系の土器である。いずれもキャリパー形の深鉢形土器の口縁部破片である。23は口縁部に隆帶を十字に施文し、十字の中央には渦巻文を施文している。地文は、撲糸文Lを横方向に施文している。25は地文として、撲糸文L



第 167 図 第 21 号住居跡出土遺物



第 168 図 第 22 号住居跡

第 23 表 第 22 号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.35	0.29	0.06	P 4	0.37	0.35	0.45	P 7	0.32	0.28	0.56
P 2	0.26	0.21	0.75	P 5	0.34	0.32	0.23	P 8	0.33	0.31	0.25
P 3	0.42	0.28	0.55	P 6	0.28	0.28	0.30	—	—	—	—

を横方向に施文している。

28~31は地文のみを施文する、深鉢形土器の胴部破片である。28・29は地文として、撚糸文Lを縦方向に施文している。30の地文は単節R Lの縄文で、斜め方向に施文している。31は多条R Lの縄文を地文とするもので、条が縦に施文されるように、斜め方向に施文している。

32は深鉢形土器の、無文の底部の破片である。

33・34は浅鉢形土器の破片で、33は無文の口縁部で、34は屈曲部に刻みを施している。

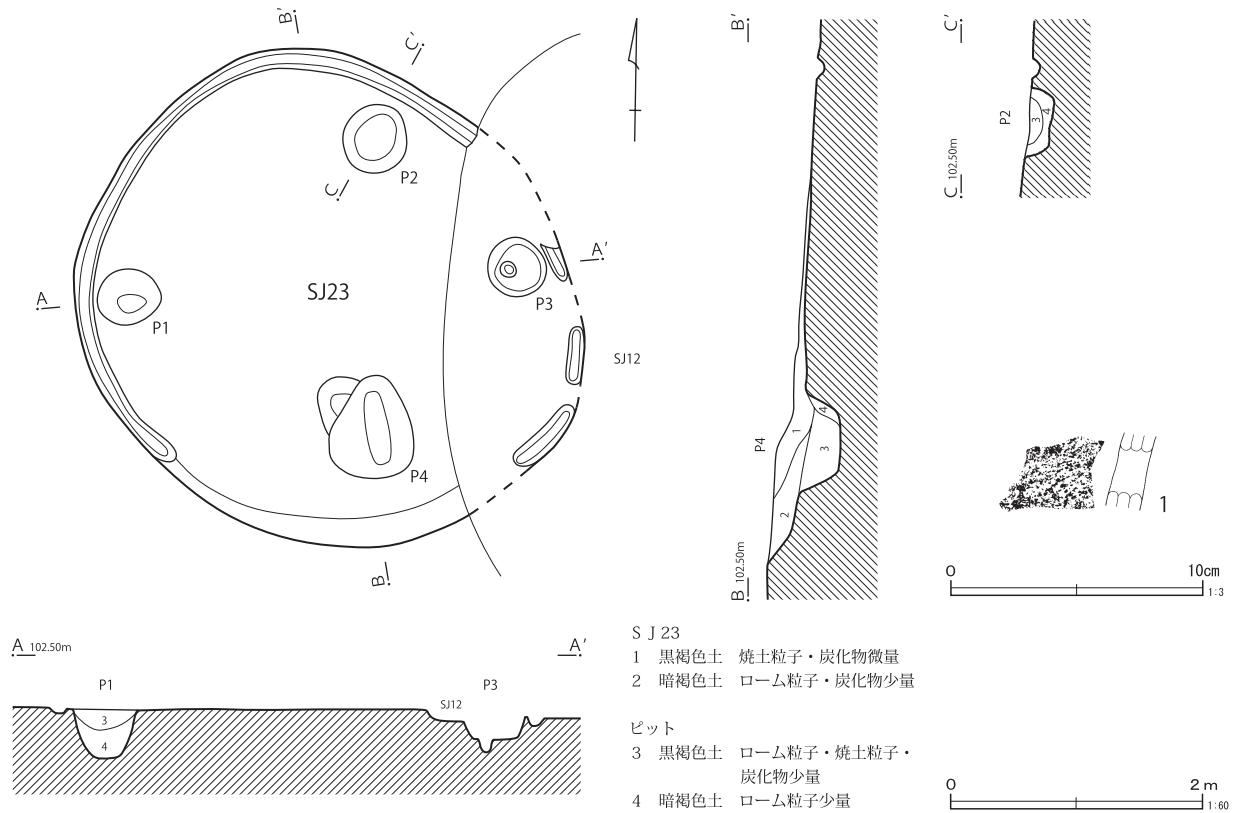
35・36は打製石斧である。35は側縁部を平行に

作り出すもので、刃部は偏刃である。36は裏面が大きく剥落し、基部と刃部は欠損している。

住居跡の時期だが、出土遺物は少量すべて破片であるため、特定はできない。

第22号住居跡（第168図）

N-5グリッドに位置する。北の方向に地山が傾斜している。覆土は失われており柱穴のみ残存している。炉跡が検出されなかったため、床面は削平されたと考えられる。第12号住居跡、第23・24・25・52・248号土壙と重複する。第12号住居



第169図 第23号住居跡・出土遺物

第24表 第23号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.49	0.43	0.36	P 3	0.46	0.45	0.28	P 4	0.80	0.74	0.33
P 2	0.55	0.50	0.21	—	—	—	—	—	—	—	—

跡の土層断面からは、第22号住居跡の床面を掘り込んでいることから、第12号住居跡よりも本住居跡が古い時期であると考えられる。柱穴の外側を囲った形状から平面形を類推すると、円形に近い形状であったと考えられる。推定される規模は長径4.82m、短径4.61m、深さ0.11mである。

柱穴は8本が検出されたが、主柱穴は特定できなかった。

遺物は図示可能なものは出土しなかった。そのため、遺物から住居跡の時期は明確にはできなかった。

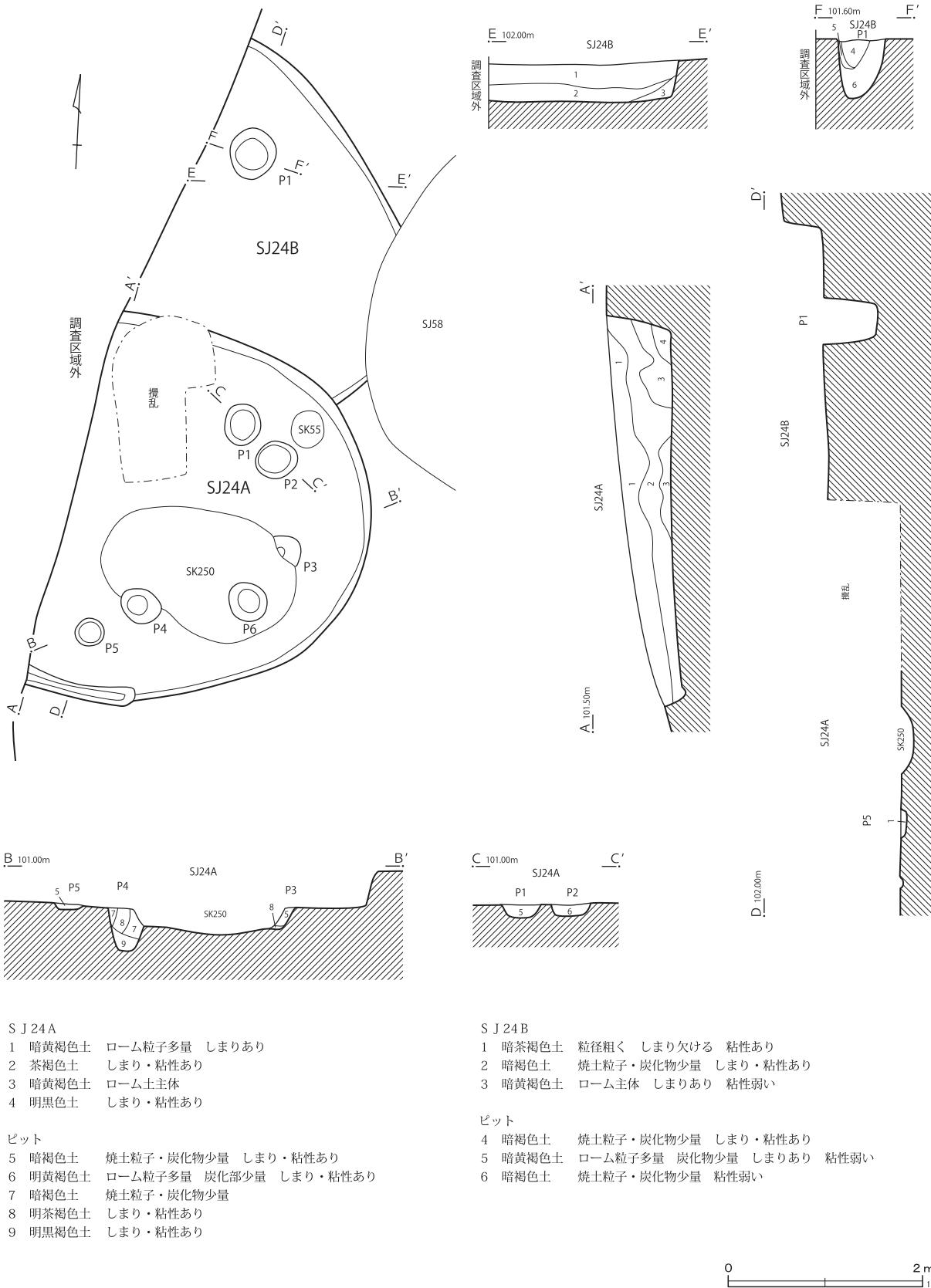
第23号住居跡（第169図）

N-5グリッドに位置する。地山が北の方向に傾斜している。覆土は南側に一部残存するのみで

ある。住居跡の東側では、第12号住居跡と重複する。第12号住居跡の土層断面からは、覆土を残存する第12号住居跡が、本住居跡の床面を掘り込んでいることから、第12号住居跡よりも本住居跡が古い時期である可能性が高い。壁に沿って壁溝が1条検出された。壁溝は部分的に残存しているが、住居跡の形状を明らかにすることができた。平面形は円形である。規模は長径4.02m、短径3.65m、深さ0.24mを測る。壁溝の最大幅0.18m、深さ0.06mである。

柱穴は4本が検出されたが、配置はまちまちであった。炉跡は検出されなかった。

第169図1は出土した深鉢形土器の胴部の破片である。無文であるため、詳細な時期は不明である。



第 170 図 第 24A・24B 号住居跡

第24A号住居跡（第170図）

S-2・3グリッドに位置する。西側半分が調査区域外となっている。南側に向けて勾配を持つ斜面となっており、低い部分に合わせて床面を掘り込んでいる。住居跡の北側の一部は、攪乱のため壊されている。重複する第24B号住居跡とは、床面の高さは1m近く高低差がある。第55号土壙、第250号土壙と重複する。第250号土壙が、住居跡の柱穴を壊して掘り込まれていることから、本住居跡の方が古いと考えられる。平面形は円形であると推定される。残存部分における住居跡の規模は、長径3.98m、短径3.04m、深さ0.36mを測る。南側には壁溝が部分的に検出されている。壁溝の最大幅0.19m、深さ0.04mである。

柱穴は6本が検出された。主柱穴や柱穴の配置は不明である。

炉跡は検出されなかった。攪乱部分または、調査区域外に存在していたと考えられる。

第24B号住居跡（第170図）

S-2・3グリッドに位置する。西側半分が調査区域外となっている。また、南側の一部は攪乱のため失われている。南側に向けて勾配を持つ斜面となっており、そのため、床面は南斜面側が失われている。第24A号住居跡と重複するが、床面の高さは1m近く高低差がある。南側の床面が失われているため、土層断面から新旧差は判断できなかった。遺物も、明確な第24A号住居跡出土遺物がないため、遺物からの新旧差も不明である。平面形は残存部からすると、円形であると推定される。残存部分における住居跡の規模は、長

径4.55m、短径2.65m、深さ0.38mを測る。

柱穴は1本が検出され、他は不明である。

住居跡の半分が調査区域外で検出できなかったためか、炉跡は検出されなかった。

第24号住居跡出土遺物（第171～174図）

出土遺物は、第24A号住居跡と第24B号住居跡とを区分して取り上げておらず、ここでは一括して図示することとしたが、第171図の遺物出土状況から見る限り、遺物の大半は第24B号住居跡に帰属すると考えられる。また、遺物は器面の風化が著しく、地文については明確にできないものも多かった。

第172図1はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部から胴上部である。口縁部には舌状の把手が貼付されると考えられる。口縁部には、端部が渦巻く波状の隆帯が連続して施文される。頸部には狭い無文帯を持ち口縁部側は1本、胴部側は2本の隆帯を巡らせて区画している。胴部には隆帯で蛇行懸垂文を施文している。地文は撚糸文Lで、縦方向に施している。推定口径は32cmである。

第172図2は曾利系の深鉢形土器の口縁から胴部である。開く口縁部は無文となっている。口縁部と胴部は、2本の隆帯を巡らし区画している。胴部は2本1組の直線的に垂下させる懸垂文と、1本の蛇行懸垂文を交互に施文している。地文は櫛歯状の条線で、推定口径49cmである。

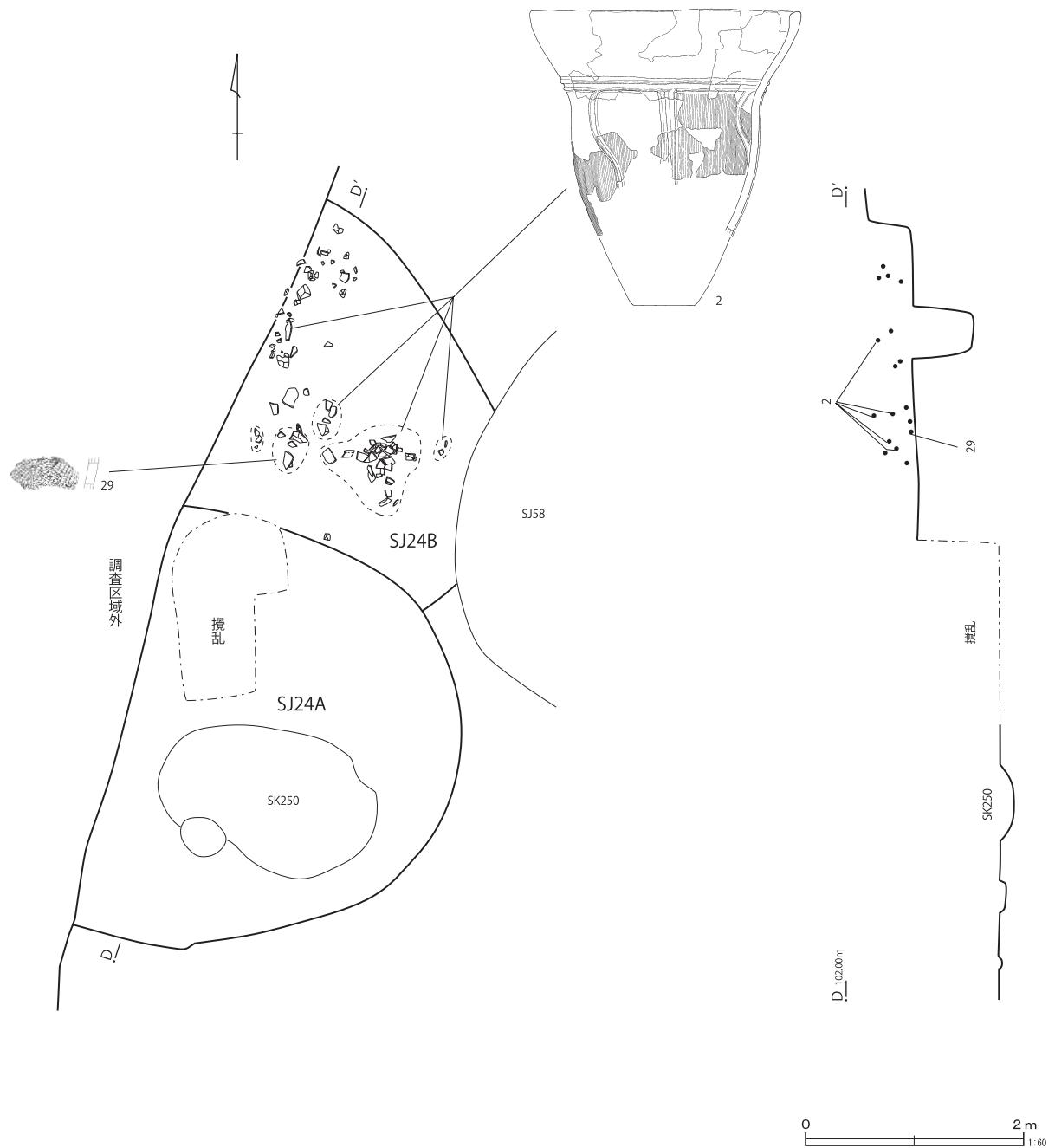
第173図3～7、9・10は隆帯脇にキャタピラ状爪形文を施文する勝坂系土器である。3～7は結節沈線で小波状文を施文している。9・10は結節沈線文を斜方向に施文している。

第25表 第24A号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.43	0.38	0.16	P 3	0.37	0.23	0.22	P 5	0.28	0.28	0.05
P 2	0.43	0.38	0.14	P 4	0.43	0.34	0.44	P 6	0.44	0.38	0.05

第26表 第24B号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.52	0.47	0.55	—	—	—	—	—	—	—	—



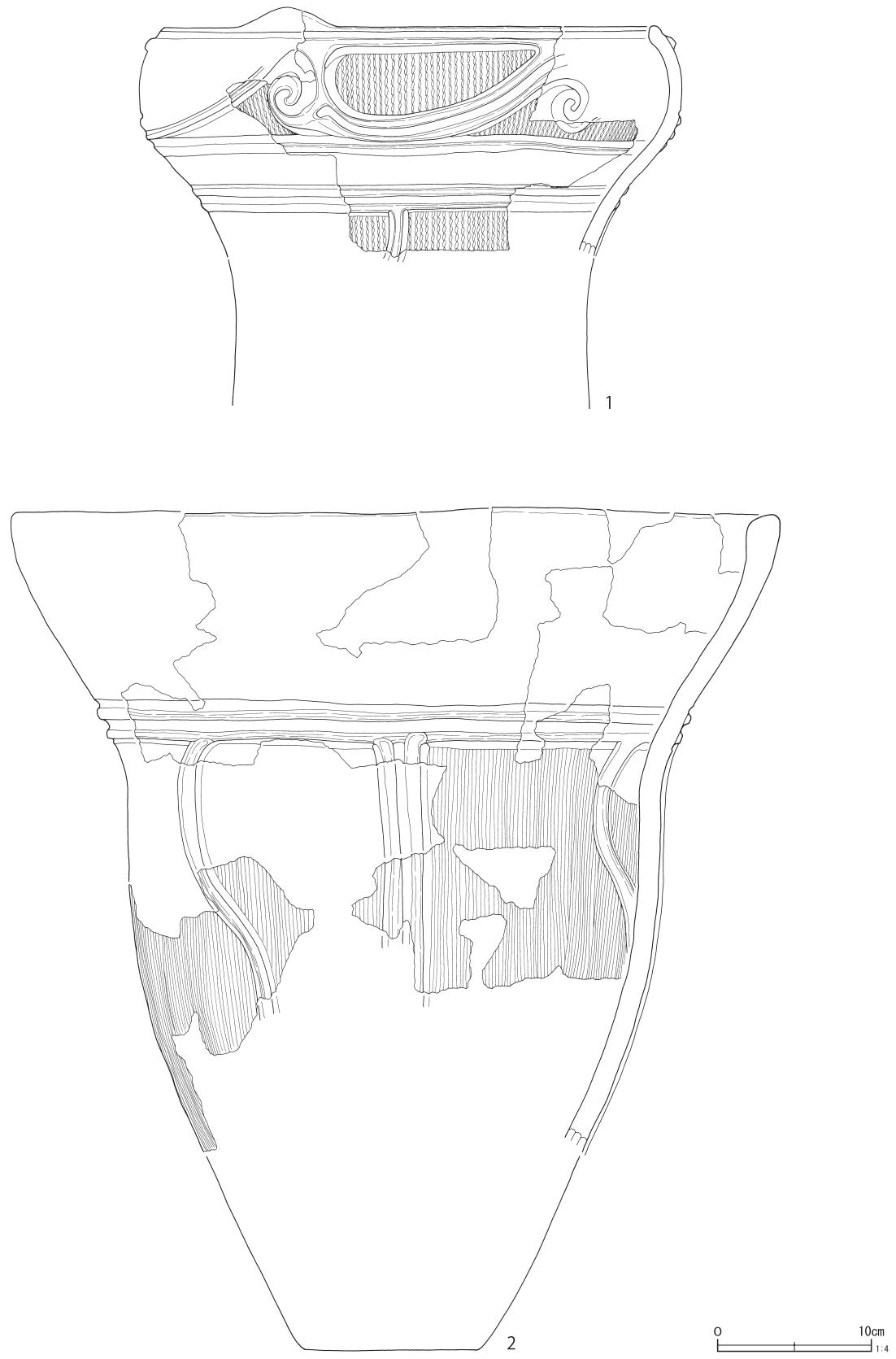
第171図 第24B号住居跡遺物出土状況

第173図8は阿玉台系の深鉢形土器の破片で、
隆帶上を押圧して刻みをつけている。

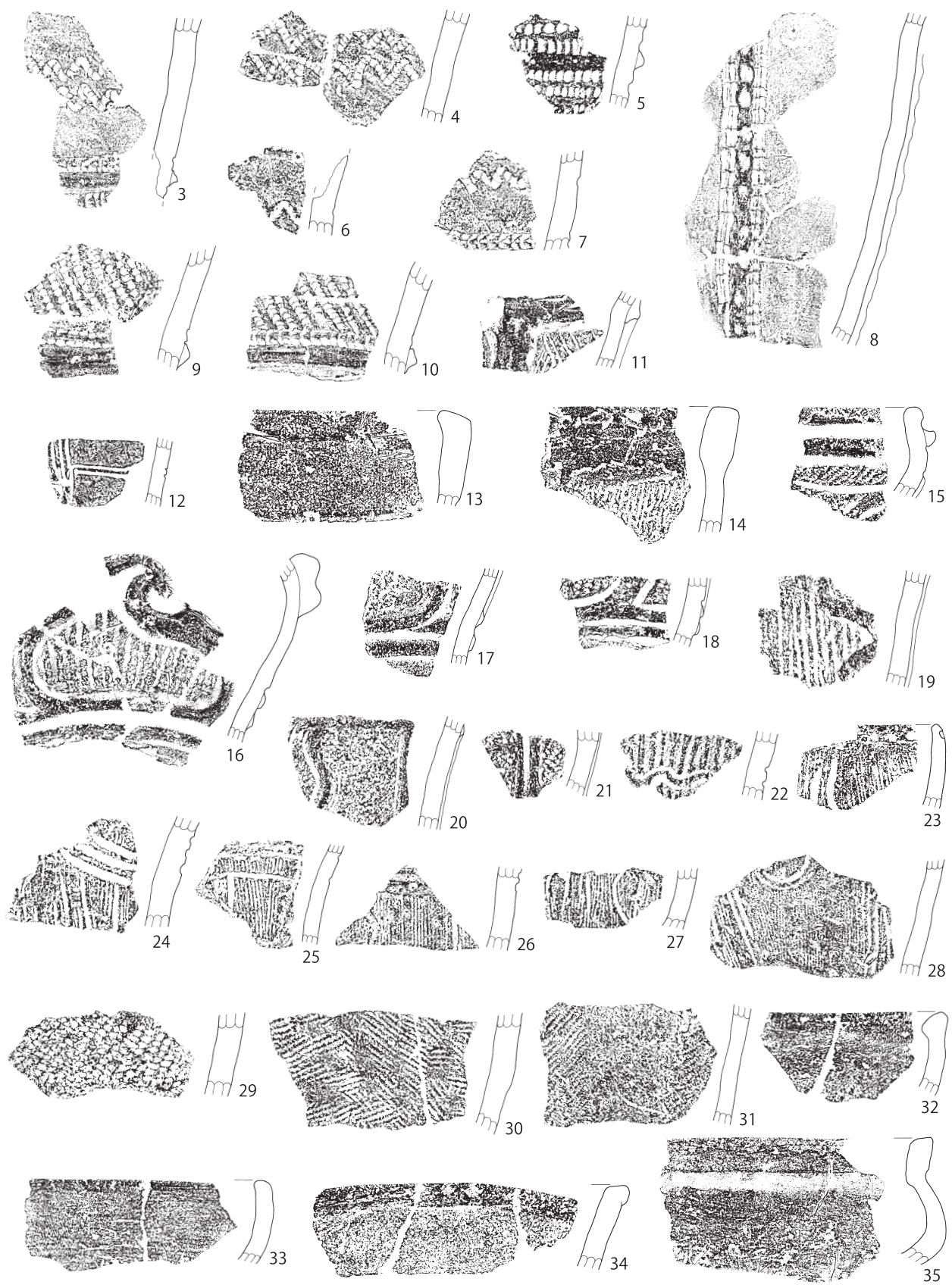
第173図11～14は勝坂式終末から加曾利E式初
頭の深鉢形土器である。14は撚糸文Lを地文とし
て胴部に施文している。

第173図15～21は加曾利E系のキャリパー形の

深鉢形土器である。15～18は口縁部の破片である。15は隆帶で文様を施文するが、文様の形状は不明である。地文は単節R Lの縄文を横方向に施文している。16は隆帶で、緩やかに内湾する口縁部には渦巻文などの文様を施文している。地文は撚糸文Lで縦方向に施文している。17は無文の頸

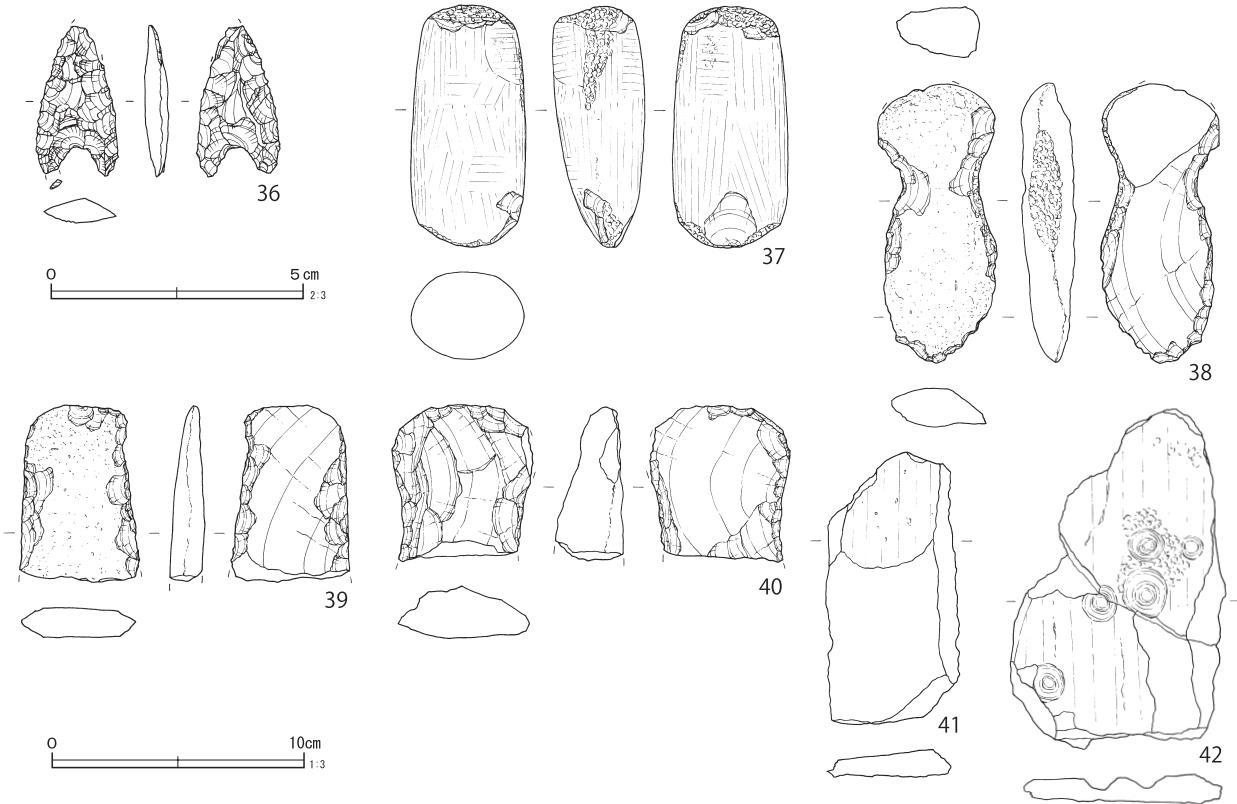


第172図 第24号住居跡出土遺物（1）



第173図 第24号住居跡出土遺物（2）

0 10cm 1:3



第174図 第24号住跡出土遺物（3）

部が残存する土器片である。18の地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。19～21は胴部の破片である。胴部には隆帯で、懸垂文を施文している。19は隆帯脇には、沈線文を施文していない。地文は撲糸文Lである。21の地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。

第173図22は半截竹管で平行沈線文を小波状に巡らして施文している。地文は、撲糸文Lを縦方向に施文している。

第173図23・24は連弧文系土器である。23は口縁部の破片で、口唇直下には1列の円形刺突文を施文している。地文は条線である。24は3本1組の沈線で文様を施文している。地文は条線である。

第173図25～28は地文が条線の、曾利系土器である。いずれも胴部の破片で、沈線で懸垂文を施文している。

第173図29～31は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部破片である。29、31の地文は単節R L

の縄文で、縦方向に施文している。30は単節L Rの縄文で、縦や斜め方向に施文している。

第173図32～35は浅鉢形土器の破片である。35は口唇部が角頭状となっている。

第174図36～42は出土した石器である。

36は石鏃である。側縁部がやや外湾するもので、基部は逆U状に抉りが入る。

37は磨製石斧である。基部の欠損後、敲打痕が顕著に認められる。また刃部先端にも敲打痕が残存しており、再加工を施したものか、または敲石として再利用した可能性もある。

38～40は打製石斧である。38は両側縁に抉りが入る。39・40は基部のみが残存している。

41・42は石皿の破片である。どちらも被熱のため赤化しており、焼礫として転用されたか、炉石に使用された可能性が考えられる。

住跡の時期は出土した遺物から、加曾利E II式期と考えられる。

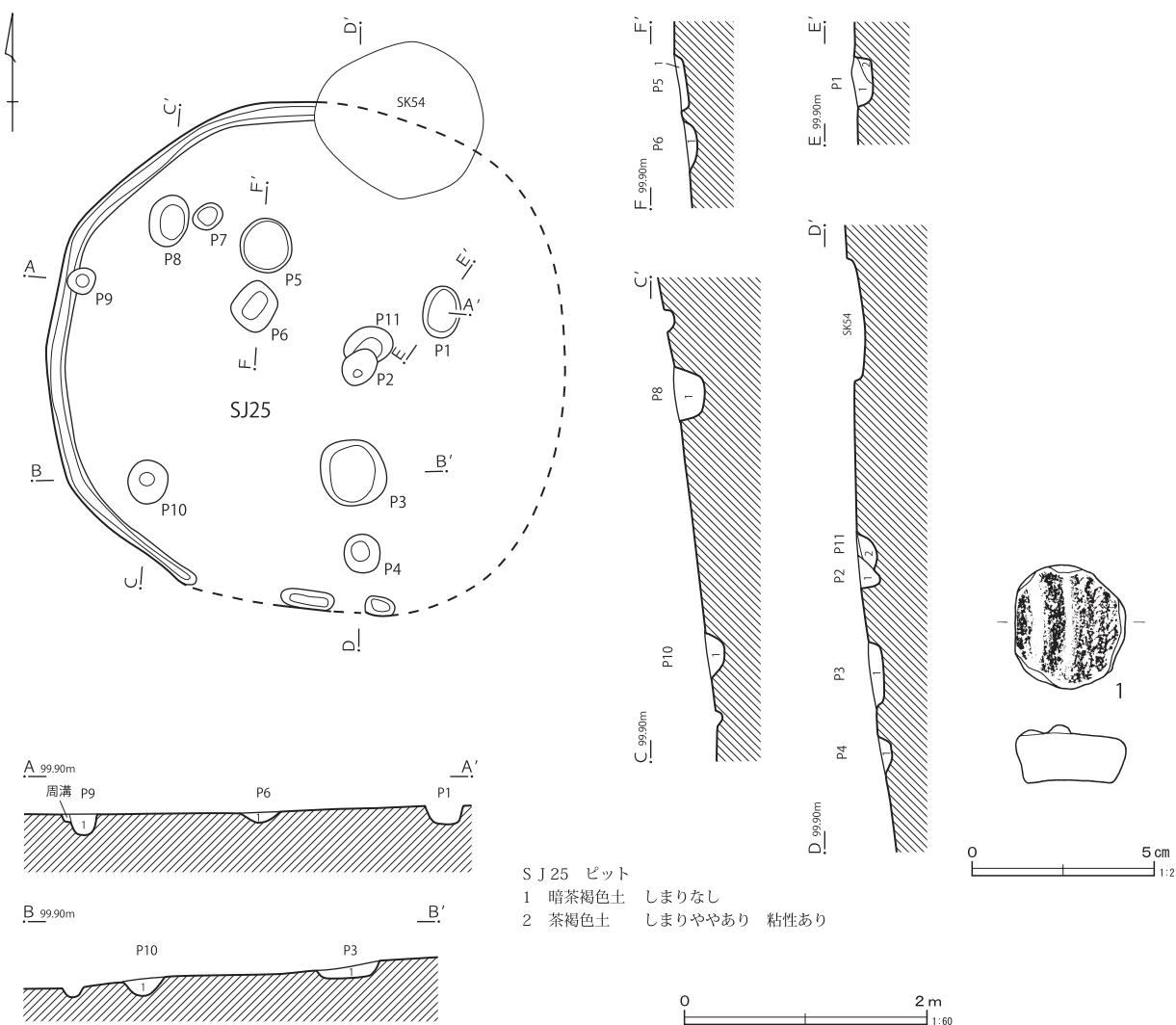
第25号住居跡（第175図）

T-2・3グリッドに位置する。地山は、南側に向かって傾斜している。覆土は失われており、床面も削られていると考えられる。壁溝の掘り込みの一部が部分的に検出されたため、住居跡の範囲が確定することができた。第54号土壙と重複するが、切り合い関係から新旧差は不明である。また、両遺構とも遺物はほとんど検出されておらず、遺物からも新旧関係は不明であった。残存してい

る部分から、平面形は円形であると推測される。検出された規模は長径4.18m、短径3.33mを測る。壁溝の最大幅0.18m、深さ0.09mである。

柱穴は10本が検出された。P1、P4、P8、P10が主柱穴として使用された可能性があるが、確定的ではない。炉跡は検出されなかった。

住居跡に帰属する遺物で図示できるものは、1の土製円盤のみであった。深鉢形土器の胴部の破片を円形に加工したもので、隆帯による懸垂文と



第175図 第25号住居跡・出土遺物

第27表 第25号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.42	0.30	0.16	P 5	0.45	0.41	0.09	P 9	0.25	0.21	0.17
P 2	0.24	0.20	0.13	P 6	0.38	0.33	0.11	P 10	0.38	0.33	0.15
P 3	0.55	0.54	0.10	P 7	0.27	0.21	0.19	P 11	0.41	0.31	0.17
P 4	0.31	0.29	0.09	P 8	0.38	0.33	0.21	—	—	—	—

地文として撲糸文Lが施されている。

住居跡の詳細な時期は不明である。

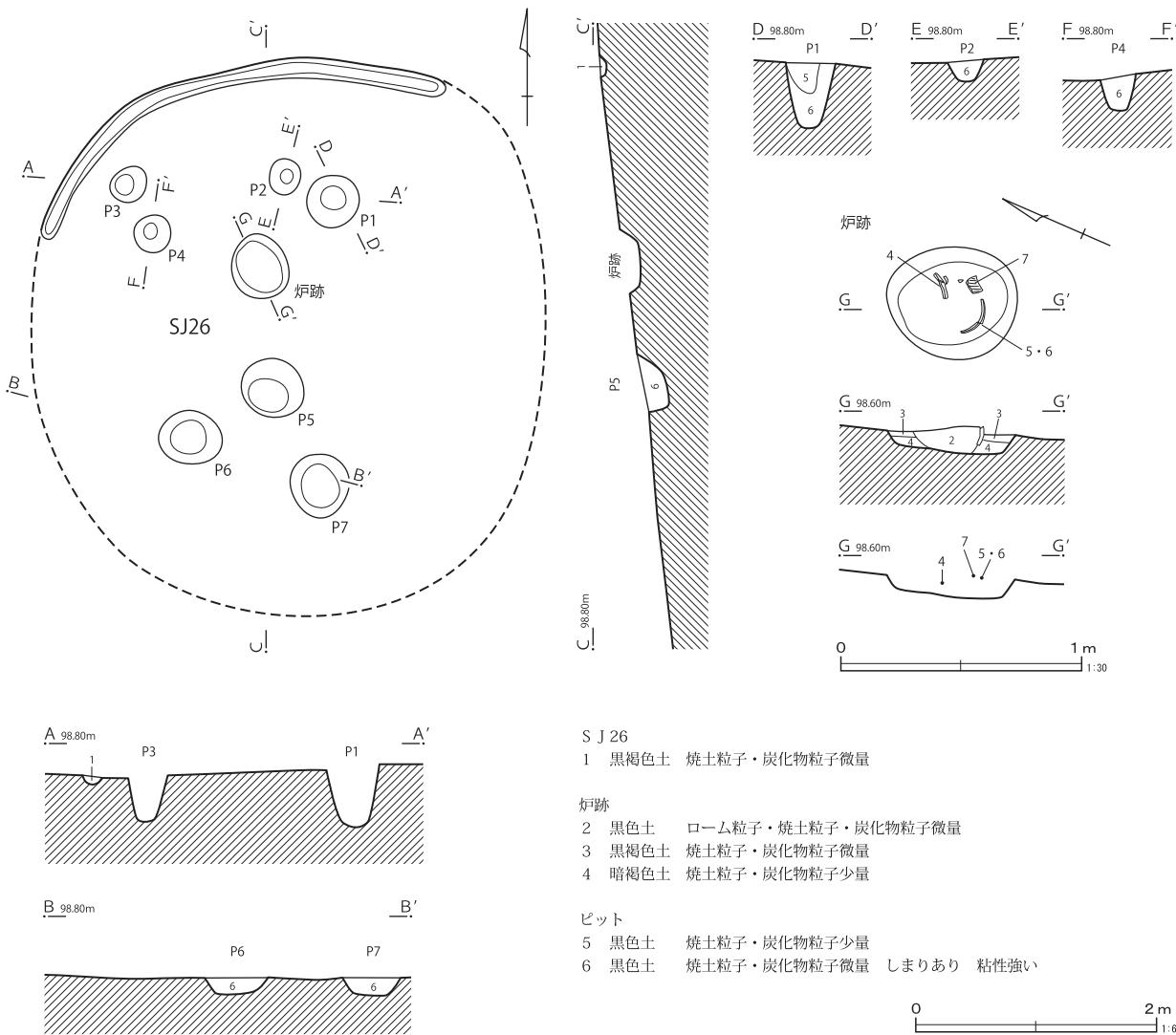
第26号住居跡（第176・177図）

U-2・3グリッドに位置する。東側半分は、調査区域外のため検出されていない。覆土は失われている。地山は、南側に向かって強い勾配を持っているため、北側には壁溝が残存しているが、低くなる南側の床面や壁溝は失われている。平面

形は残存部から、円形に近いと推測される。推定される規模は長径4.61m、短径2.89mである。壁溝の最大幅0.18m、深さ0.06mである。

柱穴は7本が検出された。P1、P3、P6、P7が主柱穴の一部であると考えられる。

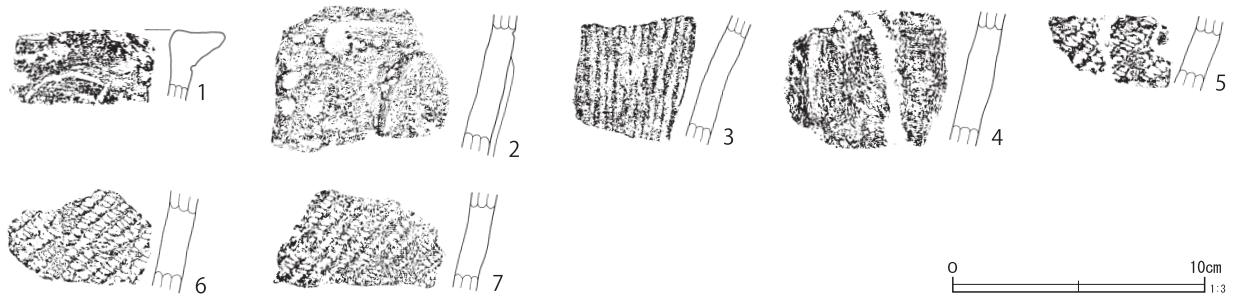
炉跡は中央よりやや北側で検出された。炉跡内からは、炉体土器と考えられる土器片が出土したが、断片的だったため復元することはできなかった。炉跡の規模は、長径0.54m、短径0.47m、深



第176図 第26号住居跡

第28表 第26号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.44	0.42	0.58	P 4	0.31	0.30	0.25	P 6	0.52	0.44	0.15
P 2	0.30	0.26	0.18	P 5	0.54	0.48	0.24	P 7	0.52	0.48	0.15
P 3	0.32	0.28	0.36	—	—	—	—	—	—	—	—



第177図 第26号住居跡出土遺物

さ0.09mである。

第177図1～7は出土した土器である。いずれも深鉢形土器の破片である。器面は風化が著しく、文様が明瞭に残っていない。1は口唇部に平坦面を持っている。口縁部には沈線による文様の一部が認められる。2は隆帶による施文が認められる。3は胴部の破片で、多条R Lの縄文を条が縦に施文されるよう斜め方向に施文している。

4～7は炉跡内から検出された土器である。4が口縁部、5～7が胴部の破片である。口縁部は無文で、刻みを持つ隆帶を垂下させている。胴部には多条R Lの縄文を縦方向に施文している。

住居跡の時期は、炉跡内から検出された土器片から、勝坂式終末と考えられる。

第27号住居跡（第178・179図）

N・O-4・5グリッドに位置する。覆土は失われていたが、壁溝が残存していたため、平面形をほぼ確定することができた。重複する第31号住居跡も覆土がなく、切り合い関係から新旧を判断することができなかった。また、第31号住居跡から時期を判別できる遺物は検出されておらず、出土遺物からも新旧関係は不明である。第61号土壙も同様である。住居跡の南東部分は、壁溝が内側を廻っており、本住居跡が拡張した可能性を考えられる。平面形は隅丸方形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-50°-Wをとる。規模は長径4.97m、短径4.01m、深さ0.11mを測る。壁

溝の最大幅0.24m、深さ0.12mである。

柱穴は5本が検出された。P1～P4の4本が主柱穴と考えられる。

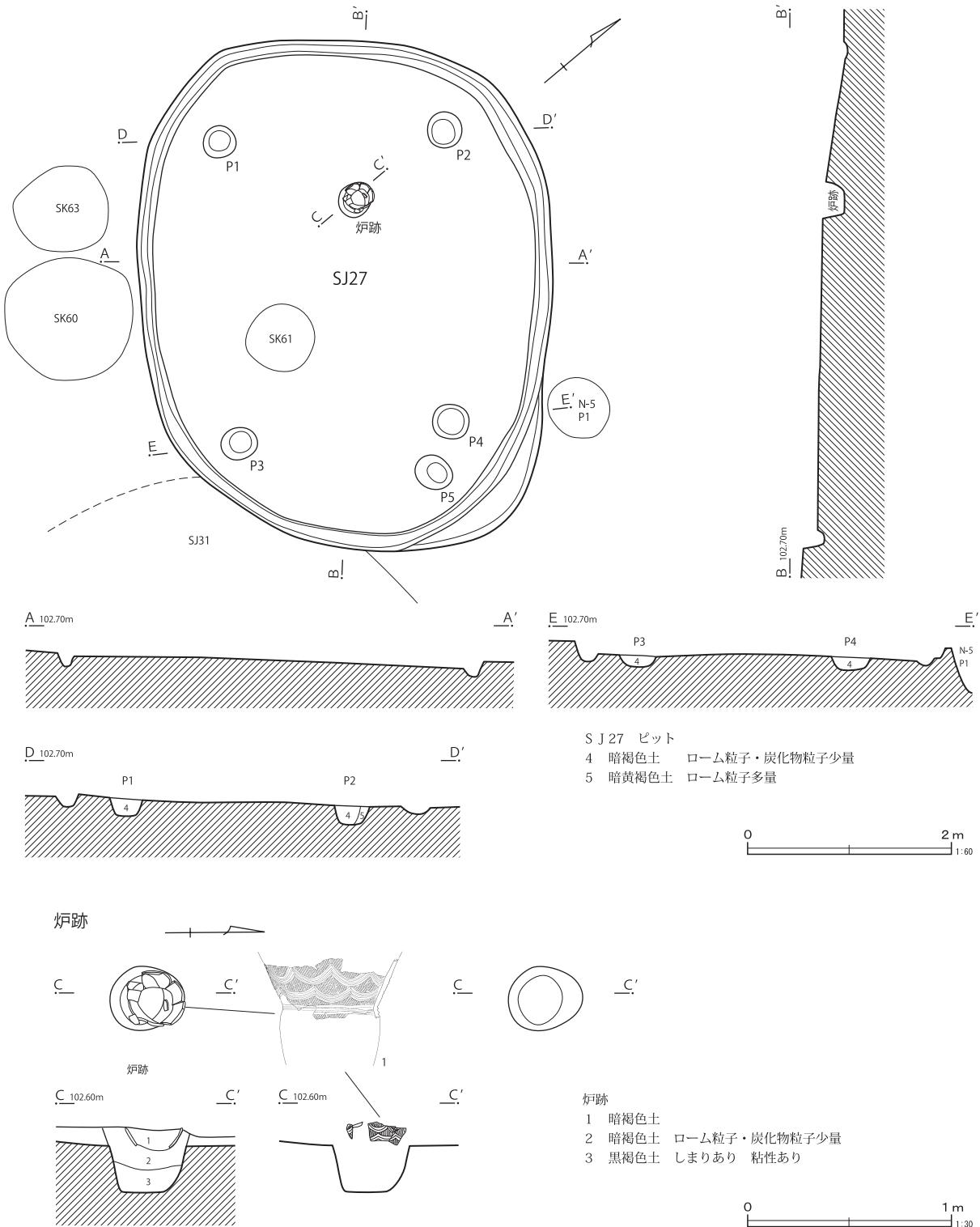
炉跡は中央よりやや北側で検出された。炉跡内からは、第179図1の炉体土器が検出された。胴上部が埋設されたもので、口唇部は壊されていた。炉跡の規模は、長径0.36m、短径0.32m、深さ0.23mである。

第179図は検出された遺物である。第179図1～18は出土土器で、第179図19・20は出土石器である。1以外は、炉跡内やピットから検出された遺物ではなく、明確に住居跡に伴うと言える遺物は1のみである。

1は連弧文系の深鉢形土器である。胴部の括れ部より上部を、炉体土器とし埋設したものと考えられる。口唇部は壊されており、残存していない。胴上部には、3本1組の沈線で連弧文を2段施文している。上段と下段の弧はずらし、上段の弧底部と下段の弧頂部が接するよう、施文されている。括れ部には、3本の沈線を巡らしている。地文は単節R Lの縄文で、斜め方向に施文している。

7・8、15は阿玉台系土器である。7は結節沈線文を施し、2本の平行する波状沈線文を施文している。8は爪形文を2列施文している。15は隆帶上に押捺状の刺突を加えるもので、輪積痕部分をひだ状に残すものである。

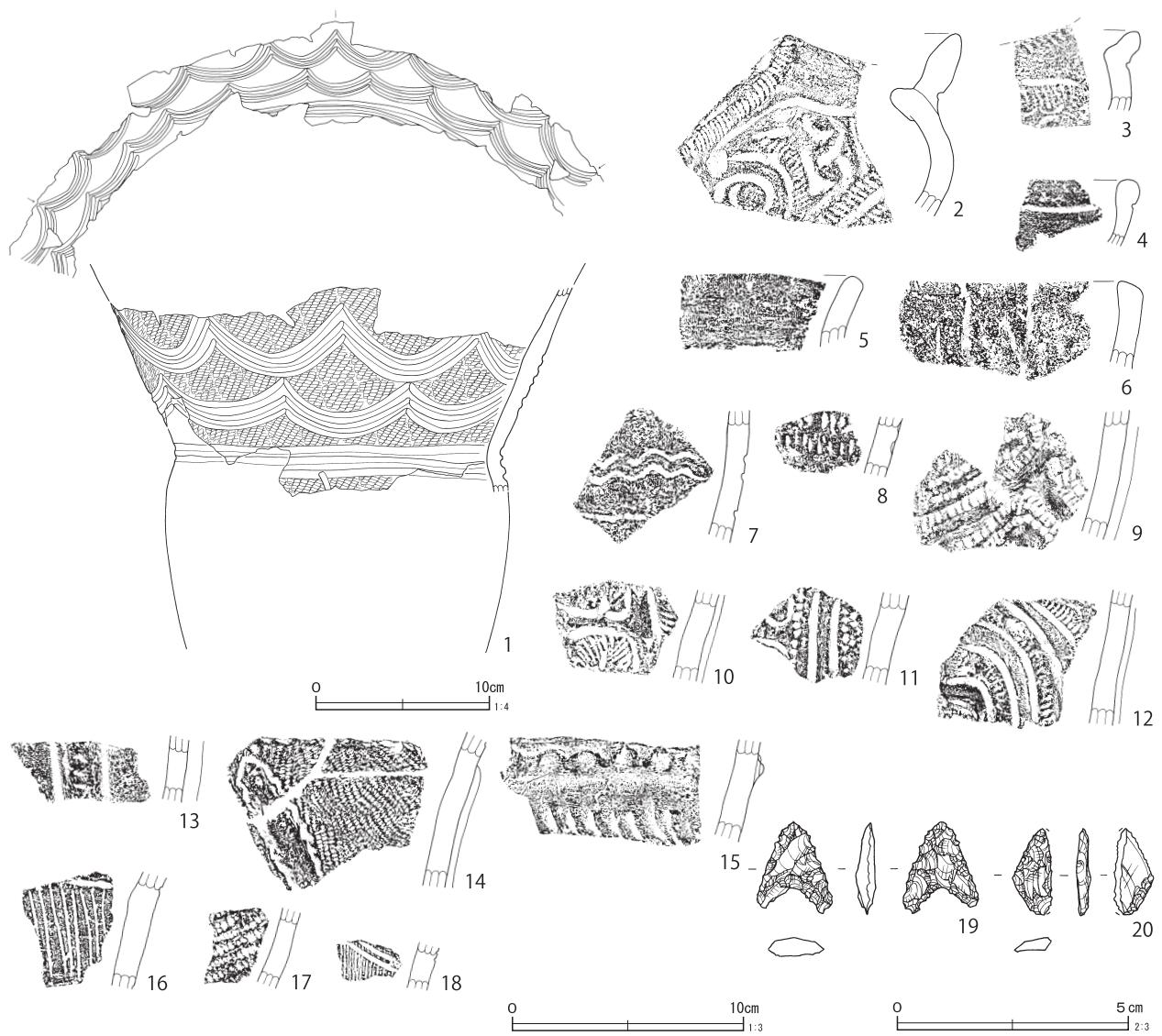
9は隆帶脇にキャタピラ状爪形文と、それに沿ってペン先状結節沈線文を施文している勝坂系



第 178 図 第 27 号住居跡

第 29 表 第 27 号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.33	0.32	0.14	P 3	0.35	0.31	0.12	P 5	0.37	0.32	0.24
P 2	0.35	0.34	0.18	P 4	0.38	0.35	0.14	—	—	—	—



第179図 第27号住居跡出土遺物

土器である。

2~6、10~14、16は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施す勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器である。2~6は口縁部の破片である。2・3は波状口縁部の破片である。2は口唇部に刻みの入るもので、口縁部に沈線で渦巻文などを施し、沈線間に刻みを施している。3は沈線文に爪形文を沿わせ、爪形文に蓮華文を沿わしている。4・5は無文の口縁部で、6は円筒形の深鉢形土器の破片である。10・11、16は沈線文のみが残存しているものである。12は隆帯の形状に沿って沈線文が施される

もので、沈線文間には刻みを施している。14は胴部にぞうり虫状の隆帯を貼付し、周囲に結節沈線文を施している。単節R Lの縄文を地文としている。

17は地文のみが施される深鉢形土器の胴部の破片である。地文として、単節R Lの縄文を縦方向に施している。

18は連弧文系の土器で、地文は条線である。

19・20は石鏸である。20は欠損した石鏸を、再加工している。

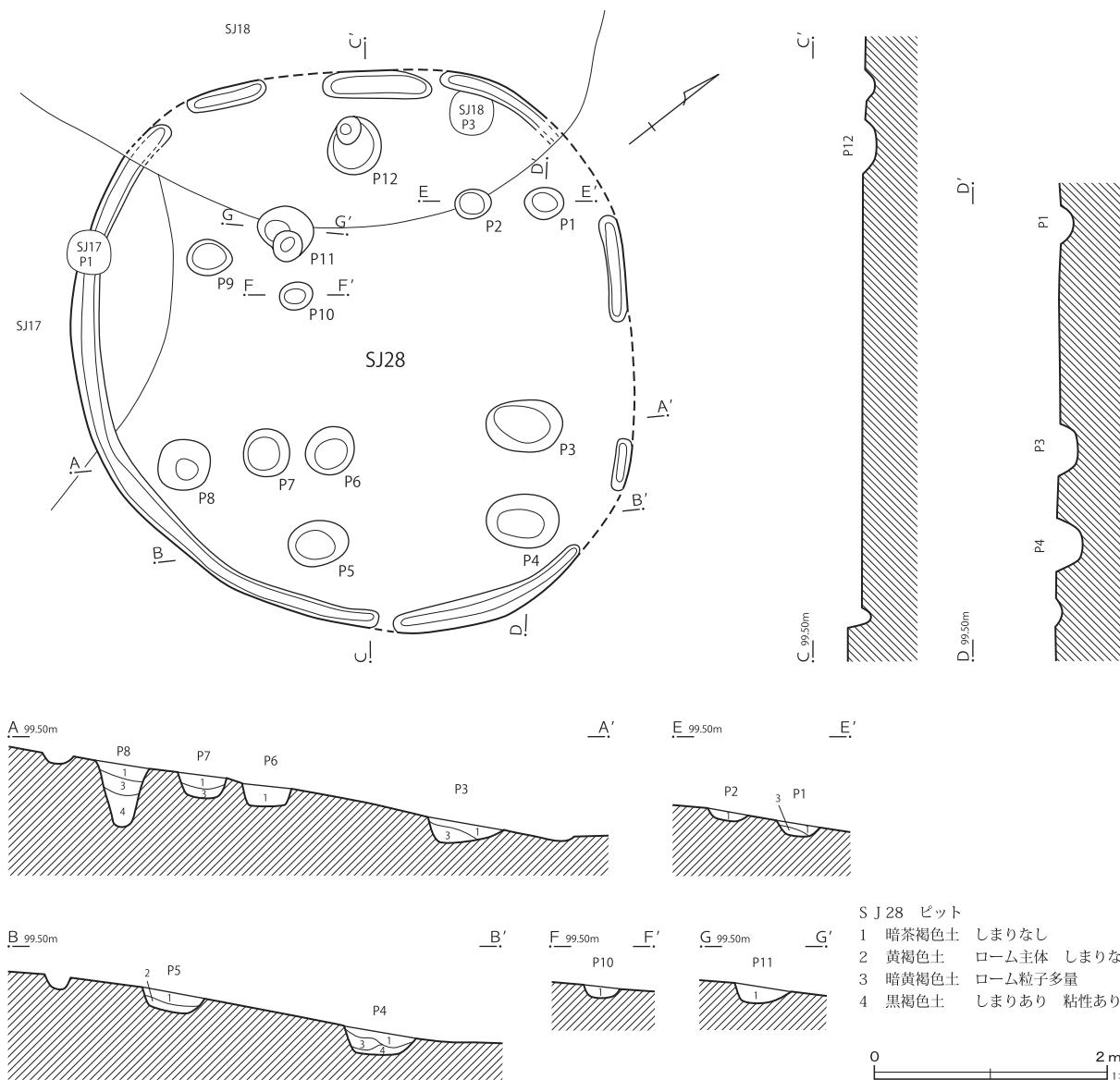
住居跡の時期は炉体土器から、加曾利E II式期と考えられる。

第28号住居跡（第180図）

L-7グリッドに位置する。地山は、北東方向に低くなる斜面となっている。第17・18号住居跡と重複する。第17・18号住居跡の項で触れたように、本住居跡が一番古い時期に相当する。覆土は失われており、壁溝が途切れ途切れに残存して検

出された。壁溝から平面形は円形であると考えられる。平面形を基準とした主軸方位は、N-48°-Wをとる。規模は長径4.78m、短径4.75m、深さ0.36mを測る。壁溝の最大幅0.21m、深さ0.12mである。

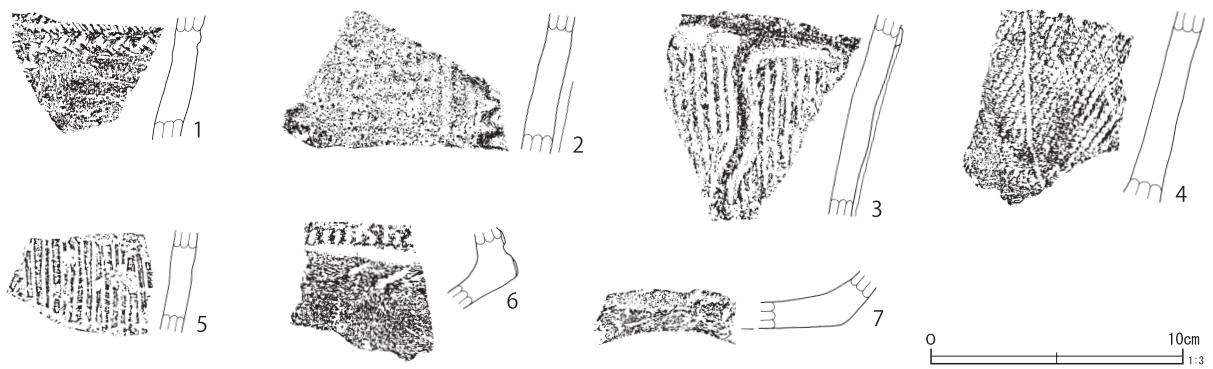
柱穴は12本が検出されたが、主柱穴は特定でき



第180図 第28号住居跡

第30表 第28号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.34	0.28	0.16	P 5	0.52	0.39	0.15	P 9	0.39	0.30	0.05
P 2	0.32	0.26	0.12	P 6	0.44	0.40	0.17	P 10	0.29	0.24	0.07
P 3	0.65	0.55	0.18	P 7	0.40	0.39	0.19	P 11	0.47	0.47	0.15
P 4	0.61	0.45	0.20	P 8	0.43	0.44	0.53	P 12	0.50	0.46	0.15



第181図 第28号住居跡出土遺物

なかった。当時の床面は失われており、炉跡は検出されなかった。

第181図1～7は検出された遺物である。1と6は、P3内から検出されている。他の遺物は、住居跡の範囲内から出土した土器片である。

1・2は勝坂系の深鉢形土器の破片で、1はペン先状結節沈線文と、それに平行してペン先状結節沈線文による小波状文を施文している。2は縦方向に施文している隆帶に交互刺突文を施文している。隆帶以外の文様は、器面が剥落しており不明である。

3・4は加曾利E系の深鉢形土器の胴部破片である。3は隆帶で区画された胴部に、隆帶による蛇行懸垂文を施文するもので、地文は撚糸文Lである。4は沈線による懸垂文を施文するものである。地文は単節R Lの縄文である。

5は地文に条線を施す土器で、曾利系の深鉢形土器の胴部破片と考えられる。

6は浅鉢形土器の破片で、屈曲部分には刻みや沈線文などを施文している。

7は底部の破片である。

住居跡の時期は、ピット内から検出された遺物から、勝坂式期と考えられる。

第29号住居跡（第182・183図）

N・O-5・6グリッドに位置する。住居跡の覆土や、掘り込みは残存していない。第30号住

跡と重複するが、両住居跡ともに覆土はなく、また第30号住居跡からは、遺物が出土していないため、出土遺物からも新旧関係は不明である。重複している土壙は、第17・217・251号土壙であるが、いずれの土壙も時期を決定づける遺物は出土しなかつたため、新旧関係は不明である。壁溝と柱穴から、平面形はおおよそ円形であると推定される。推定範囲の規模は長径5.13m、短径5.06mである。壁溝の最大幅0.12m、深さ0.10mである。

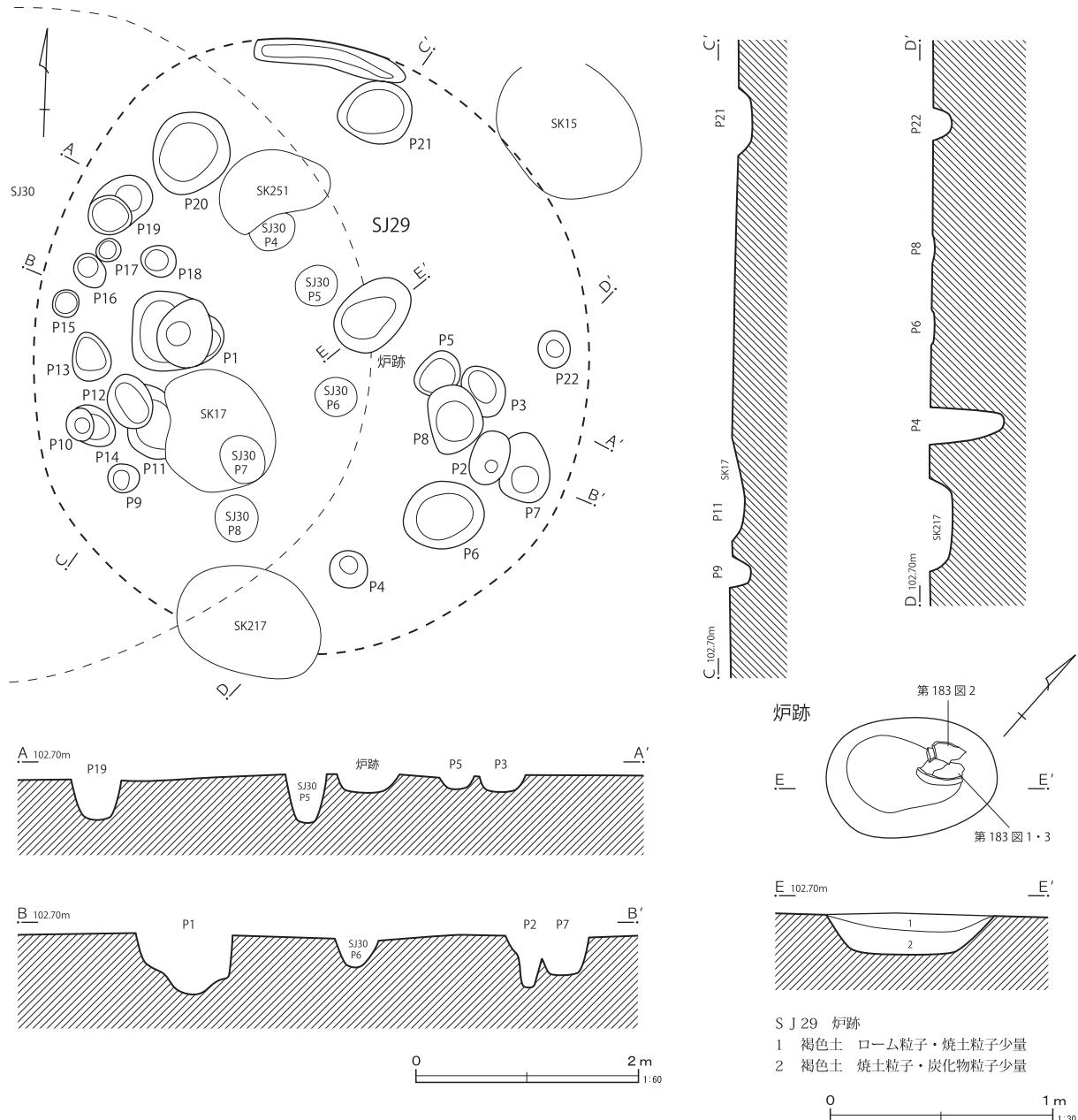
柱穴は22本が検出された。炉跡を中心として、円形に配置されているが、規則性はなく、主柱穴は確定できなかった。

炉跡は中央よりやや東側で検出された。炉跡内からは、第183図1～3の遺物が出土した。炉跡の規模は、長径0.77m、短径0.53m、深さ0.18mである。

第183図1～3は出土した土器である。いずれも炉跡内から検出されている。

1は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器の口縁部片である。隆帶で弧状に施文し、弧頂部には渦巻文を突起状に貼付している。頸部は無文である。地文は撚糸文Lである。2は浅鉢形土器の屈曲する肩部の破片で、隆帶で区画した文様内は、短沈線を施文している。3は浅鉢形土器の、無文の胴部の破片である。器面調整は丁寧である。

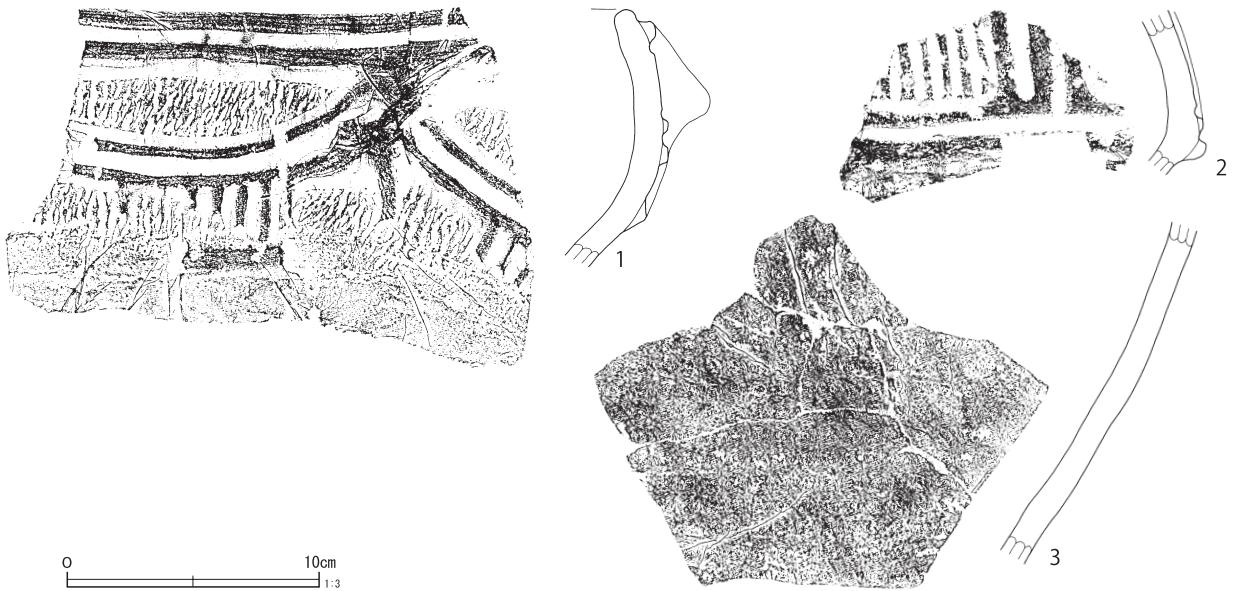
住居跡の時期は、出土した土器から加曾利E II式期と考えられる。



第182図 第29号住居跡

第31表 第29号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.84	0.69	0.60	P 9	0.28	0.26	0.18	P 16	0.32	0.26	0.20
P 2	0.49	0.32	0.46	P 10	0.31	0.26	0.33	P 17	0.22	0.20	0.19
P 3	0.48	0.32	0.13	P 11	0.60	0.37	0.16	P 18	0.31	0.28	0.29
P 4	0.34	0.32	0.65	P 12	0.50	0.39	0.20	P 19	0.62	0.41	0.35
P 5	0.44	0.36	0.11	P 13	0.43	0.35	0.37	P 20	0.76	0.67	0.30
P 6	0.73	0.60	0.26	P 14	0.41	0.31	0.13	P 21	0.68	0.58	0.12
P 7	0.62	0.48	0.37	P 15	0.24	0.22	0.55	P 22	0.33	0.28	0.15
P 8	0.59	0.47	0.16	—	—	—	—	—	—	—	—



第183図 第29号住居跡出土遺物

第30号住居跡（第184図）

N・O-5グリッドに位置する。掘り込みは無く、覆土は失われている。柱穴のみが残存している。第29・31号住居跡と重複しているが、いずれの住居跡にも覆土はなく、また本住居跡からは遺物が出土していないため、新旧関係は明確にはできない。重複する第17・215・217・251・252号土壙も同様で、新旧関係は明確にはできない。平面形は、柱穴の配置からすれば円形に近いと推定される。推定される住居跡の規模は長径6.07m、短径5.68mである。

柱穴は23本が検出された。柱穴は円形に配置されている。

炉跡は検出されなかった。

住居跡に帰属できる遺物は検出されなかったため、住居跡の詳細な時期は不明である。

第31号住居跡（第185図）

O-5グリッドに位置する覆土は、ほとんど失われていた。第27・30・32・70号住居跡と重複するが、第70号住居跡は、本住居跡が埋まった跡に掘り込まれていることが第70号住居跡の土層断面より明らかで、第70号住居跡は本住居跡よりも

時期は新しい。他の住居跡の新旧関係は不明である。土壙は、第65・212・213・251・252・253・254・260・265号土壙と重複している。第212号土壙、第213号土壙は土層や出土土器から、本住居跡よりも新しい時期と考えられる。他の土壙との新旧関係は、明確にすることはできなかった。部分的に残された壁溝や、壁からすると平面形は隅丸方形である。推定される住居跡範囲の規模は、長径5.36m、短径4.75m、深さ0.04mである。壁溝の最大幅0.25m、深さ0.03mである。

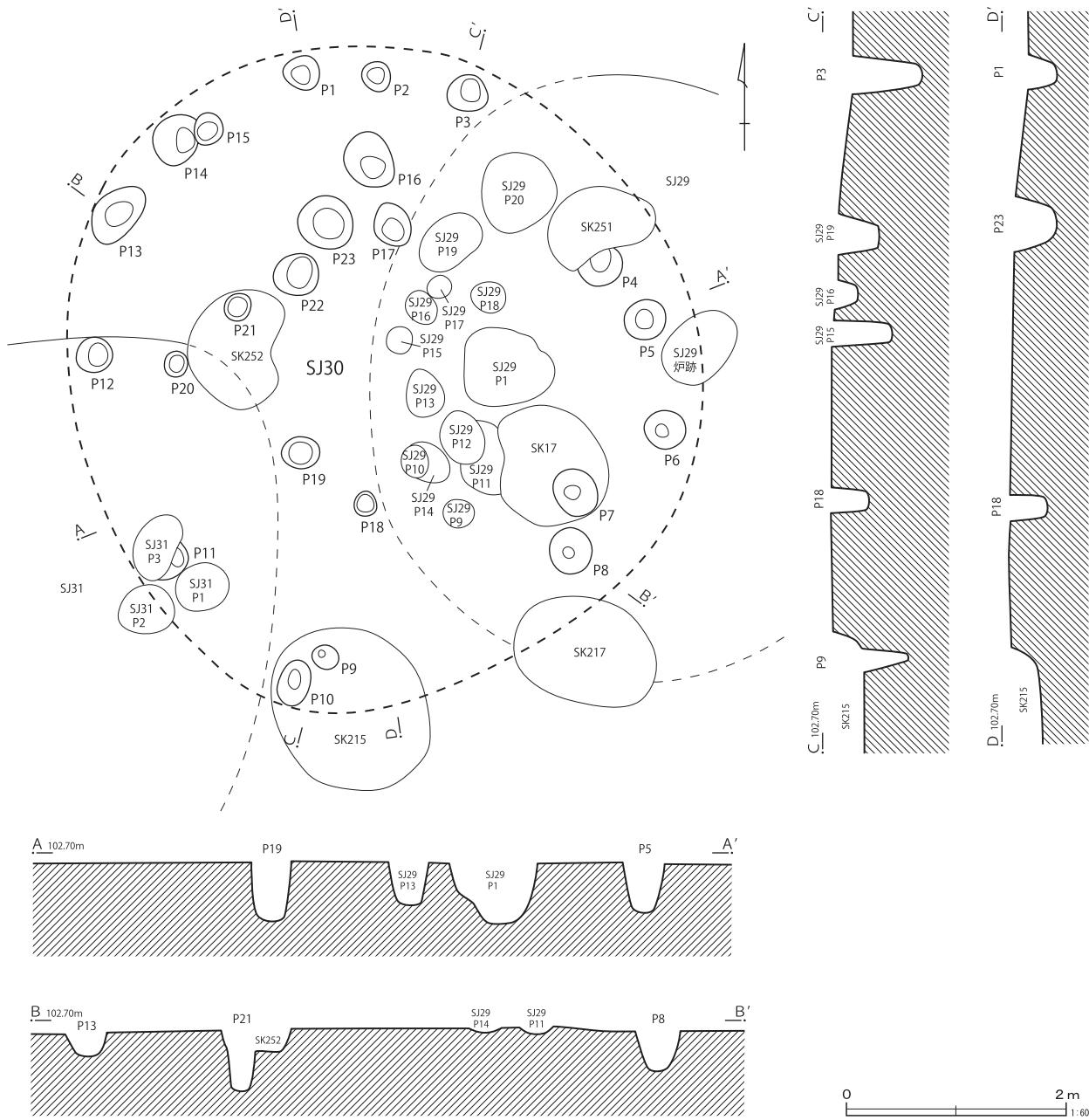
柱穴は8本が検出されたが、主柱穴を特定することはできなかった。

炉跡は地床炉で、住居跡のほぼ中央で検出された。第213号土壙によって、一部失われている。炉跡の規模は、長径0.95m、短径0.77m、深さ0.10mである。

住居跡に帰属する検出された遺物は、炉跡内から出土したごく少量の土器片のみである（第185図1・2）。

1は地文が櫛歯状の条線で、胴部を区画する沈線文が残存している。連弧文系の深鉢形土器の胴部破片と考えられる。

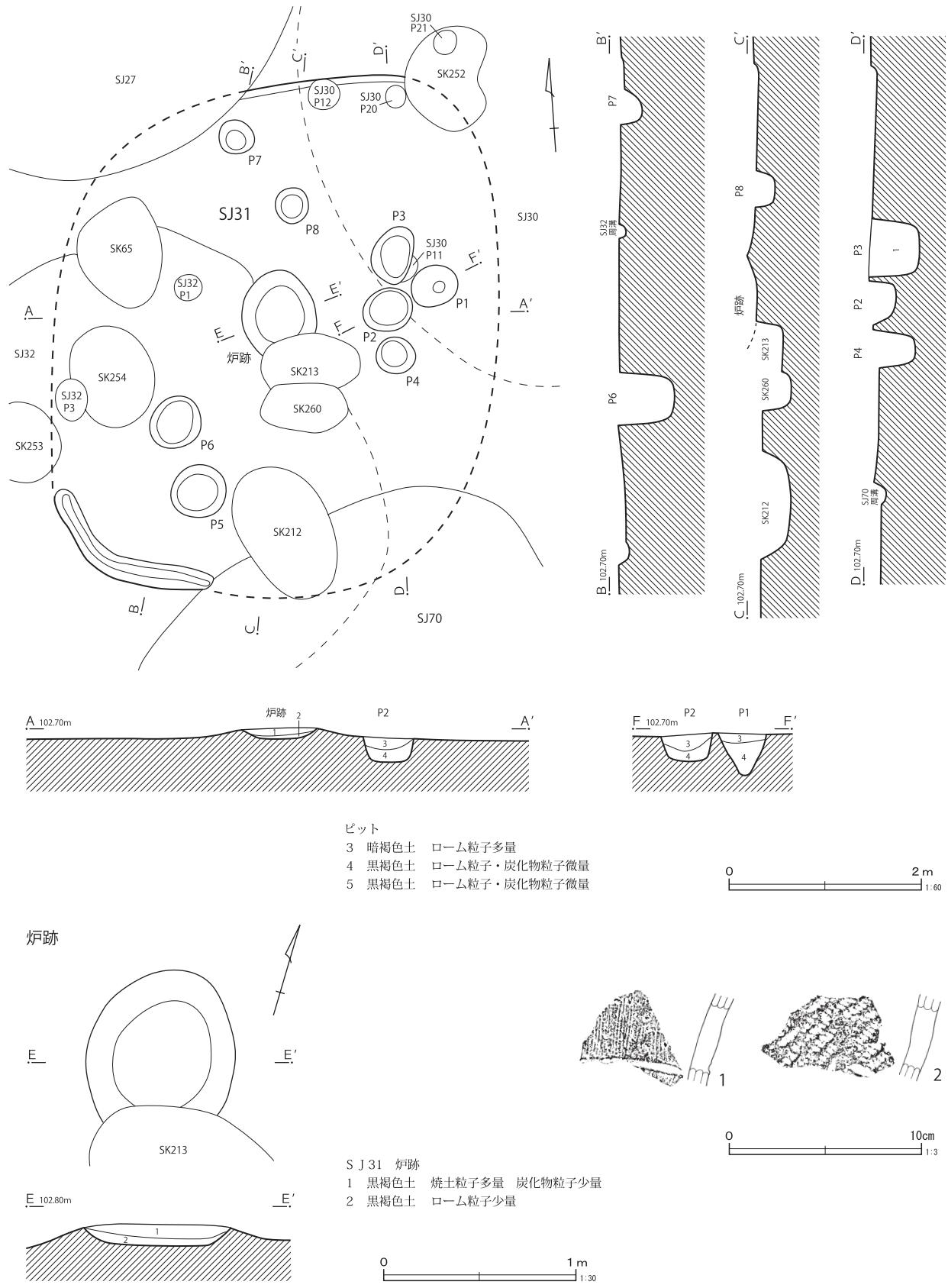
2は深鉢形土器の胴部の破片であるが、沈線文



第 184 図 第 30 号住居跡

第 32 表 第 30 号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.33	0.30	0.30	P 9	0.23	0.21	0.72	P 17	0.33	0.33	0.25
P 2	0.27	0.26	0.37	P 10	0.41	0.26	0.23	P 18	0.23	0.19	0.33
P 3	0.35	0.33	0.70	P 11	0.40	0.15	0.26	P 19	0.34	0.30	0.51
P 4	0.40	0.29	0.18	P 12	0.32	0.30	0.34	P 20	0.23	0.20	0.13
P 5	0.35	0.34	0.44	P 13	0.60	0.38	0.19	P 21	0.26	0.24	0.52
P 6	0.36	0.33	0.23	P 14	0.48	0.39	0.25	P 22	0.41	0.37	0.43
P 7	0.45	0.38	0.32	P 15	0.30	0.27	0.28	P 23	0.51	0.49	0.40
P 8	0.40	0.38	0.36	P 16	0.52	0.42	0.31	—	—	—	—



第185図 第31号住居跡・出土遺物

第33表 第31号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.50	0.42	0.43	P 4	0.40	0.38	0.35	P 7	0.37	0.34	0.24
P 2	0.52	0.45	0.22	P 5	0.55	0.55	0.27	P 8	0.36	0.34	0.18
P 3	0.62	0.41	0.52	P 6	0.51	0.56	0.57	—	—	—	—

の一部が胴部に認められるが、文様構成は不明である。地文として、単節R Lの縄文を縦方向に施文している。

住居跡の時期は、出土遺物から加曾利E II式期と考えられる。

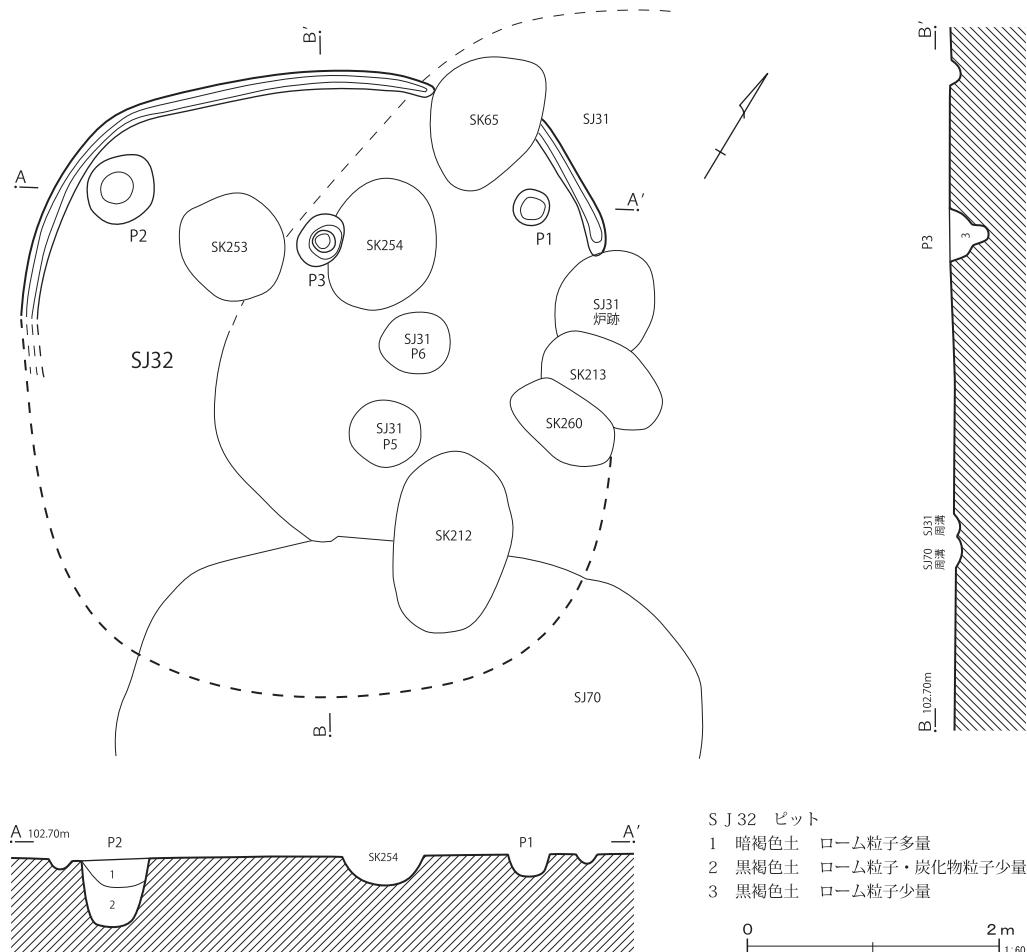
第32号住居跡（第186・187図）

O-4・5グリッドに位置する。掘り込みは検出されず、壁溝が北側半分のみ残存して検出された。重複する第31・70号住居跡のうち、第70号住居跡は、本住居跡埋没後に作られている。第31

号住居跡との新旧関係は、遺構の切り合いからは不明である。また、出土遺物からも明確ではない。重複する第65・212・213・253・254・260号土壙との新旧関係も不明である。平面形は残存する壁溝から、隅丸方形に近いと推定される。住居跡の推定範囲の規模は、長径4.97m、短径4.63m、深さ0.05mである。壁溝の最大幅0.16m、深さ0.06mである。

柱穴は3本が検出された。北側に検出され、住居跡の南側からは検出されていない。

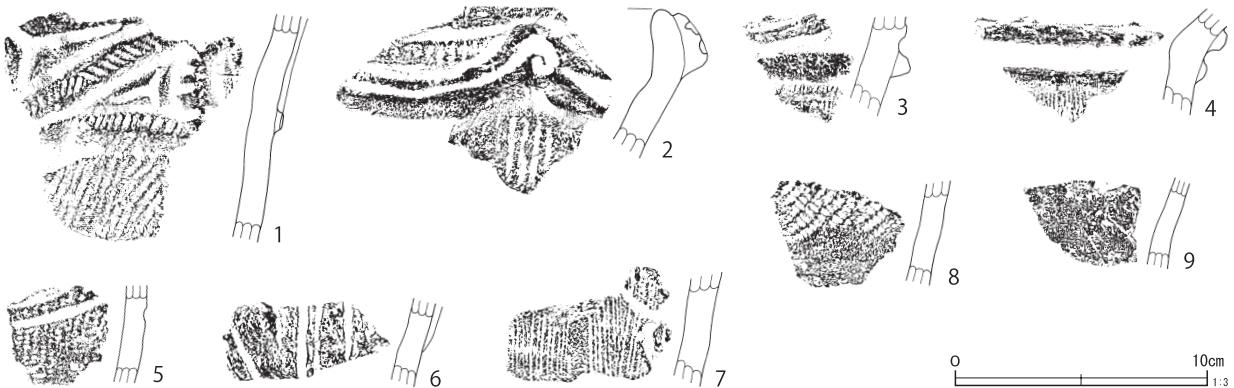
炉跡は検出されなかった。



第186図 第32号住居跡

第34表 第32号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.29	0.28	0.15	P 2	0.58	0.52	0.53	P 3	0.43	0.33	0.27



第187図 第32号住居跡出土遺物

第187図1～9は検出された遺物である。いずれも、深鉢形土器の小破片である。

1、6は勝坂系土器である。1は円筒形土器で、隆帯上に刻みを持ち、隆帯脇には沈線を施す土器で、隆帯による区画内には三叉文を施している。渦巻文となる隆帯脇には、刺突文を施している。胴部は地文のみを施している。地文は多条R Lの縄文を、縦方向に施している。6は胴部に隆帯と沈線文を施している。

2は加曾利E系のキャリパー形土器の口縁部の破片である。隆帯を連弧状に貼付し、弧頂部は渦巻文を施している。頸部に無文帯はなく、口縁部から続けて、地文である撚糸文Lを施している。

3・4、7は地文に条線を施す曾利系土器で、3・4は口縁から頸部の破片で、頸部と胴部を隆帯で区画している。7は胴部の破片で、沈線で蛇行懸垂文を施している。

5は連弧文系土器で、単節R Lの縄文を地文としている。

8は地文である単節R Lの縄文が施文される胴部破片で、9は無文の胴部破片である。

出土遺物には、壁溝や柱穴内出土のものはなかった。破片資料のみだが、出土遺物の多くは加曾利E II式期であった。住居跡の時期もおおよそ

同時期と考えられる。

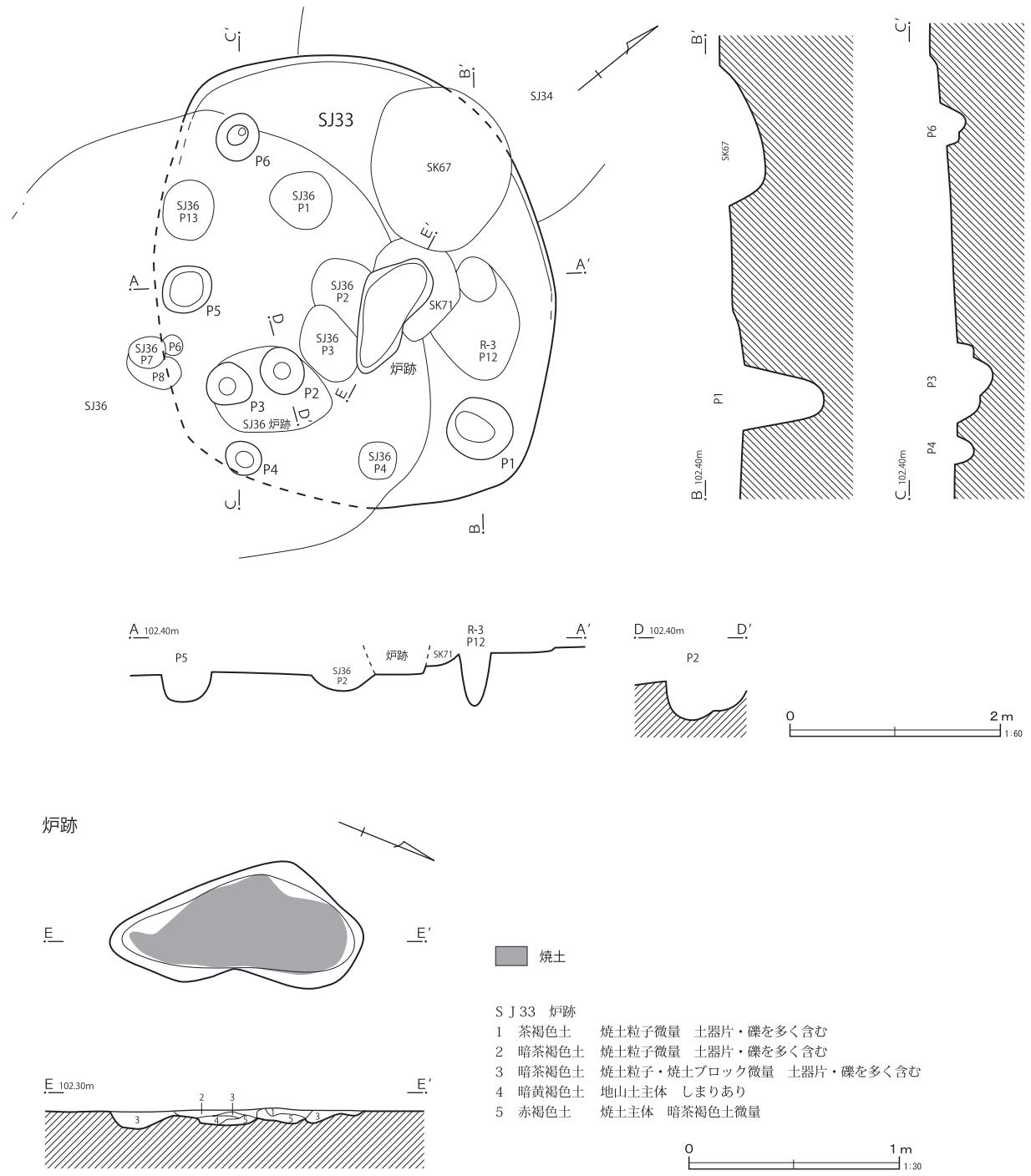
第33号住居跡（第188図）

R-3グリッドに位置する。住居跡の掘り込みは部分的に残存している。第34・36号住居跡、第67・71号土壙と重複する。重複する住居のうち第36号住居跡は、第36号住居跡の炉跡内に位置する本住居跡の柱穴が、炉跡を壊していないため、本住居跡は第36号住居跡より古い時期と考えられる。第34号住居跡は、新旧関係は明確ではないが、ほぼ同じ高さの床面で、第34号住居跡の壁溝を壊したことからすれば、本住居跡が新しいと言える。残存している壁の形状から、平面形は隅丸方形であると推定される。推定される範囲の規模は、長径4.28m、短径3.75m、深さ0.07mである。

柱穴は6本が検出された。P 1、P 3、P 5、P 6が主柱穴の可能性がある。

炉跡は中央よりやや東側で検出された。地床炉である。炉跡の規模は、長径1.21m、短径0.59m、深さ0.08mである。

第189図は検出された遺物である。第188図に見られるように、他の遺構と重複していない部分から出土した遺物を、住居跡に帰属させている。



第 188 図 第 33 号住居跡

第 35 表 第 33 号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.61	0.58	0.77	P 3	0.41	0.41	0.33	P 5	0.50	0.42	0.25
P 2	0.45	0.39	0.33	P 4	0.35	0.30	0.15	P 6	0.40	0.45	0.22



第189図 第33号住居跡出土遺物

第189図1～17は出土した土器である。

1～8は勝坂系の深鉢形土器の破片である。1は隆帯脇に角押し状の結節沈線文を施している。2は深鉢形土器の波状口縁部の破片で、口唇下にキャタピラ状爪形文を施文し、爪形文に沿って、三角押し文状のペン先状結節沈線文を施文している。3は隆帯脇にキャタピラ状爪形文を施文する深鉢形土器の破片である。4は深鉢形土器の胴部の破片で、縦方向に施文された平行沈線文に沿って爪形文を施し、爪形文に沿って蓮華文を施文している。5・6は隆帯に刻みを持つ深鉢形土器の口縁部の破片で、内湾する口縁部分は無文である。頸部には隆帯で区画された文様帶を持っている。7・8は深鉢形土器の無文の口縁部に、隆帯を貼付している。

9・10は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器の、口縁部の破片である。9は口縁部に貼付した隆帯を舌状に突起させ、渦巻文を施文している。地文として撚糸文Lを縦方向に施文している。10は口縁部に渦巻文などの文様を施文している。器面が荒れているため、地文の種類は不明である。

11は深鉢形土器の胴部の破片で、多条R Lの縄文の地文のみが施文されている。

12～15は無文の土器片で、12は開く口縁部部分の破片で、他は胴部の破片である。

16・17は底部の破片で、16は隆帯で懸垂文を施文している。16の推定される底径は8cmである。17の器面は無文である。17の推定される底径は9cmである。

第189図18～22は出土した石器である。

18は黒曜石製の石核である。6面中3面に風化面を持っている。

19は磨製石斧である。基部の欠損後、再加工を行っている。刃部は刃こぼれ状で、剥離痕が認められる。

20～22は打製石斧である。20は刃部に最大幅を持つ撥形である。21は刃部を欠損し、22は基部

と右側縁部を欠損している。左側縁部には抉りが入っている。

住居跡の時期だが、出土遺物内では、比較的多い破片は、勝坂式終末の土器であった。しかし、それも破片資料数点であるため、詳細な時期を決めることができなかった。

第34号住居跡（第190・191図）

R-3グリッドに位置する。重複する住居跡のうち、第33号住居跡は本住居跡の壁溝を壊していることから、第33号住居跡が新しいと言える。また第41号住居跡も、検出面が変わらない両住居跡のうち、本住居跡の壁溝跡が残存していることから、本住居跡が新しい可能性が高い。また、重複する第67号土壙は、壁溝を壊していることから、住居跡より新しいと考えられる。平面形は不定円形で、推定される長径3.81m、短径3.45mである。壁溝の最大幅0.20m、深さ0.05mである。

柱穴は8本が検出された。柱穴は北側に半円状に検出されている。

炉跡は検出されなかった。

第191図1～3は検出された遺物である。いずれも、深鉢形土器の破片である。

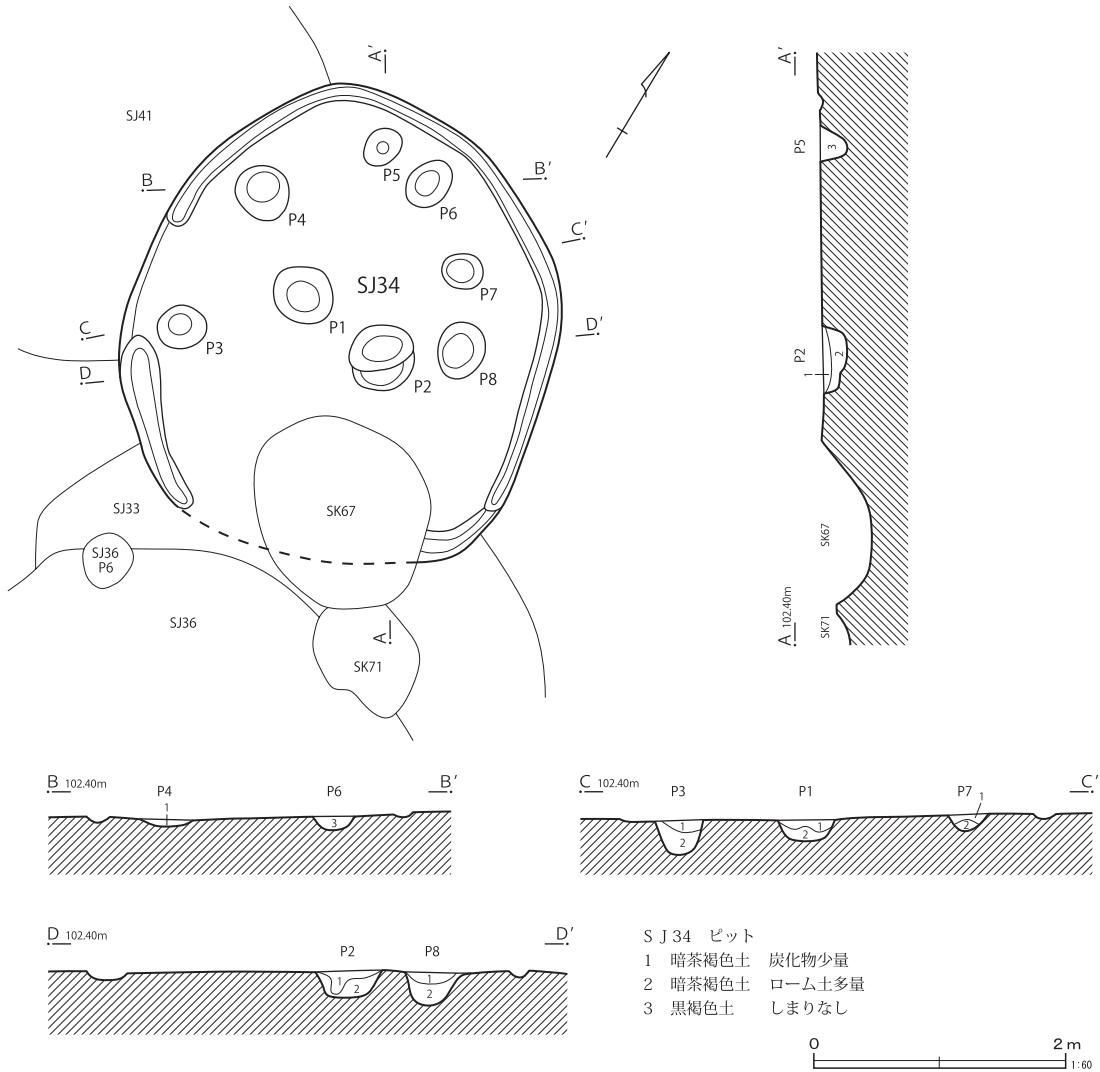
1は器面に爪形文を横方向に施文している。

2・3は同一個体の小破片である。地文のみを施文している。地文は多条R Lの縄文で、縦方向に施文している。

住居跡の時期を確定できる遺物は検出することができなかったため、詳細な時期は不明である。

第36号住居跡（第192～197図）

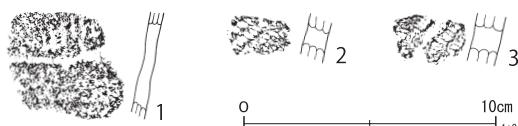
R-3グリッドに位置する。地山は南に向かって緩やかな斜面となっている。北側で僅かに掘り込みが確認できるが、南側は床面も削られている。北側に重複する第33号住居跡は、炉跡と第33号住居跡との切り合い関係から、本住居跡が新しい時期である。南側で部分的に重複する第57号住居跡



第190図 第34号住居跡

第36表 第34号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.50	0.44	0.16	P 4	0.44	0.43	0.05	P 7	0.34	0.30	0.12
P 2	0.52	0.51	0.27	P 5	0.32	0.26	0.21	P 8	0.45	0.35	0.27
P 3	0.33	0.37	0.26	P 6	0.43	0.32	0.10	—	—	—	—



第191図 第34号住居跡出土遺物

は、出土遺物から本住居跡の方が時期は古い。また、第12号集石土壙は本住居跡確認面よりも上で検出されており、住居跡廃絶後に作られたと考えられる。第71号土壙は、遺物も出土しておらず、

新旧関係は不明である。残存部から、平面形は円形と推定される。推定範囲内の規模は長径4.16m、短径3.87m、深さ0.18mを測る。壁溝の最大幅0.25m、深さ0.06mである。

柱穴は13本が検出された。P 1、P 4・P 5、P 10が主柱穴の可能性が高い。柱穴の多さや、内側に残存している壁溝から、建て替えが行われた可能性が高い。

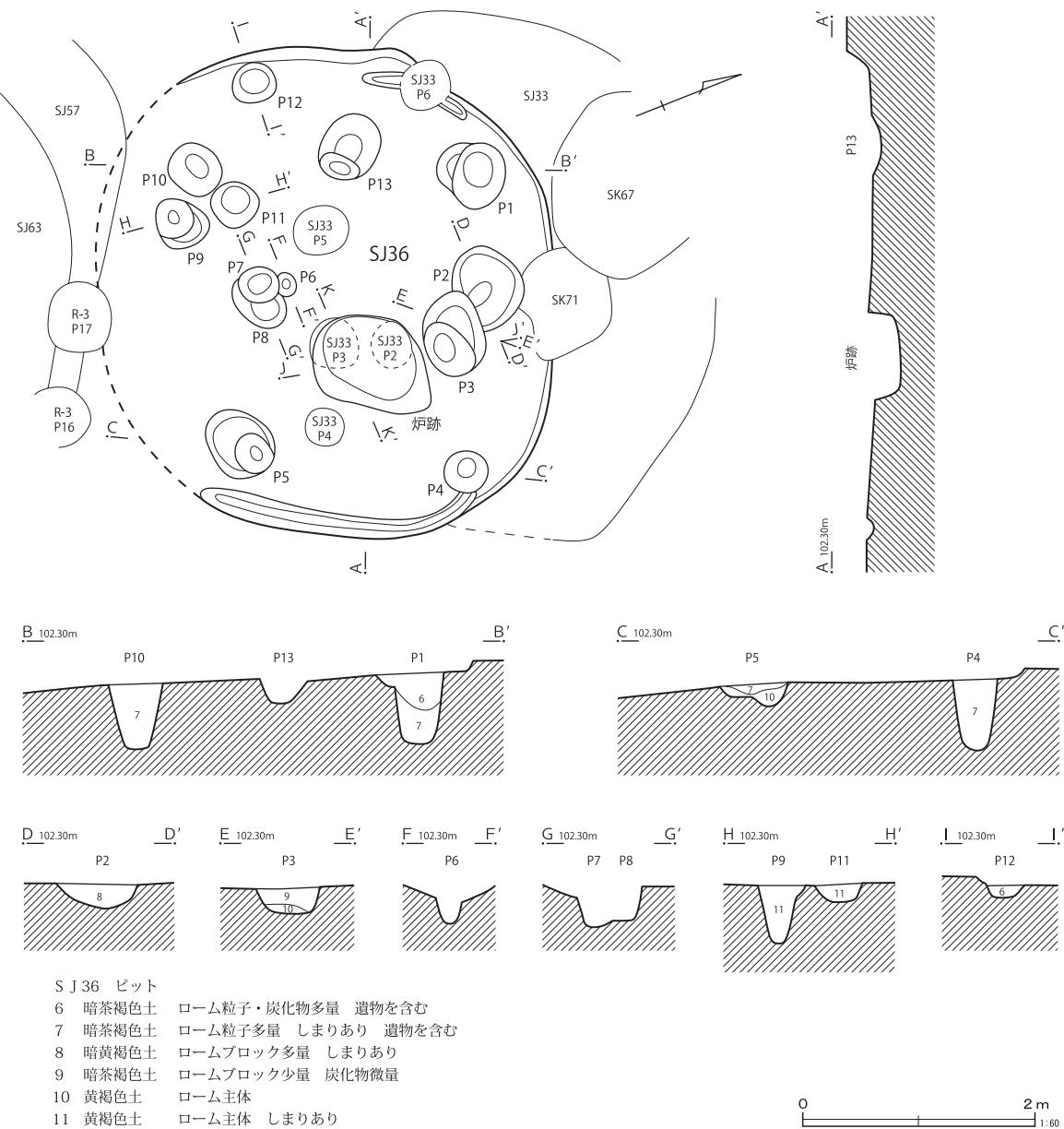
炉跡は、中央よりやや東側で検出された。炉跡

内からは、第195図2の深鉢形土器が検出されており、炉体土器であったと考えられる。炉跡の規模は、長径1.14m、短径0.78m、深さ0.22mである。

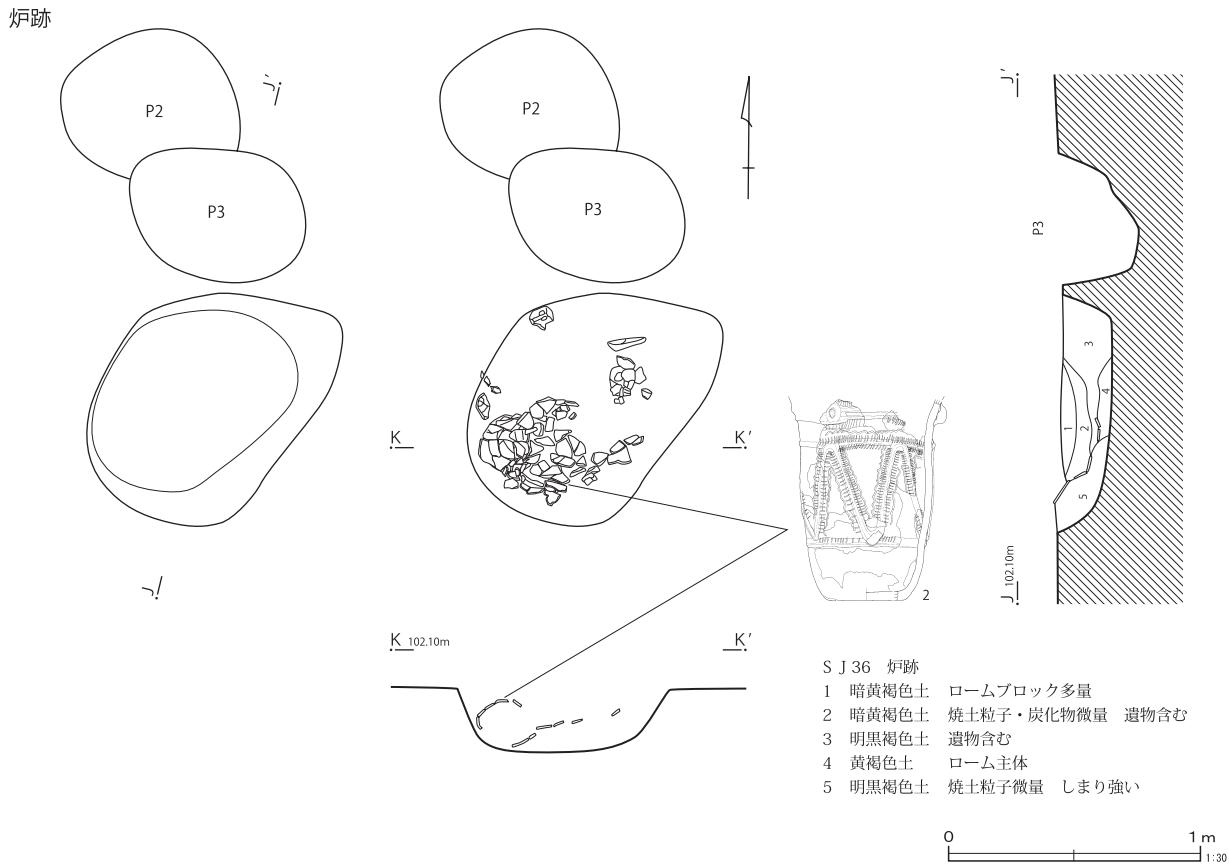
第195～197図は、出土した遺物である。遺物は第194図の遺物出土状況でもわかるように、残りのよい北半部から集中して検出された。

第195図1は勝坂式のパネル文系深鉢形土器で、底部は欠損している。口縁部は内湾し、胴上部で括れ、胴下部が算盤玉状に張り出し、底部に到る

器形である。明らかに同一個体だが、接点がなく接合できなかったため、表裏面の2面に分けて実測している。2単位の波状口縁で、口縁部は狭い無文部となる。波頂部下の胴部には隆帯で突起を貼付すると考えられるが、剥落しているため形状は明らかではない。突起下は、隆帯と交差させて垂下させている。波頂部と、それに対応する隆帯によって縦位に大きく2分割された器面は、その間でさらに隆帯で縦位に分割された可能性がある。分割された区画内は、平行沈線文で区画される。



第192図 第36号住居跡(1)



第193図 第36号住居跡（2）

第37表 第36号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.57	0.56	0.57	P 6	0.20	0.15	0.24	P 10	0.45	0.41	0.55
P 2	0.67	0.50	0.18	P 7	0.34	0.31	0.23	P 11	0.38	0.38	0.13
P 3	0.74	0.54	0.28	P 8	0.52	0.33	0.33	P 12	0.37	0.33	0.10
P 4	0.38	0.37	0.58	P 9	0.47	0.41	0.50	P 13	0.57	0.48	0.17
P 5	0.66	0.52	0.16	—	—	—	—	—	—	—	—

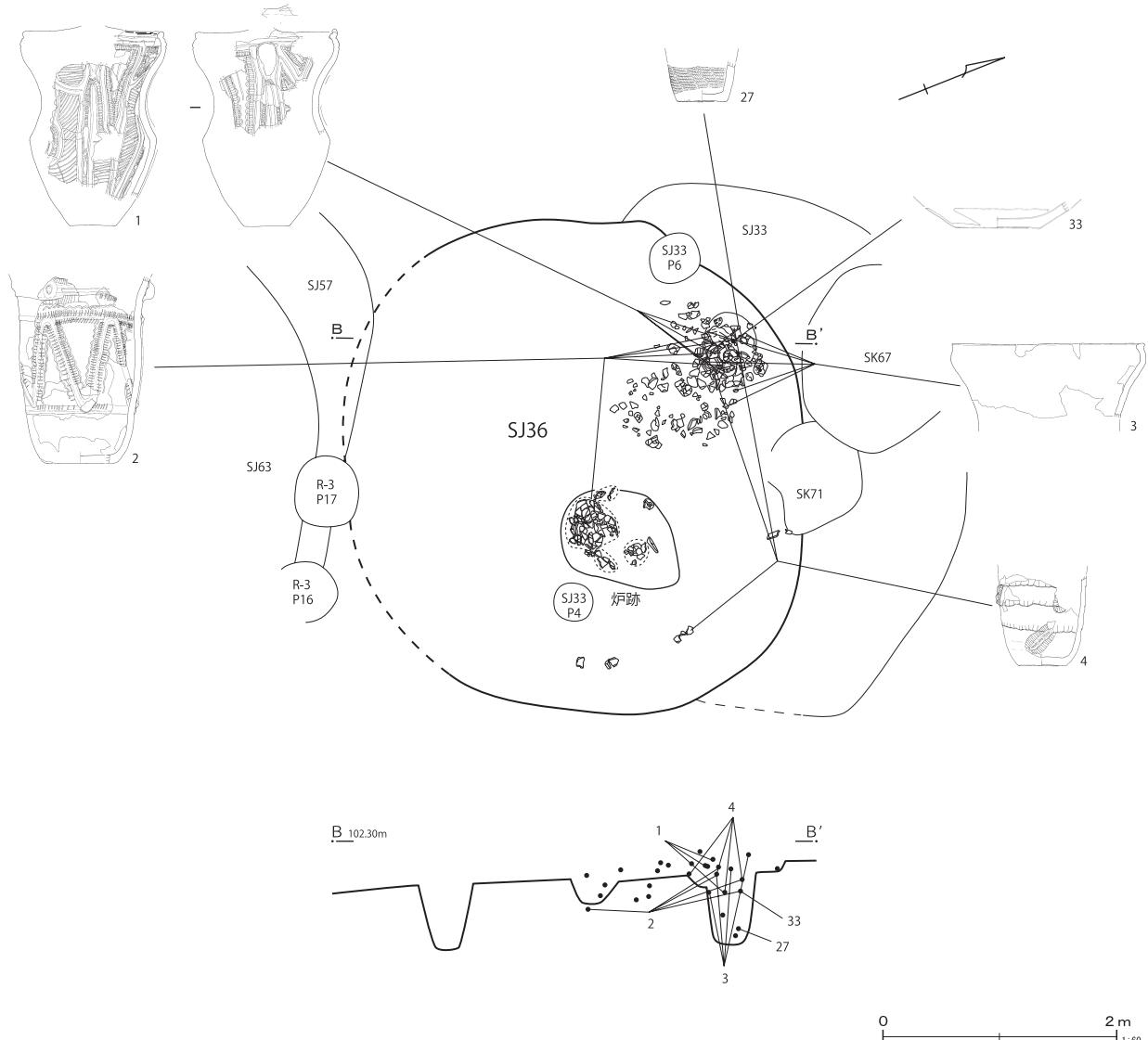
区画内は、短沈線を斜め方向に充填するものと、キャタピラ状爪形文を沿わせるものとに、大きく2つに分かれ。爪形文には、蓮華文を沿わせ区画の中央には、三叉文などを施文している。推定口径は23cmである。

第195図2は炉跡内から検出された、炉体土器と考えられる深鉢形土器の胴部から底部である。口縁部は欠損している。器面に隆帯を巡らし、横方向に分割する土器である。広い文様帶と狭い文様帶を交互に施文すると考えられる。狭い文様帶には、中央に小波状沈線文を巡らしている。隆帯脇には爪形文が施文されるが、キャタピラ状では

なく、粗雑に施文されている。最下段の隆帯脇の爪形文は刻みに近い。上部に残る文様帶には、キャタピラ状に施文されている。広い文様帶には、隆帯を鋸歯状に連続して貼付し、三角形状の区画を作り出している。隆帯脇には爪形文を粗雑に施文し、爪形文に沿わせて小波状沈線文を施文している。底径は12.4cmである。

第195図3は深鉢形土器の口縁部である。胴部から底部は欠損している。内湾する口縁部は無文である。口径は32.8cmである。

第195図4は深鉢形土器の胴部から底部である。胴部には、輪積み部分を指頭で押圧し、ひだ状



第194図 第36号住居跡遺物出土状況

となっている。また、ぞうり虫状に隆帯を貼付し、隆帯の周囲にはキャタピラ状爪形文を巡らしている。隆帯上を押圧し波打たせ、押圧部分の中央には刻みを入れている。底径8.2cmである。

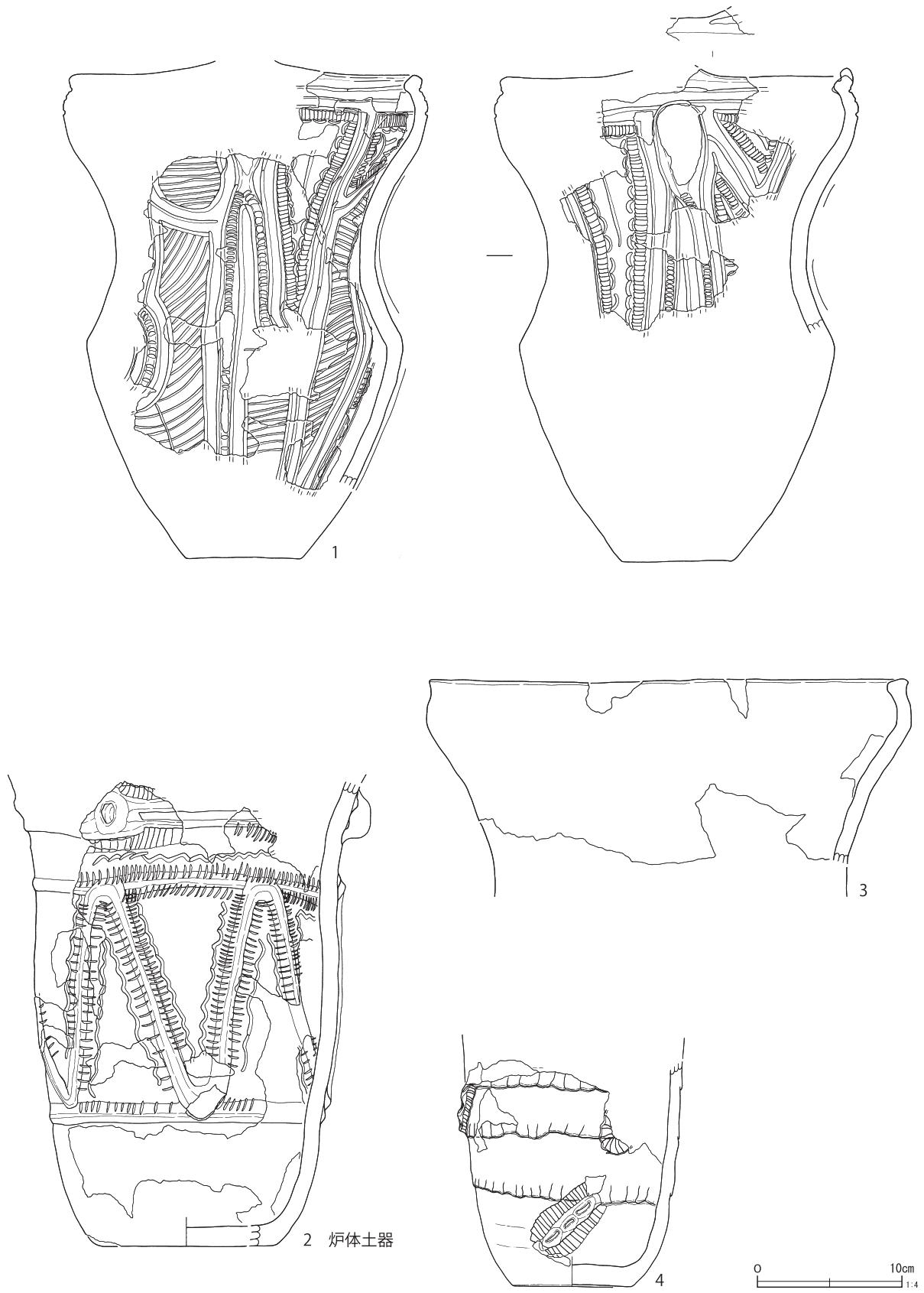
第196図5～33は出土した土器片である。

23は深鉢形土器の胴部で、結節沈線文を縦方向に施文している勝坂系の土器である。

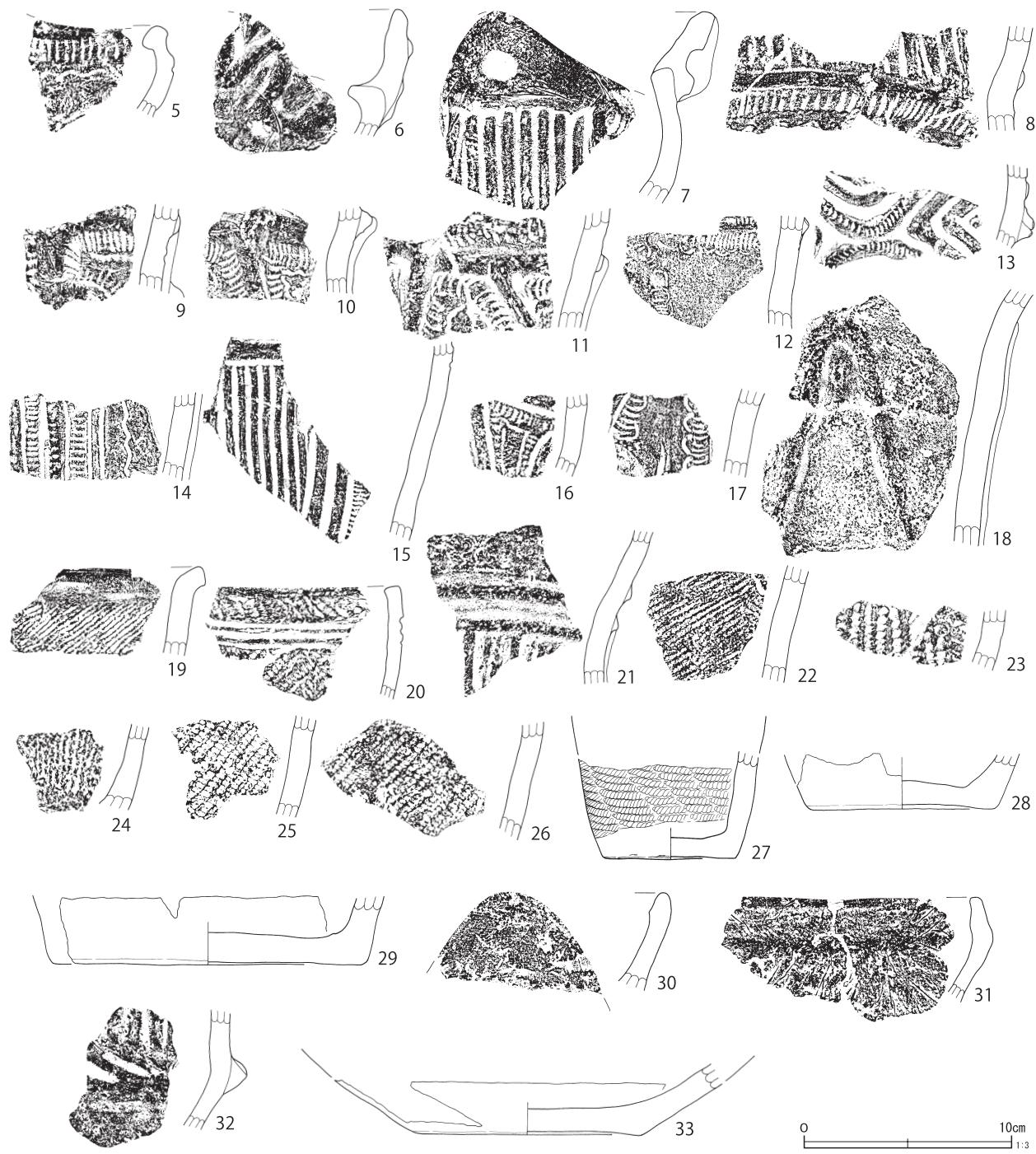
5、8～12は隆帯脇にキャタピラ状爪形文と、爪形文に沿って小波状沈線文や、三角押文状のペン先状結節沈線文を施文する勝坂系土器である。いずれも深鉢形土器の破片である。5は波状口縁で、口唇部直下にキャタピラ状爪形文を施文して

いる。爪形文には小波状沈線文を沿わせている。8は、隆帯下側には爪形文を施文するが、上側には施文していない。上側の区画内は、沈線を充填している。隆帯は半截竹管の内側でなぞられ、両側には細い沈線が残っている。9は爪形文に沿ってペン先状結節沈線文が、10は小波状沈線文を施文している。11は爪形文が半截竹管の内面を使用して施文されている。また、隆帯の上側には沈線文が施文されている。12は爪形文に沿って、蓮華文を施文している。

6・7、13～20は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂



第195図 第36号住居跡出土遺物（1）



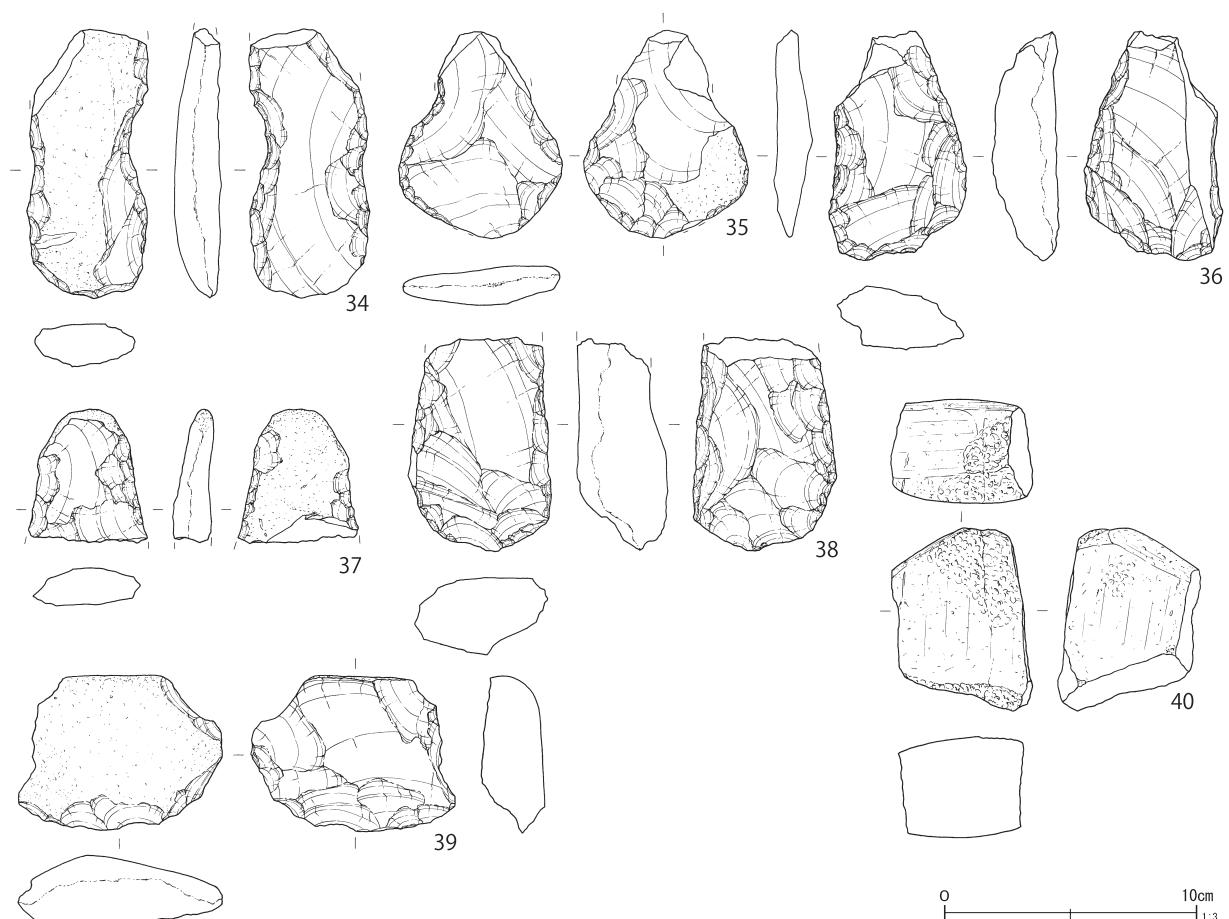
第196図 第36号住居跡出土遺物（2）

式終末から加曾利E式初頭の深鉢形土器の破片である。

6・7は口縁部の把手部分である。6は把手の頂部から、蛇行する隆帯を口縁部側に貼付している。7は三角形状の把手中央に、円文を施文するもので、口縁部には半截竹管で平行沈線文を縦方

向に施文している。

13・14は刻みを施す隆帯を施文し、それに沿って沈線文を施文している。13は隆帯脇に半截竹管による平行沈線文を施文し、その形状に沿って内側には平行沈線文を施文している。14は隆帯脇に沈線も平行して施文して、平行する沈線文間に刻



第197図 第36号住居跡出土遺物（3）

みを施している。文様間には、小波状沈線文を施している。

15～17は沈線文のみが残存している。隆帯は施文されていない。15は半截竹管の内面の使用した平行沈線文で文様を区画し、区画内に平行沈線文を充填している。別の区画には、沈線文に沿って爪形文を施文している。16・17は沈線に沿って爪形文を、その爪形文に沿って16は小波状沈線文を、17は蓮華文を施文する。

18は無文の口縁部の破片で、隆帯で鋸歯状に文様を施文している。

19・20は地文を施文する口縁部の破片である。19は角頭状の口唇部が外反するもので、地文は無節Rを横方向に施文している。20は口唇部が角頭状となるもので、口縁部には沈線文を巡らしている。地文は太細の条を撚り合わせた単節R Lの原体で、口縁部は横方向に胴部は縦方向に施文して

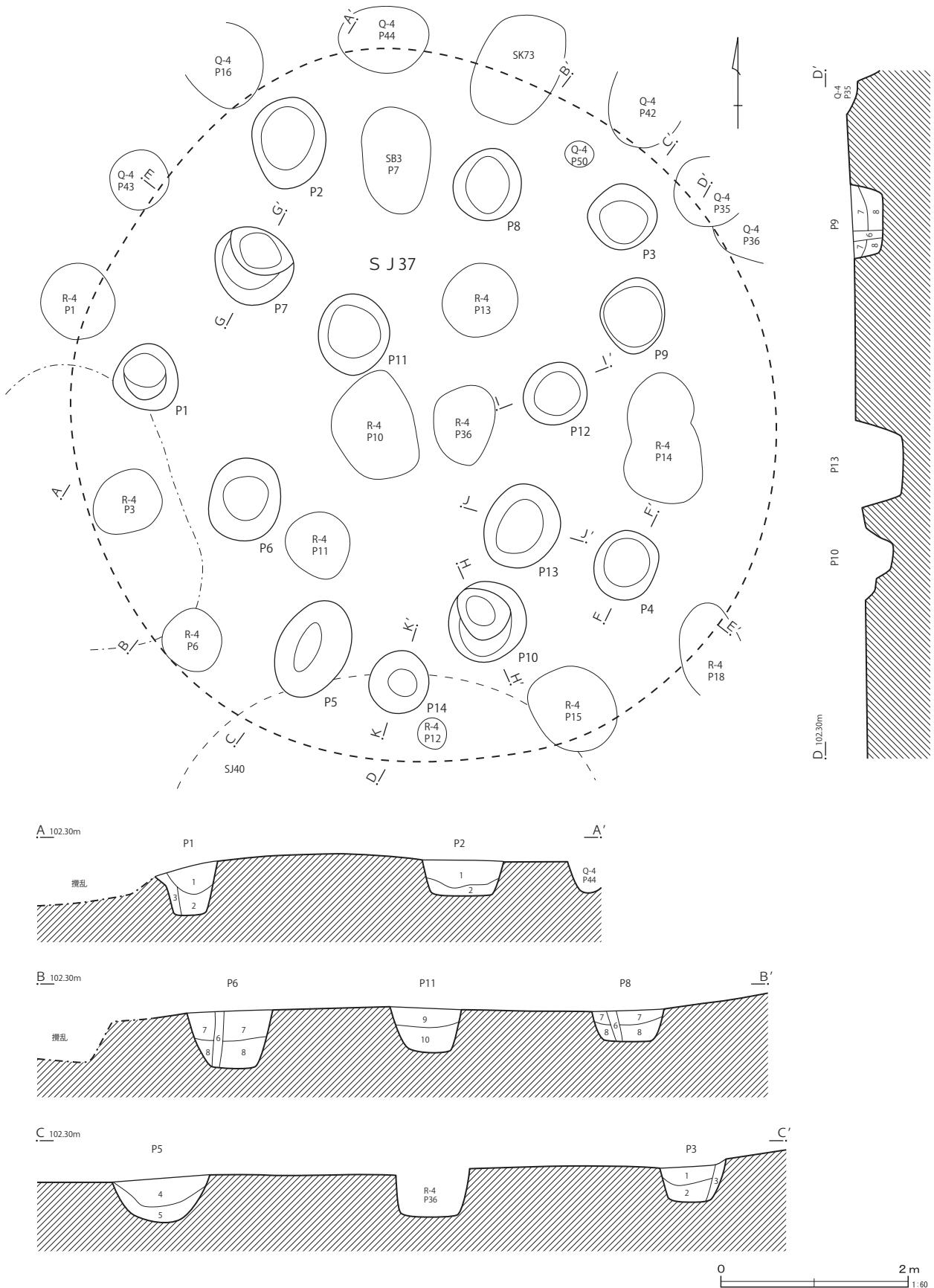
いる。

第196図21は加曾利E系の深鉢形土器の、頸部から胴部の破片である。頸部は無文で、胴部には隆帯で懸垂文を施文している。地文は撚糸文Lである。

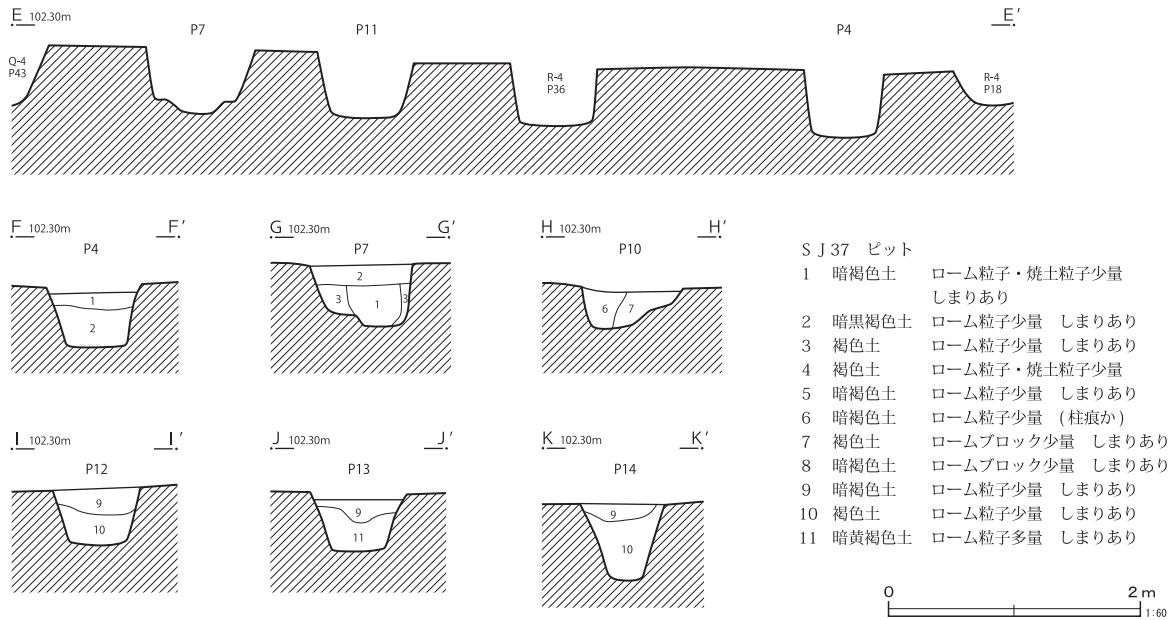
第196図22、24～26は地文のみを施文する深鉢形土器の胴部の破片である。24の地文は撚糸文Lで、縦方向に施文している。25の地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。26の地文は多条R Lの縄文で、縦方向に施文している。

第196図27～29は深鉢形土器の底部である。27は胴部に単節L Rの縄文を、斜め方向に施文している。底径は6.5cmである。28の底径は9cm、29の底径は15cmである。

第196図30～33は浅鉢形土器の破片で、30は把手部分、31は無文の口縁部、32は屈曲する肩部に沈線を施文している。33は底部で、底径11cmであ



第198図 第37号住居跡(1)



第199図 第37号住居跡（2）

第38表 第37号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.69	0.68	0.58	P 6	0.96	0.84	0.56	P 11	0.86	0.74	0.51
P 2	1.02	0.79	0.37	P 7	0.85	0.80	0.50	P 12	0.70	0.66	0.43
P 3	0.67	0.66	0.36	P 8	0.78	0.72	0.30	P 13	0.91	0.76	0.47
P 4	0.74	0.64	0.63	P 9	0.80	0.78	0.31	P 14	0.66	0.61	0.62
P 5	1.08	0.73	0.48	P 10	0.86	0.80	0.29	—	—	—	—

る。

第197図34～40は出土した石器である。

34～38は打製石斧である。34は横長の剥片を使用し、側縁から最低限の調整剥離を行っている。基部が欠損する打製石斧で、右側縁部に抉りを入れている。刃部は偏刃である。35・36は基部に最大幅を持つ撥形のもので、基部を欠損している。35は側縁部に大きく抉りが入る。刃部は偏刃である。36の刃部は偏刃である。37は基部のみが残存する。38は肉厚のもので、丸刃である刃部のみが残存している。

39はスクレイパーである。剥片の鋭い端部側を刃部とし、調整剥離は最低限行っている。表面には大きく自然面が残存している。

40は磨石である。器面はよく磨られているが、端部には敲打痕が顕著で、敲石としても使用していたと考えられる。

住居跡の時期は、炉体土器から勝坂式期後葉である。

第37号住居跡（第198・199図）

Q・R-4グリッドに位置する。柱穴のみが残存するもので、掘り込みはなく、床面も失われていると考えられる。第40号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第73号土壙とは重複するが、遺構が切り合わず、また本住居跡から遺物が検出されていないため、新旧関係は不明である。平面形は、柱穴の範囲から円形に近いと推定される。推定される範囲の規模は長径7.35m、短径7.33mである。

柱穴は14本が検出された。円形に巡る形態で配置されている。

炉跡は検出されなかった。

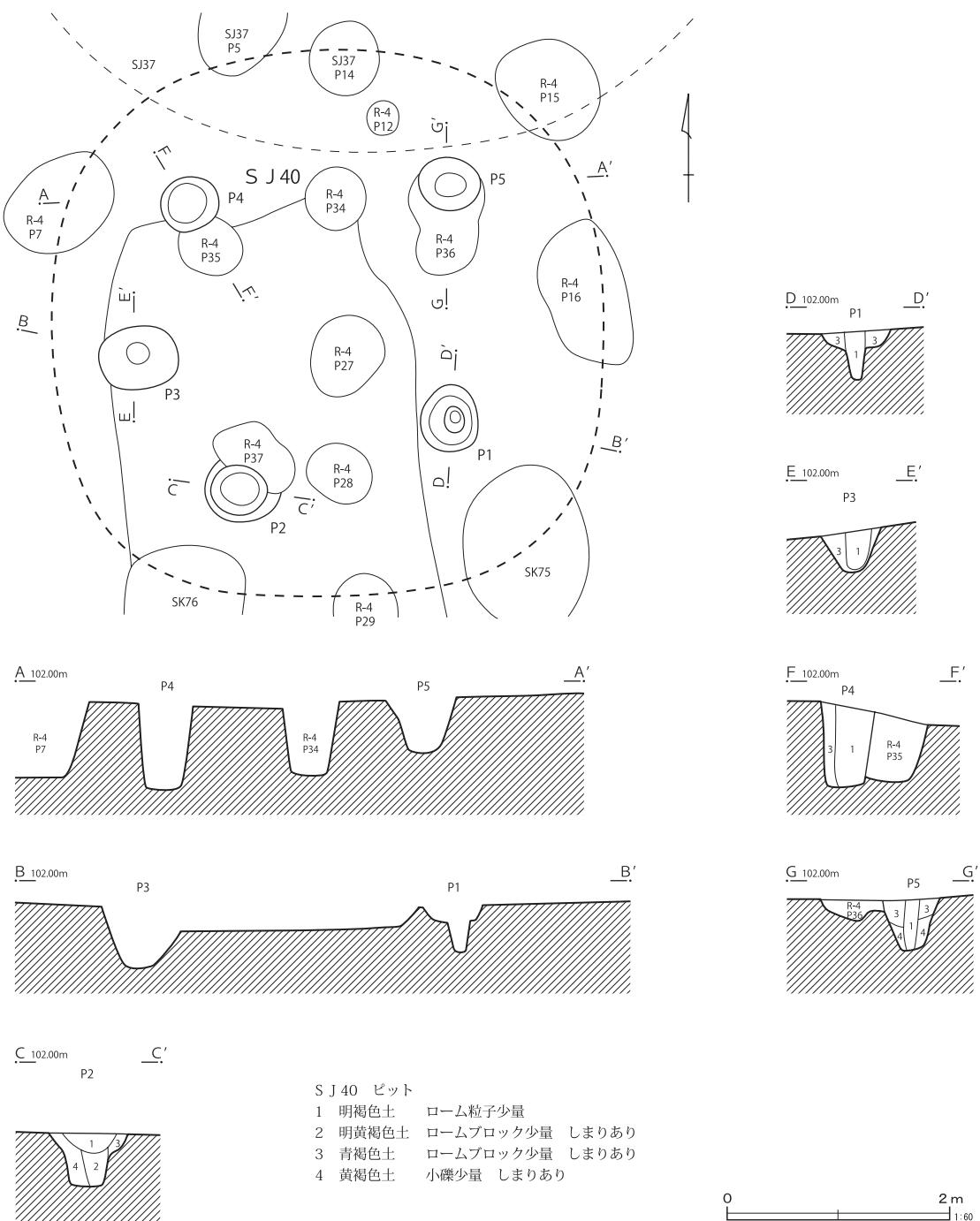
遺物は検出されなかったため、住居跡の詳細な時期は不明である。

第40号住居跡（第200図）

R-4グリッドに位置する。第37号住居跡、第75・76号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。床面の一部と柱穴のみ残存する住居跡で、平

面形は柱穴の配置から、円形に近い楕円形を呈するものと思われる。推定される規模は長径4.93m、短径4.92m、深さ0.06mを測る。

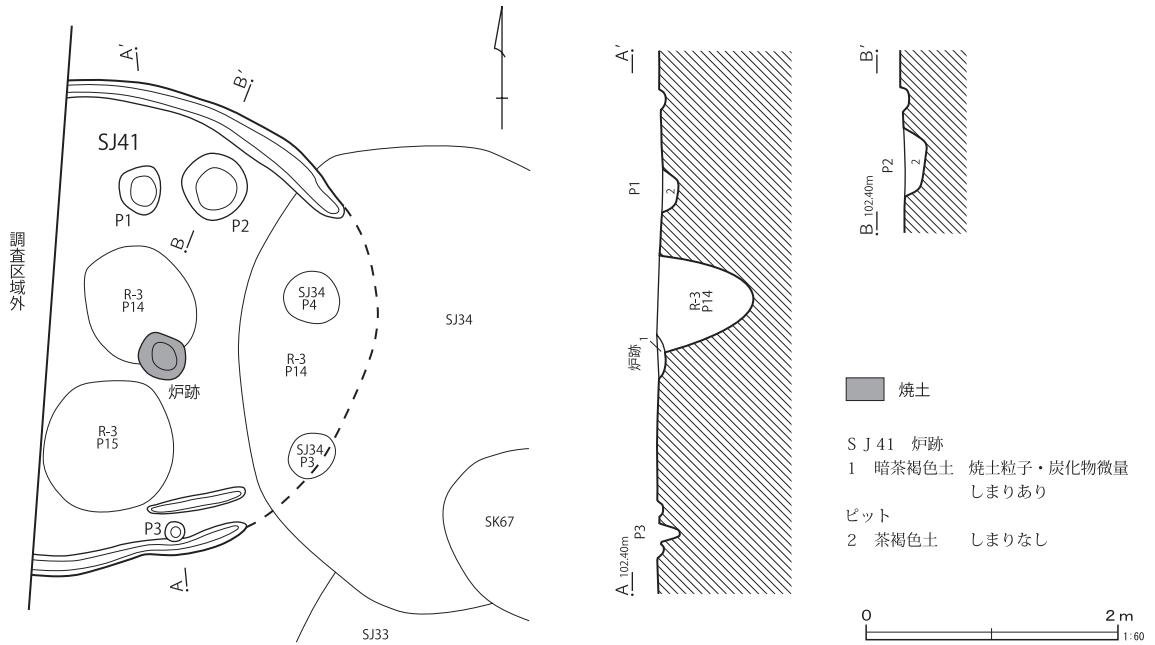
多数のピットと重複するが、本住居跡に所属す



第200図 第40号住居跡

第39表 第40号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.60	0.51	0.45	P 3	0.69	0.57	0.32	P 5	0.56	0.41	0.44
P 2	0.67	0.51	0.47	P 4	0.51	0.46	0.78	—	—	—	—



第201図 第41号住居跡

第40表 第41号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.38	0.33	0.12	P 2	0.51	0.50	0.21	P 3	0.17	0.15	0.16

る柱穴は、P 1～P 5の5本が推定される。また、柱穴の重複関係もあることから、建て替えの住居跡の可能性もある。

炉跡及び壁溝等の住居跡の付属施設は検出されなかった。

本住居跡に所属する明瞭な遺物は出土していないが、5本柱穴で、円形に近い平面形を持ち、壁溝が存在しないことを考慮すると、勝坂式の終末期に所属する可能性が高い。

第41号住居跡（第201図）

R-3グリッドに位置する。第34号住居跡と重複し、新旧関係は不明であるが、重複部分の壁溝が不明となることから、本住居跡の方が古い可能性がある。平面形は約半分が調査区域外にあるため、不詳であるが、東西方向に細長い楕円形を呈するものと推定される。床面まで削平されており、地床炉、壁溝、柱穴の一部が現存する。

住居跡の規模は、調査範囲内で長径3.83m、推

定される短径2.58m、深さ0.06mを測る。

柱穴は壁溝寄りに3本が検出された。P 1とP 2が隣接して存在し、炉を中心として対称的な位置に、小さなP 3が存在する。大きさや深さが不揃いであり、すべてが本住居跡の柱穴であるかは不明である。

炉跡は地床炉で、調査範囲内ではほぼ中央で検出されているが、推定される住居跡の全体からは、中央より東側の壁寄りに位置しているものと思われる。ほぼ円形を呈し、規模は長径0.41m、短径0.38m、深さ0.04mを測る。炉床が浅く、埋設土器等の痕跡は認められなかった。

壁溝は重複部分で不明瞭となっているが、全周していたと思われる。住居跡南側の一部で、壁溝が二重になっている部分があり、隣接する柱穴があることなどから、建て替えられた住居の可能性が高い。壁溝の最大幅0.25m、深さ0.04mである。

住居跡に明瞭に帰属する遺物がなく、所属時期は不明である。

第42号住居跡（第202～207図）

P-7・8グリッドに位置する。第166、175号土壌と重複するが、本住居跡の方が新しい。二重の壁溝が存在することから建て替え住居と推定され、炉及び埋甕も各2基検出されている。炉跡1には外側の壁溝が、炉跡2には内側の壁溝が伴うものと判断される。

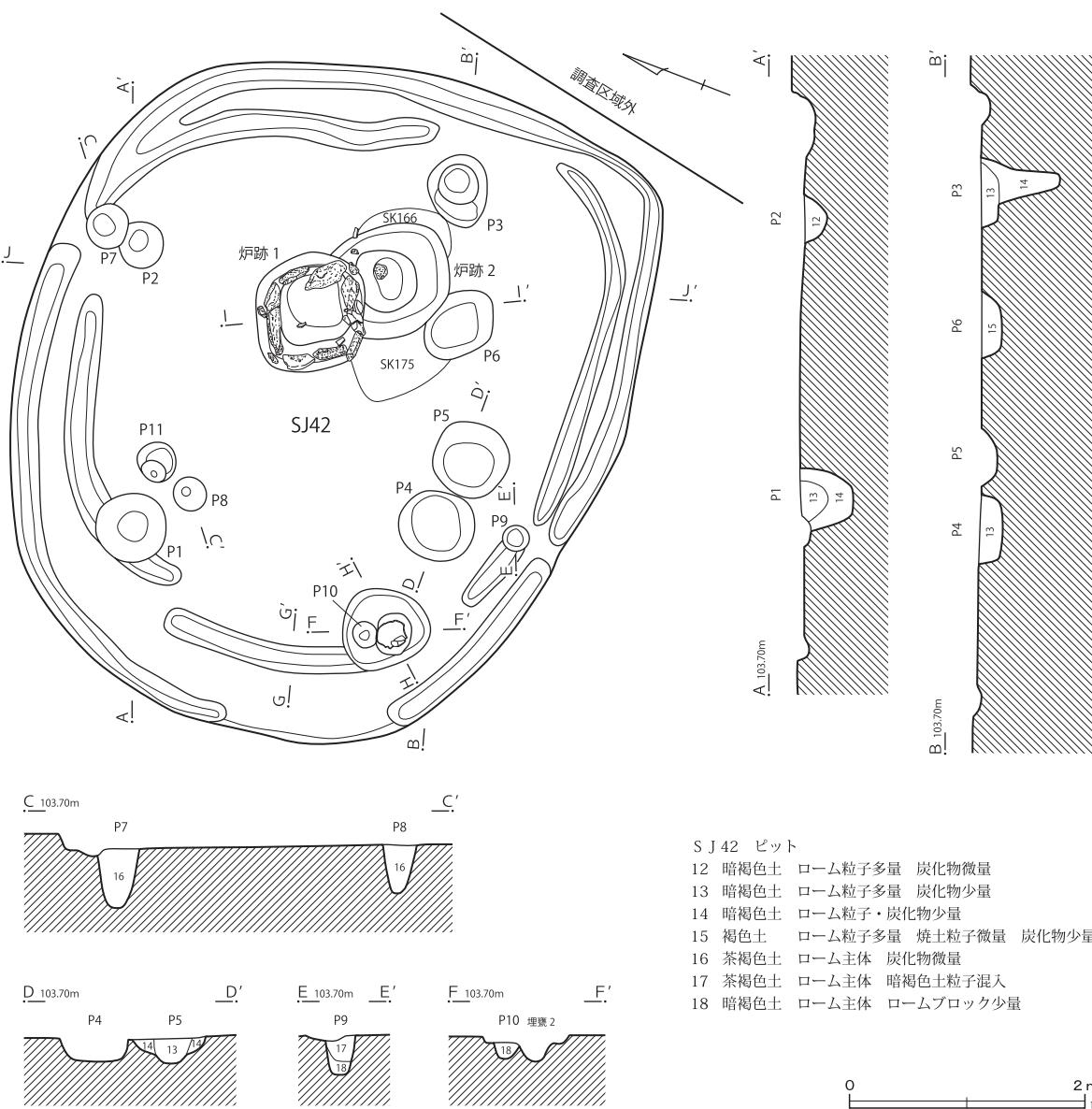
平面形は奥壁である東壁がやや開く隅丸の台形状を呈し、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-86°-Eをとる。規模は長径5.75m、短径5.33m、深さ0.10mを測る。外側の壁溝のプランは南

東コーナーが強く角張っている。

柱穴は二重に巡る壁溝の内側に、11本が検出された。外側を巡るピット列が外側の壁溝に対応するものと思われる。

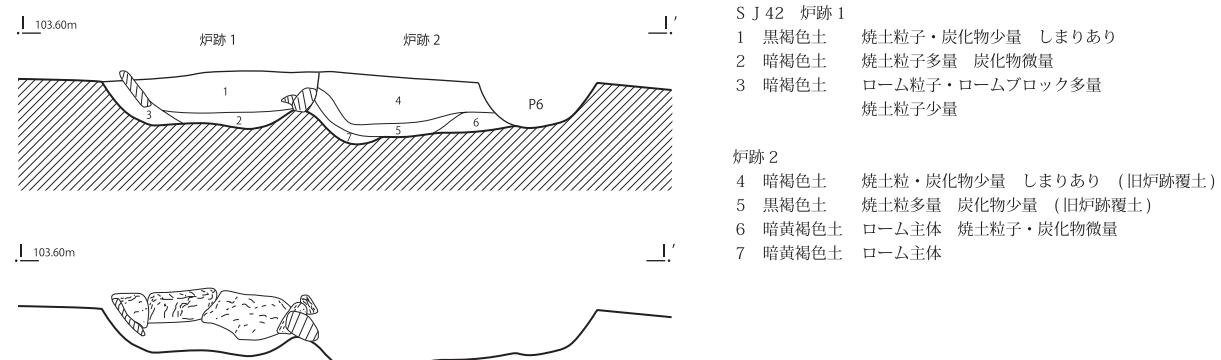
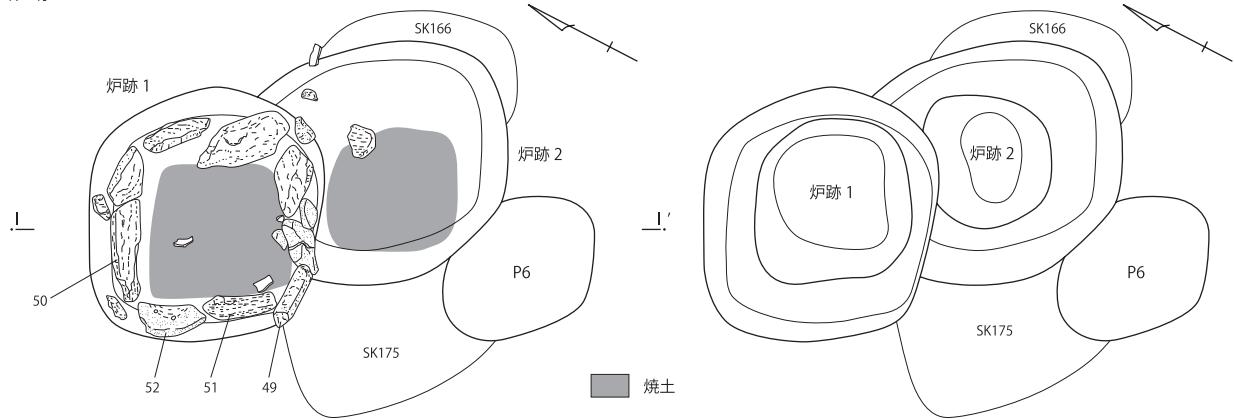
炉跡は、中央やや東側の奥壁寄りで2基検出された。旧炉である炉跡2を壊しながら一部重複して構築されていた新炉の炉跡1は、方形を呈する石廻炉で、埋設土器は伴わない。規模は、長径1.01m、短径0.90m、深さ0.19mを測る。

旧炉跡である炉跡2は長方形のプランを呈するが、被熱した炉床部分が方形状を呈することから、

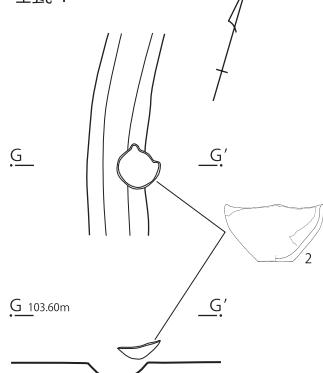


第202図 第42号住居跡(1)

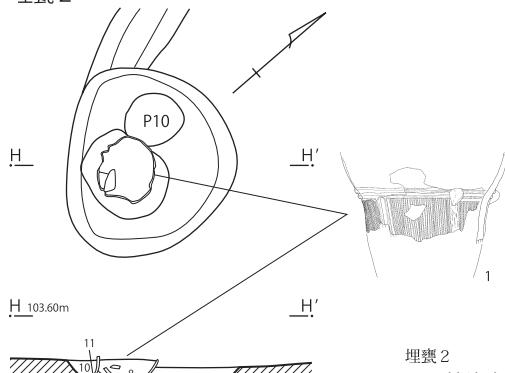
炉跡



埋甕 1

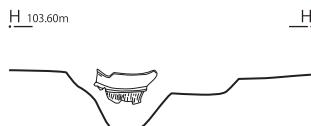


埋甕 2



埋甕 2

8 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物少量
 粘性あり
 9 茶褐色土 ローム粒子多量 しまりややあり 粘性あり
 10 暗褐色土 ローム粒子多量
 11 暗褐色土 ローム粒子多量

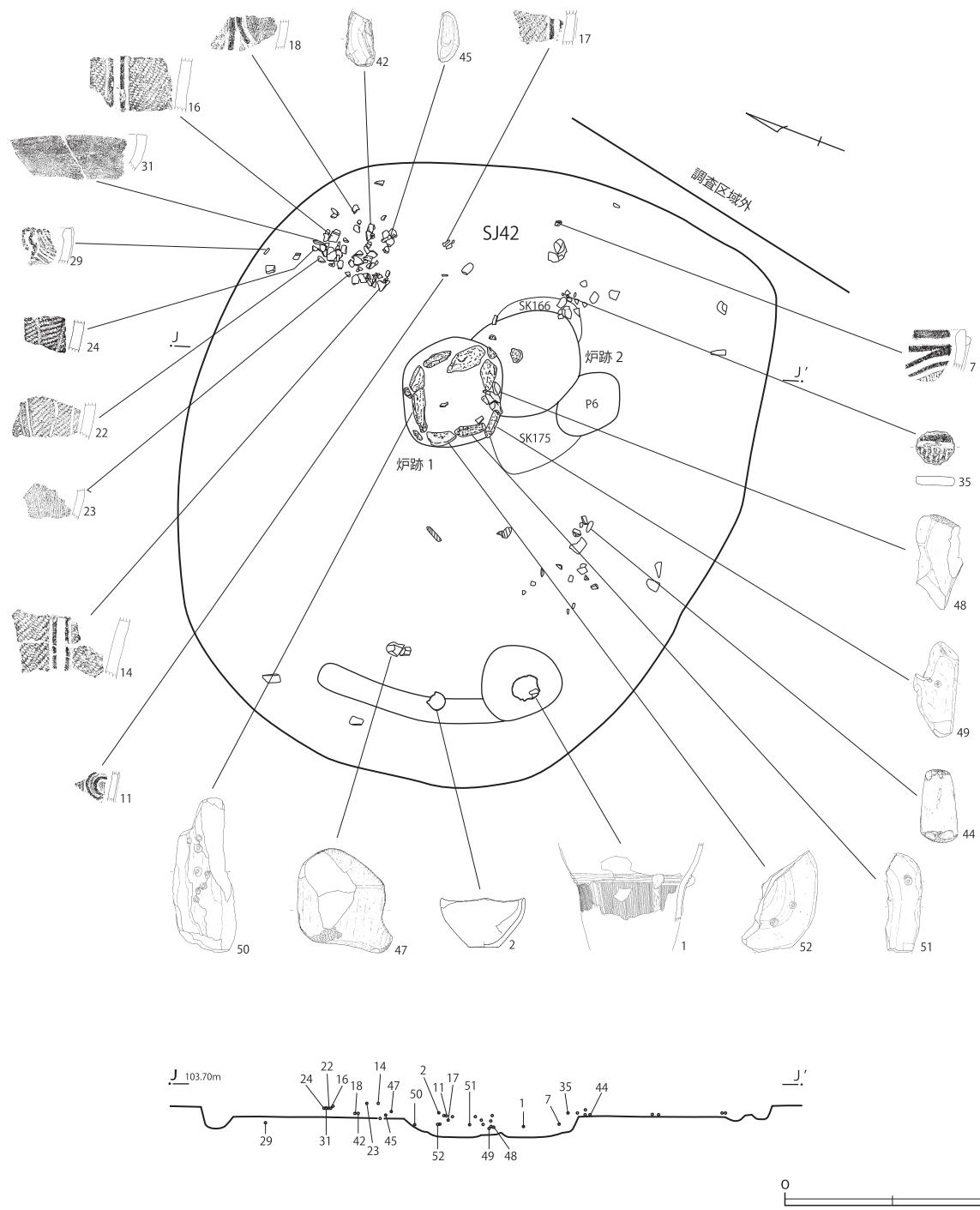


0 1 m 1:30

第 203 図 第 42 号住居跡 (2)

第41表 第42号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.60	0.59	0.47	P 5	0.63	0.62	0.21	P 9	0.23	0.22	0.31
P 2	0.39	0.34	0.18	P 6	0.52	0.42	0.18	P 10	0.22	0.19	0.18
P 3	0.62	0.50	0.68	P 7	0.39	0.35	0.49	P 11	0.32	0.32	0.20
P 4	0.64	0.60	0.17	P 8	0.28	0.28	0.43	—	—	—	—



第204図 第42号住居跡遺物出土状況

炉跡 1 と同様な石囲炉であった可能性が高い。規模は、推定される長径1.02m、短径0.93m、深さ0.25mを測る。

埋甕は2基が検出された。埋甕 1 及び埋甕 2 は内側の壁溝と関係する位置から検出されており、内側の壁溝に伴うものと判断される。また、埋甕 1 は第205図 2 の浅鉢を使用したもので、壁溝上で出土したことから埋甕と認識したが、外側の壁溝住居跡に伴うとする判断は難しい。

埋甕 2 は第205図 1 の深鉢の上半部を埋設したものであり、柱穴の規模は、長径0.75m、短径0.68m、深さ0.23mを測る。土器は口縁部を欠いており、胴部下半を欠損したものを埋設している。口縁部は外側の壁溝の住居跡を構築した際に欠損したものと推定される。

本住居跡は埋甕 2 の時期から、加曽利 E I 式末から E II 式の初めにかけて構築されたものと思われる。

住居跡内からは、加曽利 E 系土器を中心とした土器と、石器が少量出土した。

第205図 1 ~35 は出土土器である。1 は埋甕 2 であり、無文の口縁部を欠損する深鉢形土器で、現存口径26.4cm、現存高14cmを測る。加曽利と曾利の中間的な土器で、無文の若干内湾する口縁部を欠損する。胴部は2本隆帯で区画され、区画隆帯から2本隆帯が対で懸垂する。垂下降帯は区画隆帯上で、瘤状を呈する。地文には、撚糸文 R を施文する。

2 は埋甕 1 であり、口縁部が緩い波状を呈する無文の鉢形土器である。推定口径15.6cm、器高8.8cm、底径5.4cmを測る。

3 ~ 5 は勝坂系土器の胴部破片で、3 は蓮華文を、4・5 は隆帯脇に沈線を添わせ、隆帯上に刻みを施している。

6 ~ 24 は加曽利系の口縁部が内湾するキャリパー形深鉢形土器で、6 ~ 8、12 は口縁部破片である。6 ~ 8 は口縁部の湾曲が緩く、口縁部が立

つ器形を呈し、口唇下に1本の隆帯を巡らせ、2本隆帯で連結する渦巻文を施文するものである。12 は口縁部文様帶の2本隆帯でモチーフを描く破片である。地文は6・7 が撚糸文 L を縦位施文し、8 は単節 R L の縄文を横位施文する。12 は不鮮明であるが、撚糸文を施文する。

9 ~ 11、13 ~ 24 は頸部から胴部にかけての破片である。9・10 は2本隆帯の頸部無文帯下端区画から、隆帯の懸垂文が垂下する破片で、10 は地文に単節 R L を縦位施文している。

11 は撚糸文 L 地文上に、2本隆帯で描く横位の連結する横 S 字状渦巻文を施文するものである。

13 ~ 18 は隆帯の懸垂文が垂下する胴部破片である。14 ~ 17 は2本隆帯が垂下する破片で、13、18 は懸垂隆帯と蛇行隆帯が組み合わさって垂下する。地文は13 が撚糸 L、14 ~ 16 が単節 R L、17 が0段多条の R L、18 が條線を垂下施文する。

19 ~ 24 は沈線懸垂文を垂下するもので、19 は頸部を沈線で区画し、20 ~ 22 は沈線懸垂文と蛇行沈線を懸垂する。地文は20 は単節 R L、21・22 が多条の R L を縦位施文する。24 は単節 R L 地文上に、浅い沈線が垂下する。32 は底部破片である。

25 は口縁部が無文となる深鉢形土器である。

26 は撚糸文 L、23、27、30 は条線を地文とし、28 は無文である。

29 は口縁部の沈線地文上に隆帯の弧線文を連結する曾利系の土器である。31 は無文の口縁部が内湾する浅鉢形土器である。

33・34 は円形の透かしのある器台で、34 は透かしに沿って沈線を巡らす。

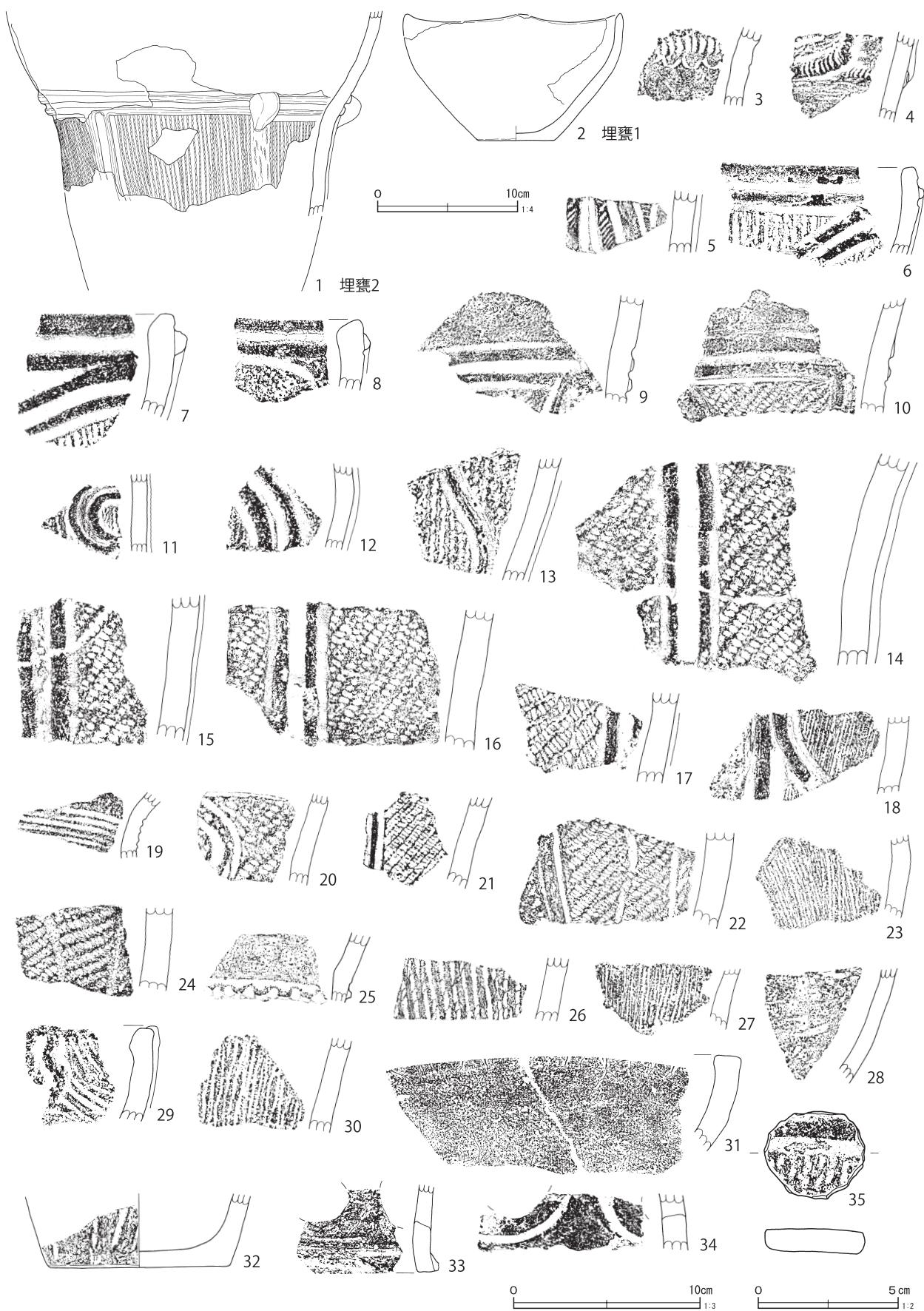
35 は土製円盤である。径3.6cmを測る。

第206図 36 ~ 47、第207図 48 ~ 52 は石器である。

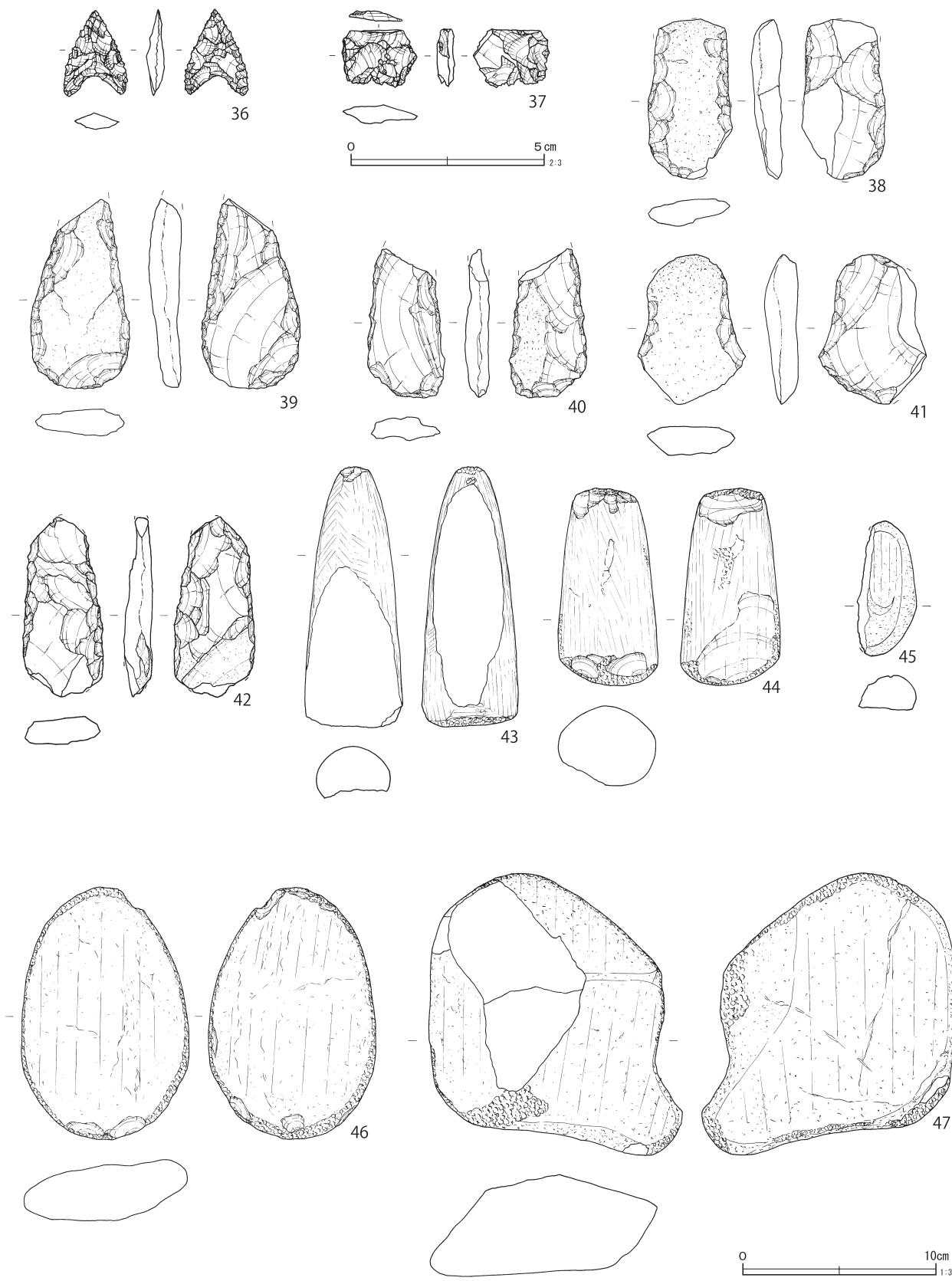
36 はチャート製の石鏃で、完形品である。37 はくさび形石器である。

38 ~ 42 は打製石斧で、短冊形から撥形を呈するものである。

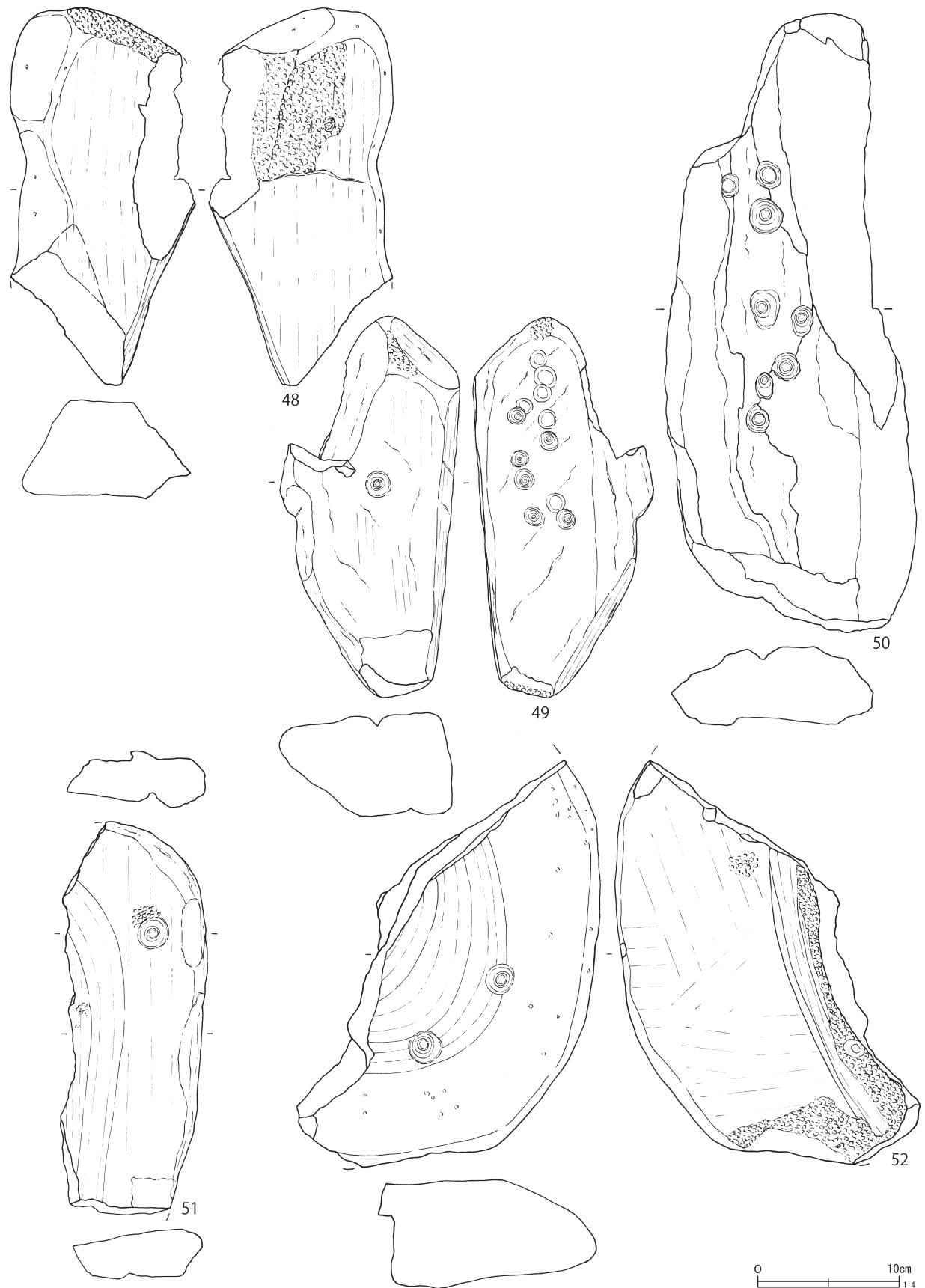
43・44 は磨製石斧で、43 は表裏面とも体部に



第205図 第42号住居跡出土遺物（1）



第206図 第42号住居跡出土遺物（2）



第 207 図 第 42 号住居跡出土遺物 (3)

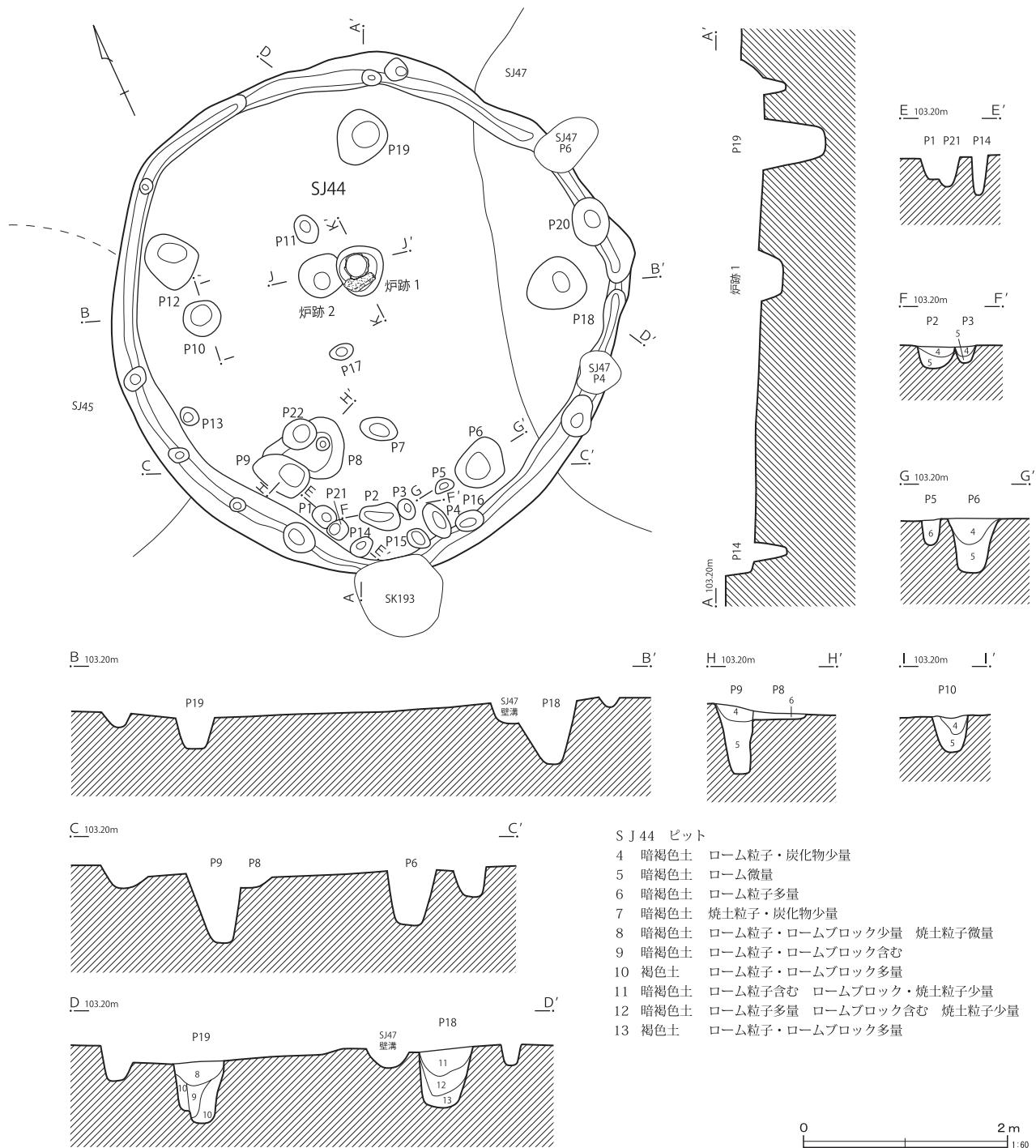
剥落がみられる。44は欠損する刃部に敲打を施し、磨石として再利用している。

45~47は磨石で、48~52は片岩を素材とする石皿である。凹部を持ち、凹石と兼用のものが多い。

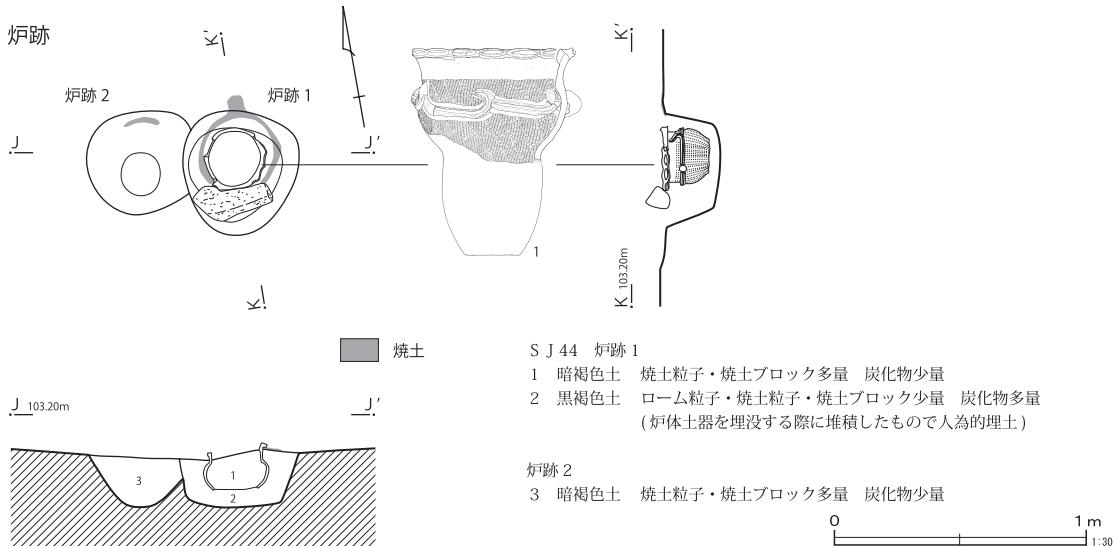
第44号住居跡（第208図～第212図）

N・O-7・8グリッドに位置する。第45・47号住居跡、第193号土壙と重複する。本住居跡は第45号住居跡より新しく、第47号住居跡より古い。

平面形は円形を呈し、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-25°-Eをとる。規模は、長径4.99m、短径4.91m、深さ0.19mを測る。



第208図 第44号住居跡（1）



第209図 第44号住居跡（2）

第42表 第44号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.22	0.21	0.22	P 9	0.56	0.37	0.65	P 16	0.30	0.17	0.08
P 2	0.40	0.28	0.20	P 10	0.37	0.36	0.36	P 17	0.25	0.15	0.65
P 3	0.21	0.17	0.18	P 11	0.28	0.21	0.14	P 18	0.78	0.60	0.62
P 4	0.38	0.22	0.22	P 12	0.56	0.48	0.19	P 19	0.53	0.48	0.61
P 5	0.19	0.12	0.24	P 13	0.19	0.16	0.17	P 20	0.48	0.35	0.32
P 6	0.51	0.44	0.53	P 14	0.24	0.16	0.38	P 21	0.22	0.20	0.29
P 7	0.36	0.22	0.52	P 15	0.24	0.20	0.10	P 22	0.33	0.30	0.24
P 8	0.78	0.60	0.12	—	—	—	—	—	—	—	—

炉が重複して2基存在し、柱穴も多く検出されているため、建て替えの住居と判断される。

柱穴は合計20本検出された。基本的には、P 6、P 9、P 12、P 18・P 19の5本主柱と推定される。それぞれ近くに柱穴があり、建て替えられている可能性が高い。入口部はP 6とP 9の間に想定され、壁溝がやや窄まり、小ピットが多く存在している。入口部の埋甕はない。

炉跡は住居跡の中央部やや北寄りで、2基が重複して検出された。新しい炉跡1は埋甕炉で、第210図1の深鉢上半部を炉体土器として埋設していた。また、炉体土器の南側で、入り口に面する部分に細長い石が置かれていた。炉の規模は、長径0.49m、短径0.46m、深さ0.21mである。

旧炉である炉跡2は焼土が一部認められ、深さのあるピット状のものである。炉跡1と同様に

埋甕炉であり、炉体土器が抜かれたものである可能性が高い。規模は推定される長径0.44m、短径0.44m、深さ0.22mを測る。

壁溝は全周するが、五角形状に近い円形を呈する。最大幅0.44m、深さ0.25mである。

本住居跡は、炉体土器から勝坂式終末期の構築と考えられる。

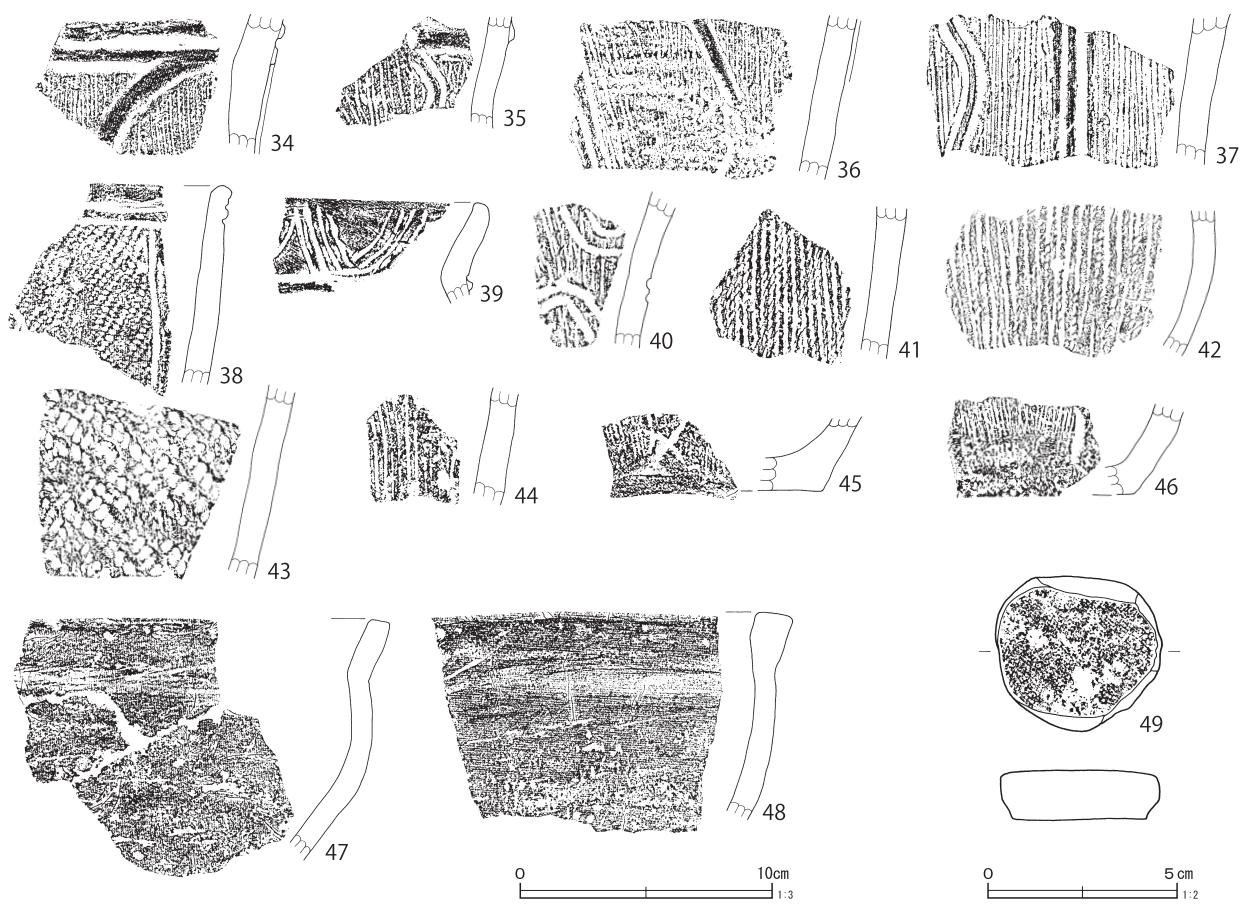
出土土器は勝坂式土器から連弧文土器までが含まれている。

第210図1は炉体土器で、球形状の口縁部に無文の口唇部がやや開き気味に立つ器形を呈し、口唇外端部に連結するレンズ状隆帯を巡らす。口縁部には2本隆帯で瘤状に巻き込む横S字縄文を連結している。地文には多条の単節R Lの縦走縄文を施文する。口径26cm、現存高18cmを測る。

第210図2～4、9は阿玉台系の胴部破片で、



第210図 第44号住居跡出土遺物（1）



第211図 第44号住居跡出土遺物（2）

2・3は隆帯脇に2本の角押文を施し、区画内に横位の鋸歯状押引文を施文する。4は口縁部の楕円区画に沿って幅広の爪形文を、9は隆帯脇に2列の押引文を施文する。

第210図5～8は隆帯脇に幅広の連続爪形文を施文するもので、5は内湾して開く口縁部に隆帶で三角区画文を組み合わせたモチーフを描き、隆帯脇に連続爪形文と鋸歯状押引文を添わせる。

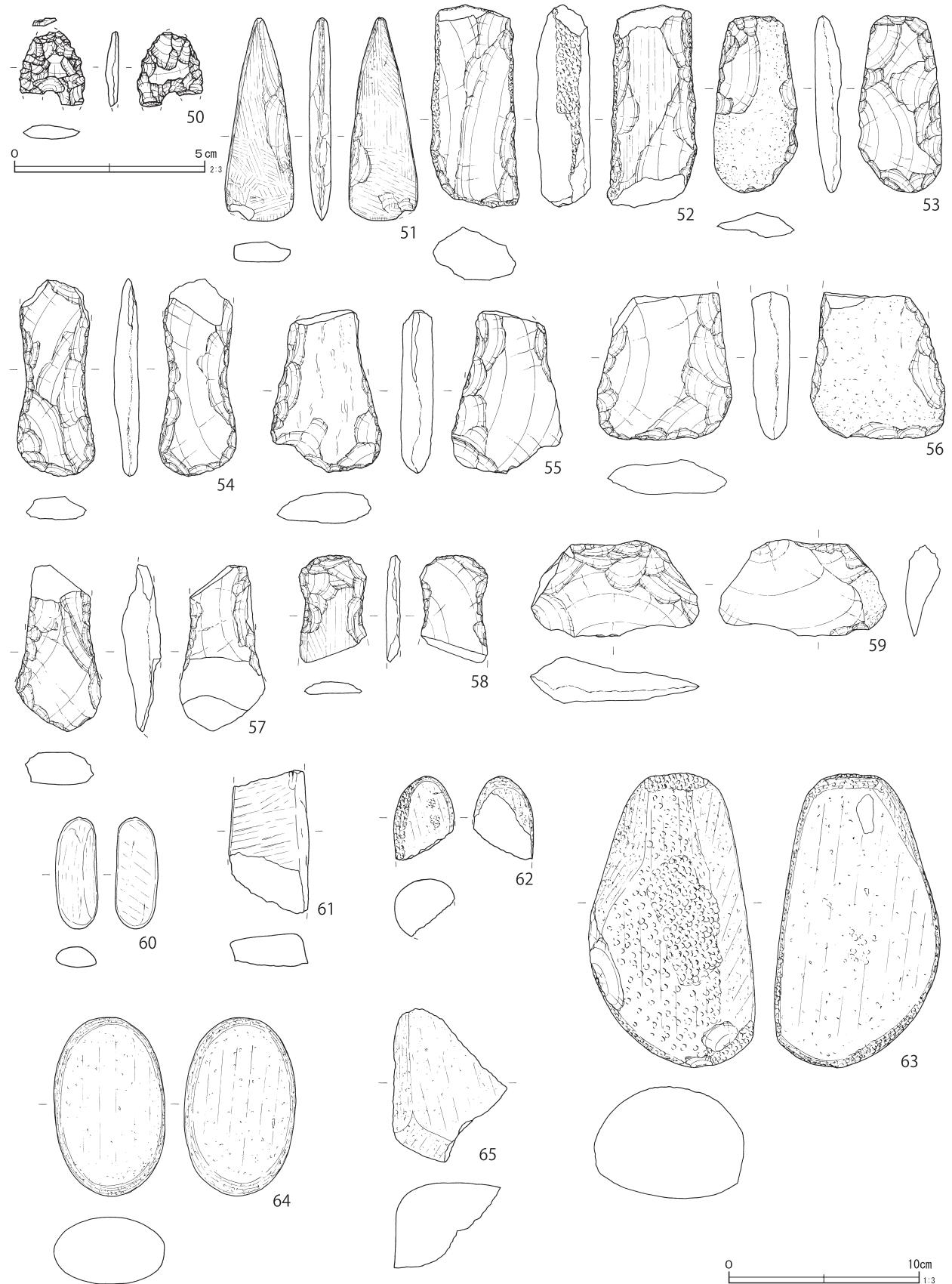
第210図10～14は勝坂式終末の円筒形の深鉢形土器で、10、13は口唇部内面が突出する。隆帯と平行沈線、または太い短沈線で縦位構成のモチーフを描き、12、14は同一個体で平行沈線間に爪形文を施文する。13は太沈線の三叉文に沿って刺突文を施文する。

第210図15は口縁部の把手の内外面に沈線の渦巻文を施文する。第210図16は低隆帯の渦巻文を施文する浅鉢で、第210図18は角状の隆帯で渦巻

文を垂下する深鉢形土器である。地文に単節L Rを縦位施文する。第210図17は内湾し開く口縁部に隆帯で波状のモチーフを描き、頸部の区画隆帯に縦位の刻みを施す。第210図19は区画隆帶上に交互の刻みを施す。以上は勝坂式終末期の土器で、炉体土器とほぼ同時期に位置付けられる。

第210図20～33、第211図34～48は加曾利E系土器である。20は4単位の波状を呈する口縁部が開き、胴部が括れる器形を呈し、口縁部に押圧を施す隆帯が巡る。地文は単節縄文L Rの縦位施文である。21は内湾する口縁部が開く器形を呈し、地文は単節L Rの縦位施文上に横位施文を施し、羽状を構成する。22は撚糸文Lを施文する。

23～37は、加曾利E式の頸部無文帯を持つキャリパード形深鉢形土器で、23・24が口縁部破片、他は胴部破片である。頸部を隆帯で区画し、2本対の隆帯懸垂文と蛇行懸垂文を垂下する。地文



第212図 第44号住居跡出土遺物（3）

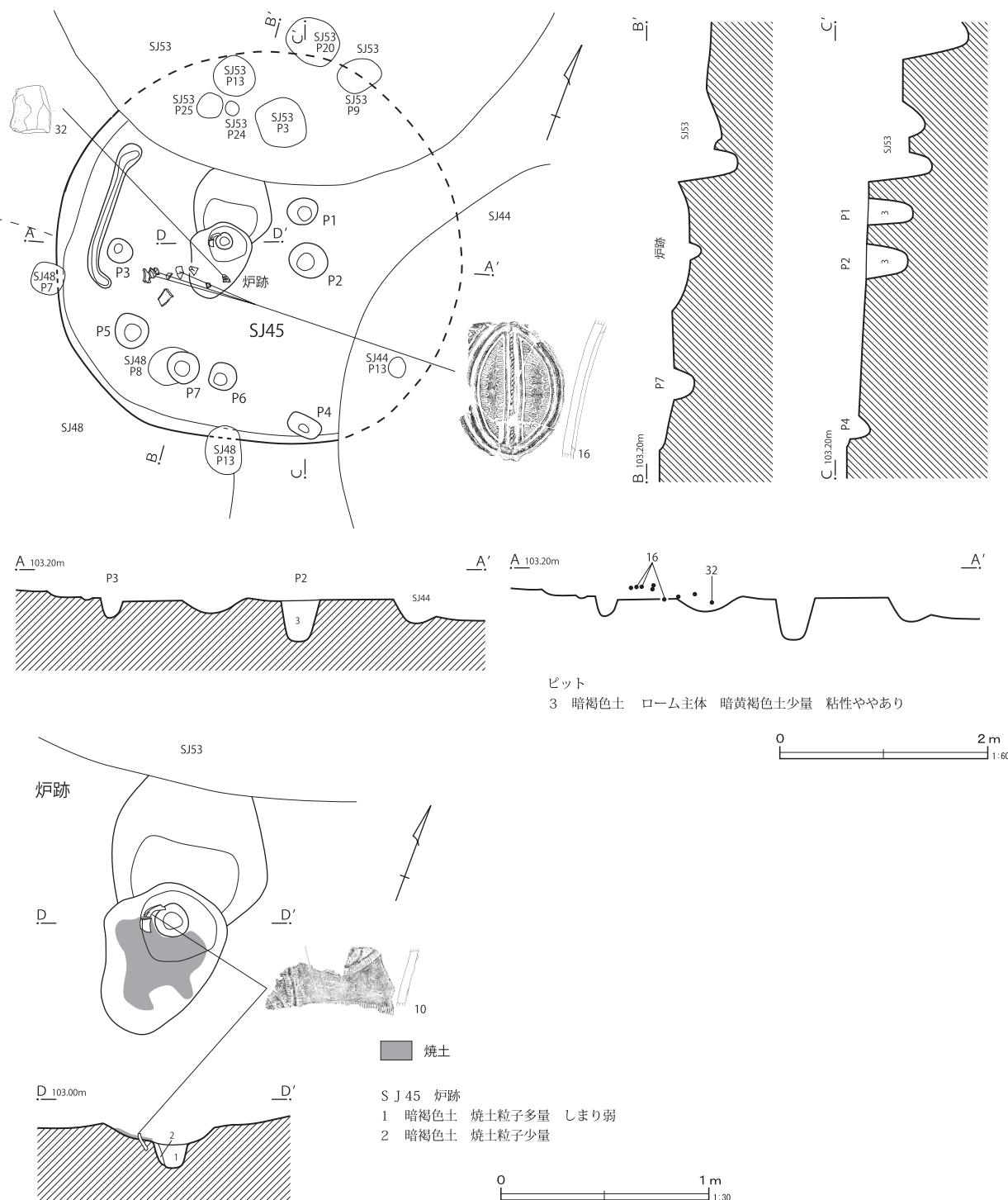
は23、30・31が縄文R L、24~28、32が撲糸文、29、33が0段多条縄文R L、34~37は条線である。

38は筒形状を呈し、口縁部から懸垂文を垂下するもので、地文は単節R Lの縦位施文である。

39・40は連弧文土器で、39は外反する口縁部に

重弧状の弧線を連続する。40は条線地文上に2本沈線の連弧文を施文する。41・42は撲糸文L、43は単節L R、44は条線を施文する。45は撲糸施文、46は条線施文の底部破片である。

47・48は口唇部が角頭状を呈する浅鉢形土器で、



第213図 第45号住居跡・遺物出土状況

第43表 第45号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.30	0.26	0.45	P 4	0.31	0.19	0.11	P 6	0.25	0.25	0.37
P 2	0.36	0.34	0.39	P 5	0.32	0.32	0.46	P 7	0.31	0.30	0.21
P 3	0.24	0.23	0.18	—	—	—	—	—	—	—	—

加曾利E系土器に伴うものと思われる。

49は径4.4cmを測る、土器片の土製円盤である。

石器は第212図50が石鏃、51が磨製石斧、52～58が短冊形から撥形の打製石斧、59が横型のスクリイバー、60～65が磨石で、53、59、63・64は完形品で、他は大小の欠損を生じている。

第45号住居跡（第213図～第215図）

N・O-7グリッドに位置する。第44、48、53号住居跡と重複し、いずれの住居跡よりも古い。平面形は明確ではないが、円形を呈するものと推測される。規模は、長径の現存値3.87m、短径の現存値3.83m、深さ0.18mである。

柱穴は炉の周辺に7本が検出された。住居跡には壁溝は構築されていないが、一部壁溝状の溝が確認されたことから、重複、もしくは建て替えの可能性がある。

炉跡は埋甕炉で、住居跡のほぼ中央に検出された。炉体土器は一部残存するものの、大半が抜き去られていた。炉体土器の南側に焼土範囲が広がり、炉跡の規模は、長径1.21m、短径0.57m、深さ0.22mを測る。炉の北側に浅い掘り込みがあり、焼土等の痕跡はなかったが、旧住居跡の炉跡の可能性がある。

本住居跡は残存していた炉体土器の一部である第214図10から、勝坂期中葉の構築と推定される。

出土遺物は第214・215図である。第214図1～4は雲母を含む阿玉台系の土器で、1は口縁部に楕円区画文を配し、2本の小波状沈線文を添わせている。胴部の隆帯区画文には2条の結節沈線を施文する。2～4は隆帯脇に3～4本の条線状沈線を添わせるもので、3の区画隆帯は断面が三角状を呈する。

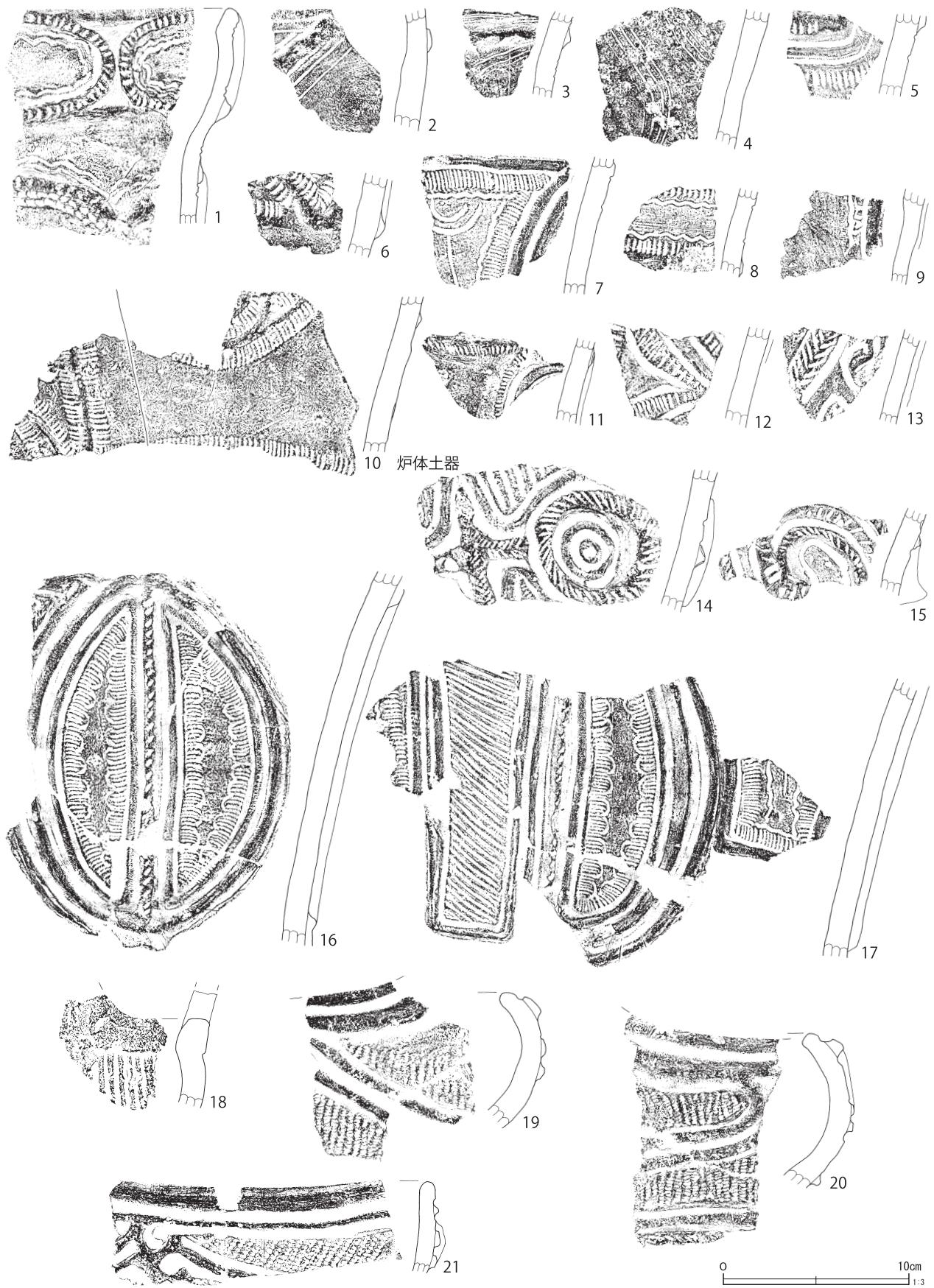
第214図5～17は勝坂系の土器である。炉体土器である10は隆帯で抽象文状モチーフを描くもので、隆帯脇に細かなキャタピラ文を施文する。6も隆帯脇に連続爪形文のみを施文する。勝坂式中葉に位置付けられよう。

5、7～9は隆帯脇を竹管内面の平行沈線で区画し、幅広の連続爪形文を施文する。さらに爪形文脇には小波状沈線を施文する。7は二重弧線と垂下線を組み合わせた三叉文を区画内に充填施文する。11～15は刻みを施す隆帯で区画文を施し、隆帯脇に平行沈線を沿わせている。沈線の区画内には短沈線や、矢羽根状沈線、集合沈線を施文し、隆帶上にも矢羽根状の刻みを施すものもある。14は隆帯の円形モチーフを「+」状隆帯で連結するモチーフを施文する。15は2本隆帯の渦巻文を横位連結するモチーフを描くものと思われる。

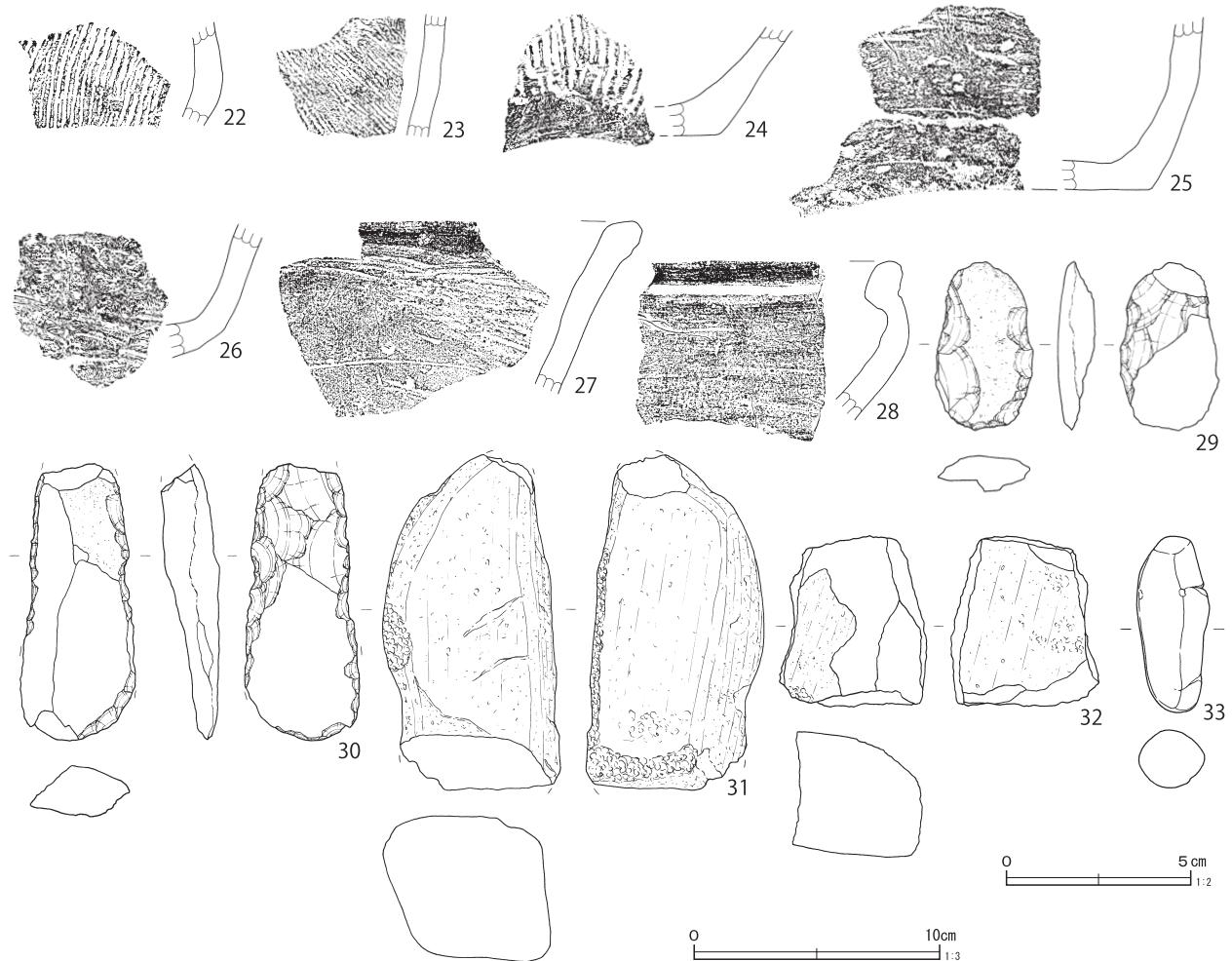
16・17は同一個体のいわゆるパネル状区画文土器である。16は長楕円形を隆帯で縦に2分割したモチーフで、三日月状区画に沿って蓮華状文を施文する。17は長方形区画と三日月状区画を組み合わせている。長方形区画内には集合沈線を充填施文する。以上、大半は勝坂式後葉に位置付けられよう。

第214図18～21は加曾利E系の土器である。18は口縁部文様帶内に縦位の撚糸Lを施文するもので、口唇部は角頭状を呈し、円形透かしのある把手が付くものと思われる。

19・20は同一個体で、口縁部の内湾が強いカリパー形深鉢形土器で、頸部に無文帯を持つものと思われる。口縁は把手が付く波状を呈するものと思われ、1本隆帯で口縁部上下の区画を行い、この区画隆帯に連結して2本隆帯の渦巻文を連結するモチーフが描かれる。地文は細かな単節R L



第214図 第45号住居跡出土遺物（1）



第215図 第45号住居跡出土遺物（2）

を縦走施文する。

21は湾曲の緩い口縁部が立つ器形を呈し、末端で小さな渦を巻く2本隆帯を弧状に連結するモチーフを描く。地文は単節R Lの縦位施文である。

第215図22は撲糸Lを施文する胴部破片で、23は細かな無節Rの縄文と思われる。24は撲糸Lを施文する底部破片、25は無文の底部破片である。

第215図26は丸底状を呈する無文の底部破片で、浅鉢の底部の可能性もある。27は口径の大きな直線的に開く浅鉢の口縁部破片で、内削状を呈する口唇部がやや外反する。内面の一部に朱の痕跡が認められ、内外面と朱彩されていた可能性がある。

28は口縁部が内湾する浅鉢の、口縁部破片である。

第215図29～32は石器で、29・30が打製石斧、

31・32が磨石である。

第215図33は土製品で、土錘である。

第46号住居跡（第216図～第223図）

O-7・8グリッドに位置する。第76号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。第76号住居跡と大半が重複するため、本住居跡の方が新しいものと判断される。

平面形は北方向に狭い隅丸台形状を呈し、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-6°-Eをとる。規模は長径4.52m、短径4.35m、深さ0.35mを測る。

柱穴は6本検出された。内P1～P4までの4本が主柱で、P5が入口施設のピットと思われる。

壁溝は均一的に全周し、最大幅0.40m、深さ0.16mである。

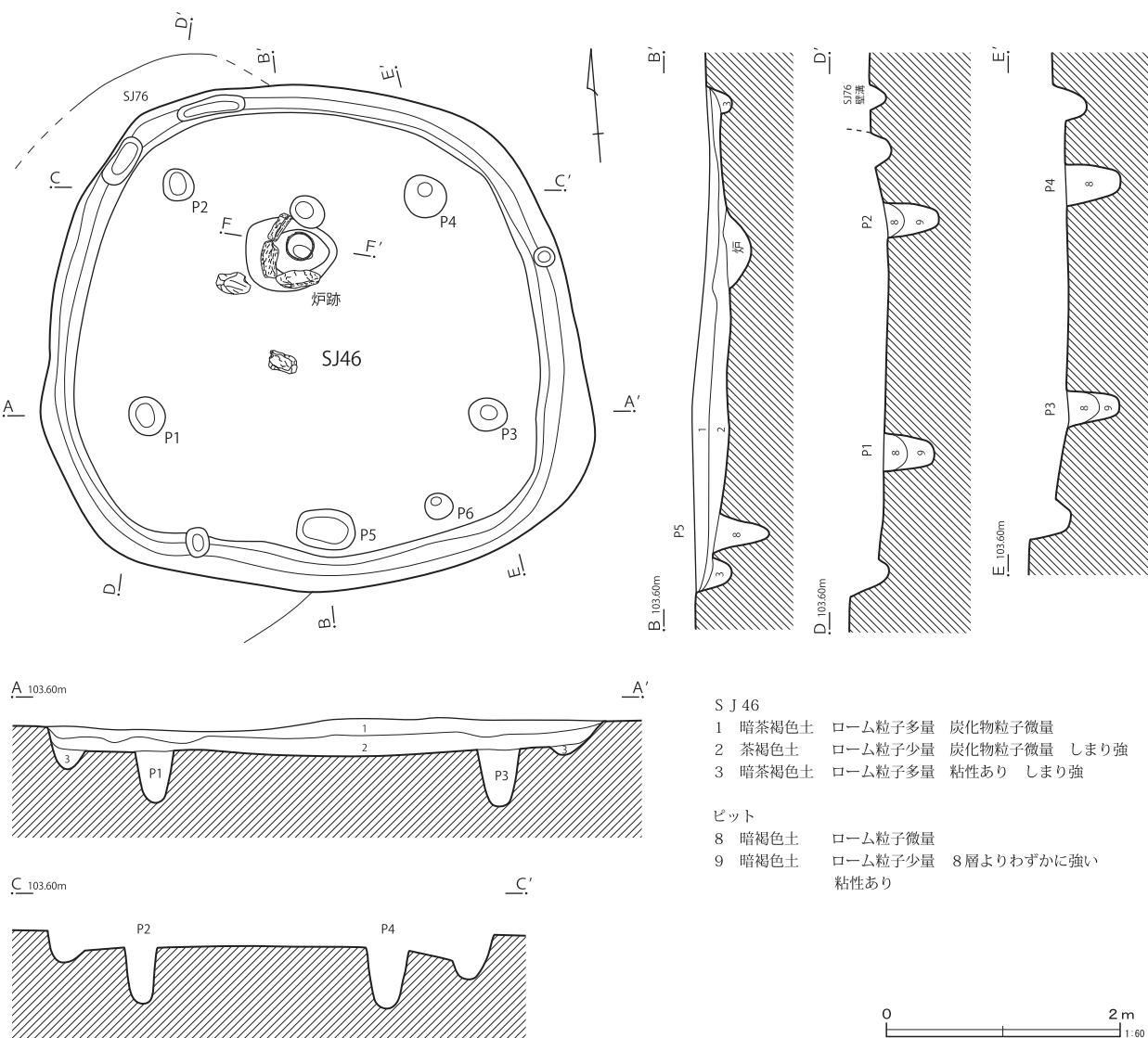
炉跡は石囲埋甕炉で、中央部の奥壁である北壁寄りで検出された。石囲炉の北から東側にかけての石が抜けており、炉の西側に一部移動していた。炉体土器は石囲いの中央に埋設されていたものと思われ、土器の西側の炉床が良く焼けていた。炉体土器は第219図1であり、胴下半部を欠損する深鉢形土器を使用している。炉跡の規模は、長径0.78m、短径0.63m、深さ0.25mを測る。

本住居跡は、炉体土器から加曾利E I式終末期に構築されたものと推定される。

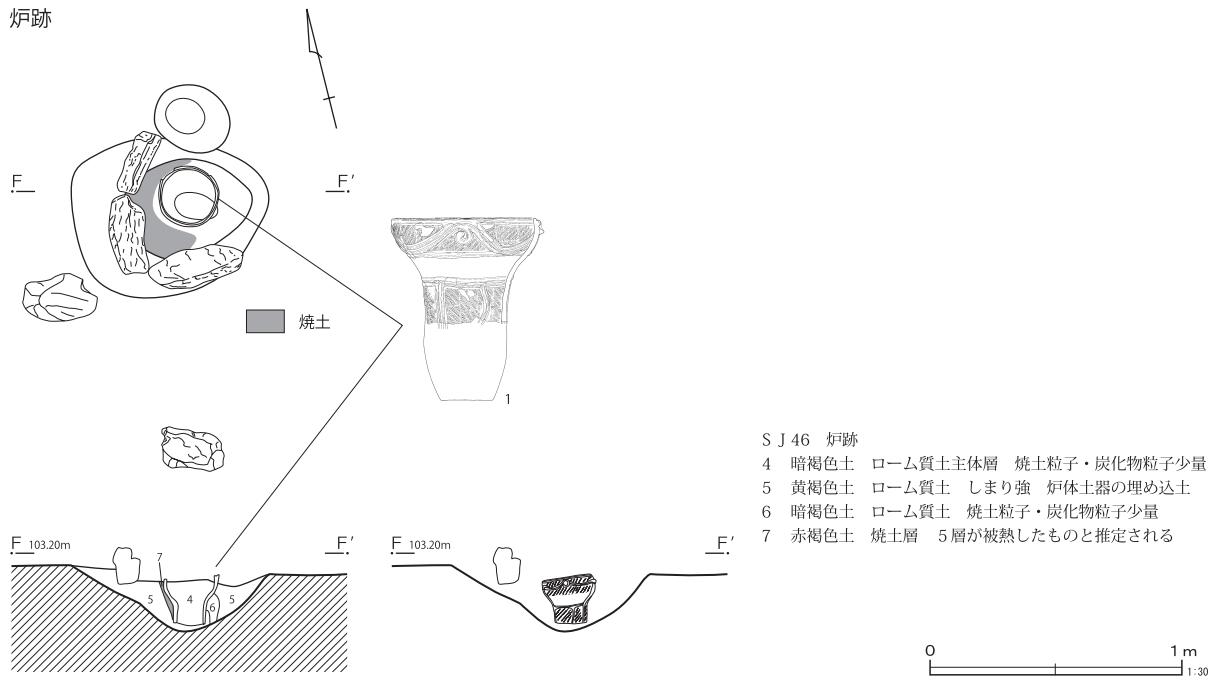
住居跡の覆土からは多量の遺物が出土した。遺物出土状況を第218図に示した。

出土土器は第219～223図77～86で、器形の復元できる個体が多く出土した。その多くが口縁部文様帶、頸部無文帶、胴部文様帶を持つ加曾利E式のキャリパー形を呈する系統の深鉢形土器である。

第219図1は炉体土器である。頸部無文帶を持つキャリパー形土器で、口縁部文様帶には2本隆帯で口縁部区画隆帯に接する部分で小さな渦を巻く弧状隆帯を4単位に連結するモチーフを描く。いわゆる突出する繫弧文の渦巻文を、平坦な渦巻



第216図 第46号住居跡(1)



第217図 第46号住居跡(2)

第44表 第46号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.35	0.30	0.45	P 3	0.32	0.28	0.44	P 5	0.50	0.33	0.42
P 2	0.27	0.27	0.46	P 4	0.38	0.34	0.54	P 6	0.23	0.23	0.28

文にモチーフ化したものと言える。胴部は2本隆帶の懸垂文と、蛇行隆帶懸垂文を組み合わせて、3単位の構成で垂下する。従って、口縁部は4単位、胴部は3単位の区画構成となっている。地文は1段Rと2段RLを撫り合わせた付加条縋文LRを口縁部では横位に、胴部では縦位に施文する。口径32.2cm、現存高16.8cmを測る。

第219図2～5は頸部に無文帯を持つキャリパ一形土器である。2は胴部破片で、1本の隆帶懸垂文と蛇行隆帶懸垂文が垂下する。地文は単節RLの縦位施文である。現存高13.2cmを測る。

3は口縁部に2本隆帶で入り組み状の渦巻文を連結するモチーフを描く。胴部は隆帶懸垂文と蛇行隆帶懸垂文を交互に垂下し、地文に単節RLを口縁部で横位に、胴部で縦位に施文する。推定口径32.5cm、現存高22cmを測る。

4は口縁部に剣先文の付く上下に入り組み連結

する渦巻文と、楕円状区画文が組み合ったモチーフを構成するもので、地文に単節RLを横位施文する。推定口径40cm、現存高12.8cmを測る。

5は口縁部の湾曲が緩く、頸部の括れも緩い器形を呈し、口縁部には剣先渦巻文が連結するモチーフを描く。胴部は2本隆帶の渦巻文を施文する。地文は単節RLを口縁部では横位に、胴部では縦位に施文する。推定口径46.4cm、現存高25.5cmを測る。

第220図6は口縁部が屈曲して外反する浅鉢で、胴部には上下に入り組み連結する渦巻文と、楕円画文を組み合わせたモチーフを描く。推定口径44cm、現存高12cmを測る。

第220図7は胴部の屈曲する有孔鍔付土器で無文の口縁部が立つ器形を呈する。鍔は断面三角形状を呈し、6.5cmの間隔で上下に貫通する孔を穿つ。肩部の文様帶には低隆帶と沈線で対向する渦



第218図 第46号住居跡遺物出土状況

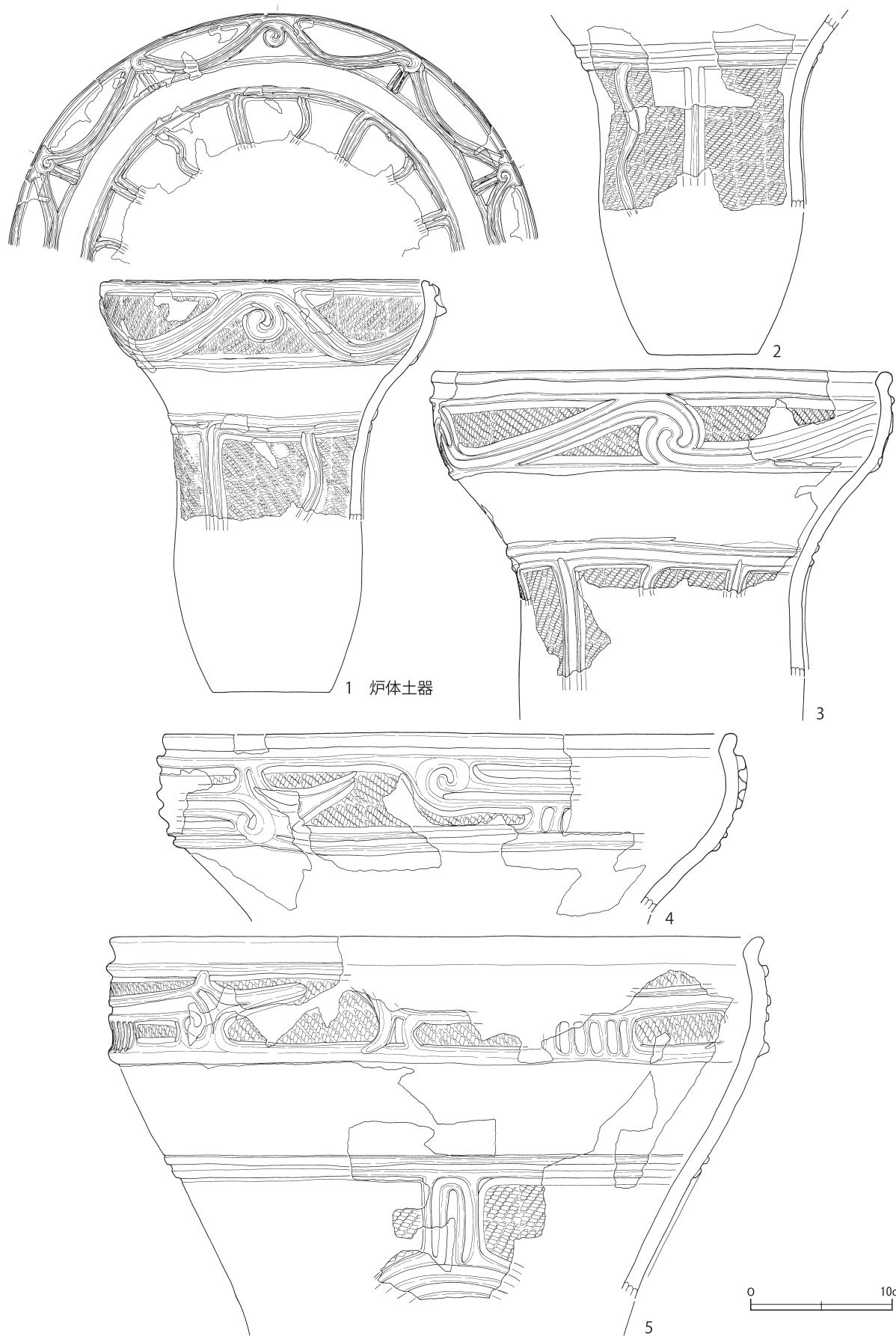
巻文を施文しており、余白の区画文も左右対称の形状となっている。地文は0段多条R Lを肩部と胴部下半では縦位施文、屈曲部直下では横位施文し、部分的に羽状縄文を構成する。推定口径32.8cm、推定最大径46cm、現存高23.5cmを測る。

破片では、第221図8～24が勝坂系土器である。8は胴部に隆帯で長方形区画を施し、隆帯脇に連続爪形文を沿わせる。9は隆帯区画に沿って蓮華文を施文するが、隆帯上には単節R Lを施文する。

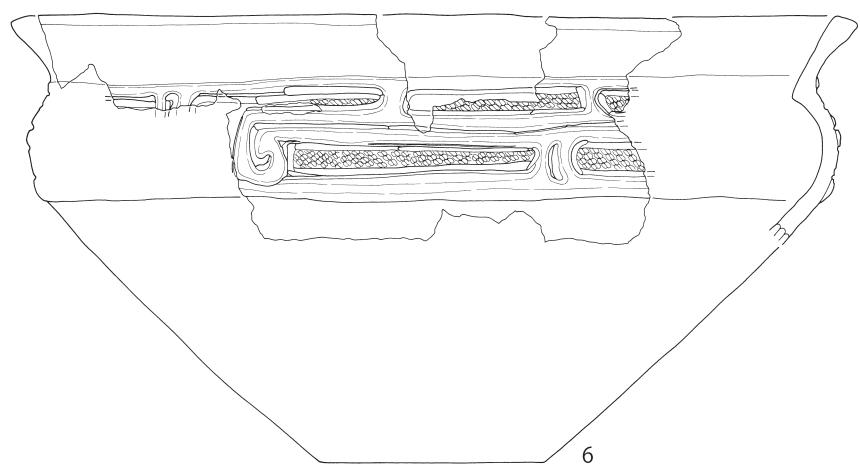
10～12は刻みを施す隆帯で区画するもので、10、12は波状を呈する口縁部破片で、11は胴部破片

である。隆帯区画内には沈線の充填文や三叉文を施文する。13は筒型土器で、低隆帯で区画を施し、三叉文を施文する。14・15は沈線で文様を描くものである。

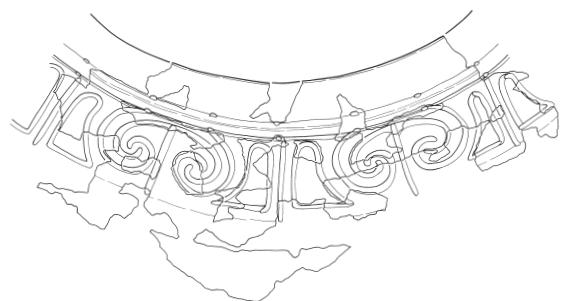
16・17は縄文のみ施文の深鉢形土器で、16は肥厚する口縁部下に単節L Rを縦位施文する。17は口唇部が角頭状で立つ器形を呈し、0段多条R Lの縦走縄文を施文する。19は湾曲する口縁部に、やや間隔を空けて縦位の撚糸文を施文する。18は横位施文の0段多条R L地文上に、小波状沈線を施文し、沈線間を磨消している。



第219図 第46号住居跡出土遺物（1）



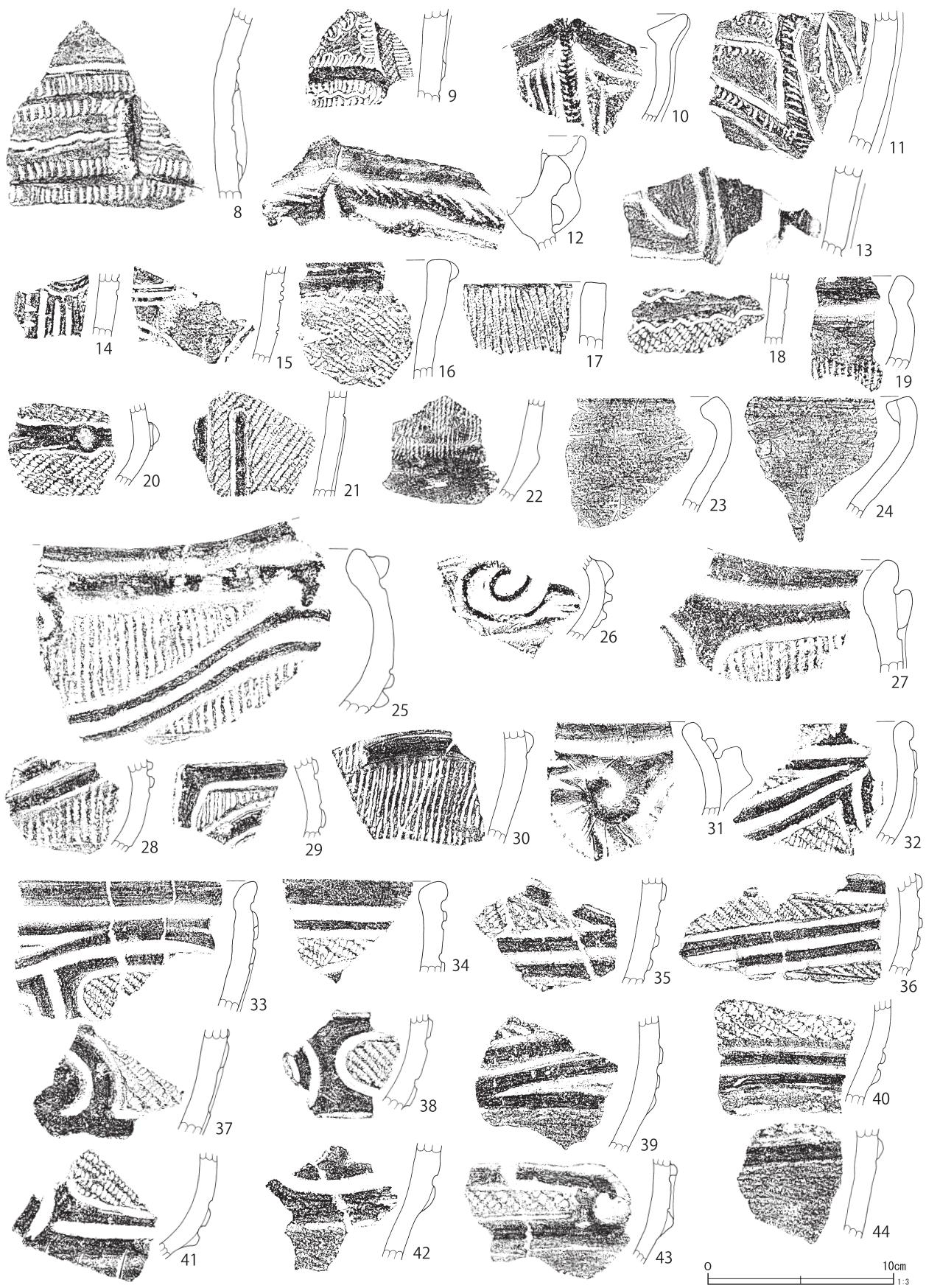
6



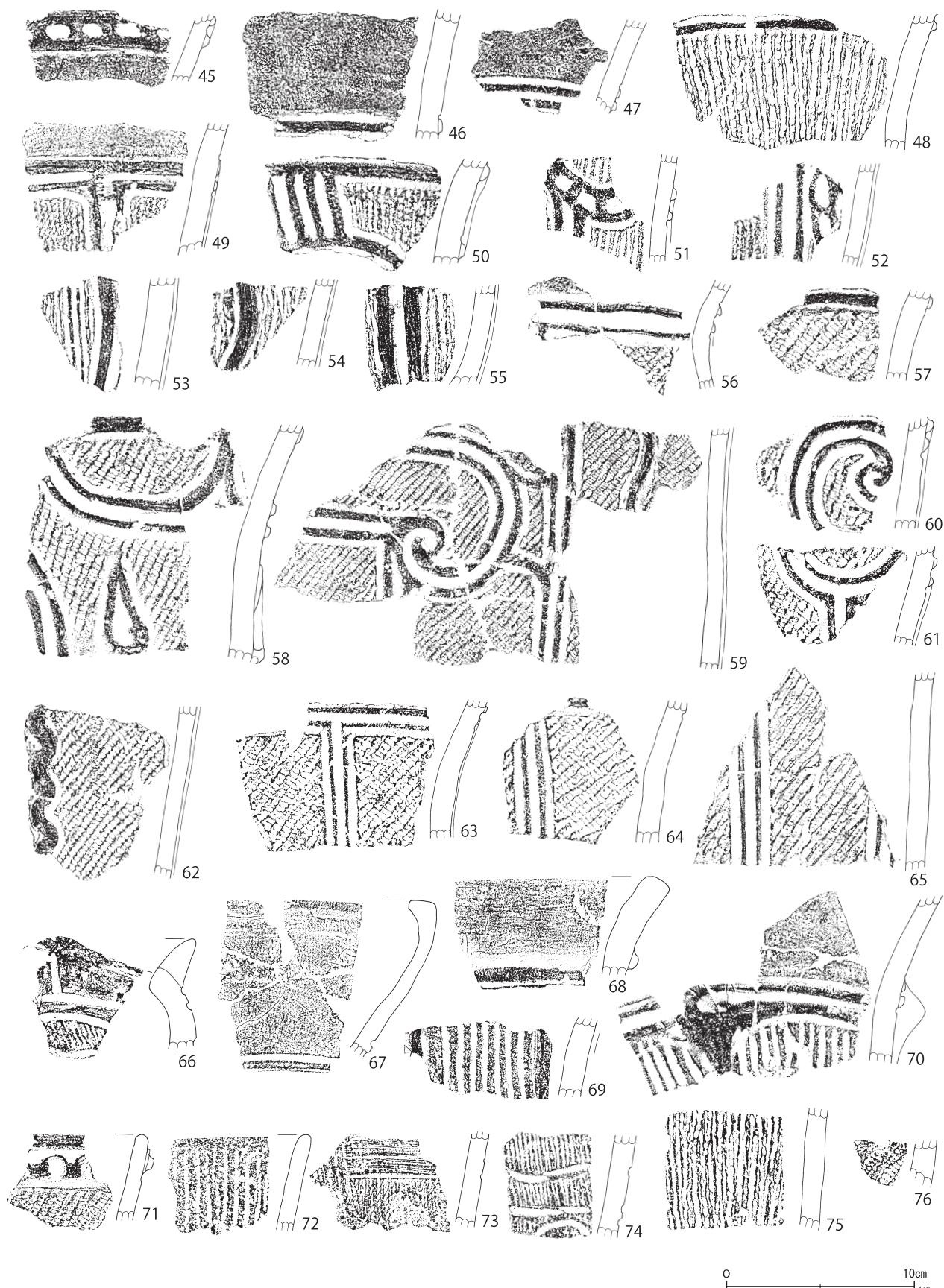
7

A scale bar at the bottom right of the drawing, marked with '0' at the left end and '10cm' at the right end. Below the '10cm' marking is the text '1:4'.

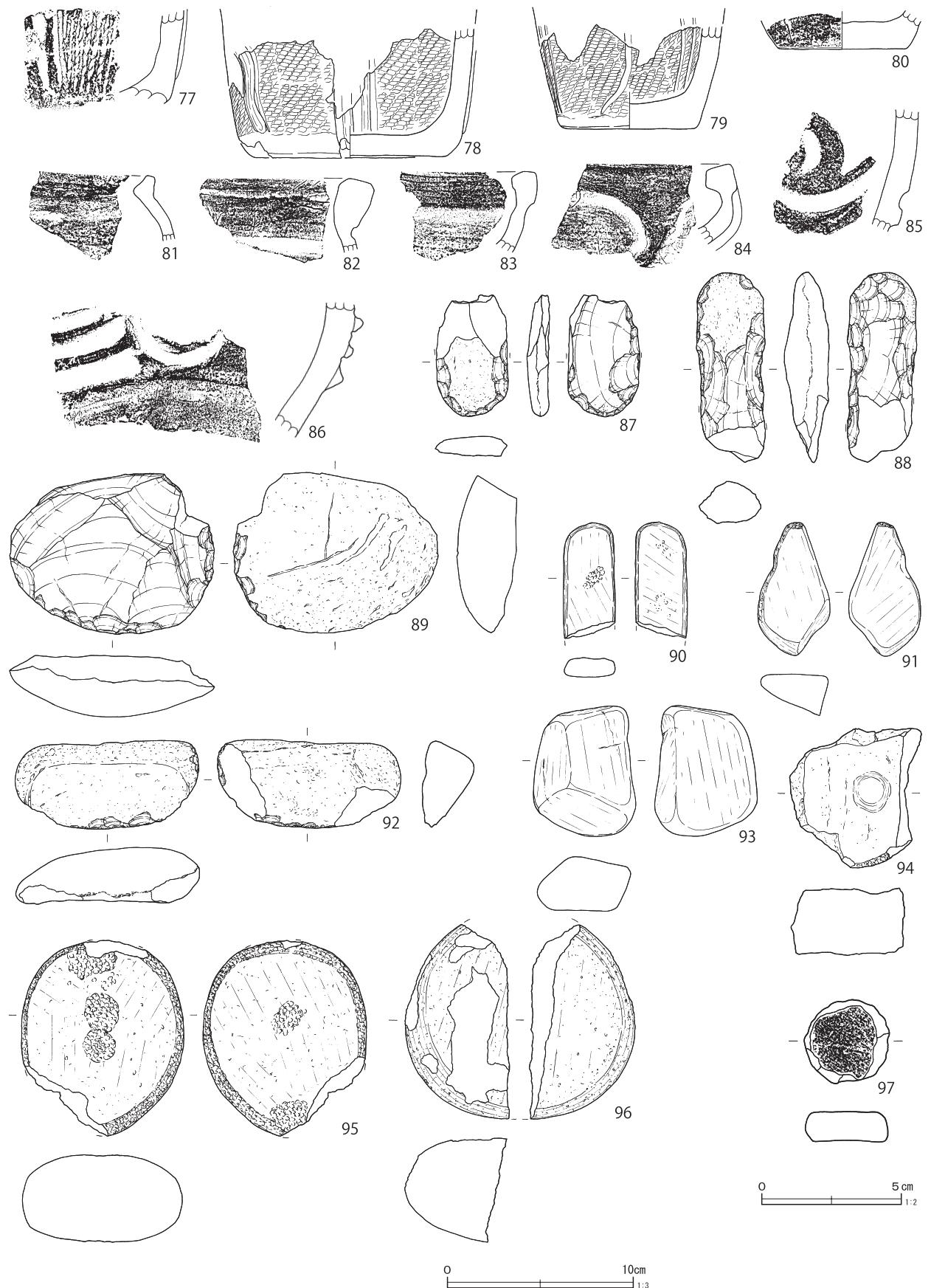
第220図 第46号住居跡出土遺物（2）



第221図 第46号住居跡出土遺物（3）



第222図 第46号住居跡出土遺物（4）



第223図 第46号住居跡出土遺物(5)

20・21は地文縄文上に隆帯を施文するもので、20は押圧隆帯を横位に、21は途切れる縦位隆帯を垂下する構成をとる。地文は単節R L縄文の縦位施文である。

22は撚糸文Lを地文とする屈曲底部である。23・24は無文の口縁が内湾して開く器形の深鉢形土器で、口唇部内端が突出する口縁部破片である。

25～80、85・86は加曽利E系土器である。25～30は地文に撚糸文を施文するキャリパー形の口縁部破片で、31～43は地文に縄文を施文する口縁部破片である。25は2本隆帯で渦巻文を連結するモチーフを描く。26は内湾の強い口縁部に、背高の隆帯で渦巻文を描く。31は口縁部に接する渦巻文が突出する、いわゆる繫弧文土器である。27、32～34は口縁部の湾曲が弱くなり、口縁部が立つ器形となる。区画文を施す隆帯も低隆帯化する。地文や撚糸文L、縄文はR Lを主体とする。

45～65は胴部破片である。45の区画隆帯は背割れ状の梯子状隆帯文に近い、短沈線を施している。

胴部破片には隆帯や低隆帯で、懸垂文のみ垂下するものと、渦巻文を連結するモチーフ等を施文する文様がある。50、58～61は2本隆帯を基本にして、渦巻文やクランク文を連結するモチーフを描いている。51・52は2本隆帯間に短隆帯を施文する梯子状隆帯で渦巻文等を施文するものである。63～65の低隆帯は、竹管内面で整形されており、半肉彫り状を呈する。

66は内湾する口縁部に突起が付くもので、突起部分には縦位沈線を垂下施文する。

67・68は無文の口縁部が開く深鉢形土器で、67は口唇部内端が突出する。

69・70は曾利系の土器で、70は頸部の区画隆帯から懸垂文の垂下する起点に突出する渦巻文を施文する。

71は口縁部に押圧を施した隆帯を巡らすもので、地文に単節R Lを縦位施文する。72は直線的に開く口縁部から撚糸文Lを施文する。73の地文は撚

糸文Lを幅広の工具で横位に磨消している。74は連弧文土器の胴部破片と思われ、細かな撚糸文Lを地文とする。75は2段R Lの撚糸文と思われる。76は0段多条R L縄文である。

77～80は底部である。77・78は隆帯懸垂文が垂下する底部破片で、地文は77が撚糸文L、78が単節R Lである。79は沈線懸垂文が垂下する底部破片で、地文は単節R Lである。

81～84は浅鉢形土器の口縁部破片で、81は口唇部が短く外折し、82は狭い口縁部が外傾し、沈線で胴部と区画している。84は口縁部がコ字状に内湾し、低隆帯で区画文を施している。

石器は87・88が短冊形の打製石斧、89が礫器、90～93、95・96が磨石、94が石皿である。

97は土器片を利用した土製円盤で、径3cmを測る。

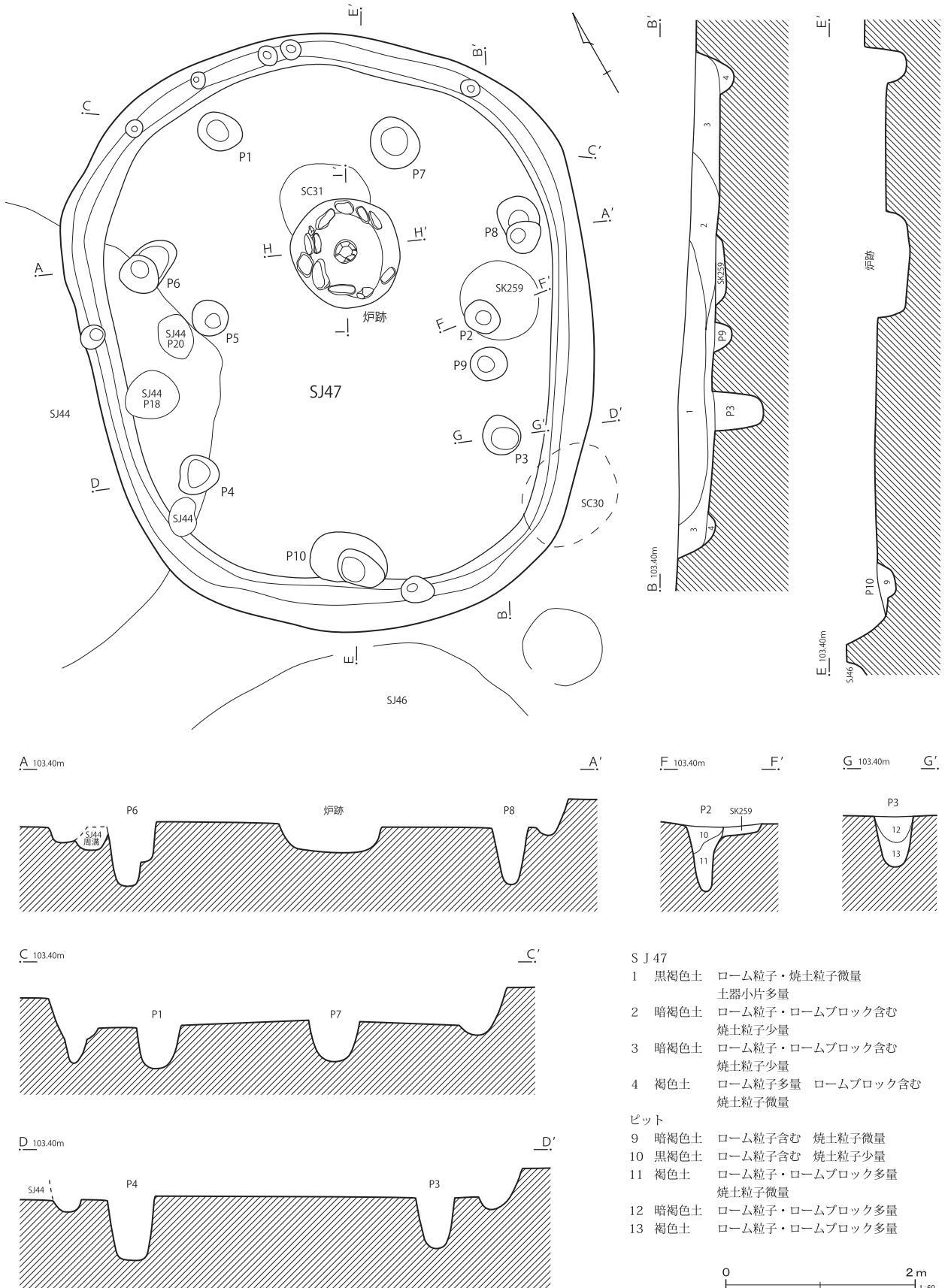
第47号住居跡（第224図～第278図）

N・O-8グリッドに位置する。第44号住居跡、第259号土壙、第30・31号集石土壙と重複する。第44号住居跡との新旧関係は、炉体土器から本住居跡の方が新しいことが判明している。

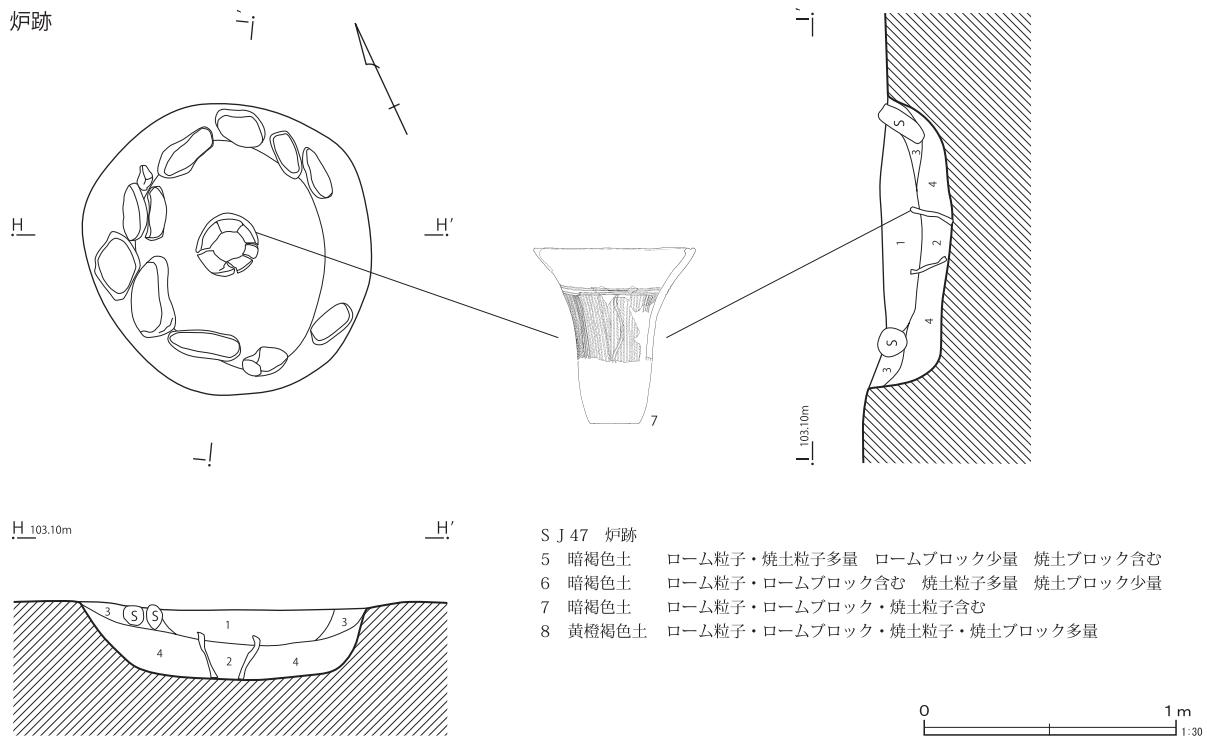
住居跡の平面形は南北方向に細長い隅丸五角形状の楕円形を呈し、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-29°-Eをとる。規模は長径6.30m、短径5.40m、深さ0.49mを測る。

柱穴は10本が検出された。P 3、P 4、P 6、P 1、P 7、P 8の6本柱を主柱とし、P 10を入口施設の柱穴とする構成と推定される。P 6、P 8が重複し、P 2、P 5が対称的な位置にあることから、建て替えされたと判断される。壁溝は均一的に全周し、最大幅0.50m、深さ0.20mである。

炉は石囲埋甕炉であり、中央よりやや北東側で、五角形の頂点部側に寄って検出された。炉の東側の石囲いが欠損している。炉体土器は第229図7であり、ほぼ中央部に埋設されていた。炉体土器の中や、周囲から第228図3の破片が出土してい



第224図 第47号住居跡（1）



第225図 第47号住居跡（2）

第45表 第47号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.48	0.40	0.44	P 5	0.40	0.37	0.71	P 8	0.60	0.40	0.60
P 2	0.39	0.33	0.69	P 6	0.66	0.42	0.63	P 9	0.40	0.56	0.23
P 3	0.40	0.40	0.54	P 7	0.55	0.50	0.42	P 10	0.84	0.52	0.16
P 4	0.42	0.39	0.65	—	—	—	—	—	—	—	—

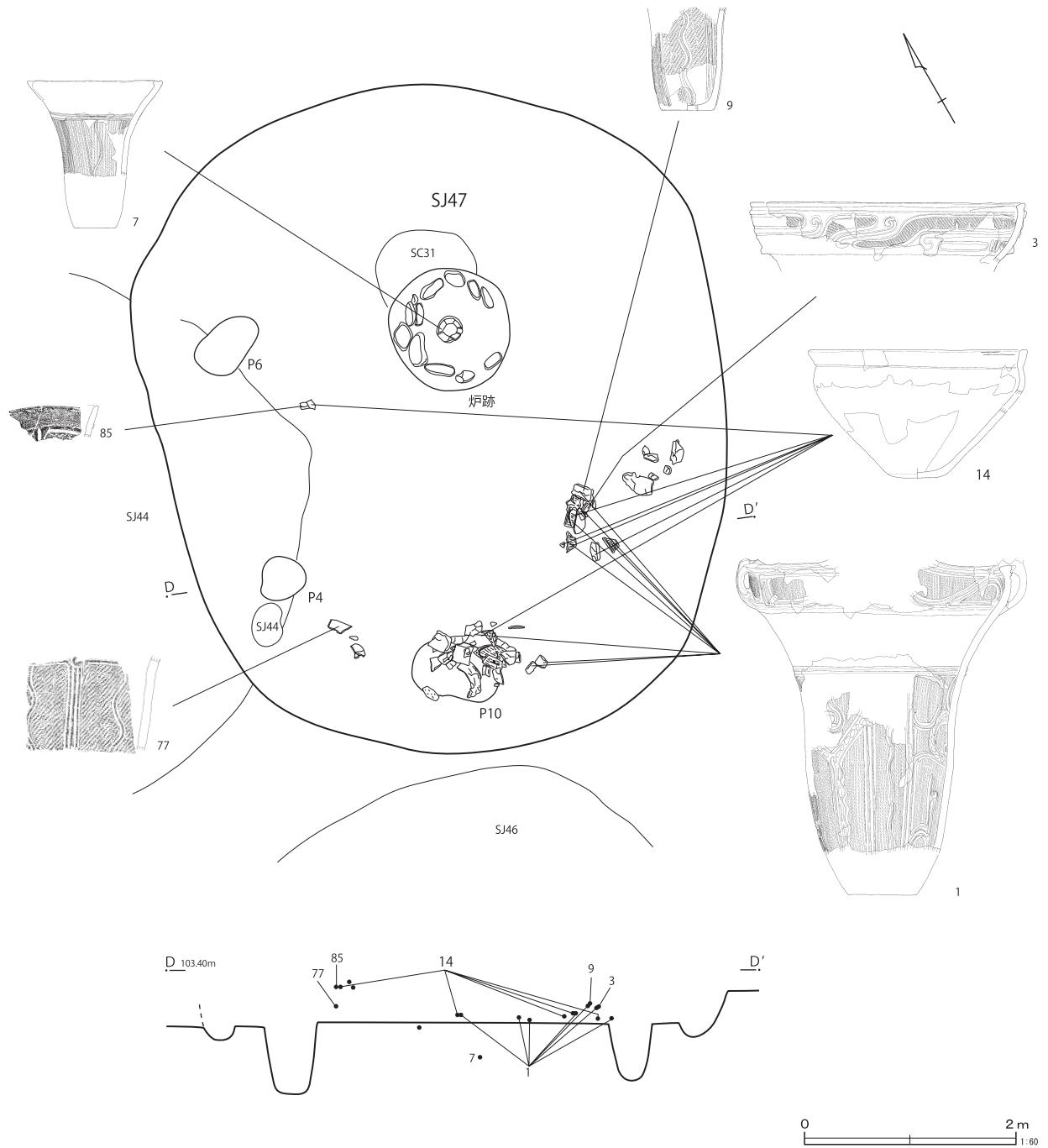
る。炉跡の規模は、長径1.18m、短径1.12m、深さ0.30mである。

本住居跡は、炉体土器の時期から、加曾利E I式終末段階の構築と考えられる。

出土遺物は、加曾利E系の土器を主体とし、各段階の勝坂系土器が混じっている。加曾利E系土器群は器形を復元できるものが多く、石器は打製石斧や磨石が少量出土している。

第229図7は炉体土器である。無文の口縁部が朝顔状に開く器形で、キャリパー形深鉢形土器の口縁部文様帯を欠くタイプである。口唇部内面に隆帯を巡らせて突出させており、口唇上に沈線を巡らせる。頸部を4条の平行沈線で区画し沈線懸垂文と蛇行沈線懸垂文を交互に垂下する。地文は撲糸文Lである。推定口径約25.6cmである。

第230図17～37、39～43は勝坂系及び阿玉台系の土器群である。17～19は角押文、三角押文でモチーフを描くもので、17は屈曲の強い口縁部破片である。20～22は雲母を含まないが、爪形文や襞状整形を施すものである。23・24は地文に縄文を施すもので、23はキャタピラ文を沿わす隆帯上にも細かな単節L Rを施文する。24はペン先状の三角押文と波状沈線区画内に単節R Lを施文する。25・26は隆帯脇にキャタピラ文を施文するもので、26は背の高い隆帯で長楕円区画を施す。27・28は隆帯脇に竹管内面の平行沈線を施文し、キャタピラ文を施文する。28は短隆帯をキャタピラ文で囲んで、ぞうり虫状のモチーフを描く。29～37、39～41、102は隆帯と沈線でモチーフを描くもので、隆帯上に刻みを施すものが多い。29は沈線の円形



第226図 第47号住居跡遺物出土状況

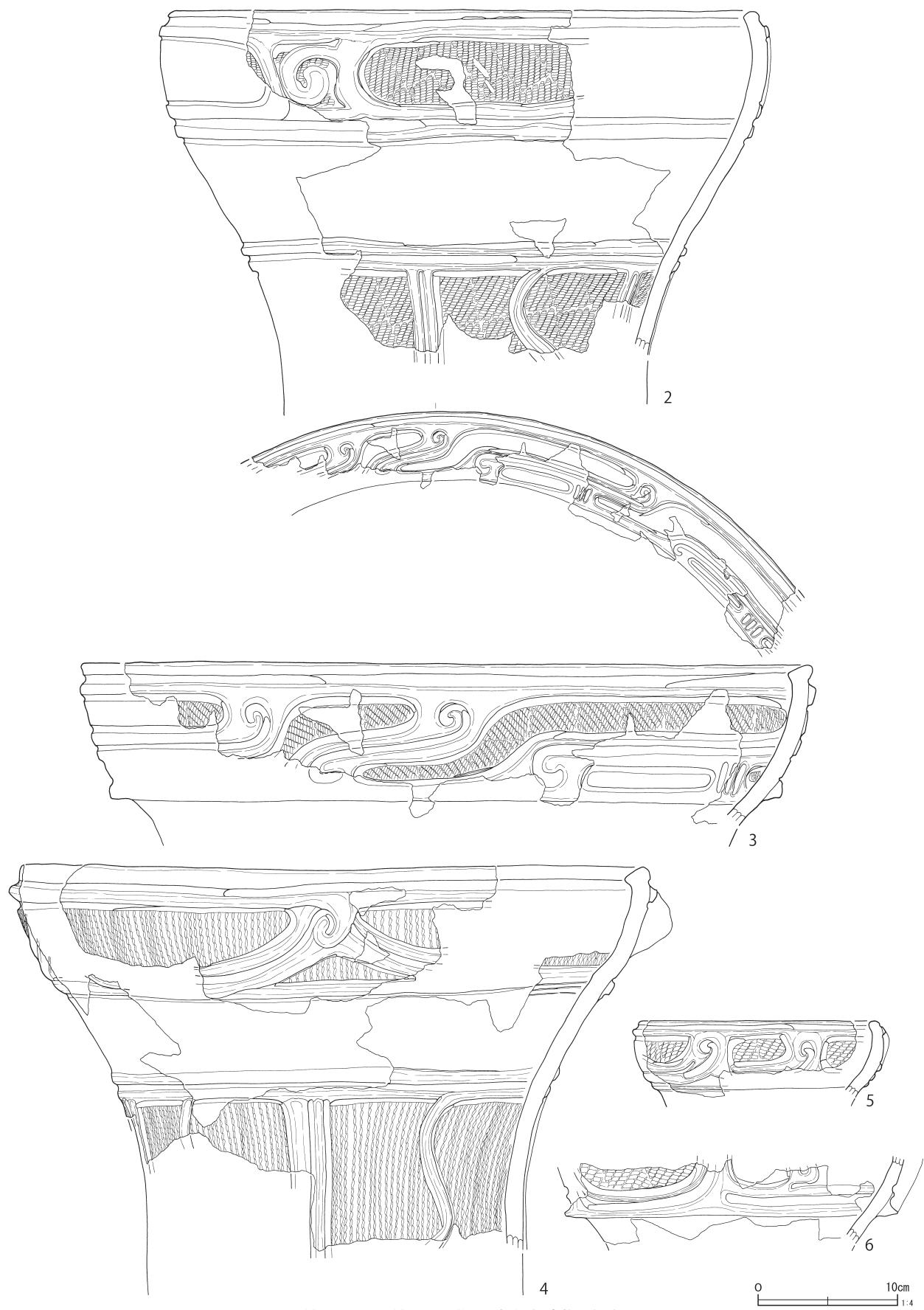
区画内に集合沈線文、30は沈線区画内に集合押引沈線文を施文する。37は0段多条R Lの縦走施文、39は末端を結ぶ無節L、40・41は単節R Lを施文する。42は無文の口唇部が内折し、幅広の口唇部を持つ器形を呈し、43は無文の口縁部が内湾して開く器形を呈する。

第227図1～229図16、第230図38、44～233図110は加曾利E系の土器である。

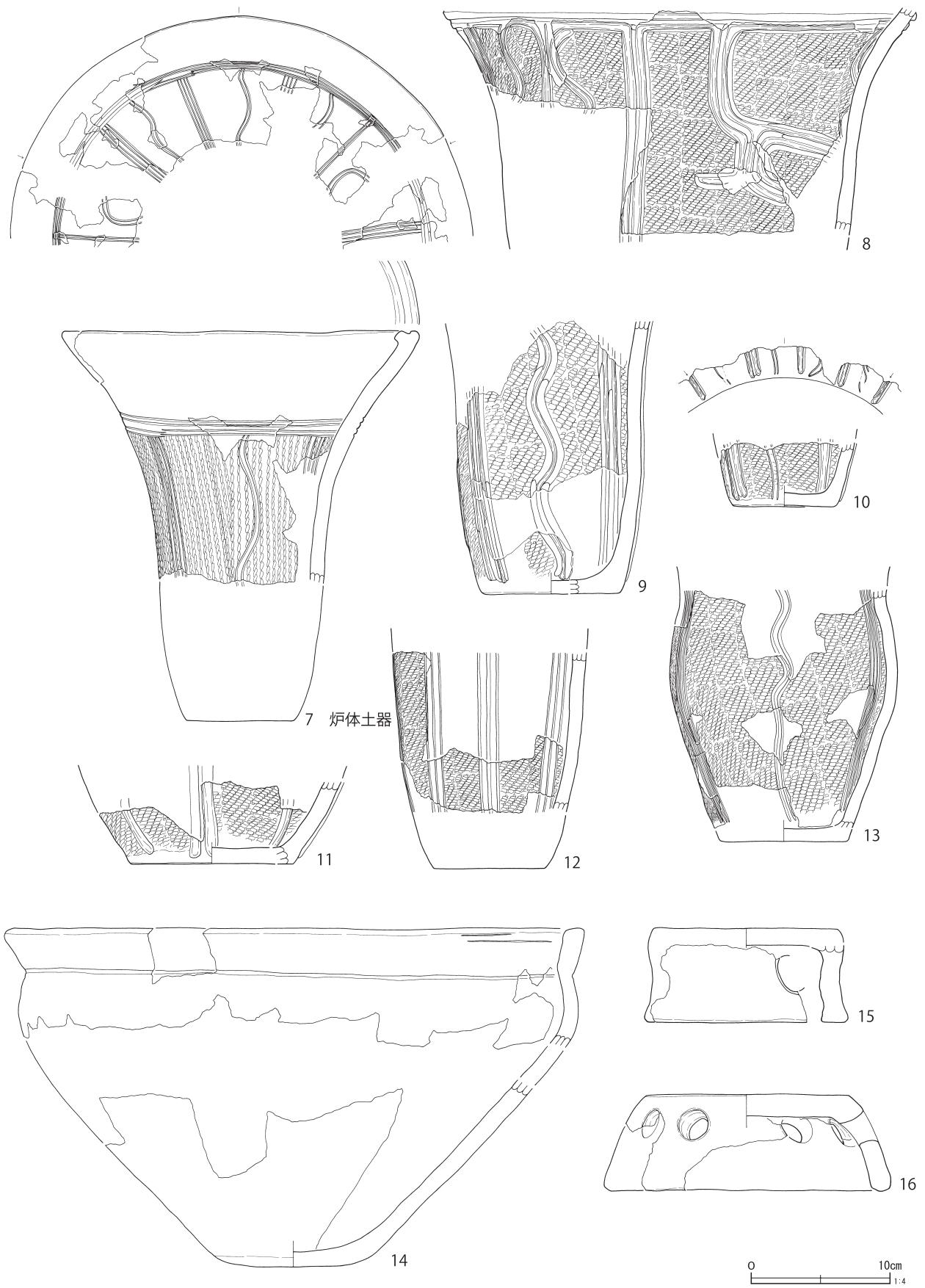
1は頸部無文帯を持つキャリパー形深鉢形土器で、口縁部に4単位の把手を持ち、対になる2単位の把手から横S字状隆帯を垂下して連結するモチーフを構成し、他の2単位の把手間は楕円区画



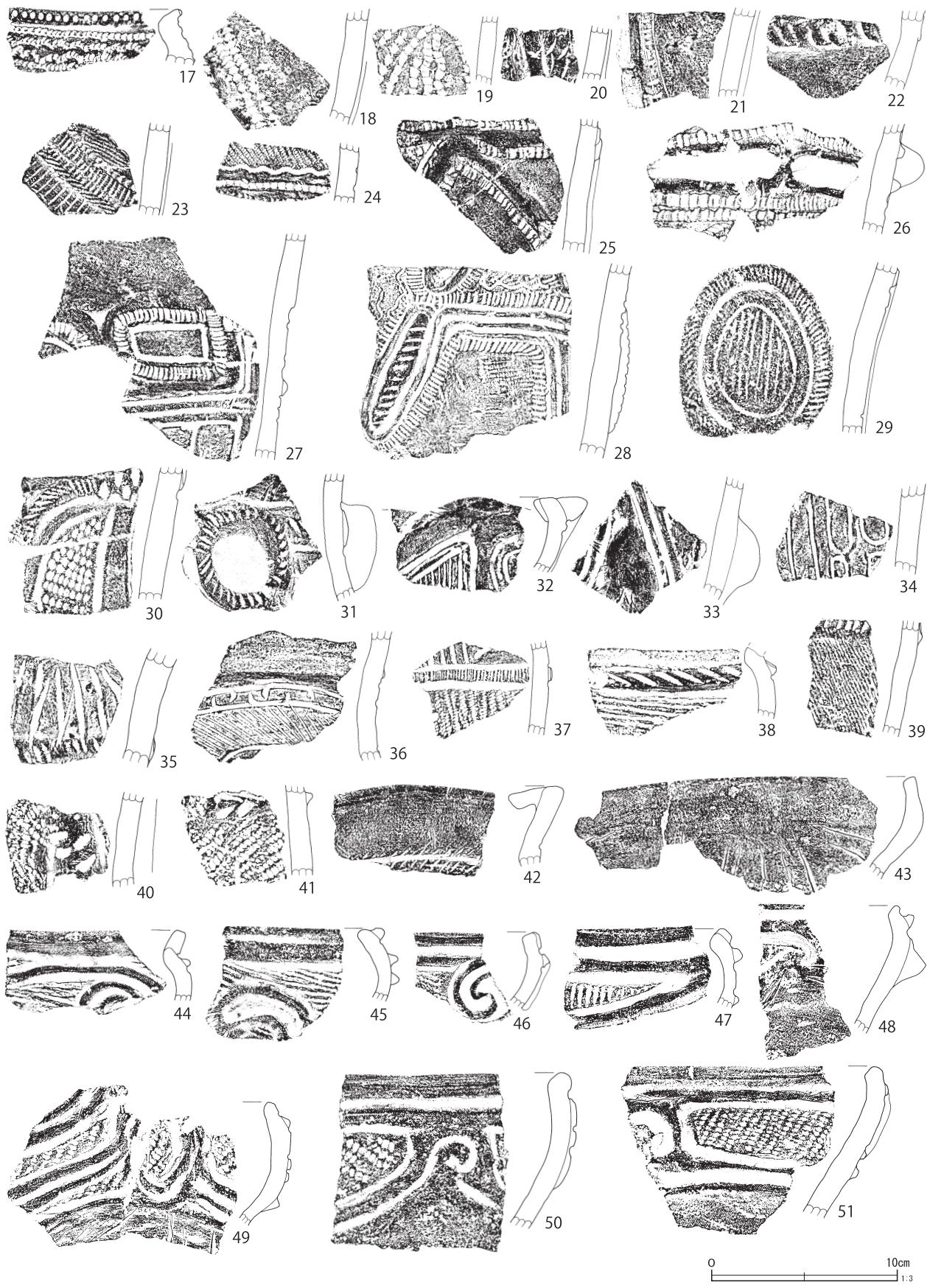
第227図 第47号住居跡出土遺物（1）



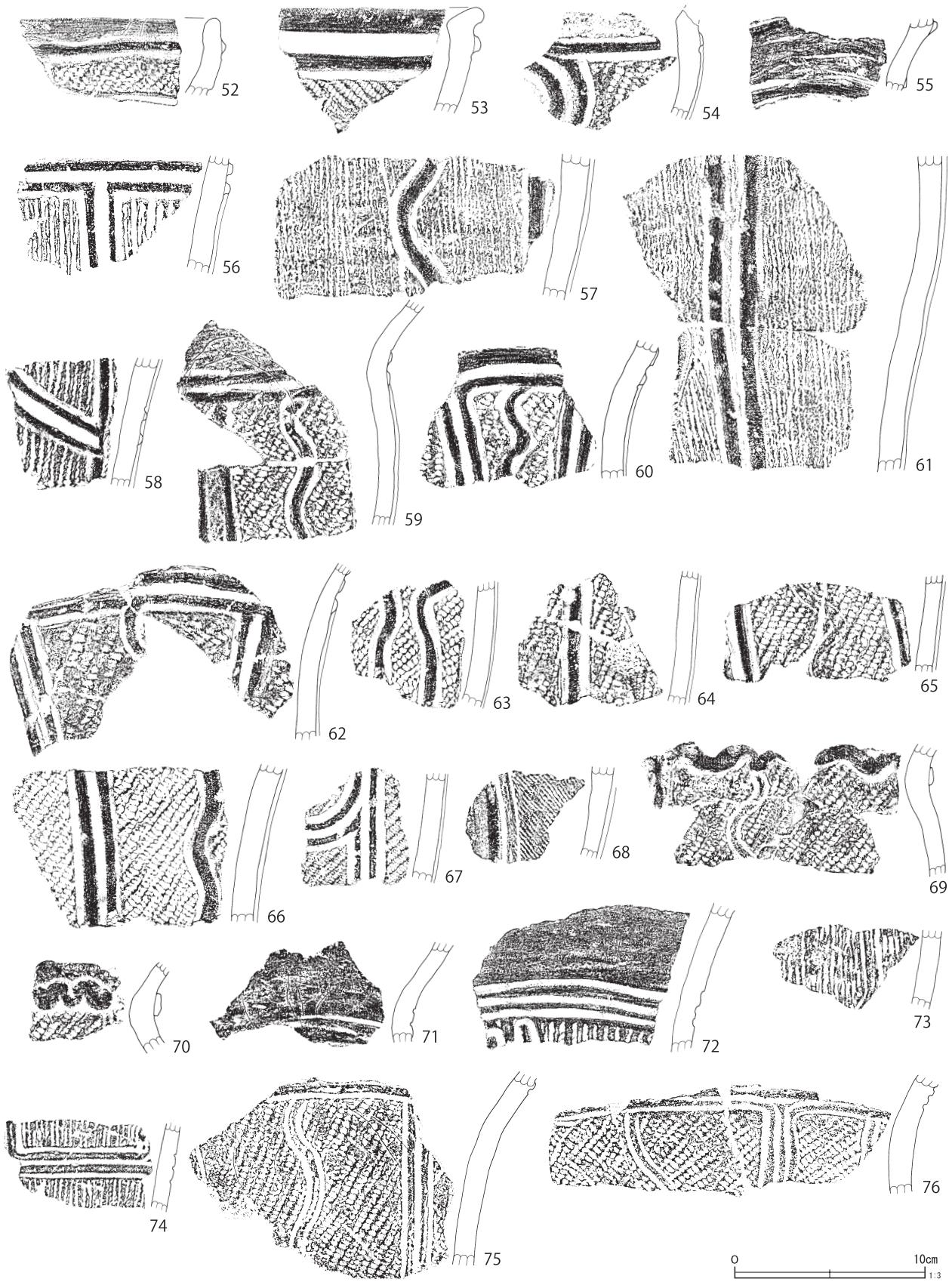
第 228 図 第 47 号住居跡出土遺物 (2)



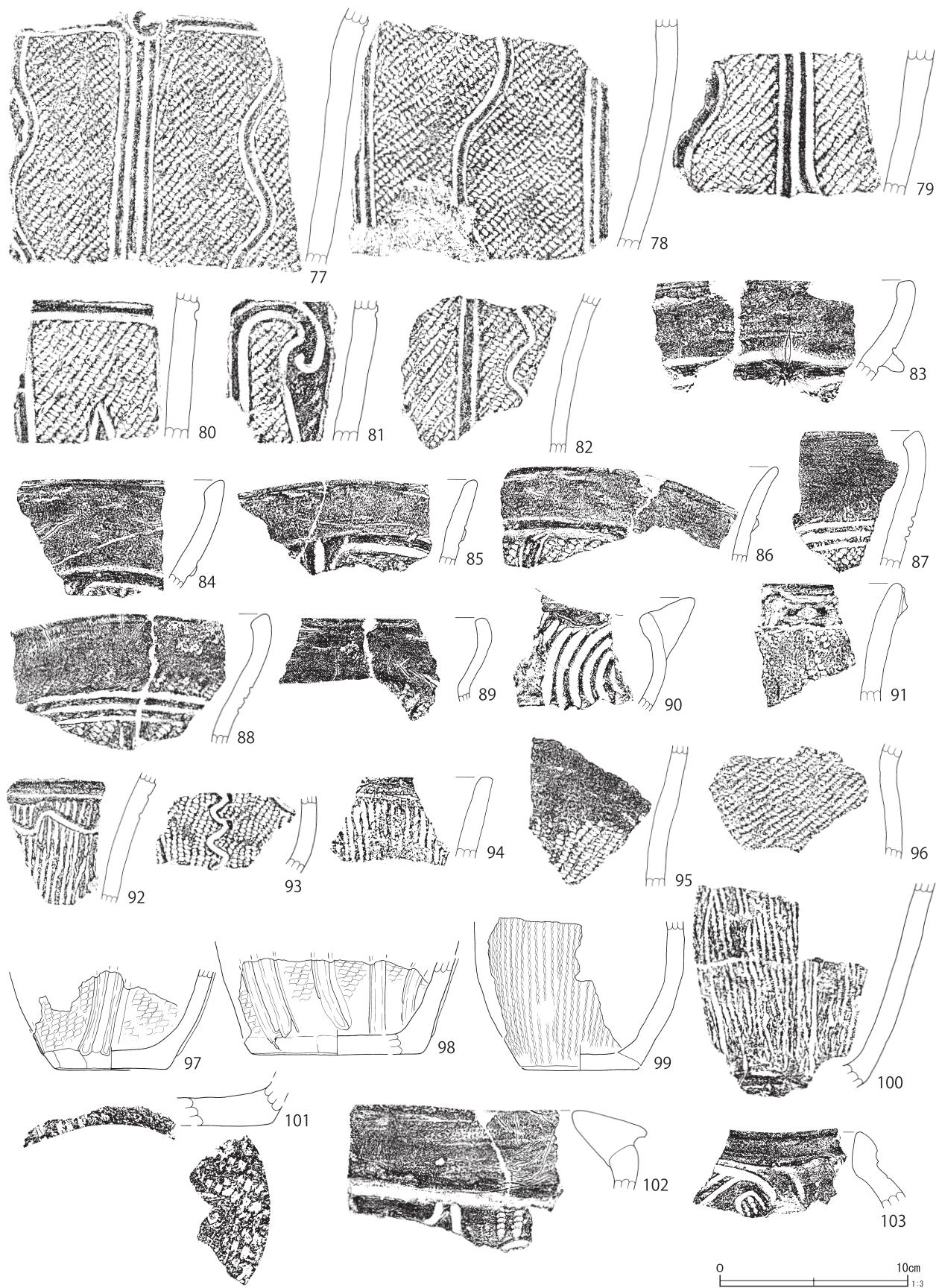
第229図 第47号住居跡出土遺物（3）



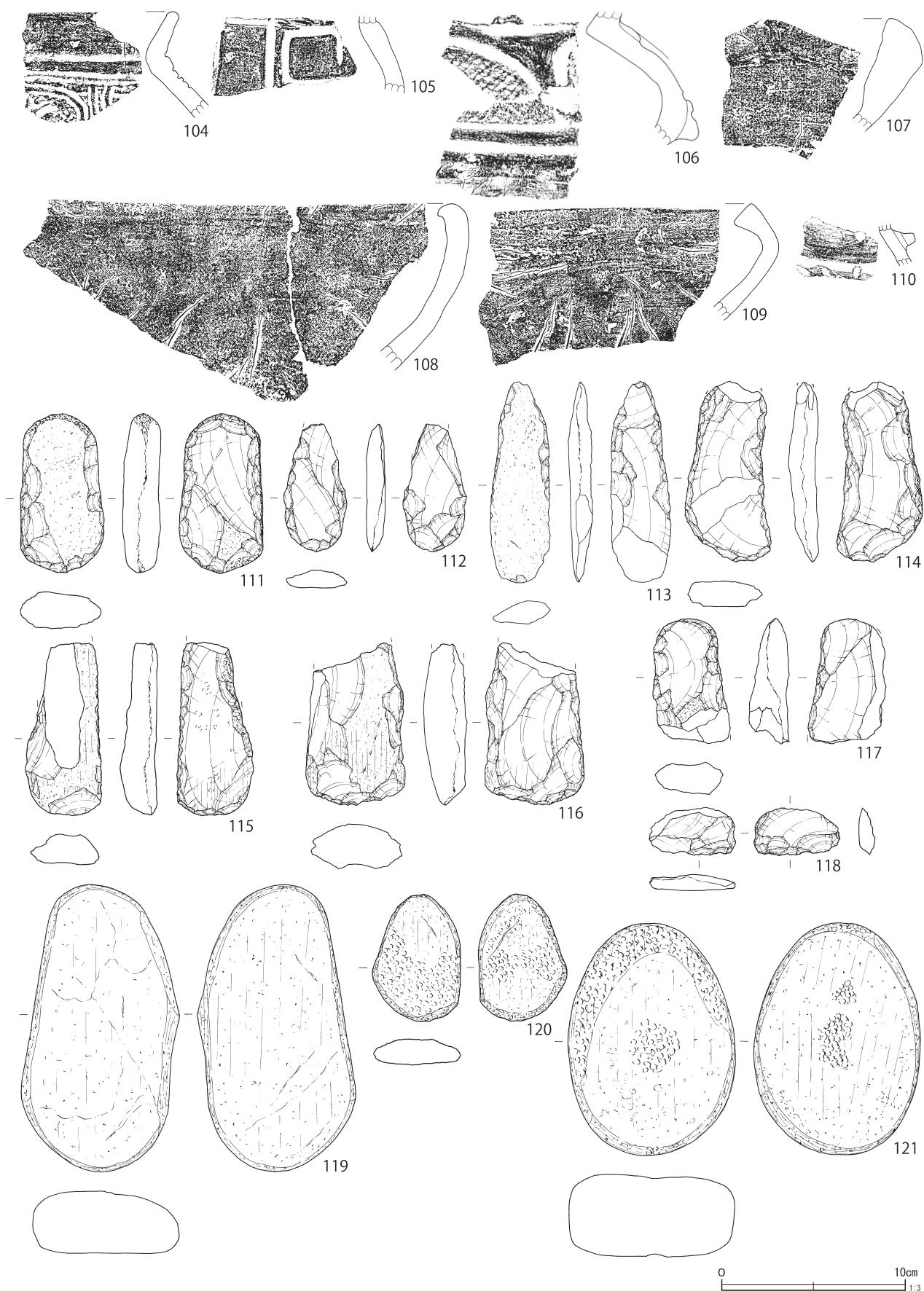
第230図 第47号住居跡出土遺物(4)



第231図 第47号住居跡出土遺物（5）



第232図 第47号住居跡出土遺物(6)



第233図 第47号住居跡出土遺物（7）

文を連結する構成をとる。胴部は2本隆帯が垂下する副文様帯と、梯子状隆帯で蕨手状の隆帯文を連結する幅広の文様帯が組み合って、2単位構成の文様帯構成となっている。口縁部区画と胴部区画はおよそ一致している。地文は撚糸文Lである。底部を欠損するが器形を復元でき、口径50cm、現存高55cmを測る。

2～4は頸部無文帯を持つキャリパー形深鉢形土器で、2は口縁部に渦巻文と橜円区画で構成される文様帯を持ち、胴部に2本隆帯の懸垂文と蛇行隆帯懸垂文を垂下する。推定口径約42.5cm、現存高25cmを測る。5・6も同様な文様構成を持ち、5は小形で推定口径約17.6cmを測る。いずれも地文は単節RLの縄文である。

3は口縁部に上下に入り組む渦巻文と橜円区画文を連結するモチーフが展開するキャリパー形深鉢形土器で、地文に単節RLの縄文を施文する。推定口径約53cmを測る。

4は口縁部に繫弧文系の隆帯文を展開するキャリパー形深鉢形土器で、胴部に2本隆帯と蛇行隆帯懸垂文を垂下する。地文は撚糸文Lである。推定口径約11.3cm、現存高6.8cmを測る。

8～13はキャリパー形の深鉢形土器の胴部から底部にかけての破片で、8～11は隆帯懸垂文、12・13は沈線懸垂文を垂下するものである。地文は全て単節RL縄文の縦位施文である。

14は無文の口縁部が開きながら立ち、胴部が湾曲して窄まる器形の浅鉢で、推定口径約42cm、推定高約25cmを測る。

15・16は円形の透かしを施す器台である。15は台部を欠損する破片で、推定脚部幅約14.8cmを測る。16は2個対の透かしを持ち、台部幅約14.4cm、推定脚部幅約21cmを測る。

第230図44～54はキャリパー形深鉢形土器の口縁部破片で、44～46は口縁部に2本隆帯のS字状渦巻文を連結し、地文に撚糸文を施文するもので、加曾利E I式の前半に位置付けられよう。47～56

は頸部無文帯を持つキャリパー形土器で、隆帯渦巻文と区画文が組み合わさる構成の口縁部文様帯を持ち、E I式後半から終末に位置付けられる破片である。地文の縄文は、全て単節RLである。

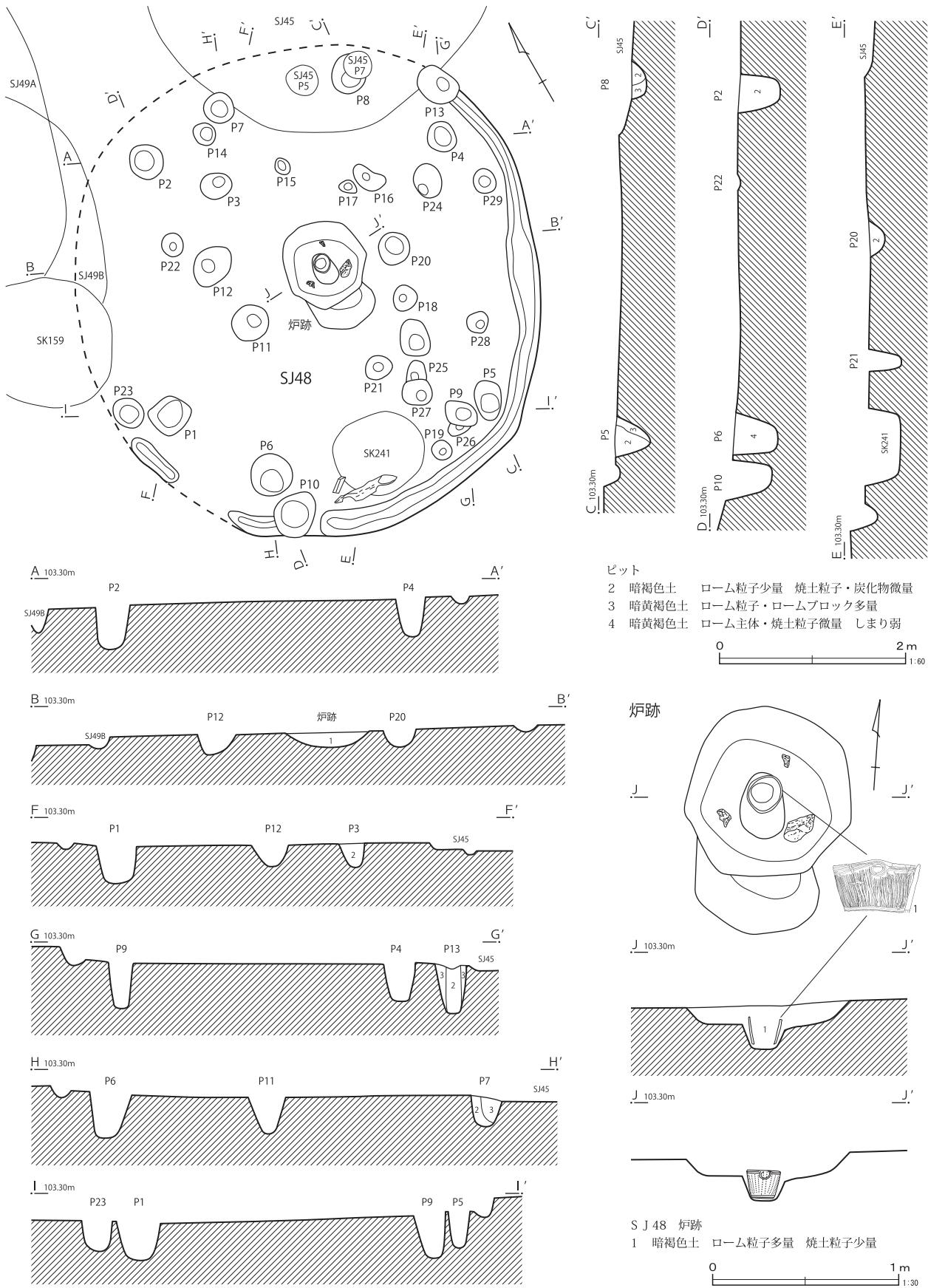
55～68、71～82はキャリパー形土器の胴部破片で、55～68、97・98は隆帯の区画や懸垂文を施すもので、71～82、92・93は沈線の区画や懸垂文を施すものである。58、67は懸垂文から横位に派生するモチーフを連結するものであり、74は竹管内面の重複施文による平行沈線文を施文することから、古手の様相を帶びる。80・81は胴部懸垂文に、磨消手法による剣先文を施文する。地文は56～58、61は撚糸L、59・60、62～66は単節RL、67は0段多条RL、68は無節Lを施文する。また、72～74は撚糸L、75～82は単節RLを縦位施文する。

69・70は波状隆帯で頸部を区画する曾利系の深鉢形土器で、隆帯と沈線も懸垂文を垂下する。

83～89、95は口縁部文様帯を持たない深鉢形土器の口縁部破片で、無文の口縁部が開く器形を呈する。83～86は頸部を隆帯で、87・88は沈線で区画し、84・85は隆帯懸垂文、86、88は沈線懸垂文を垂下する。89、95は口縁部区画のないものである。いずれも、地文は単節RLの縄文である。

90は重弧文系土器の口縁部破片で、内湾する口縁部に小さな把手が付くものである。91は口縁部に押圧を施した隆帯を巡らすもので、口縁部が開く器形を呈する。94は直線的に開く口縁部から、撚糸文Lを施文するものである。96は単節RLを施文する胴部破片、99・100は撚糸文Lを施文する底部破片、101は網代痕のある底部破片である。

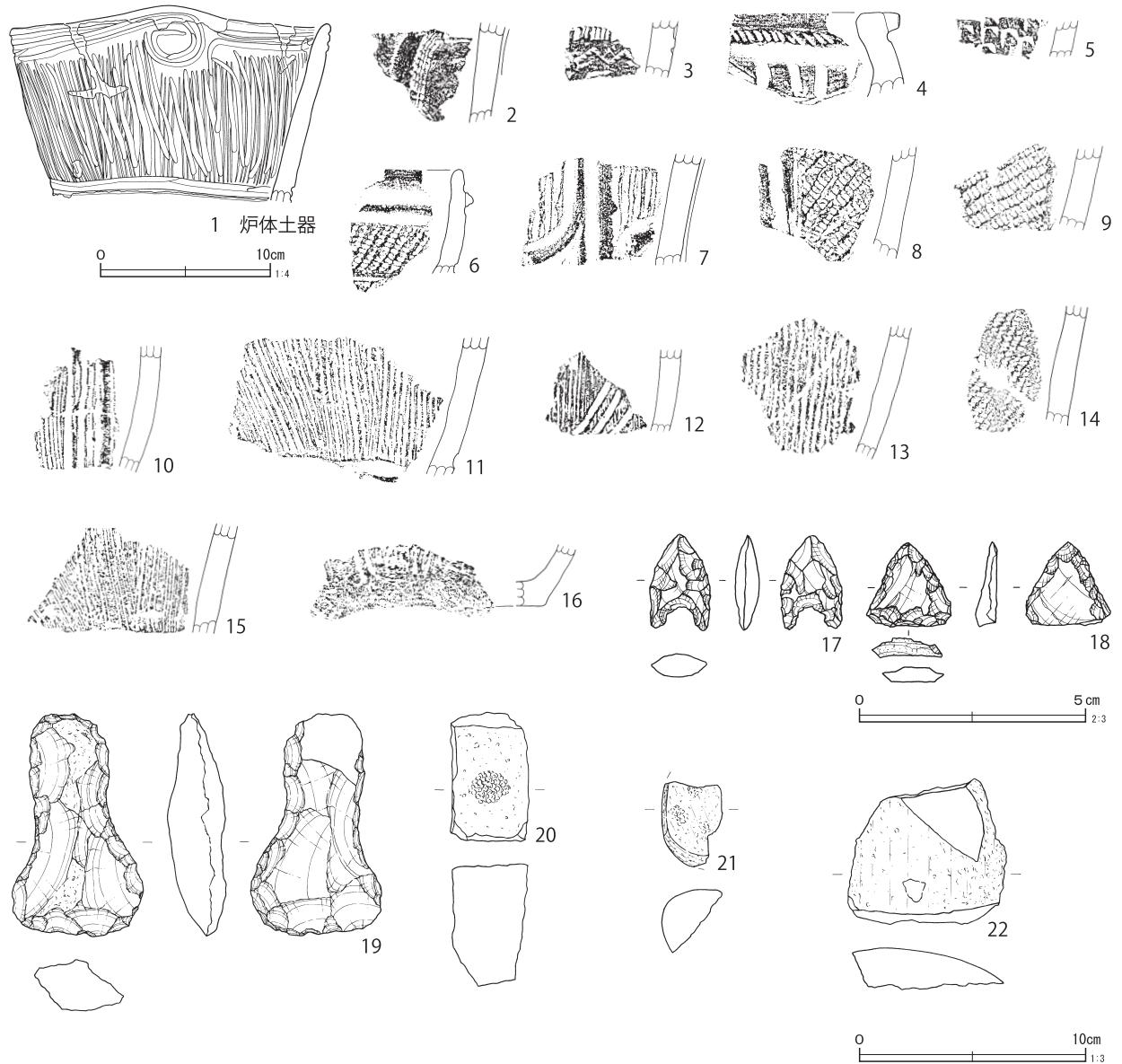
103～109は浅鉢である。103～106は無文の口縁が外折し、胴部が屈曲する浅鉢で、肩部に文様帯を持つ。103は口縁部の屈曲が弱く、104・105は沈線描出の文様帯を持ち、106は低隆帯の渦巻文と橜円区画文の組み合わさるモチーフを施文する。107は小波状を呈する肥厚した口縁部が開く器形を呈する。108・109は口縁部が内湾する浅鉢



第 234 図 第 48 号住居跡

第46表 第48号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.42	0.38	0.38	P 11	0.40	0.38	0.38	P 21	0.29	0.24	0.36
P 2	0.40	0.35	0.47	P 12	0.48	0.35	0.20	P 22	0.24	0.22	0.29
P 3	0.33	0.26	0.23	P 13	0.46	0.34	0.52	P 23	0.35	0.31	0.33
P 4	0.34	0.30	0.40	P 14	0.25	0.25	0.27	P 24	0.36	0.29	0.45
P 5	0.44	0.26	0.37	P 15	0.20	0.14	0.10	P 25	0.20	0.20	0.11
P 6	0.44	0.44	0.47	P 16	0.37	0.20	0.09	P 26	0.20	0.12	0.05
P 7	0.33	0.33	0.32	P 17	0.18	0.14	0.08	P 27	0.32	0.26	0.13
P 8	0.44	0.36	0.15	P 18	0.28	0.26	0.10	P 28	0.22	0.22	0.33
P 9	0.34	0.25	0.46	P 19	0.22	0.20	0.18	P 29	0.27	0.22	0.14
P 10	0.52	0.43	0.42	P 20	0.36	0.34	0.16	—	—	—	—



第235図 第48号住居跡出土遺物

で、109は内湾が強い。110は有孔鍔付土器である。体部には沈線のモチーフが展開する。

石器は111～117が短冊形の打製石斧、118はスクレイパー、119～121が磨石である。

第48号住居跡（第234・235図）

O-7グリッドに位置する。第45・49B号住居跡、第159・241号土壙と重複する。住居跡では本住居跡の方が新しい。平面形の詳細は不明であるが、壁溝のプランから南北方向に細長い楕円形を呈するものと思われる。推定される規模は長径5.27m、短径5.01m、深さ0.26mを測る。

柱穴は合計29本が検出された。P10あたりを入口部とし、楕円形の四隅を中心とした4本主柱の構造と思われるが、主柱を特定することは難しい。炉が作り替えられている可能性があることから、建て替えの住居跡で、柱穴も移動しているものと推測される。

壁溝は、北東コーナーから南西コーナーにかけて約半周が現存するが、他の住居跡と重複する部分などでは不明瞭になっている。

炉は石囲埋甕炉で中央部やや奥壁寄りに作られており、石囲いの大半がなくなっている。炉体土器は第235図1であり、炉のほぼ中央部に埋設されていた。炉跡の規模は、長径1.22m、短径0.89m、深さ0.28mを測る。

本住居跡は、炉体土器から加曾利E II式の前半頃の構築と判断される。

出土遺物は少なく、炉体土器以外は所属が明瞭ではない。

第235図1は炉体土器である。胴部が括れ、口縁部が直線的に開く器形を呈し、口縁部と胴部を3本の沈線で区画する。口縁は緩い4単位の波状を呈し、波頂部には口縁部の区画線が渦を巻き、渦巻文の反対側の区画沈線が垂下する構成をとる。また、波頂部下を中心として、多条の沈線懸垂文が、渦巻文を囲むように垂下する。地文は条線文

である。文様帶の分割などは、連弧文系土器と同様であることから、連弧文と同時期に位置付けられるものと思われる。口径18.8cm、現存高11.2cmを測る。

2は隆帯脇に多条の押引文を施文する阿玉台系の深鉢形土器である。3～5は勝坂系土器で、3はキャタピラ文と三角押文による鋸歯状文を施文する。4は肥厚する口唇部が強く内湾するキャリバー形土器の口縁部破片で、口端部には刻みを施す。5は竹管内面の複列押引文を施文する。

6～10は加曾利E系のキャリバー形土器である。6は内湾の緩い口縁部が立つ器形を呈し、口唇部からやや離れた位置で、口縁部上端区画を隆帯で行う。7～10は隆帯懸垂文の垂下する胴部破片で、7は懸垂文から派生する隆帯文が渦巻文を連結する構成をとるものと思われる。地文は6が単節RL繩文の縦位施文、7が撚糸文L、8・9が単節RL繩文の縦位施文、10は条線である。

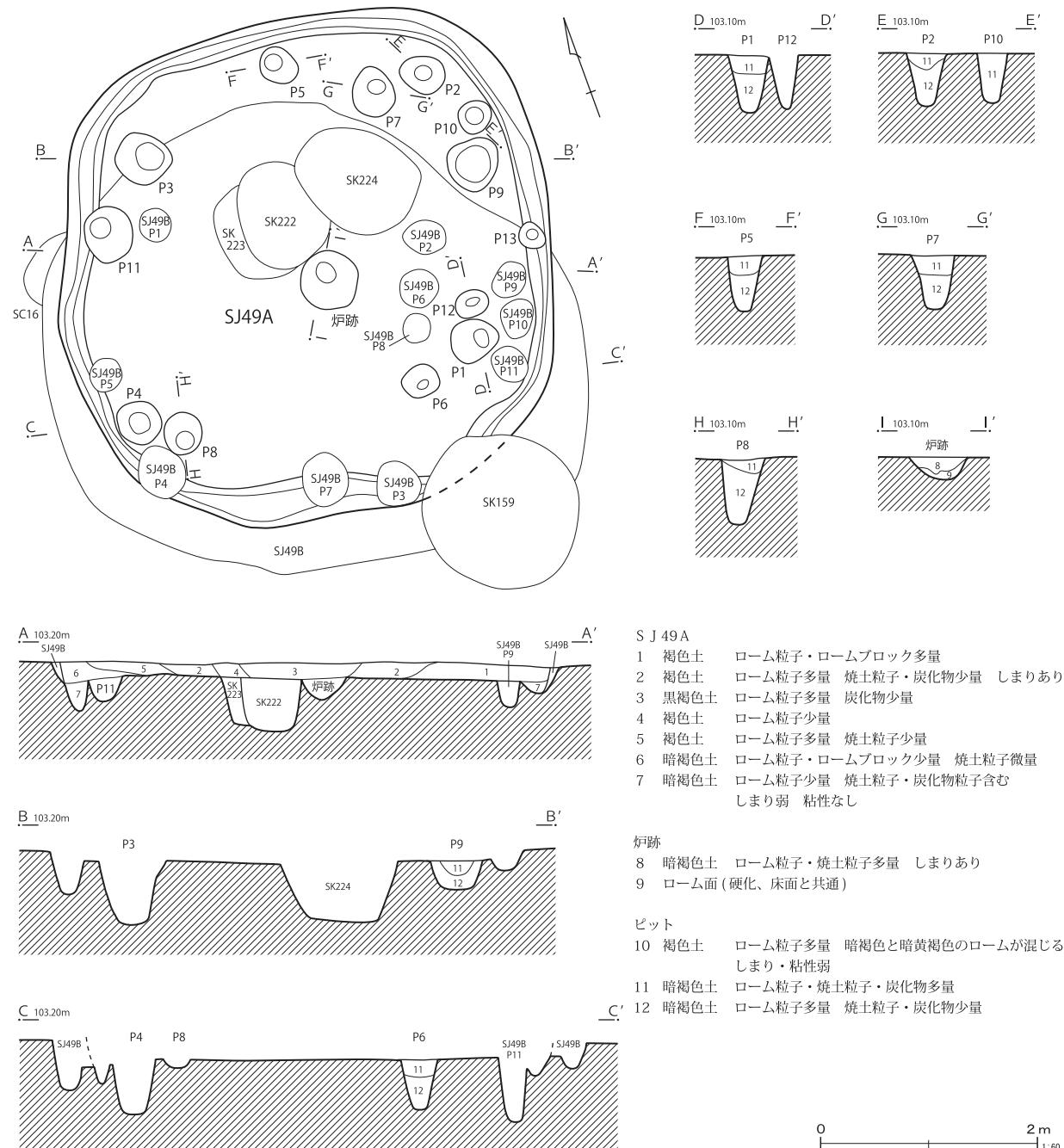
11・12は連弧文系土器の胴部破片で、11は胴部を太い沈線で区画する。12は3本沈線の連弧文が描かれている。地文は条線である。13は撚糸L、14は単節RLの縦位施文、15は条線を施文し、16は条線地文上に沈線懸垂文が垂下する底部破片である。

石器は17・18が石鏃である。17はホルンフェルス製の石鏃で、完形品である。18はチャート製で、未成品と思われる。19は撥形の打製石斧、20～22は磨石である。20は敲打痕が認められる。

第49A号住居跡（第236～242図）

N・O-6・7グリッドに位置する。第49B号住居跡、第159・222・223・224号土壙と重複する。本住居跡は第49B号住居跡より新しい。平面形は隅丸方形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-19°-Eをとる。規模は長径5.16m、短径4.45m、深さ0.19mを測る。

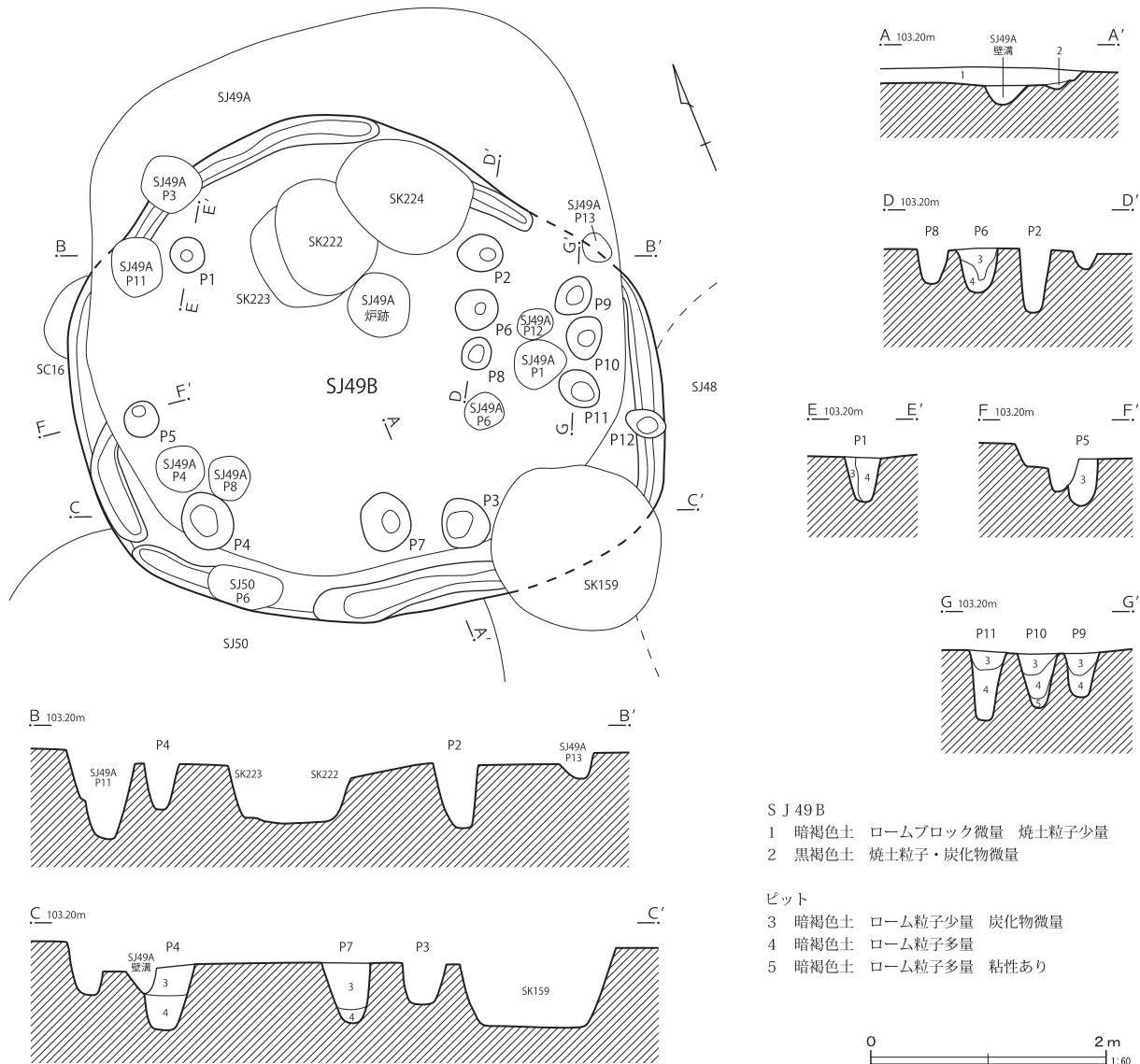
柱穴は13本が検出された。4本主柱を基本とする構成と思われるが、柱穴を特定するのは難しい。



第 236 図 第 49A 号住居跡

第 47 表 第 49A 号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.44	0.40	0.52	P 6	0.32	0.30	0.45	P 10	0.30	0.29	0.45
P 2	0.42	0.34	0.47	P 7	0.46	0.39	0.48	P 11	0.48	0.44	0.59
P 3	0.48	0.44	0.55	P 8	0.39	0.34	0.59	P 12	0.32	0.25	0.48
P 4	0.41	0.40	0.48	P 9	0.48	0.46	0.26	P 13	0.26	0.22	0.27
P 5	0.36	0.32	0.49	—	—	—	—	—	—	—	—



第237図 第49B号住居跡

第48表 第49B号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.31	0.30	0.38	P 5	0.31	0.29	0.39	P 9	0.36	0.29	0.36
P 2	0.40	0.31	0.53	P 6	0.36	0.36	0.37	P 10	0.37	0.30	0.45
P 3	0.42	0.41	0.35	P 7	0.49	0.41	0.50	P 11	0.36	0.30	0.63
P 4	0.50	0.43	0.51	P 8	0.28	0.27	0.26	P 12	0.37	0.22	0.28

壁溝は全周する。

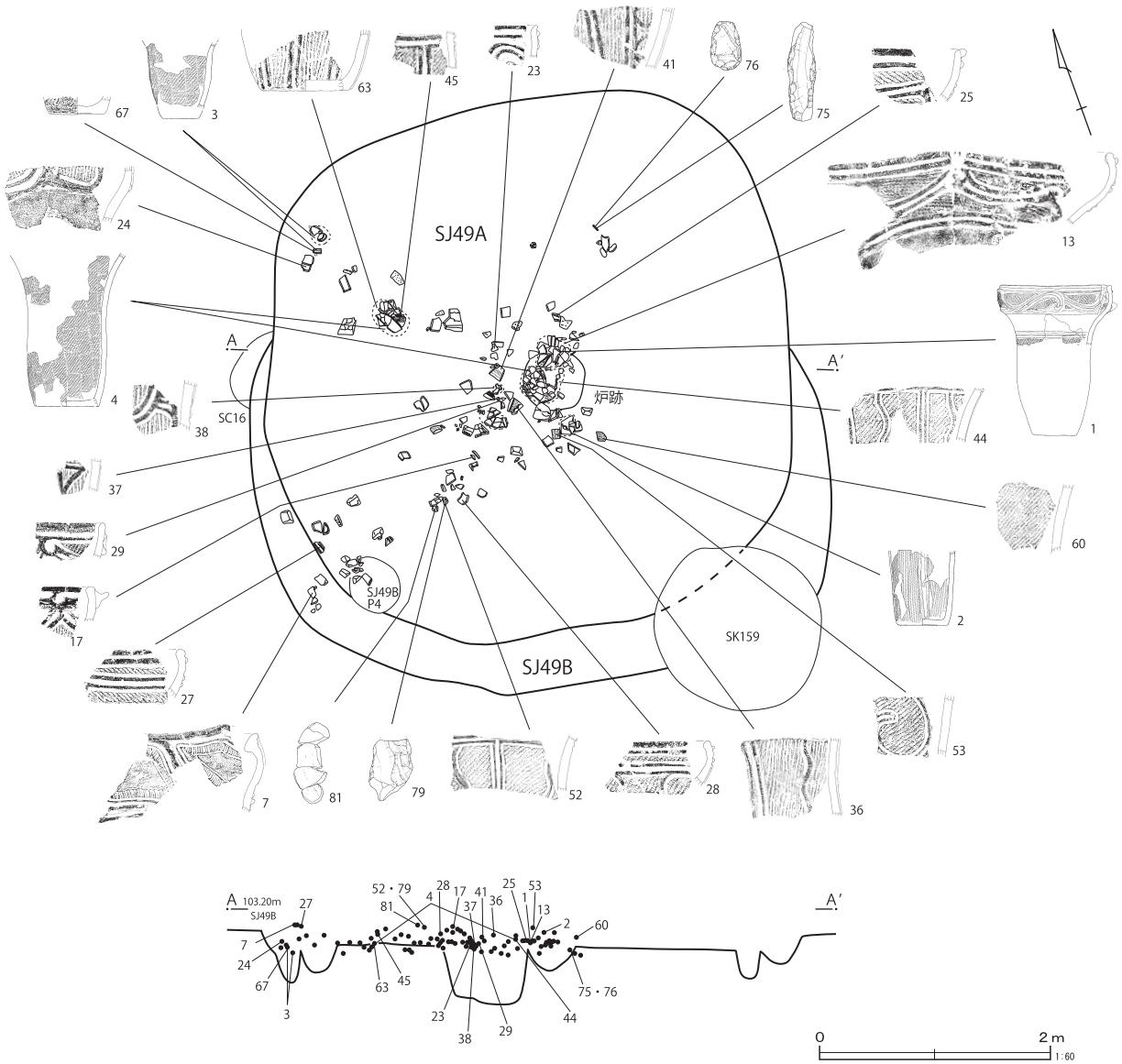
炉は地床炉で、住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡の規模は、長径0.54m、短径0.52m、深さ0.20mである。

第49B号住居跡（第239図）

N・O・6・7グリッドに位置する。第48・49

A・50号住居跡、第159・222・223・224号土壤と重複する。本住居跡は第49A号住居跡より古い。

平面形は不整形で、東西方向に細長く、北方向を頂点とする五角形状を呈する可能性もある。柱穴を基準とした主軸方位は、N-68°-Wをとる。



第238図 第49号住居跡遺物出土状況

規模は長径5.18m、短径4.12m、深さ0.17mを測る。

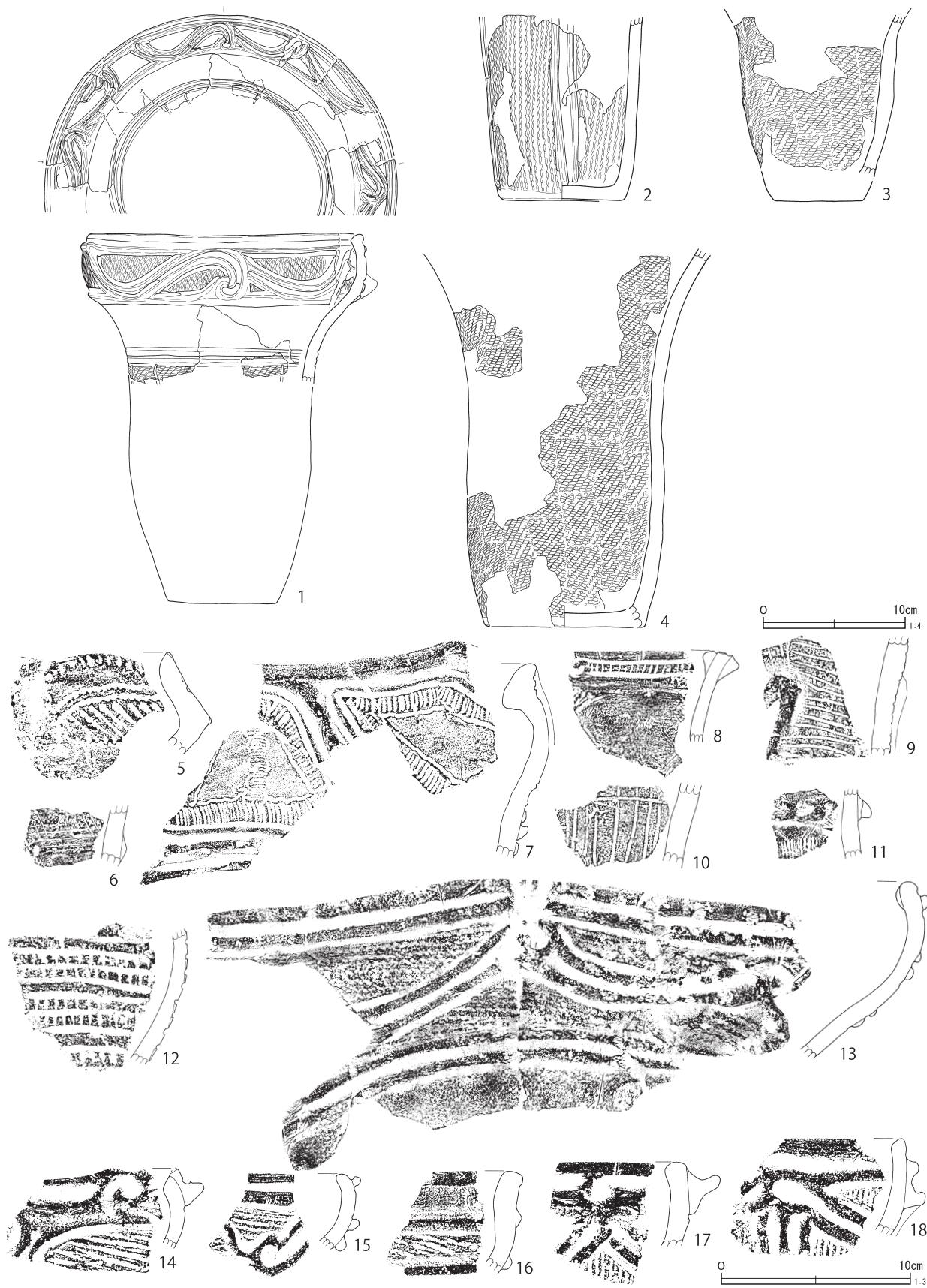
柱穴は12本が検出された。4本主柱を基本にするものと思われるが、特定できない。

壁溝は途切れがちであるが、全周する。

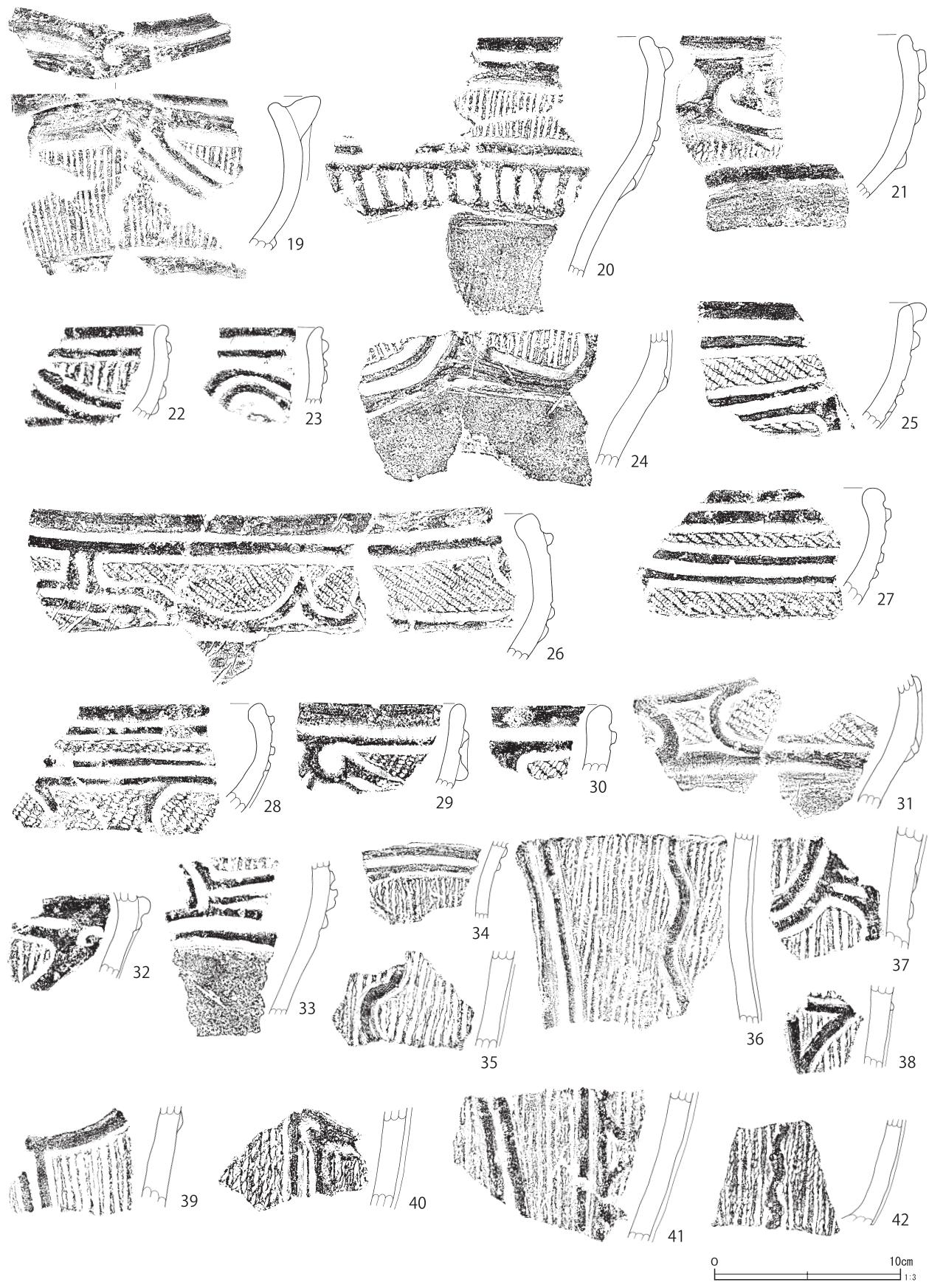
炉跡は検出されなかった。

第49A・B号住居跡出土遺物は、大半が第49A号住居跡からのものであるが、明瞭に区分できないため、一括して説明する。遺物は第49A号住居跡の炉跡直上、もしくはその周辺部から集中的に出土した。

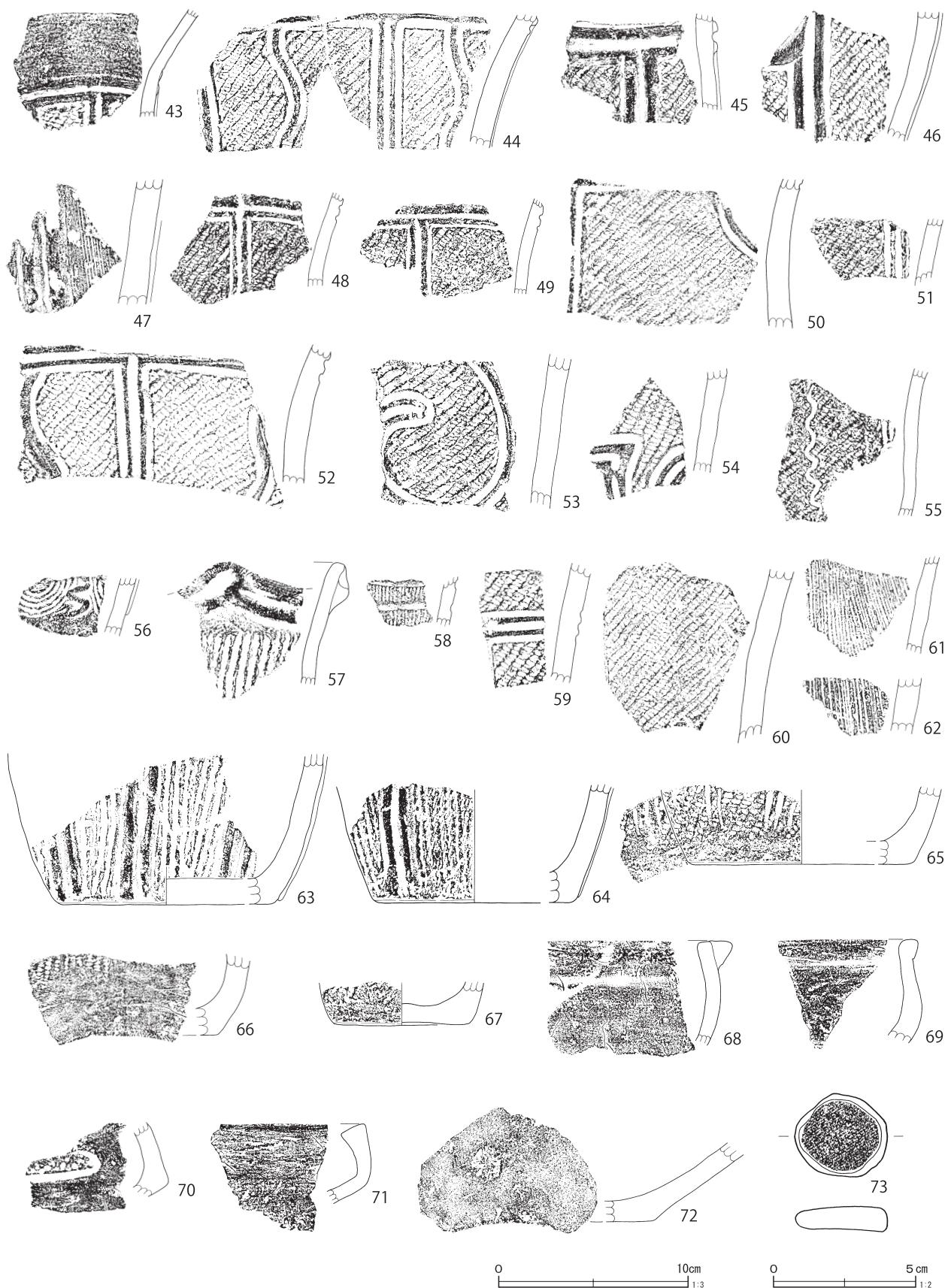
第239図5～7、9～12は勝坂系の土器である。5は口縁部が強く屈曲して開く器形を呈し、口縁部の隆帯区画に沿って2状の三角押文を施し、集合結節沈線を施す。7は内湾する口縁部が開く器形で、緩い波状を呈するものと思われる。口縁部は隆帯で区画し、隆帯脇に平行沈線と爪形文、小波状沈線を添わせる構成をとる。6、9・10は細沈線を施すもので、9は隆帯が垂下する。11は押圧を施す隆帯で胴部を区画し、地文に細かな撲糸文Lを施す。12は湾曲の強い胴部破片に平行沈線を施し、突き刺すような刺突文



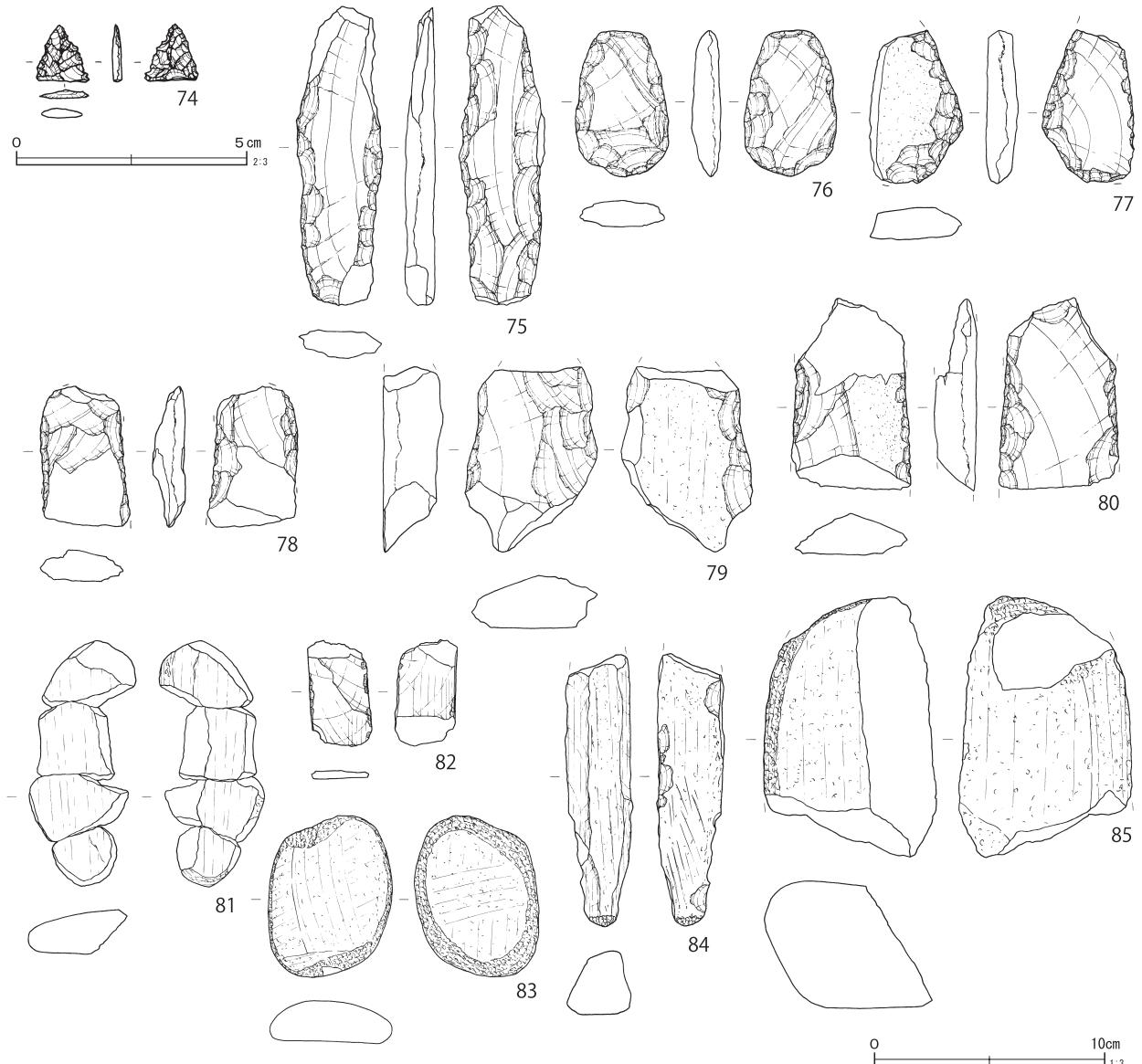
第239図 第49号住跡出土遺物（1）



第240図 第49号住居跡出土遺物（2）



第 241 図 第 49 号住居跡出土遺物（3）



第242図 第49号住居跡出土遺物（4）

を梯子状に施文する。

1～4、8、13～72は加曾利E系の土器である。1～4は器形が復元される土器である。

1は内湾の緩い口縁部が立ち、頸部無文帯が大きく開くキャリパー形土器で、口縁部には上下区画に接する2本隆帯で、横S字状文や、弧状に連結するモチーフを描いている。沈線で頸部区画を行い、胴部の単節RL地文上に、沈線懸垂文を垂下する。口径19.5cm、現存高10.5cmを測る。2は撲糸L地文上に、2本隆帯懸垂文が垂下する底部

で、底径8.5cm、現存高12.8cmを測る。3・4は地文縄文のみ施文する胴部破片で、両者とも単節RLを縦位施文する。4は現存高26.5cmを測る。

8は無文の口縁部が外反して開く器形を呈し、平坦面を形成する口唇部の上に渦巻文と刻み目を挟む平行沈線を施文するものである。

13～33は口縁部無文帯を持つキャリパー形土器の口縁部破片である。13は内湾する口縁部が大きく開く器形を呈し、口縁部文様帯の上下端区画を2本隆帯で行い、文様帯内には端部で小さな渦を

巻く2本隆帯で、繫弧文状のモチーフを描いている。地文は撚糸文Lを横位施文する。

14~24、33は地文に撚糸文を施文する口縁部破片で、15のみ撚糸文R、他は全て撚糸文Lを施文する。口縁部文様帶には隆帯の区画文と沈線の渦巻文を組み合わせたモチーフを描くものと、2本隆帯で繫弧文状の波状文を構成するものとがあり、14、21、24は前者にあたる。また、14、19のように幅広の口唇部を形成して、沈線の渦巻文を施文するものもあり、17は繫弧文の連結部渦巻が口唇部まで迫り上がり、口唇部と一体化して渦巻文を構成している。20は緩く内湾する口縁部が開く器形を呈し、口縁部文様帶直下に、短隆帯を縦位の梯子状に施文する区画帯を設けている。32は口縁部に縦位の沈線を充填施文するものである。

25~31は地文に縄文を施文する口縁部破片であり、すべて単節RLであるが、26・27、31は0段多条の縄文である。25も多条の可能性がある。26・27は同一個体である。25~27は2本隆帯で、渦巻文を連結する構成のモチーフを描き、26は口縁部文様帶上部区画から垂下する隆帯で連結されたクランク文と、2連の三角状の棘状文を組み合わせたモチーフを構成している。28、30・31は隆帯の楕円状区画文を構成し、29は繫弧文を連結しているものと思われる。

34~42は撚糸地文上に隆帯の懸垂文を垂下する胴部破片である。37~41は胴部に隆帯の渦巻文を連結するモチーフを描く土器群で、37は部分的に梯子状隆帯文を使用し、40は隆帯連結部に小さな渦巻文を構成している。41は垂下する隆帯懸垂文間に対弧状の区画を施している。

43~46は地文縄文上に隆帯懸垂文を垂下するもので、2本懸垂隆帯と、1本蛇行隆帯文との組み

合わせである。44は隆帯を竹管内面で整形することにより、低隆帯状を呈する。地文は全て単節RLである。44は多条縄文である。

47は地文条線文上に、隆帯の懸垂文を垂下するものである。

48~55、59は縄文地文上に、沈線の懸垂文や渦巻文を連結するモチーフを描くものである。懸垂文は48、52、55のように3本沈線と、2本蛇行沈線を組み合わせるものと、50、53・54のように渦巻文を連結する構成のものがある。53は竹管内面を重複施文する3本沈線で、大きな渦巻文を描いている。54はクランク状に連結する渦巻文を、3本沈線で描いており、クランク部分では中央の沈線が途切れ状に施文されている。地文縄文は全て単節RLである。50、53は多条縄文である。

56は沈線の重弧文と蛇行隆帯を組み合わせた、曾利系の土器である。57は口縁部が外反して、緩い4単位の波状口縁を呈し、胴部が張る器形の深鉢形土器で、波状口縁に沿って隆帯を施文し、波頂部で連結する構成をとる。地文は撚糸文Lを施文する。58は撚糸L地文上に、やや間隔を空けた横位の沈線を施文するものである。60は単節RLの縄文を施文するのみの破片で、61・62は条線文を施文する破片である。

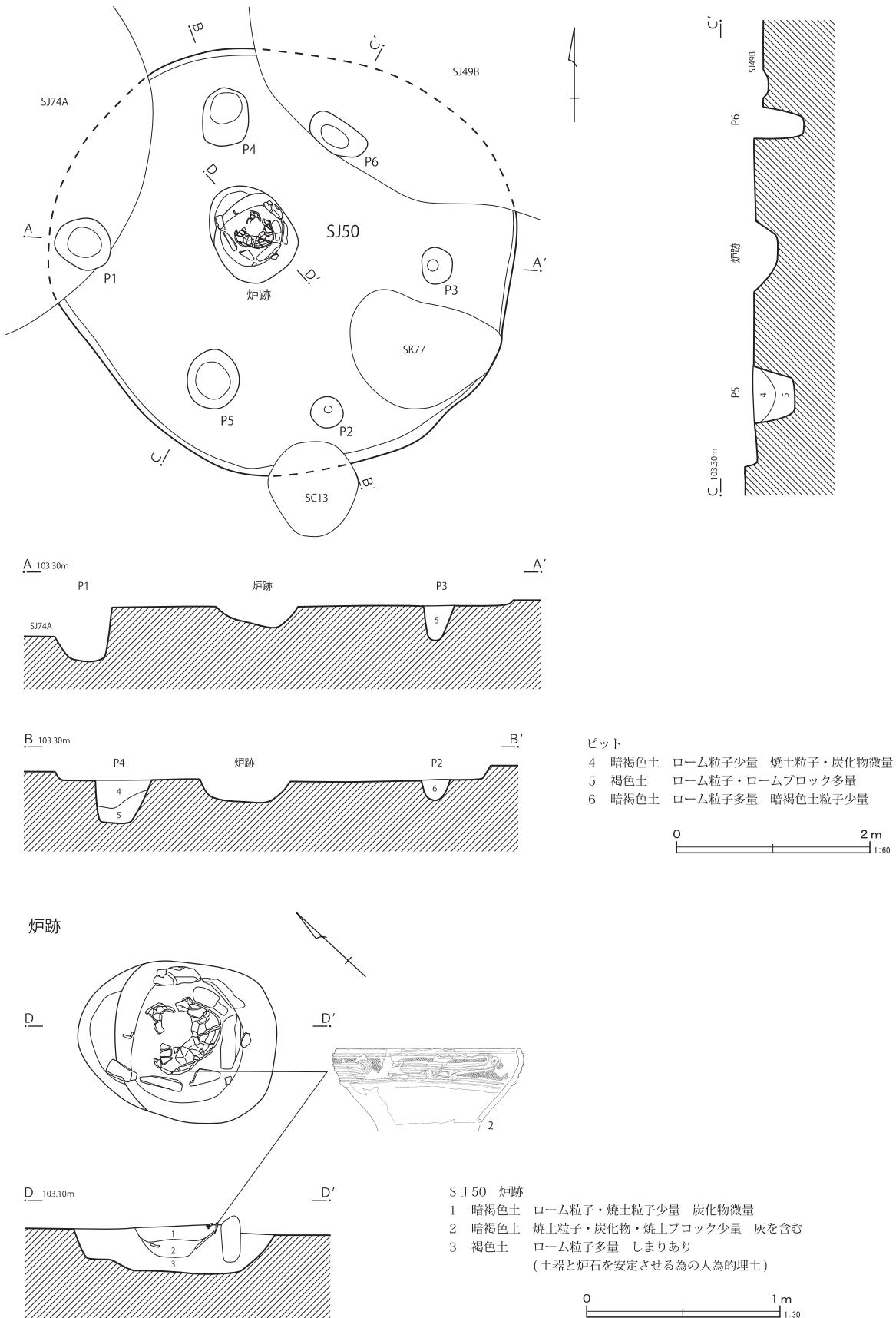
63~67は底部破片で、63・64は撚糸L地文上に隆帯懸垂文を垂下するものである。65は単節RL縄文上に沈線の懸垂文を垂下するもので、66・67は地文に単節RLの縄文を施文する底部破片である。

68~72は浅鉢形土器で、68・69、71は胴部が湾曲する浅鉢で、70は口縁部が屈曲して開き、肩部に文様帶を持つものである。72は底部である。

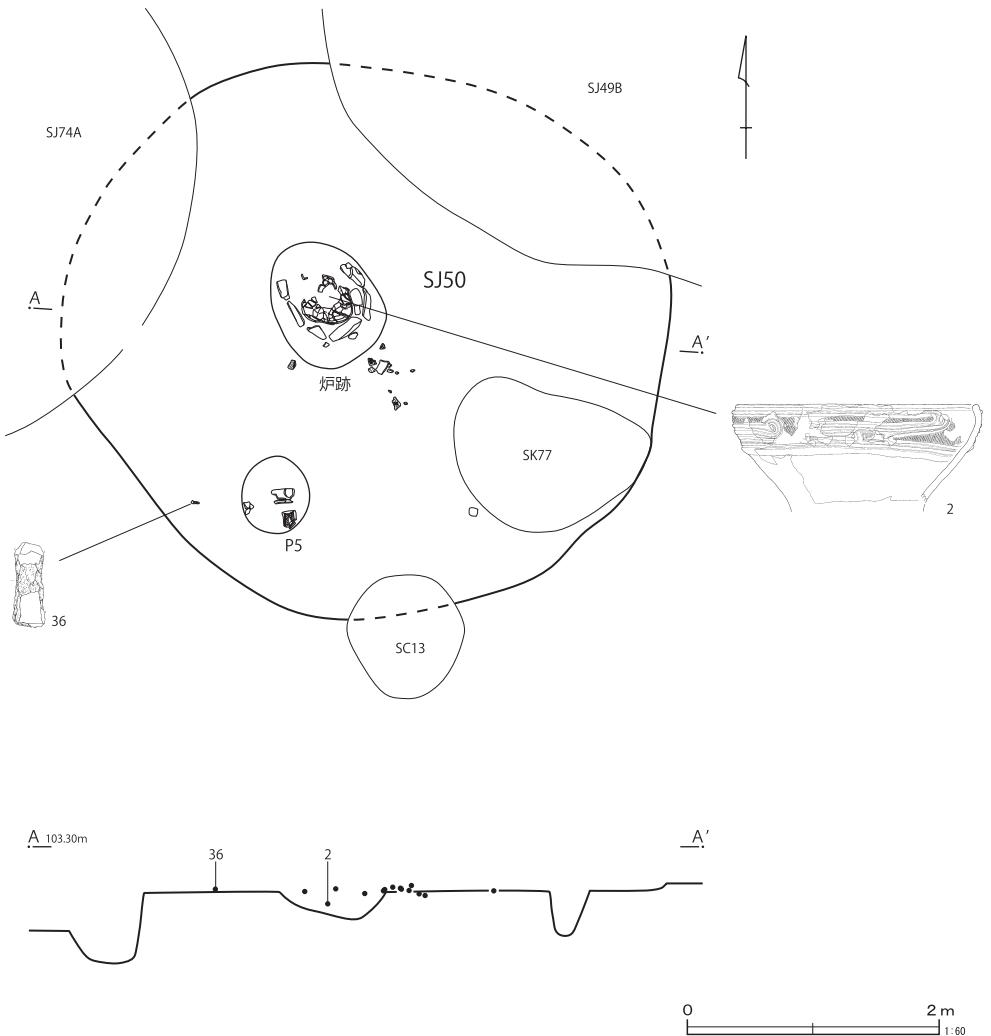
73は径3.2cmを測る、土器片を利用した土製円

第49表 第50号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.58	0.50	0.51	P 3	0.39	0.32	0.34	P 5	0.59	0.54	0.42
P 2	0.33	0.32	0.22	P 4	0.60	0.56	0.43	P 6	0.63	0.33	0.54



第 243 図 第 50 号住居跡



第244図 第50号住居跡遺物出土状況

盤である。

石器は、74が黒曜石製の石鎚で、基部を欠損する。75~80、82は打製石斧である。76のみ完形である。81、83、85は磨石で、81は細かく破碎されている。84は先端部に使用痕が認められる磨石か、もしくは敲石である。

第50号住居跡（第243～246図）

O-6・7グリッドに位置する。第49B、74A・74B号住居跡、第77号土壙、第13号集石土壙と重複するが、遺物から第77号土壙より古いと考えられるが、他の新旧関係は不明である。平面形

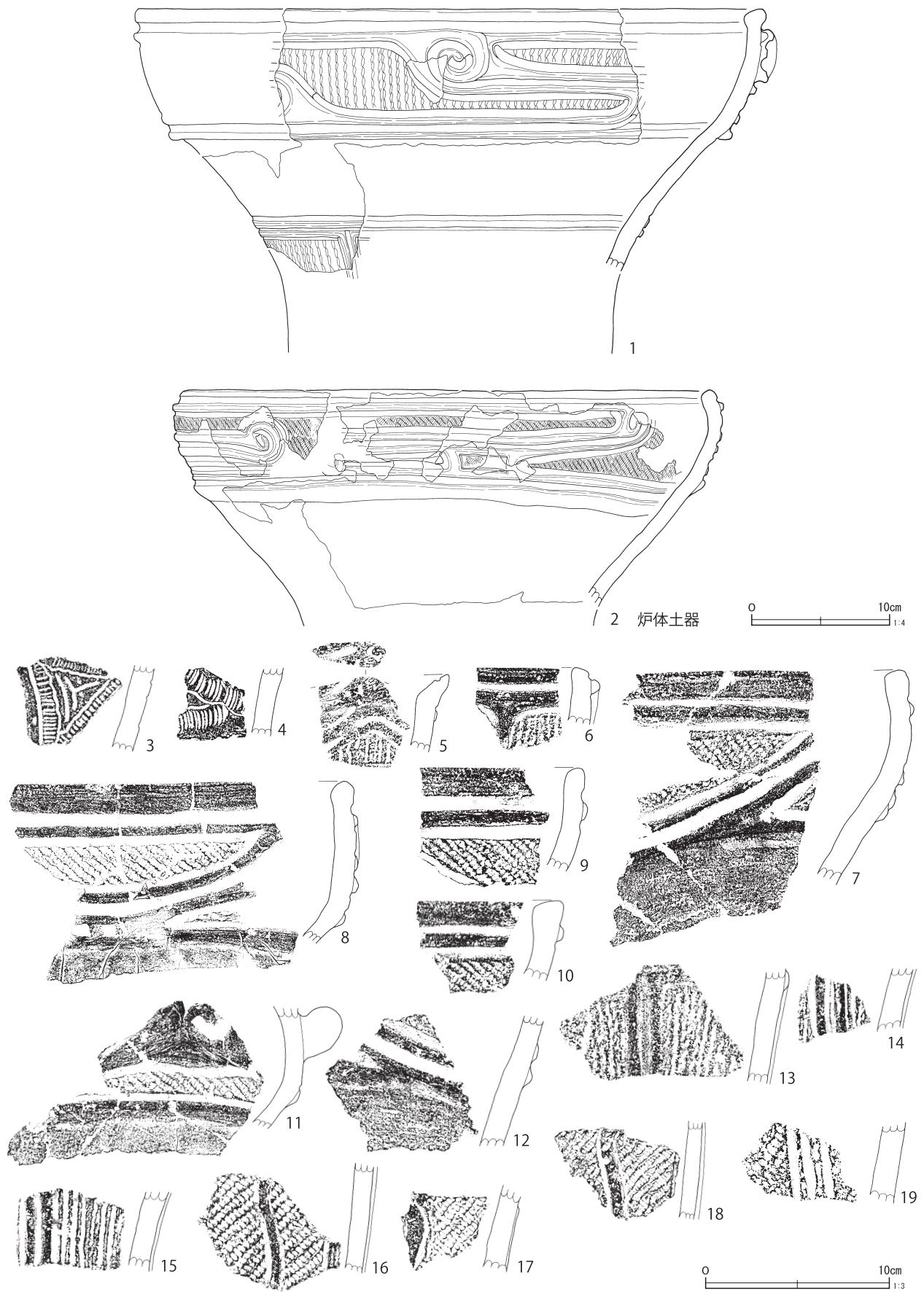
は南北方向に長い不正の楕円形を呈するものと思われ、推定される規模は長径4.69m、短径4.37m、深さ0.15mを測る。

柱穴は6本が検出された。配列が不整であり、主柱を推定するのが難しい。

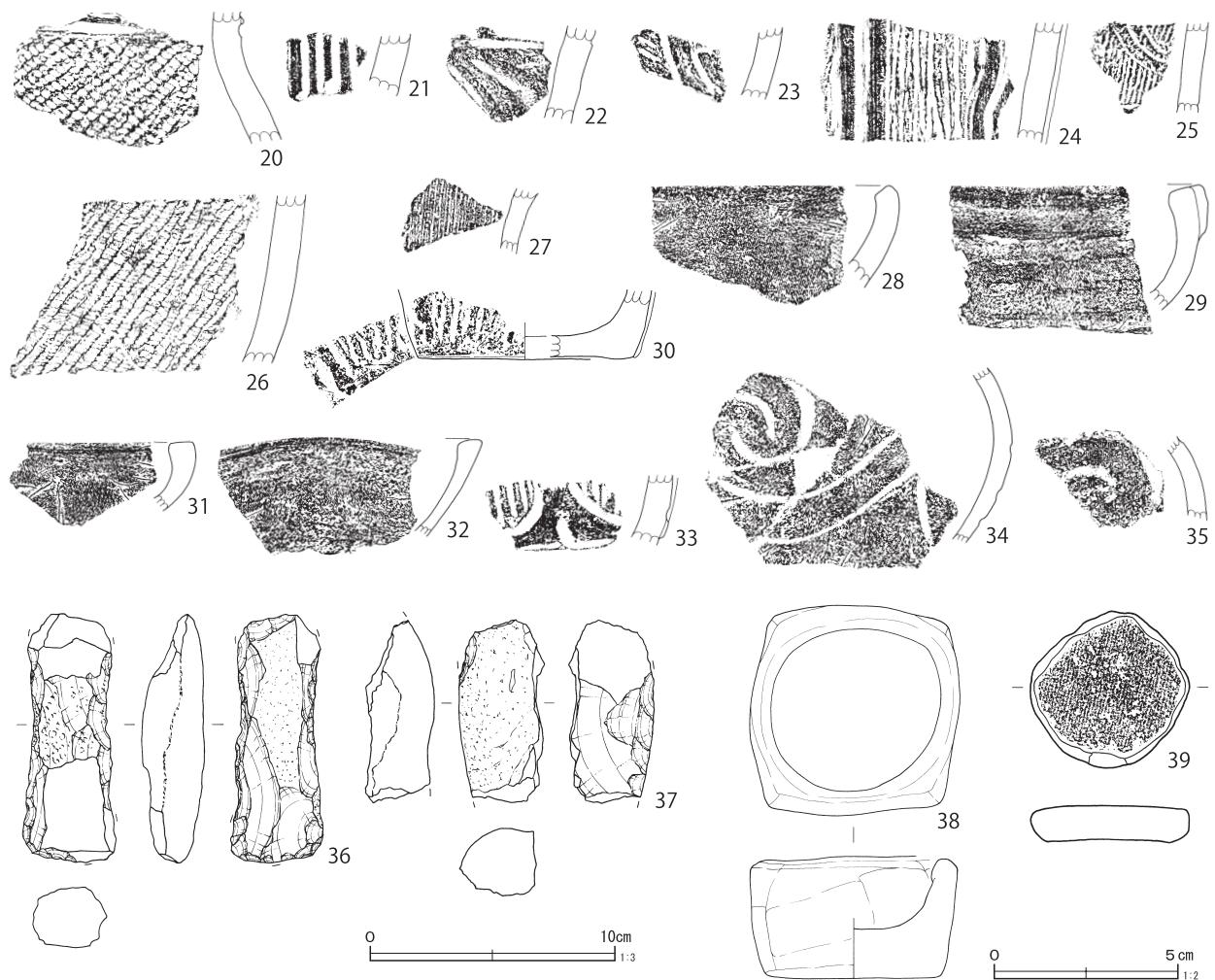
炉跡は石圍埋甕炉で、第245図2が埋設されていた。住居跡のほぼ中央で検出されたが、北側の石围いが欠損していた。炉跡の規模は、長径1.03m、短径0.81m、深さ0.22mである。

炉体土器から、本住居跡は加曾利E I式終末の構築と考えられる。

炉体土器の第245図2は、キャリパー形土器で、



第245図 第50号住居跡出土遺物（1）



第246図 第50号住居跡出土遺物（2）

頸部無文帯を幅広く設定するもので、上下に入り組む渦巻文を組み合わせるモチーフを描く。地文は単節R Lの縄文である。口径29.2cm、現存高16cmを測る。第245図2は口縁部の文様が1と類似するが、頸部無文帯の幅が狭く、地文に撚糸文Lを施文する。推定口径45.5cm、現存高19.2cmを測る。

3・4は勝坂系土器で、5～35は加曾利E系土器である。

5～19、24、30、33は頸部無文帯を持つ加曾利E系のキャリパー形土器であり、5～12、33が口縁部破片、13～19、24が胴部破片、30が底部破片である。口縁部は2本隆帯で渦巻文や区画文を連結するモチーフを描き、胴部には13～18、24、30のように隆帯の懸垂文や、19のように沈線懸垂文

を垂下する。縄文施文は全て単節R Lで、18は多条縄文である。撚糸文はLである。

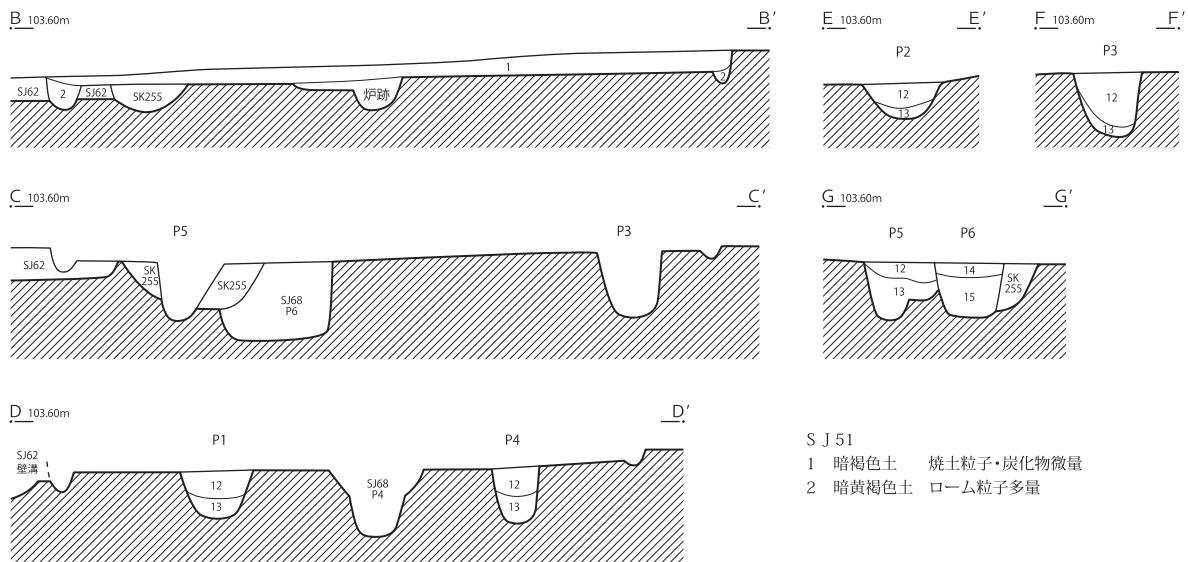
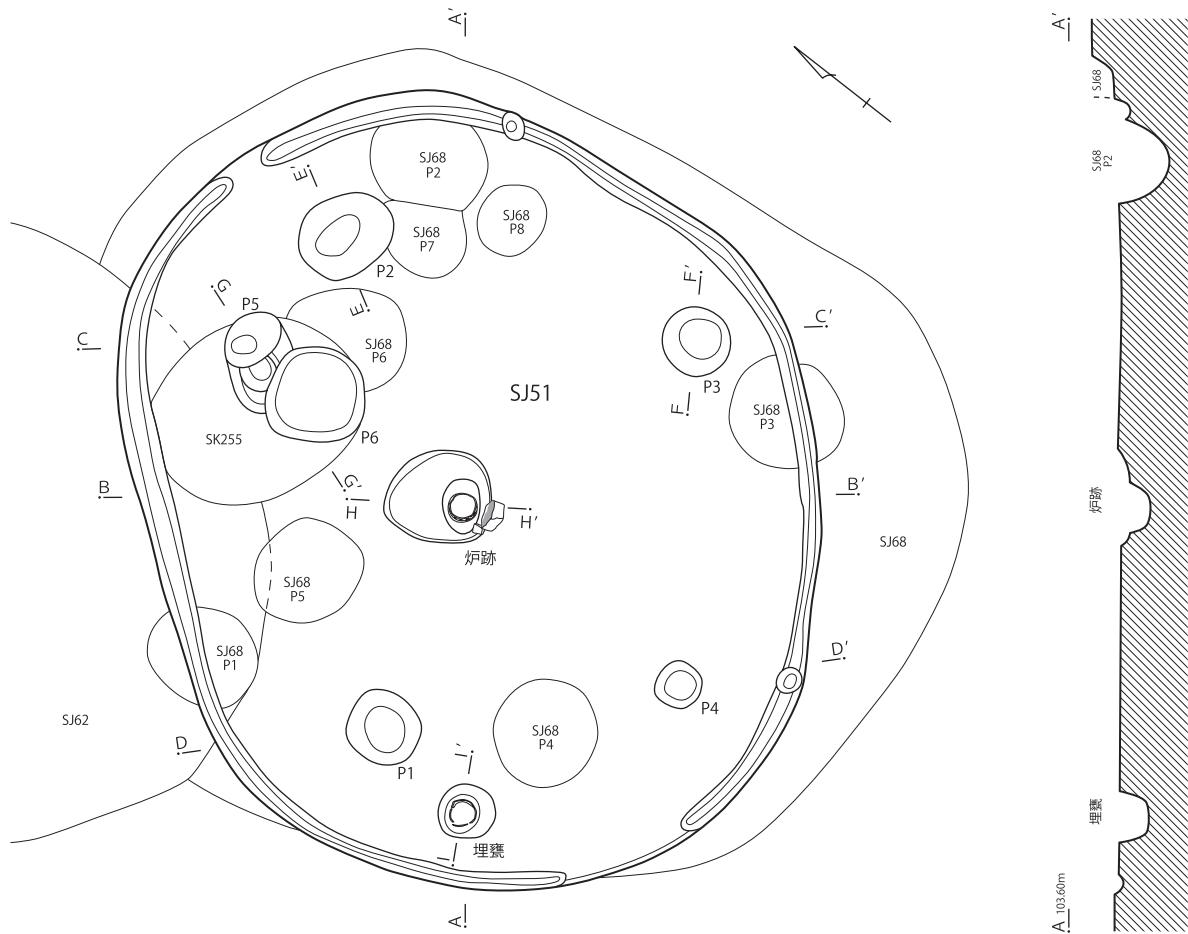
20～23は沈線文で文様を描く土器群で、25は3本沈線で弧線文を描く連弧文土器と思われる。26は多条のR Lの縄文、27は条線文を施文する。

28～32は無文の、34・35は有文の浅鉢形土器で、いずれも体部が内湾する器形である。34・35は同一個体と思われ、2本沈線で渦巻文を連結するモチーフを描く。

石器は36・37の短冊形打製石斧が2点出土した。

38は口縁が円形で、底部が方形状のミニチュア土器である。口径5.6cm、器高3.4cmを測る。

39は土器片を利用した土製円盤で、径4.2cmを測る。

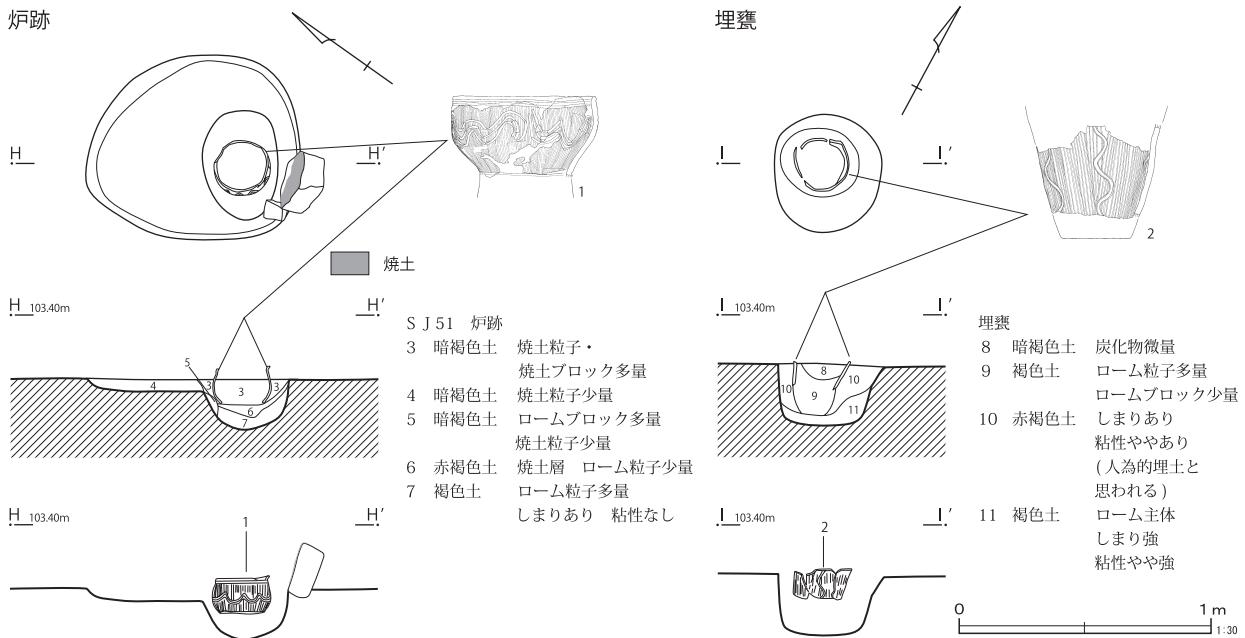


ピット
 12 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
 13 暗黄褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物微量
 14 褐色土 ロームブロック多量 しまりあり 粘性ややあり
 15 暗褐色土 炭化物少量 しまりあり 粘性やや強

S J 51
 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物微量
 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量

0 2 m 1:60

第247図 第51号住居跡(1)



第248図 第51号住居跡（2）

第50表 第51号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.46	0.41	0.33	P 3	0.55	0.53	0.52	P 5	0.78	0.46	0.44
P 2	0.76	0.62	0.27	P 4	0.36	0.35	0.40	P 6	0.78	0.76	0.43

第51号住居跡（第247・248図）

O・P-7グリッドに位置する。重複する住居跡は、第62号住居跡と第68号住居跡の2軒である。第62号住居跡については、本住居跡が覆土を掘り込んでいることや、出土遺物からも本住居跡が新しい時期である。第68号住居跡については遺物の出土はないが、本住居跡が第68号住居跡の覆土を掘り込んで作られていることから、本住居跡が新しい時期である。住居跡で重複する第255号土壙の覆土を、P 5が掘り込んでおり、本住居跡が新しい時期である。平面形は残存している壁溝の形状から橢円形で、炉跡と埋甕を基準とした主軸方位は、N-52°-Eをとる。規模は長径6.25m、短径5.32m、深さ0.20mを測る。壁に沿って検出された壁溝は浅く、そのため途中2個所ほど途切れている部分がある。壁溝の最大幅0.28m、深さ0.18mである。

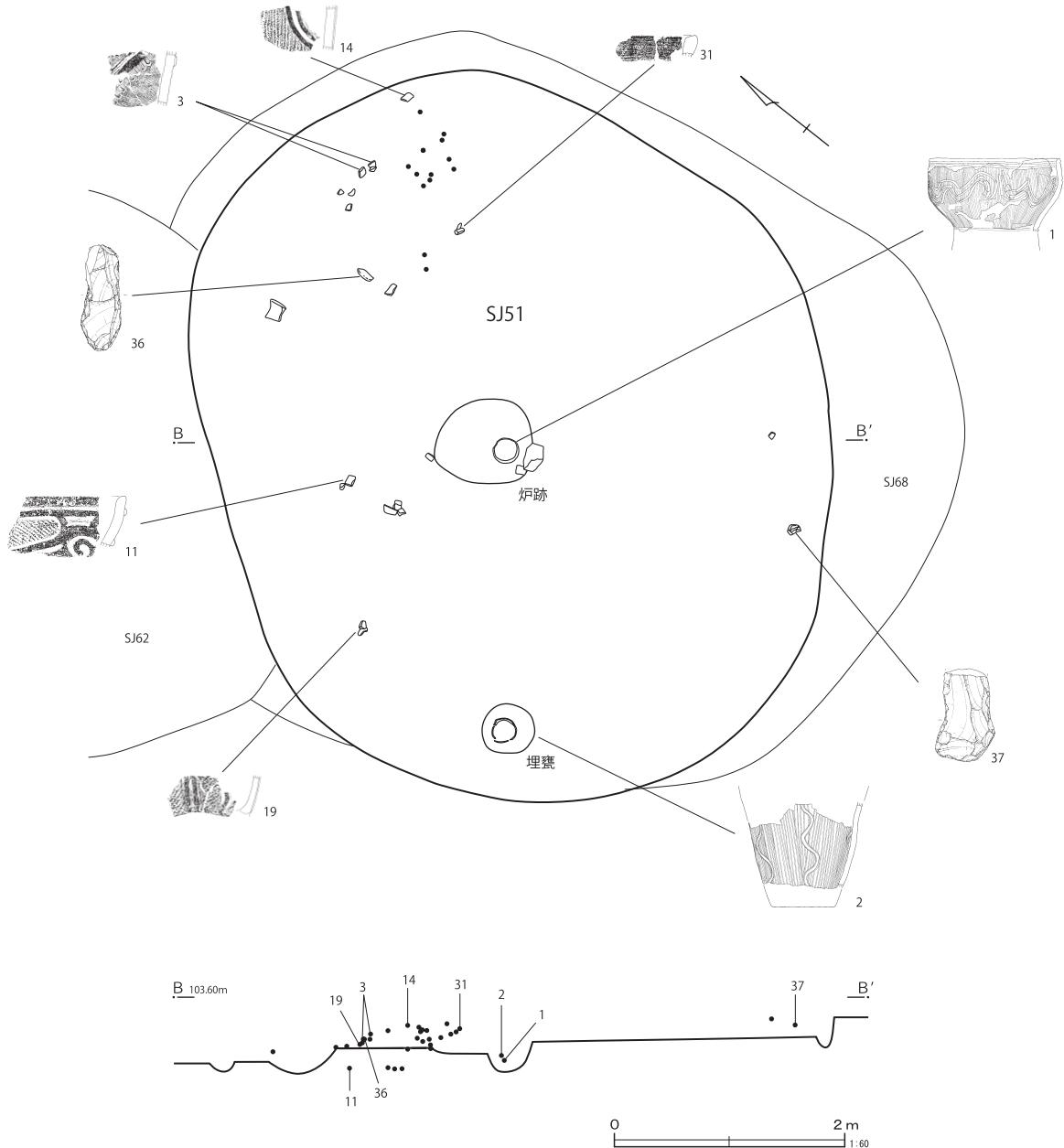
柱穴は6本が検出された。そのうち、P 1～P 5の5本が、主柱穴であると考えられる。土層か

らは柱穴の痕跡を認ることはできなかった。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡の南側に炉体土器（第250図1）を埋設している。北側はごく浅く掘り込まれている。また、炉石も一部残存していることから（第248図）、石囲埋甕炉であったと考えられる。炉体土器は口縁部を使用しており、胴部から底部は欠損している。規模は、長径0.86m、短径0.73m、深さは深い部分で0.07m、炉体土器が埋設する部分が0.20mである。

埋甕は1基が検出された。出入り口部に設置されたと考えられる。深鉢形土器の胴部（第250図2）が埋設されていた。埋甕の規模は、長径0.46m、短径0.42m、深さ0.24mである。

第250図1は炉体土器として使用された連弧文系の深鉢形土器である。頸部で大きく括れる器形であるが、胴部から底部は欠損している。口唇部下には2本1組の沈線文を巡らし、頸部にも沈線文を巡らせ、胴部と区画している。口縁部には3本1組の沈線で連弧文を施文するが、文様は最初



第249図 第51号住居跡遺物出土状況

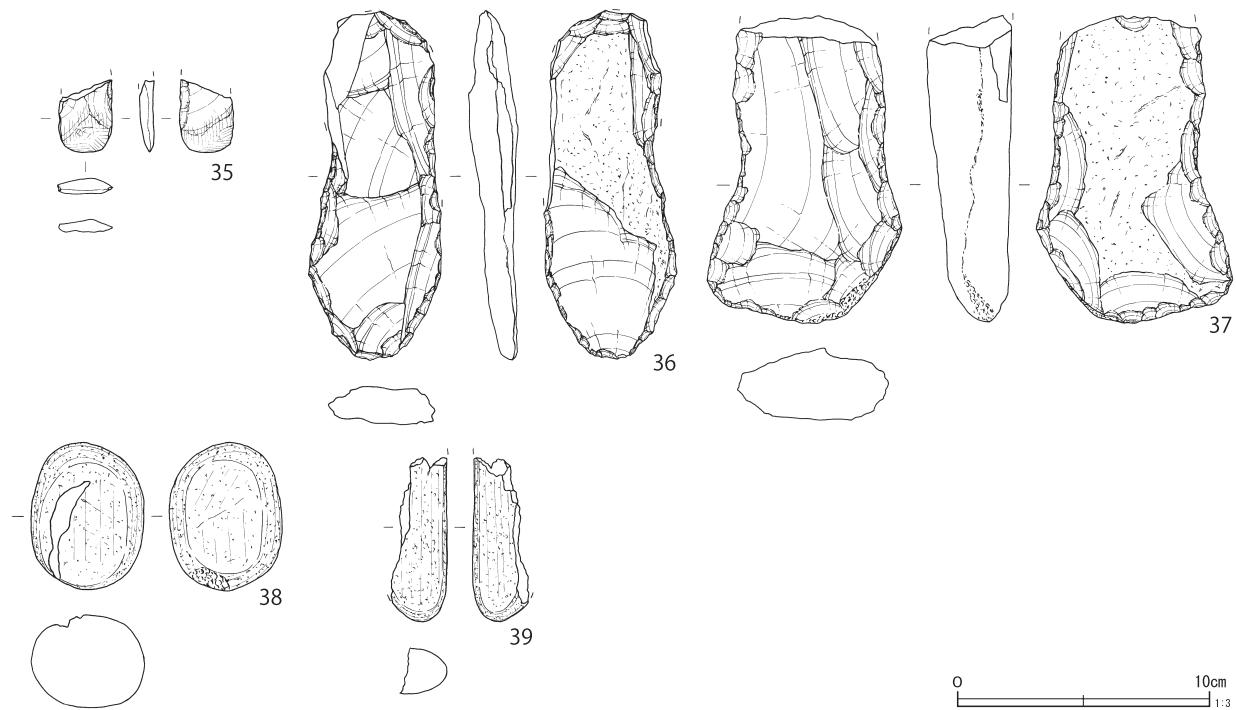
と最後を連結させず、端部を3本沈線文が閉じる様に施文している。また一箇所のみ、弧文の弧底部から1本の沈線文を頸部に向けて、垂下させている。推定口径は22.5cmである。第250図2は埋甕に使用された深鉢形土器の胴部である。地文が条線となる、曾利系土器である。胴部には、蛇行懸垂文を施文している。

第250図3～34は出土した土器である。

3～9は勝坂系の深鉢形土器である。3は隆帯の片側に、半截竹管による平行沈線文を施文する。隆帯の片側と、沈線脇には爪形文を施文し、蓮華文を爪形文に沿わしている。地文として、単節RLの縄文を横方向に施文している。4・5は刻みを施す隆帯脇に沈線文を沿わせている。6は半截竹管による平行沈線文で文様を施文している。7は燃糸文Lを地文として施文している。8・9は



第250図 第51号住居跡出土遺物（1）



第251図 第51号住居跡出土遺物（2）

無文の口縁部の破片である。

10～20は加曾利E系のキャリパ一形の深鉢形土器の破片である。10～13は口縁部の破片で、隆帯で渦巻文などを施文している。10は撚糸文L、11・12は単節R Lの縄文を横方向に施文している。14～19は胴部の破片で、隆帯による懸垂文を施文している。地文として、14～18は撚糸文Lを、19は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。20は地文が撚糸文Lで縦方向に施文している。

22・23、30は曾利系の深鉢形土器の胴部の破片である。22・23は刺突を加える隆帯を胴部に貼付している。地文は条線である。

24～26は連弧文系土器の破片である。24は口唇下に2本の沈線を巡らせ、沈線間に交互刺突を行っている。器面の剥落が著しいため、地文は不明である。25は口唇下と胴部に3本1組の沈線を巡らせて区画するもので、残存部は連弧文を2本沈線で施文している。26は3本1組の沈線で連弧文を施している。地文は櫛歯状の条線である。

27は地文である撚糸文Lを縦方向に施文してい

る。21、28、31は無文の口縁部である。

29、32は浅鉢形土器の破片である。

33は有孔鍔付土器の鍔部分の破片である。

34は無文の底部で、推定底径は10cmである。

第251図35～39は出土した石器である。35は小型の磨製石斧の破片である。36・37は打製石斧である。片方の側縁にのみ、抉りを入れており、刃部は偏刃となっている。38・39は磨石である。38は橢円形の礫を使用するもので、側縁の一部に敲打痕が残存している。

住居跡の時期は、炉体土器から加曾利E II式期と考えられる。

第53号住居跡（第252～267図）

N・O-7グリッドに位置する。重複する第45号住居跡の、北側の一部を壊して構築されている。遺物の時期からも、第45住居跡より時期が新しい。平面形は円形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-12°-Wをとる。規模は長径4.38m、短径4.27m、深さ0.15mを測る。

住居跡内には、壁に沿って壁溝が巡り、その内側にも 1 条、壁溝が検出された。内側の壁溝は、壁際の壁溝によって途切れる部分がある。2 条の壁溝から、住居跡は最低でも 1 回は建て替えが行われたと考えられる。外側の壁溝の最大幅 0.36 m、深さ 0.30m である。内側の壁溝の最大幅 0.24 m、深さ 0.20m である。

柱穴は 25 本が検出された。そのうち P 11、P 14・P 15、P 17・P 18 が主柱穴と考えられる。壁溝が 2 条検出されたことや、主柱穴と同一規模の柱穴が複数検出されていることから、柱穴からも住居跡の建て替えがなされたと考えられる。

炉跡は中央よりやや北東側で検出された。1 回以上作り替えられ、第 255 図 4 は古い炉跡に伴うと考えられる。炉跡の中央には、第 256 図 8 が埋設されていた。埋設土器を囲むように第 255 図 2、第 262 図 117 が埋設され、その外側を礫が埋められたとされる。炉跡の規模は、長径 1.06m、短径 0.95m、深さ 0.23m である。

第 255～267 図は出土した遺物である。覆土内から多量の遺物が検出された（第 254 図）。床面から 14・15・16 の深鉢形土器が伏甕状に到立して出土した。炉体土器との時期差から、住居跡廃棄後に埋設されたと考えられる。

第 255 図 1 は勝坂系の円筒形の深鉢形土器である。口唇部は角頭状となり、やや外反する口縁部は無文である。偏平な隆帯を文様として貼付している。隆帯上に刻みはなく、頸部には隆帯で、2 本隆帯の J 字状 2 単位と、1 本隆帯の逆 J 字状 1 単位の 3 単位を施文している。J 字文の先端は、渦巻文を施文するものと、蛇行する隆帯を貼付して、J の曲線部分に接合させるものがある。J 字文の口縁部との接合部分には、1 本隆帯のものはそのまま、他は隆帯で U 字文を貼付するものと、渦巻文を貼付するものがある。J 字文間の 2 区画に、沈線文で文様を施している。J 字内には、それぞれ違う文様を沈線文で施している。胴部には

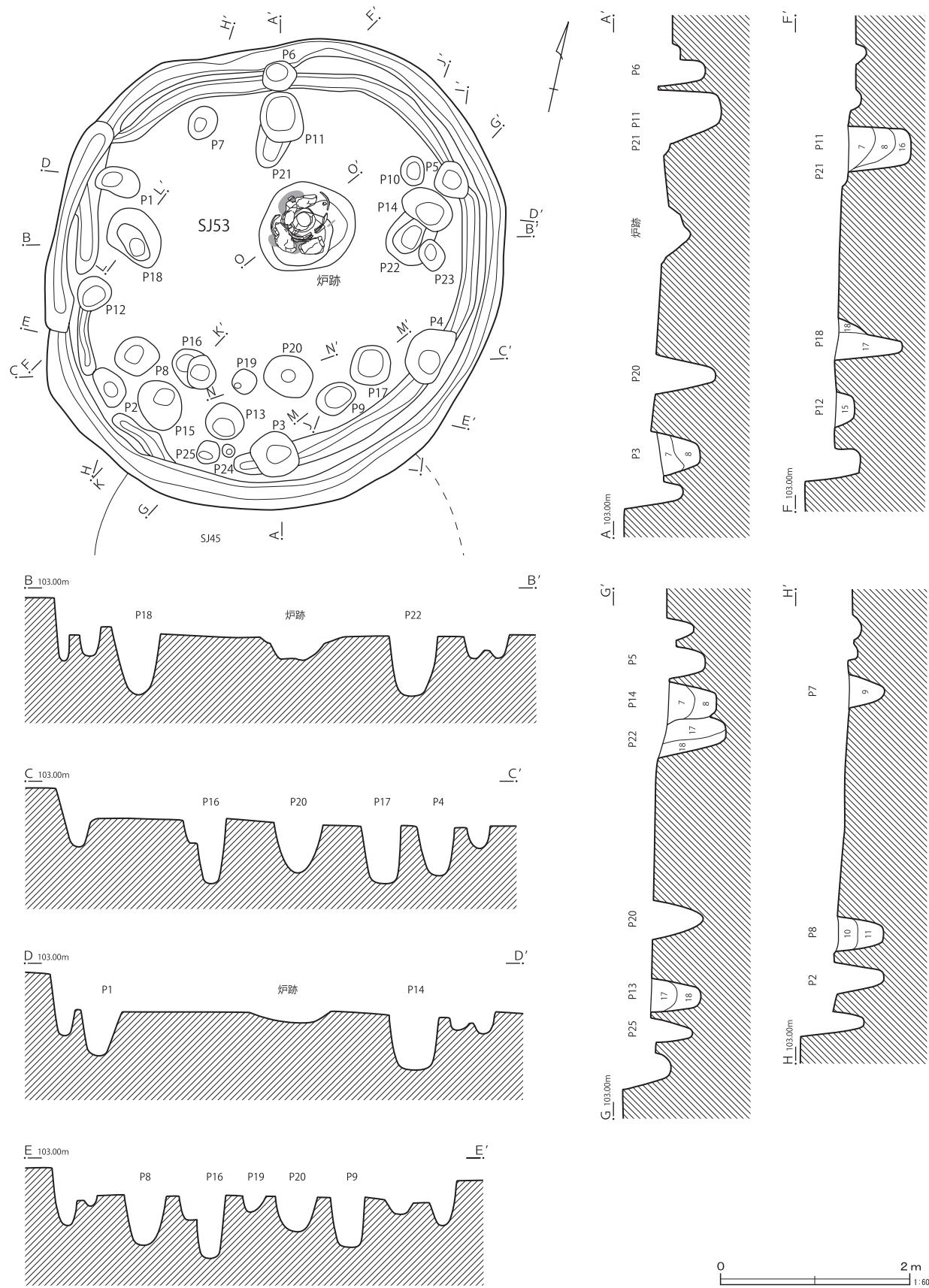
撚糸文 L が地文として施されている。口径 21.8cm である。

第 255 図 2、第 260 図 63・64 は炉体土器を囲うため、破片にして使用したもので、同一個体の破片である。勝坂系の円筒形の、深鉢形土器の胴部破片である。文様は偏平で幅広な隆帯を主体として施文している。63・64 に見られるように、刻みや刺突文が隆帯上ではなく脇に施文され、交互刺突を加える部分も認められる。

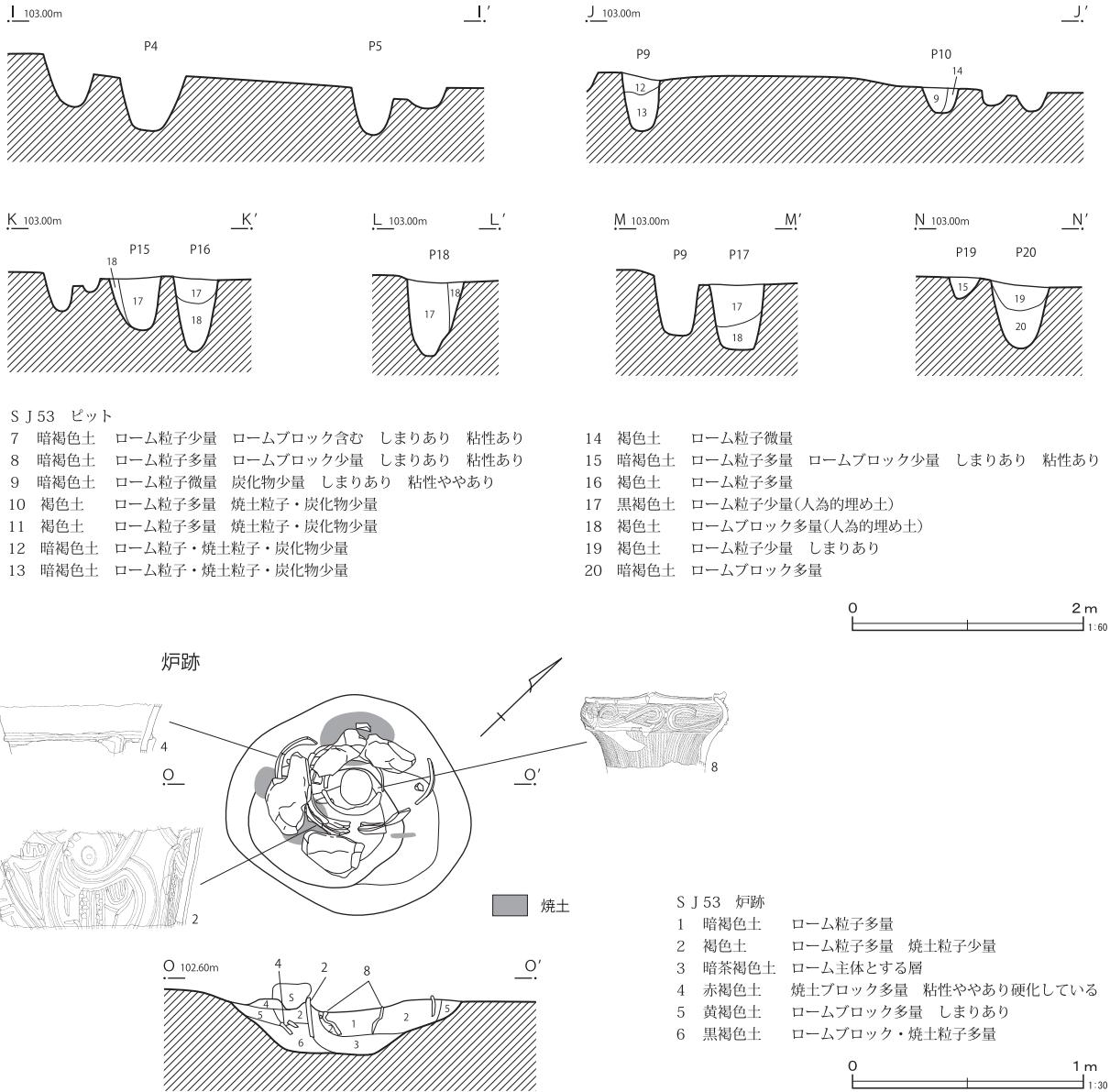
第 255 図 3 はキャリバー形の深鉢形土器の頸部から胴部の破片である。頸部に 2 本の隆帯を平行に施文して巡らし、その間に隆帯による波状文を施文している。胴部には、縦に垂下させた 2 本の隆帯間に波状文を施文している。胴部には、多条 R L の縄文を縦方向に施文している。

第 255 図 4 は炉体土器の囲いに使用された土器片で、深鉢形土器の無文の頸部の破片である。胴部とは、隆帯を巡らし区画している。

第 256 図 5～9、第 257 図 10～12、第 258 図 13、15 は加曾利 E 系のキャリバー形の深鉢形土器である。5 は口縁部から胴部が残存するもので、口縁部には大把手と小把手が貼付されている。正面の大把手の中央には、円孔が穿たれている。口縁部には、S 字文が 4 単位施文され、S 字文間には中央に、円文を貼付する十字状の隆帯を施文して、S 字文を連結させている。地文は撚糸文 L で、口縁部は横方向に、胴部は縦方向に施文している。推定される口径は 31cm である。6 は口縁部から頸部が残存するもので、口縁部には連弧状に隆帯を施文し、弧頂部には渦巻文を施している。また一箇所文様を途切れさせて、剣先状に隆帯を貼付している。地文は撚糸文 L で、縦方向に施文している。頸部は無文である。口径は 14.9cm である。7 は口縁部から胴部が残存する。強く内湾する口縁部には、S 字文を 4 単位施文すると考えられ、S 字文間には隆帯を貼付して連結させている。地文は撚糸文 L で、口縁部は縦方向に、胴部は縦方向に



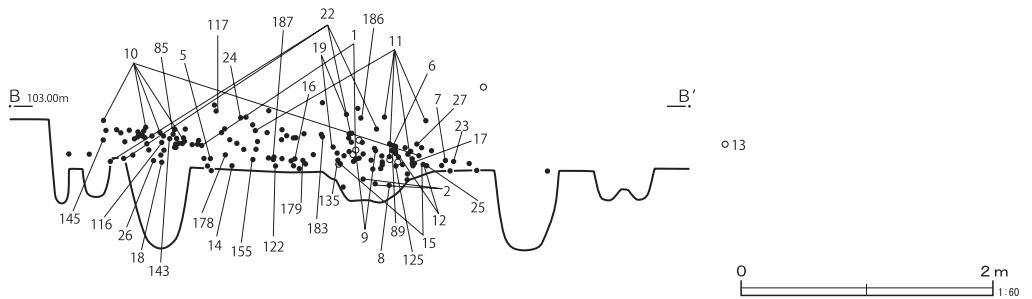
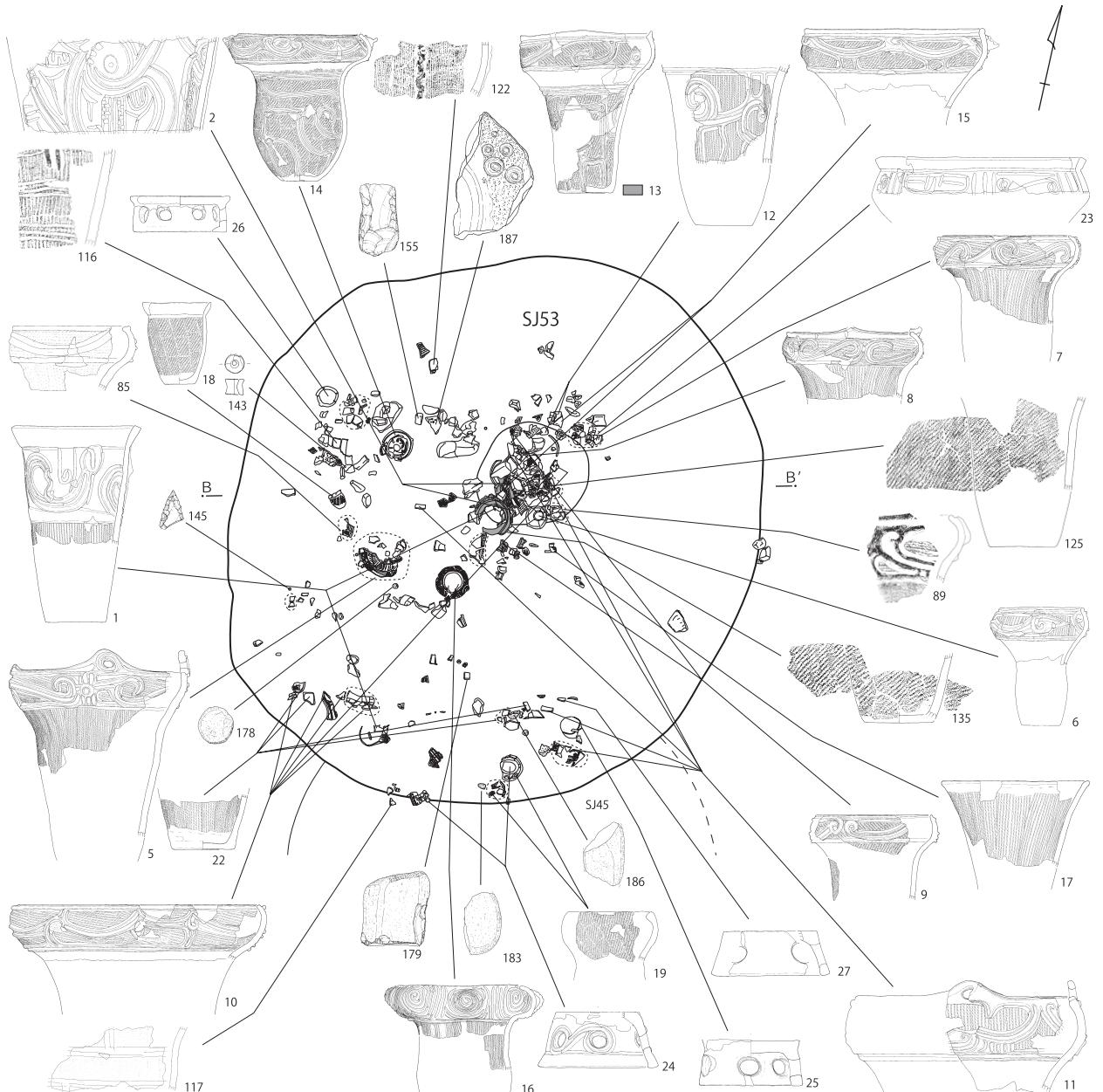
第252図 第53号住居跡（1）



第253図 第53号住居跡(2)

第51表 第53号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.46	0.30	0.48	P 10	0.31	0.25	0.19	P 18	0.68	0.49	0.64
P 2	0.44	0.28	0.50	P 11	0.54	0.43	0.66	P 19	0.26	0.26	0.17
P 3	0.48	0.44	0.52	P 12	0.37	0.33	0.20	P 20	0.50	0.44	0.60
P 4	0.58	0.40	0.54	P 13	0.40	0.38	0.48	P 21	0.30	0.28	0.06
P 5	0.37	0.35	0.39	P 14	0.56	0.37	0.53	P 22	0.47	0.36	0.61
P 6	0.33	0.30	0.47	P 15	0.54	0.44	0.45	P 23	0.31	0.26	0.28
P 7	0.36	0.29	0.37	P 16	0.49	0.38	0.64	P 24	0.15	0.12	0.27
P 8	0.40	0.39	0.49	P 17	0.43	0.42	0.56	P 25	0.23	0.23	0.38
P 9	0.41	0.32	0.52	—	—	—	—	—	—	—	—



第254図 第53号住居跡遺物出土状況

施文している。口径は22cmである。8は炉体土器として埋設されていたもので、胴下半部から底部は欠損している。口縁の正面は小突起状となっている。口縁部にはS字文を施文する。S字文の先端部には、余分な隆帯が貼付されている。口縁部には5単位が施文されるが、残りの4単位のうち2単位は、S字文の中央に隆帯を縦方向に施文して分断し、1単位は反対側の渦巻部分を施文せず、もう1単位は渦巻文を対向させて施文している。1単位はS字の途中に縦方向の隆帯を胴部側にのみ施文している。最後の1単位は、縦方向の隆帯部分で文様を止めていると推測される。地文は撚糸文Lで、口縁部は横方向に、胴部は縦方向に施文している。口径は22cmである。9は口縁部から胴部の土器で、口縁部には隆帯で端部が渦巻く文様を施文している。地文は多条R Lの縄文で、口縁部は横、胴部は縦方向に施文している。推定口径は21cmである。10・11は口縁部の破片である。11は口縁部の突起下に橋状把手が貼付される。地文は撚糸文Lで、10は横方向に、11は縦方向に施文される。10の推定口径は44.5cm、11は40cmである。12は胴部の破片で、渦巻文等を施文する文様が2単位施文されると考えられ、2単位間には狭い縦位の区画が残り、12では蛇行沈線文を施文している。13は緩やかな波状口縁で、垂直気味に立ち上がる口縁部は狭い無文部を持っている。口縁部には隆帯でS字文などを施し、文様の端部を剣先状に施文している。頸部には無文帶を持つ。胴部には隆帯で文様を施文し、クランク文や渦巻文を組み合わせた文様が2単位施文される。文様の端部や変化点には、剣先文を貼付している。口径22.6cm、底径9.5cmである。15は口縁部から無文の頸部で、連弧状に隆帯を貼付し、弧頂部は舌状にせり出させて、渦巻文を施文している。弧底部には頸部と区画する隆帯に向かい、2本の隆帯を垂下させている。口径32.5cmである。

第258図14は、大木系のキャリパー形深鉢形土

器で、狭い口縁部は強く内湾させ、胴下半に丸みを持たせている。口縁部には、大小の連弧状の文様を交互に4単位ずつ施文し、弧頂部の連結部分には渦巻文を舌状に貼付し、そのすぐ脇にも渦巻文を施文している。連弧状の文様は一箇所に、弧底部分の隆帯を剣先状にせり上げ口縁部と連結させて、小単位を作り出している。頸部には狭い無文部を持ち、胴部には3本1組の沈線文を垂下させ、広い区画が2単位と、狭い区画が2単位に分割させている。大単位内には、頸部区画から下ろす沈線から横方向に向きを変え、端部に大渦巻文を施文し、残りの空間には渦巻文の形状に合わせたクランク状の文様を施文している。文様の屈曲部は、剣先状となり、真ん中の沈線は小渦巻文を施文している。狭い小単位内には文様は施文されていない。口径22.4cm、底径6.4cmである。

第259図16は曾利系の深鉢形土器で、口縁部から胴上部が残存している。口縁部には、沈線による重弧文が施文される。地文は撚糸文Lである。口径20.2cmである。

第259図17～19は地文のみが施文される深鉢形土器である。17はバケツ状に開く器形で、撚糸文Lを施文する。推定口径26.4cmである。18は無文の口縁部を持つ小型の土器で、地文は多条R Lの縄文で、縦方向に施文する。口径12.2cm、底径5.5cmである。19はキャリパー形の口縁部で、多条R Lの縄文を条が縦方向になるよう斜め方向に施文する。推定口径15cmである。

第259図20～22は撚糸文Lを地文とする底部である。20の底径12cm、21は7.1cm、22は11.2cmである。

第259図23は浅鉢形土器の口縁から肩部で、肩部には沈線によって文様を施文している。

第259図24～27は器台である。脚部の開き方や、端部の作りなど、形状は同一のものはないが、器面に円孔を穿つことは共通している。24は円孔周囲に隆帯を施文し、円孔間を結んでいる。

第260図28～38は角押し状の結節沈線文などを

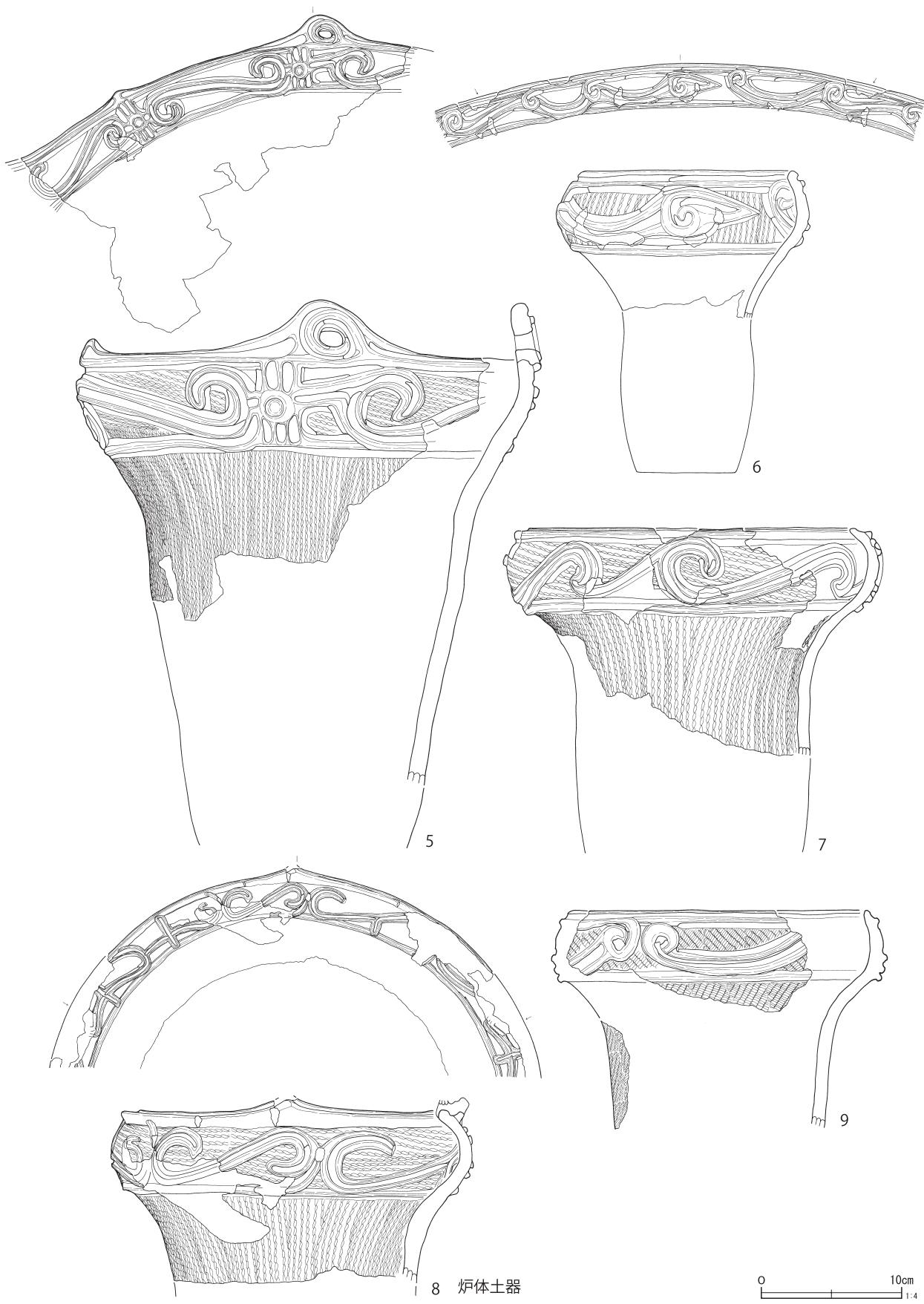


第255図 第53号住居跡出土遺物（1）

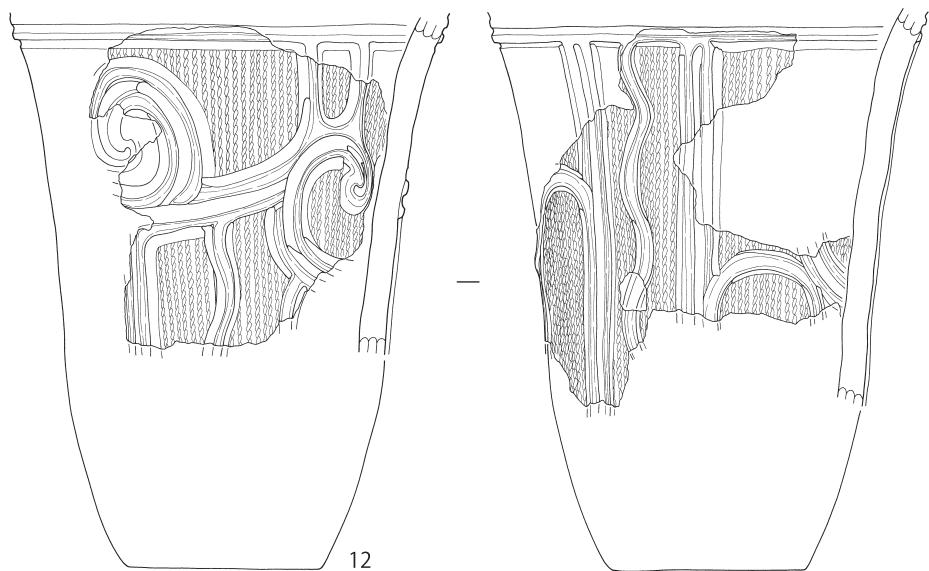
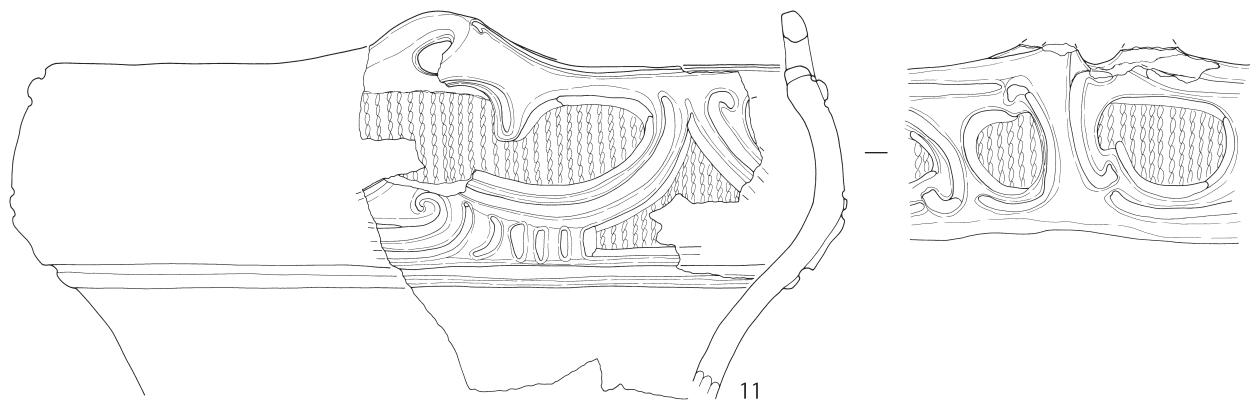
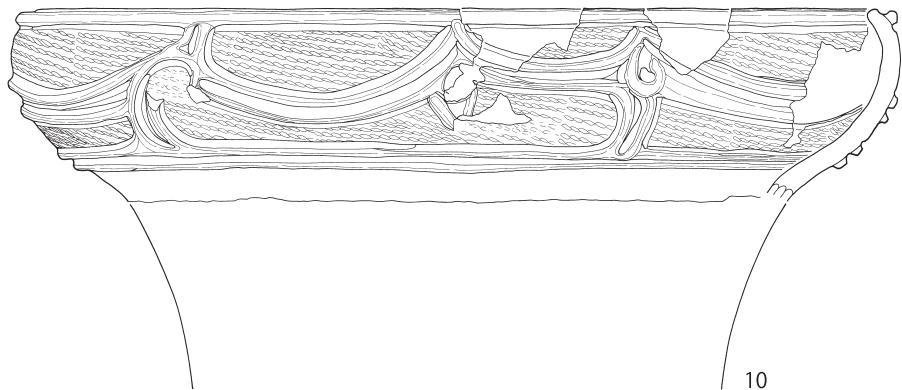
施文する土器で、阿玉台系の土器を含む。28~30は結節沈線文を施文し、31~35は櫛歯状の条線を施文する。36・37は爪形文を横方向に1列施文している。38は輪積み部分を押圧してひだ状にしている。

第260図39~48、52は隆帯脇にキャタピラ状爪形文と、爪形文に沿って小波状沈線文や、三角押文状のペン先状結節沈線文を施文する、勝坂系土器である。

第260図49~51は隆帯脇に沈線を施文し、沈線



第256図 第53号住居跡出土遺物（2）



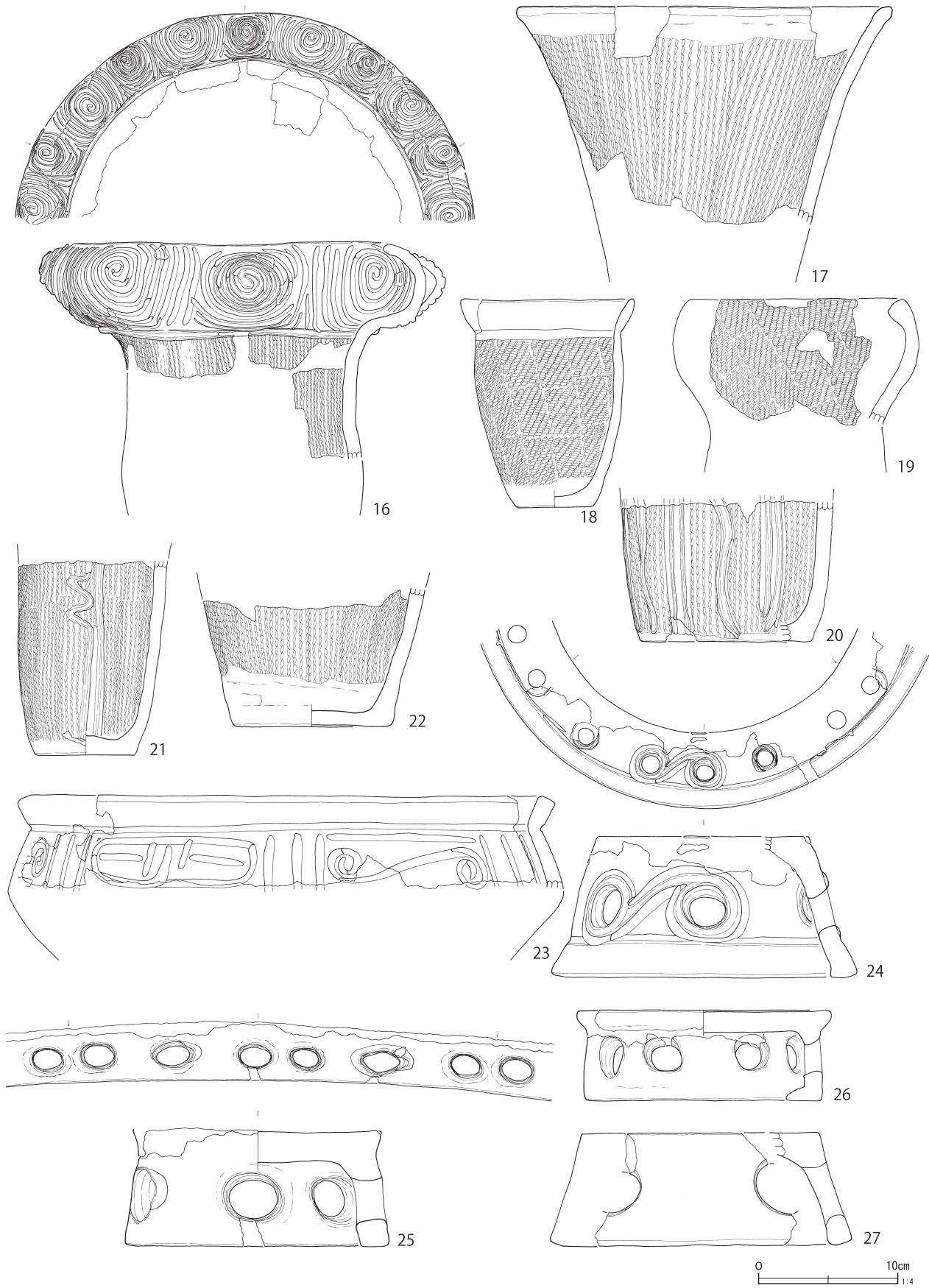
0 10cm
1:4

第257図 第53号住居跡出土遺物（3）

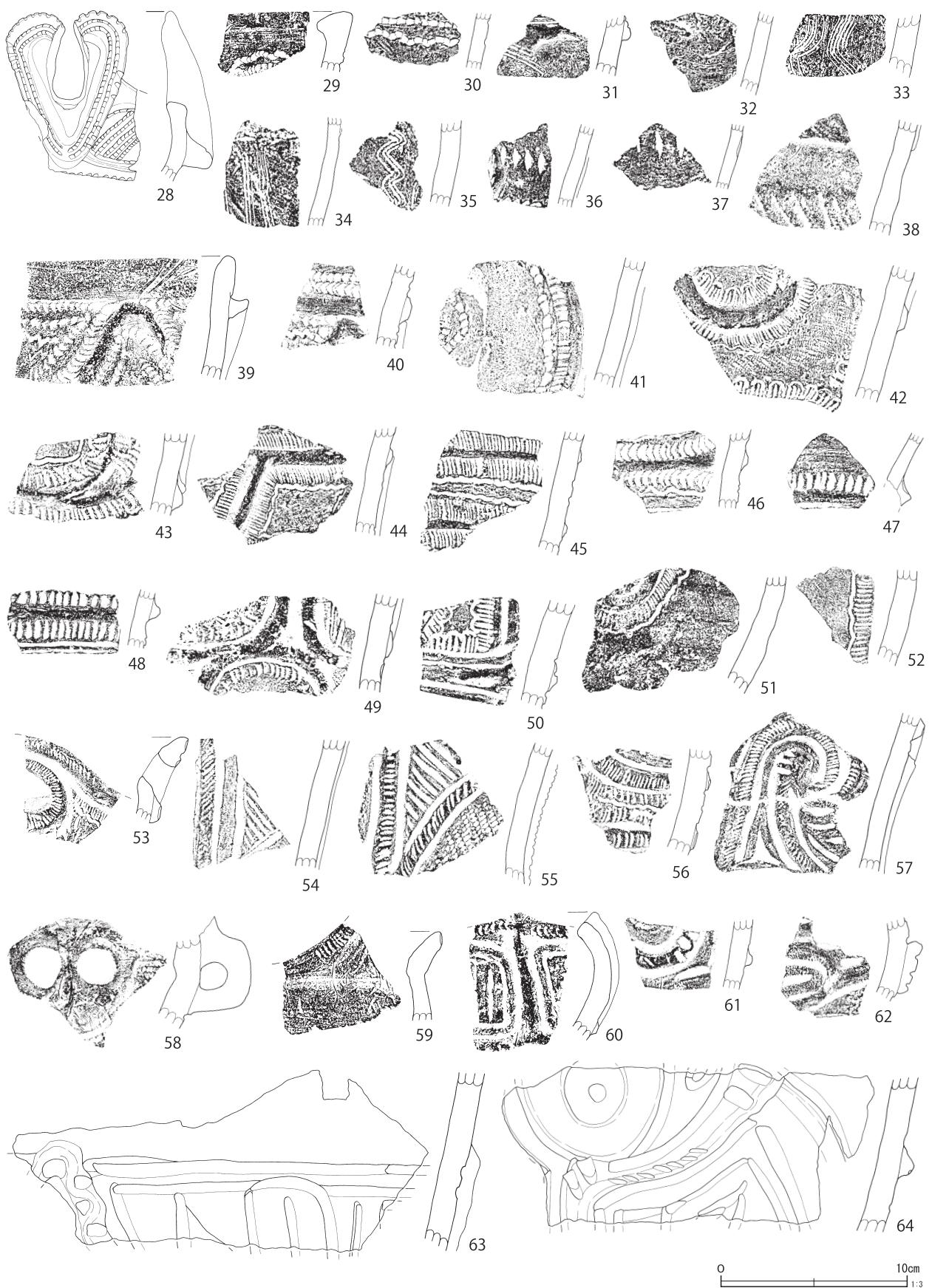


0 10cm 1:4

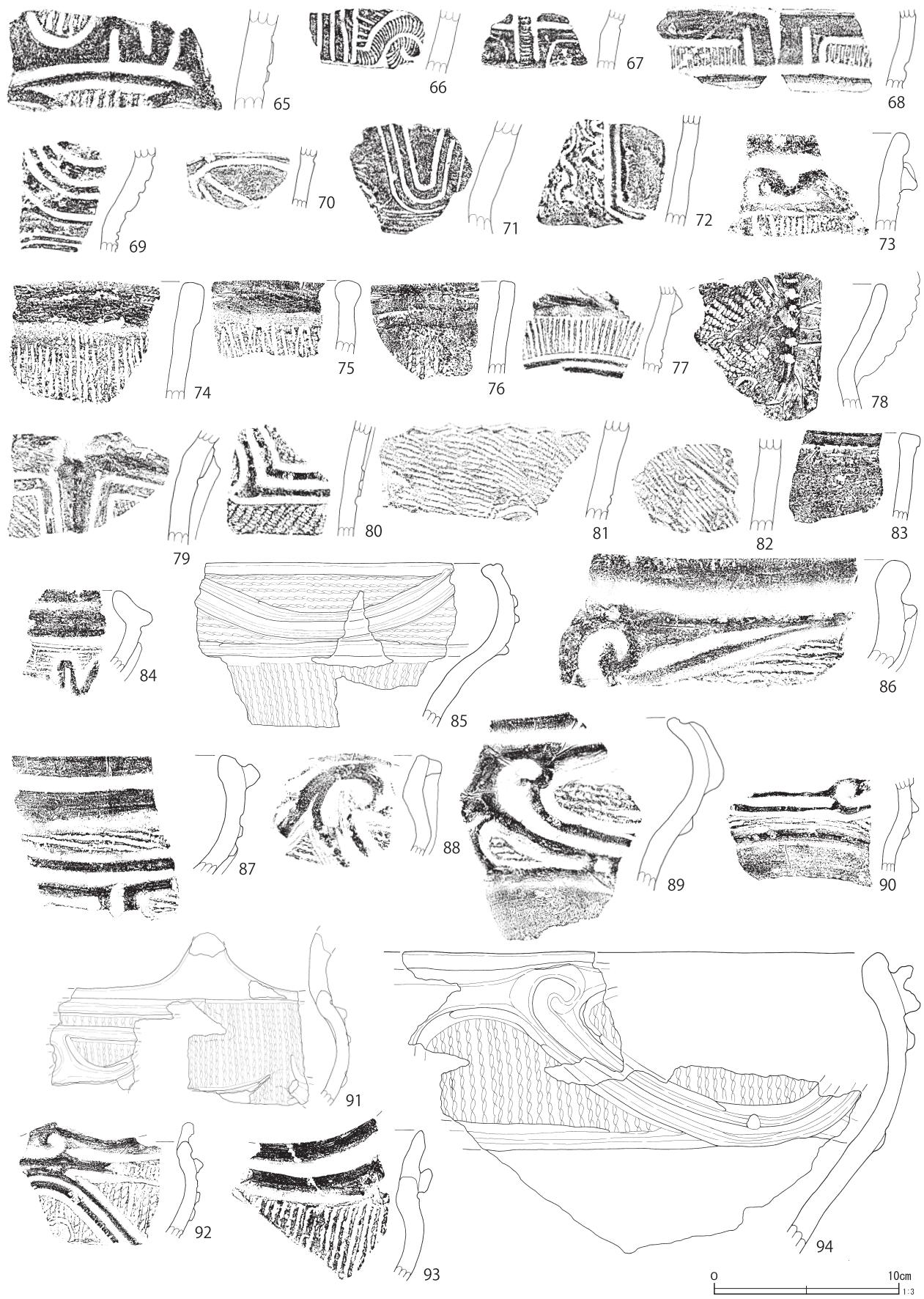
第258図 第53号住居跡出土遺物(4)



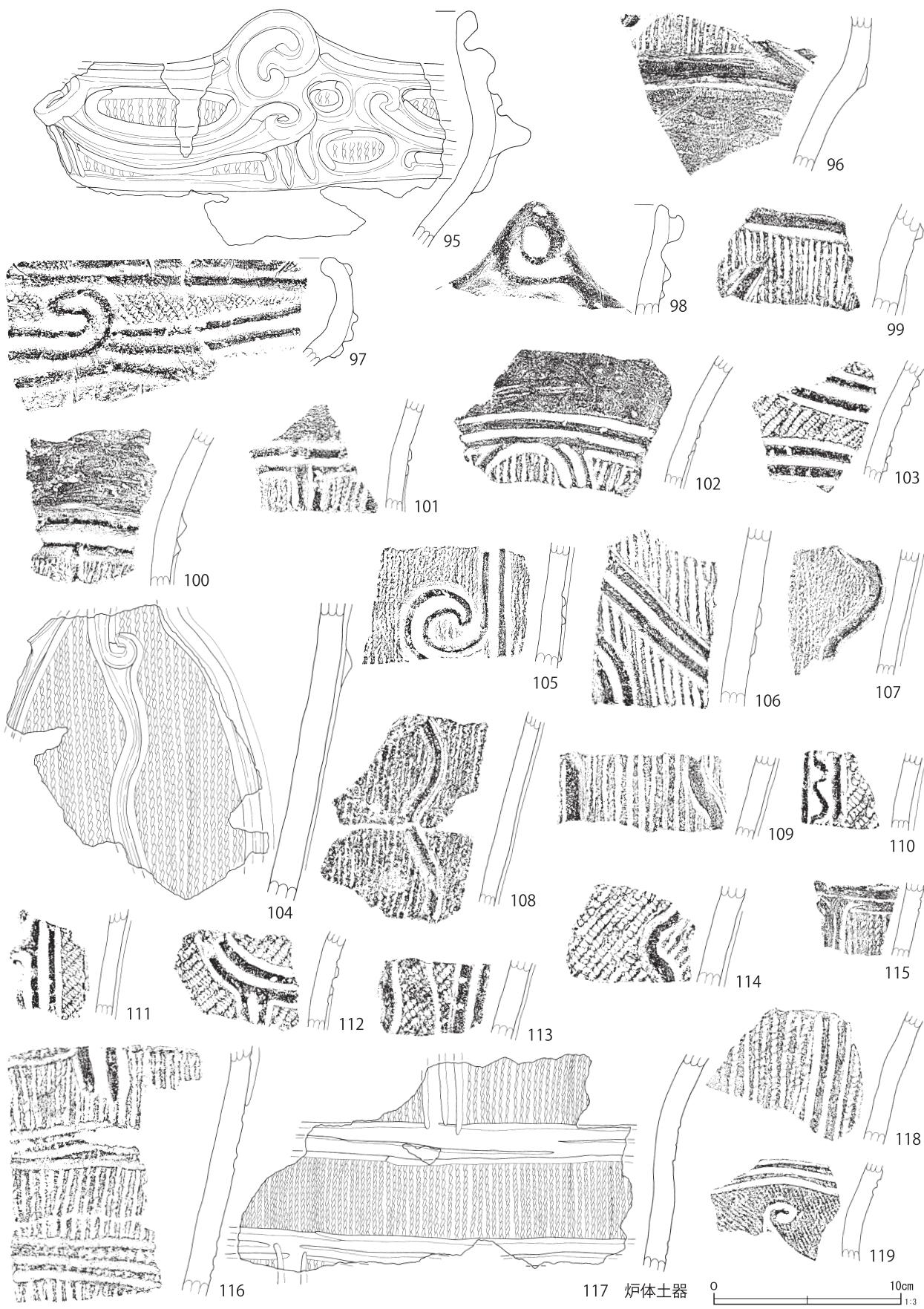
第259図 第53号住居跡出土遺物（5）



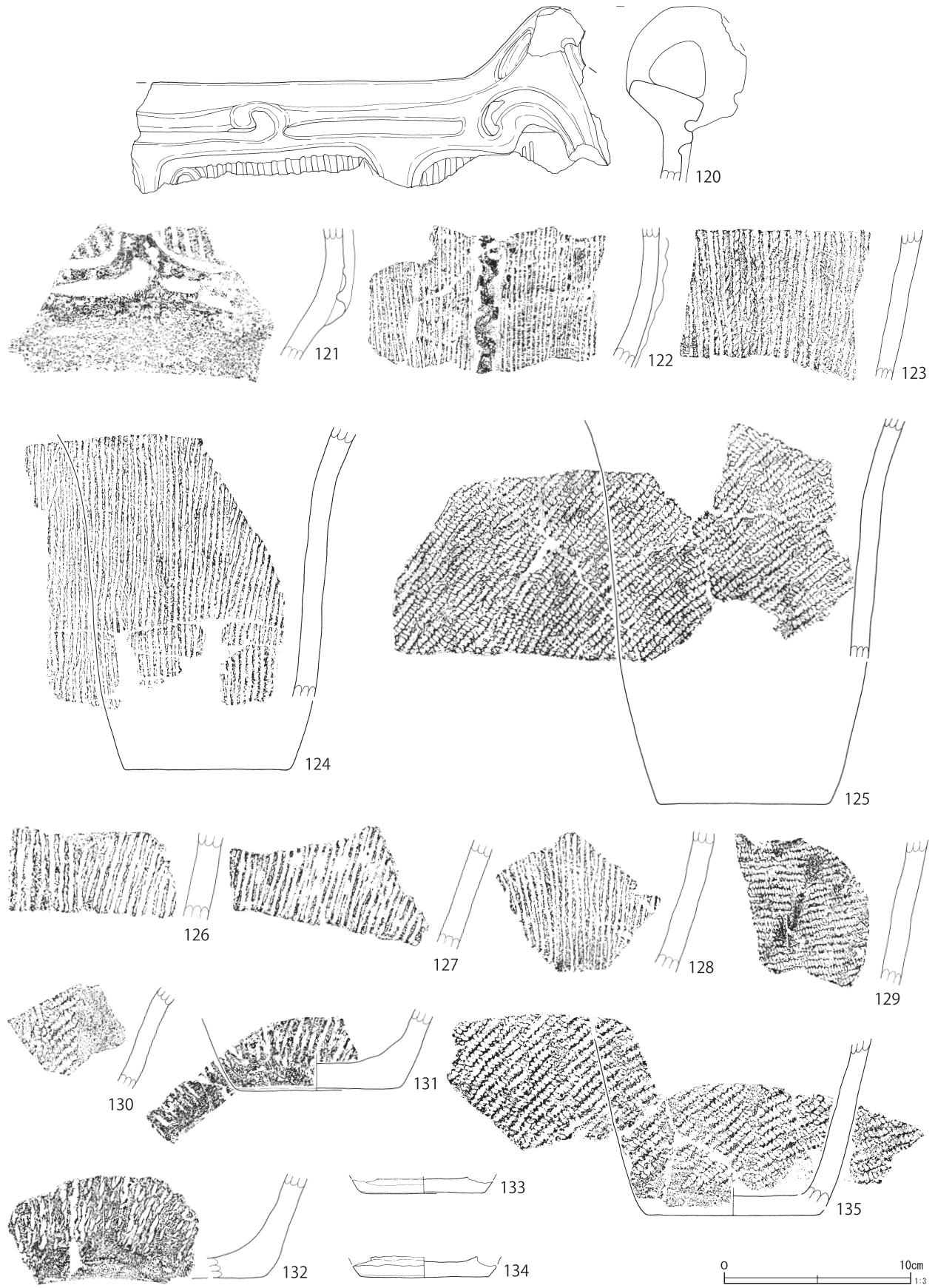
第 260 図 第 53 号住居跡出土遺物 (6)



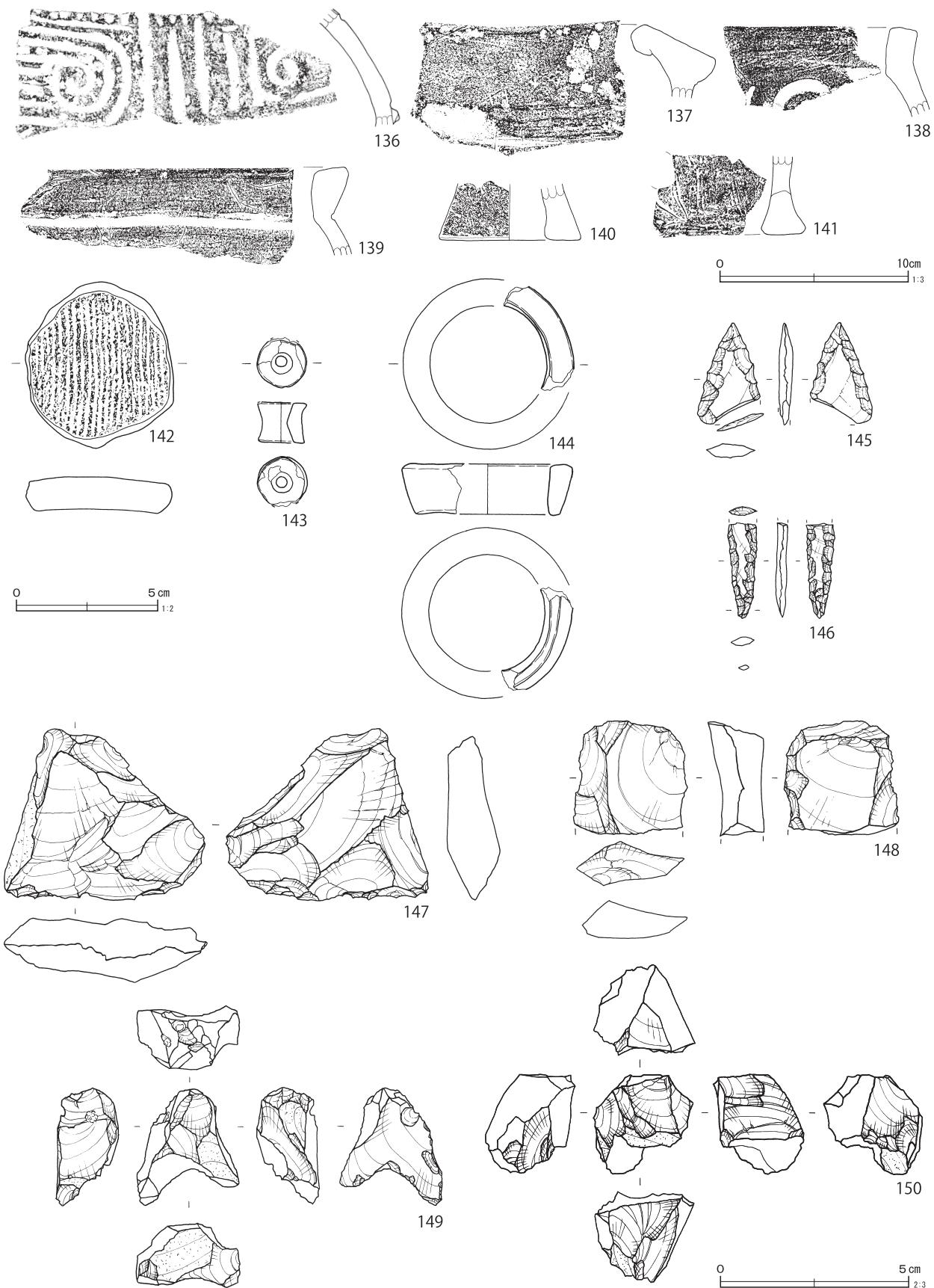
第 261 図 第 53 号住居跡出土遺物 (7)



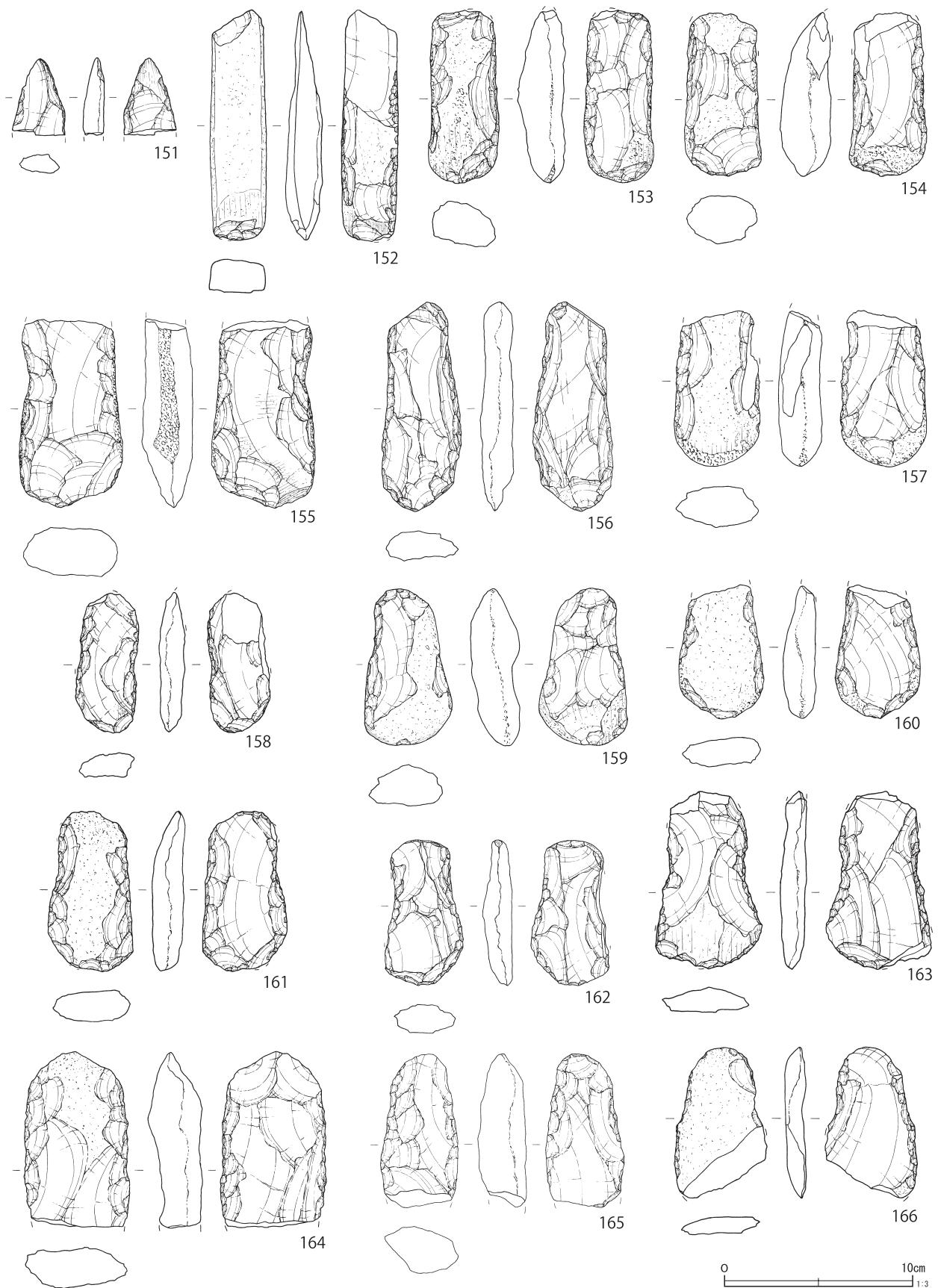
第262図 第53号住居跡出土遺物（8）



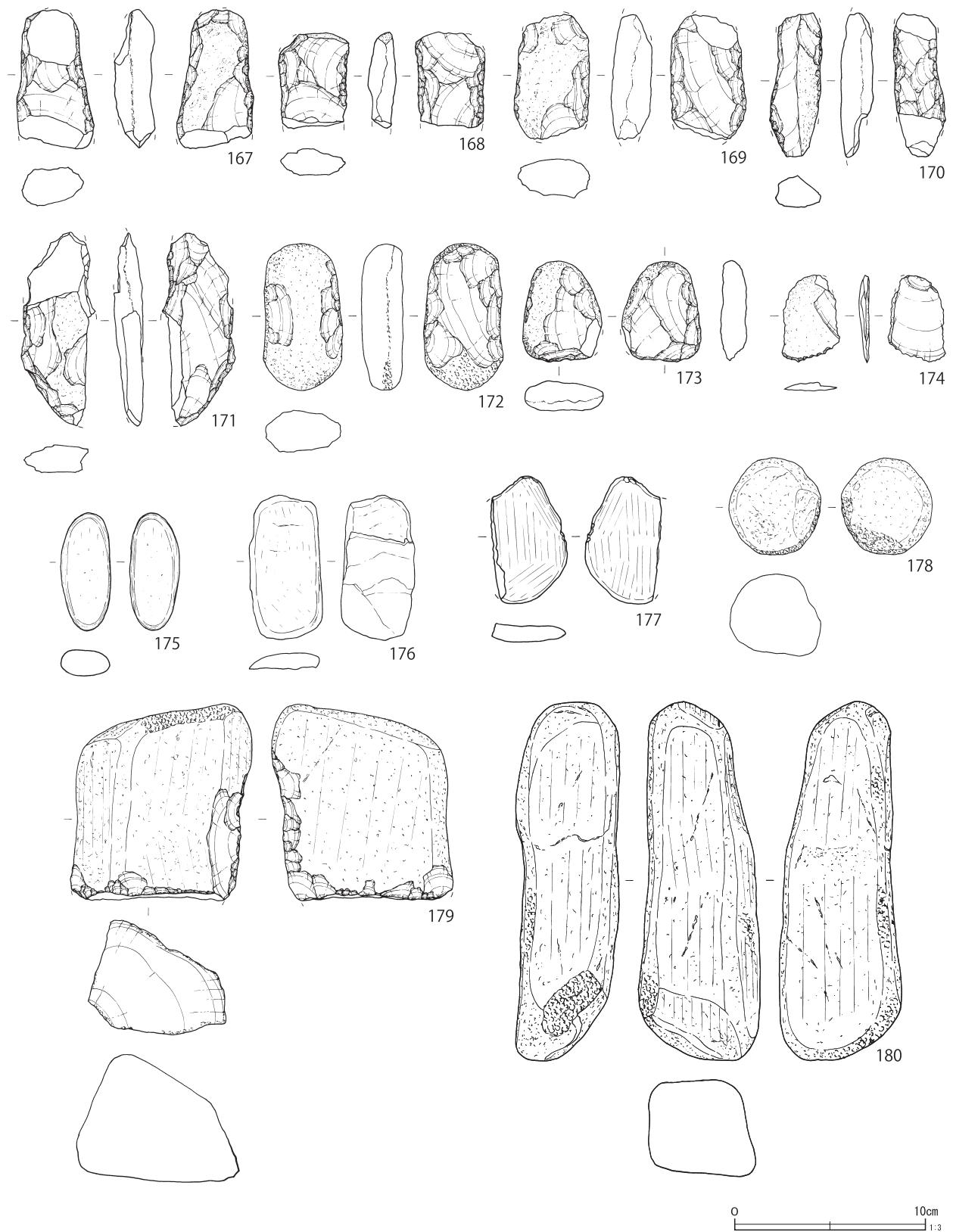
第 263 図 第 53 号住居跡出土遺物 (9)



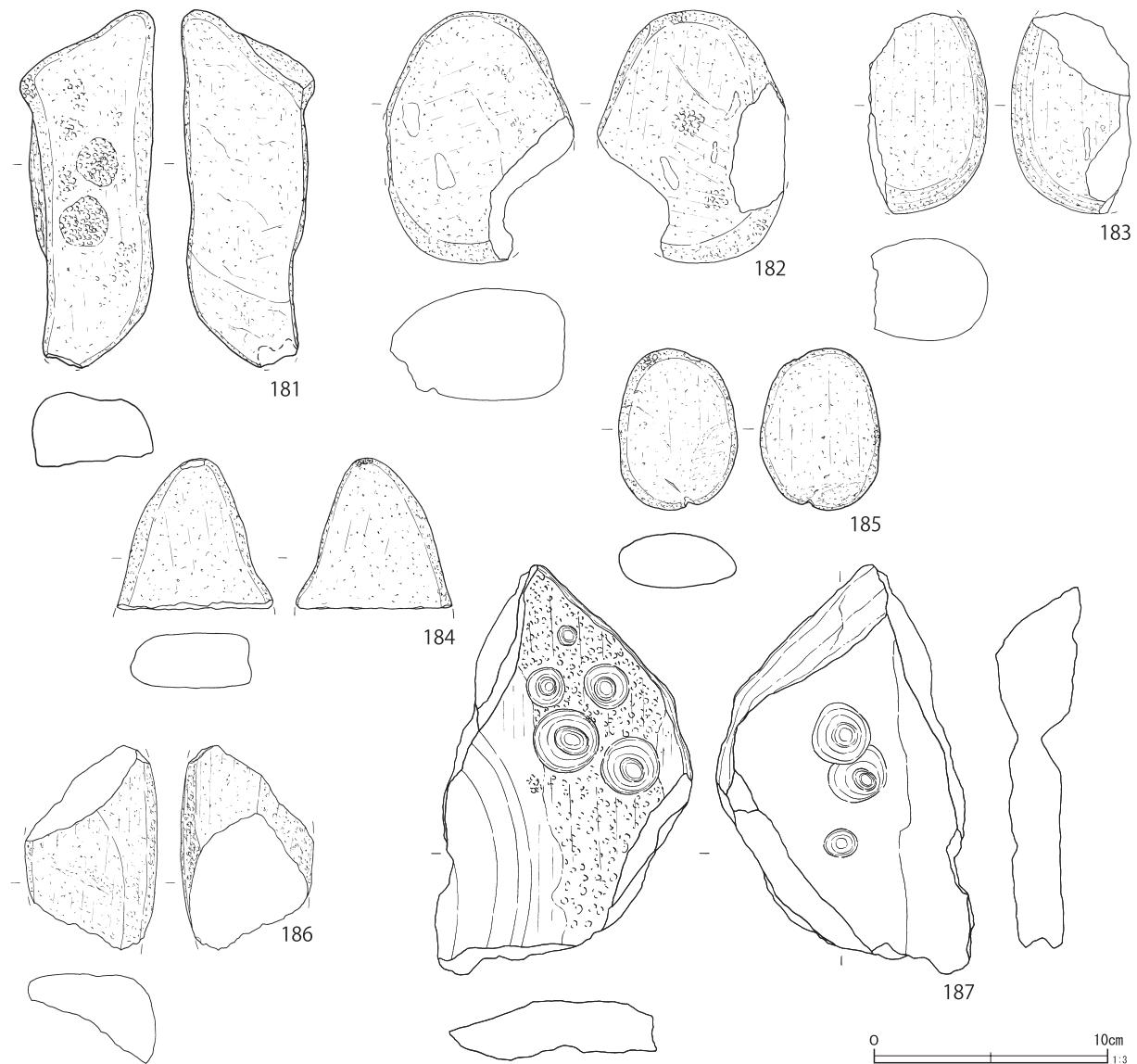
第264図 第53号住居跡出土遺物(10)



第 265 図 第 53 号住居跡出土遺物 (11)



第266図 第53号住居跡出土遺物（12）



第267図 第53号住居跡出土遺物（13）

に沿ってキャタピラ状爪形文を施文する勝坂系土器である。

第260図53～64、第261図65～83は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の深鉢形土器の破片である。53～57は隆帯上に刻みを持つものである。54～56は隆帯で区画文を施文し、その内側に沈線文や、刻みなどを施文する。55の地文は、単節R Lの縞文である。57は隆帯が文様の主体となっている。58・59は把手部分で、58は

眼鏡状把手を貼付している。60～65は隆帯上に刻みが少なくなり、刺突文や交互刺突文などを施文する。区画内の文様も簡素化している。65は偏平な隆帯を施文するもので、地文は撲糸文Lである。66～72は沈線文で文様を施文するもので、66・67は沈線間に刻みを施している。68は区画内に、条線状の沈線を充填している。73～76は地文が文様の主体となるもので、75は条線を、他は撲糸文Lを地文としている。73は口縁部に交互刺突を持つ隆帯を施文する、大木系の土器である。77は隆帯

に長い刻みを施すもので、頸部には平行沈線文を施し、胴部と区画している。地文は撚糸文Lである。78～82は地文に縄文を施す土器で、78は耳たぶ状に貼付する隆帯端部に、単節R L縄文の原体を押捺して、刻みの効果を出している。79・80は円筒形の土器で地文として79は無節R、80は多条R Lの縄文である。81・82は、蓮華文や小波状沈線文が施文される。83は無文の口縁部である。

第261図84～94第262図95～119は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。84～98は口縁部の破片である。84は1本隆帯だが、他は沈線を施文することによって2本となる隆帯で、S字文や渦巻文や剣先文を施文している。頸部が残存する破片である85、89・90、94～96のうち、85以外は頸部に無文帶を持っている。地文は97が単節R Lの縄文を横方向に施文する以外は、すべて撚糸文Lが用いられている。撚糸文は、84～90は横方向に、91～96は縦方向に施文されている。99～103は頸部と胴部を区画する隆帯が残る破片である。100～102は頸部に無文帶を持っている。地文として99、101・102は撚糸文Lを、100は撚糸文Rを、103は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。104～114は胴部の破片で、隆帯によって文様が施文されている。懸垂文の他、渦巻文などが施文されている。地文として、104～109は撚糸文L、110、113・114は単節R Lの縄文を、111・112は多条R Lの縄文を縦方向に施文している。115～119は文様が隆帯ではなく沈線文で施文される土器である。ただし116は貼付文状の隆帯が器面に残存している。116・117は沈線文で、胴部を多段に分割しているもので、117は炉体土器の囲み部分に使用された土器である。地文として、116～118は撚糸文Lを、119は単節L Rの縄文を施文している。

第263図120～122は地文が条線となる曾利系の深鉢形土器の破片である。120は眼鏡状の橋状把

手を持つ口縁部である。

第263図123～135は、地文のみを施す深鉢形土器の破片で、123・124、126～128は撚糸文Lを、125は単節R Lの縄文を、129は多条R Lの縄文を斜め方向に施文している。130は結節縄文で、中期の古い時期の土器片の可能性がある。

第263図131～135は底部の破片である。

第264図136～139は浅鉢形土器の破片である。136は肩部に文様帶を持っている。

第264図140は台付鉢の台部分である。

第264図141は器台の円孔を持つ脚部である。

第264図142～144は土製品で、142は土製円盤である。143・144は耳飾で、器面に文様はないが、器面調整は丁寧である。

第264図145～150、第265図151～166、第266図167～180、第267図181～187は出土した石器である。住居跡内からは、100点を超える石器が検出されたが、打製石斧が占める割合が高い。145～150は小型石器で、145は石鏃で基部を欠損する。146は石錐で、基部を欠損している。147・148はスクレイパーである。149・150は石核で、器面には風化面が残存している。151は尖頭器の先端部分である。152は磨製石斧と考えられるが、再加工が施されている。153～172は打製石斧である。153～158は側縁を平行に作り出す短冊形で、159～163は刃部に最大幅を持つ撥形となる。164～171は基部や刃部を欠損している。172は刃部に調整は加えられておらず、未製品と考えられる。173はスクレイパーである。174は使用痕のある剥片である。175～177は砥石である。178～180は、敲石である。179は端部に敲打を加えるため、細かい剥離が残存している。181～186は磨石である。181は器面に敲打による浅い凹みが認められる。187は石皿の破片である。器面に漏斗状の凹みが複数残されている。

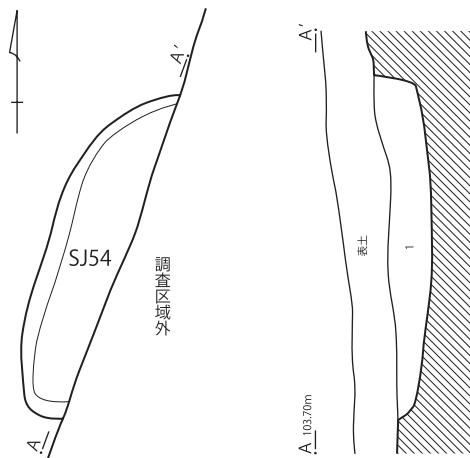
住居跡の時期は、炉跡に埋設された炉体土器から、加曾利E I式期である。

第54号住居跡（第268・269図）

Q-8 グリッドに位置する。平面形は不明である。住居跡のほとんどが調査区域外に存在しているため、柱穴、炉跡は検出されなかった。確認された範囲の規模は長径2.73m、短径0.71m、深さ0.31mを測る。

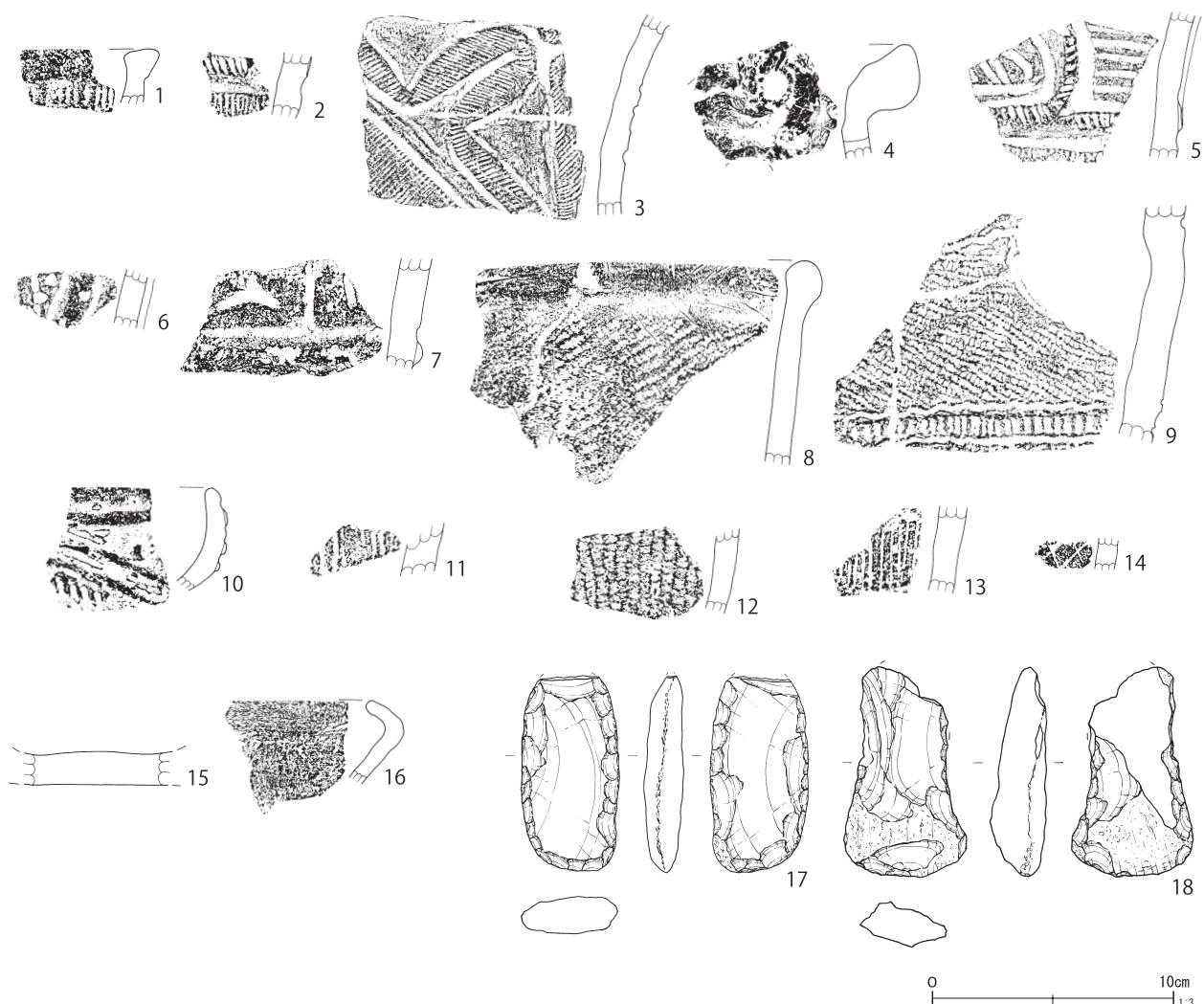
第269図1～18は、覆土内から検出された遺物である。1～16は出土土器、17・18は出土石器である。

1～9は勝坂系の深鉢形土器の破片である。1、9はキャタピラ状の爪形文を施文する土器である。1は肥厚する口縁部の破片である。9は胴部の破片で、爪形文脇には小波状沈線文を施文している。また、口縁部の文様にも、小波状沈線文が



SJ 54
1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物やや多い しまりあり 黏性弱い
0 2 m
1:60

第268図 第54号住居跡



第269図 第54号住居跡出土遺物

施文されている。地文として単節 R L の縄文を斜めから横方向に施文している。2～8は勝坂式終末から加曽利E式初頭の土器片である。2、5は隆帶上に刻みを施文する土器で、2は地文として撚糸文Lを施文している。3は円筒形深鉢土器の頸部文様帶の破片で、半浮彫状に施文された高い部分には条線状の刻みを細かく施文している。4は把手部分の破片で、波頂部下には円孔が穿たれている。6は隆帶上に刻みではなく、隆帶脇に刺突を加えている。7は隆帶に刻みや刺突も施されない土器で、文様帶には沈線で、三叉文などを施文している。8は地文のみを施文する口縁部の破片で、地文は単節 R L の縄文である。

10は加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器の口縁部破片である。地文は撚糸文Lである。

11～14は地文のみが残存している胴部の破片である。地文として、11は撚糸文Lを、12は多条R Lの縄文を、13は櫛歯状の条線を地文としている。14は細い沈線で、格子目状に施文しているものである。

15は底部の破片である。

16は浅鉢形土器の口縁部の破片である。

17・18は出土した打製石斧である。基部を欠損している。18は刃部に擦痕が認められる。

住居跡の時期は、出土遺物から勝坂式終末と考えられる。

第56号住居跡（第270～277図）

O・P-6・7グリッドに位置する。検出された床面は水平である。東壁の一部が、第62号住居跡の壁を壊し重複している。そのため、本住居跡が新しいと考えられるが、出土遺物を比較すると、遺物からも本住居跡が新しいことがわかる。平面形は隅丸方形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-0°をとる。規模は長径5.69m、短径5.12m、深さ0.23mである。

住居跡の壁の内側からは、壁溝が検出された。

壁溝は壁に沿って検出されるが、部分的に壁の内側に入っており、最終的な壁ではなく古い壁溝であることがわかる。また土層断面からは、最終的に溝を埋めて一番新しい住居跡を使用していることがわかる。以上から、住居跡が1回以上建て替えられたと考えられる。壁溝は北側で途切れる部分がある。壁溝の最大幅0.40m、深さ0.13mである。掘り込みは浅い。

柱穴は15本が検出された。そのうちP 1、P 3、P 7、P 12の5本が主柱穴と考えられる。P 1内には第273図7が、柱穴の中に落ち込むように検出された。柱穴の途中に引っかかるような、横倒しの出土状況などから、埋甕ではないと判断した。柱穴は主柱穴周辺に複数が検出されており、壁溝と併せ、住居跡は建て替えが行われていたと考えられる。

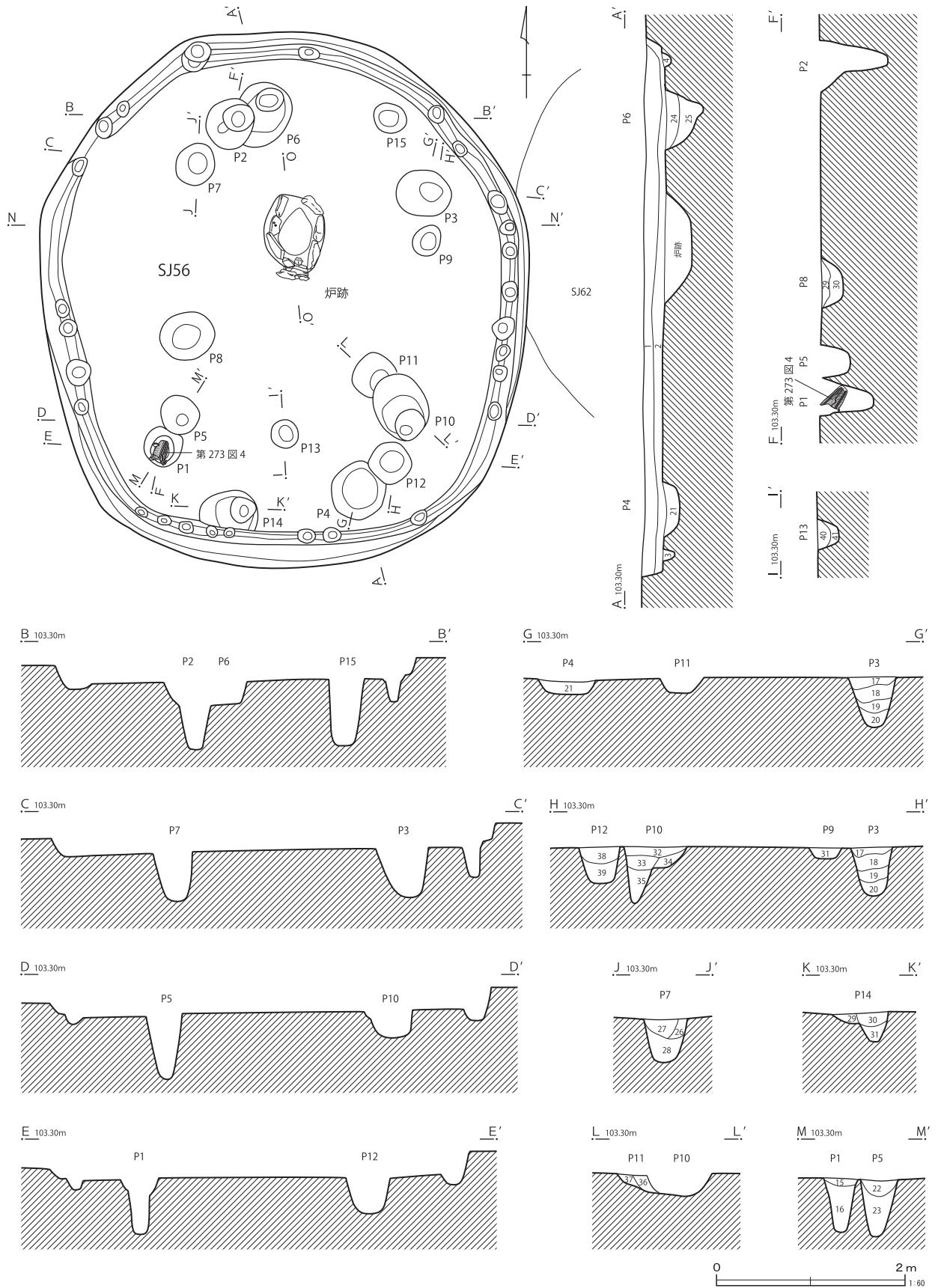
炉跡は中央よりやや北側で検出された。炉跡は礫や石皿片などを使用する石囲炉で、石囲いの平面形状が方形に近い炉跡である。また、炉跡の掘り方も検出された。住居跡が、複数回建て替えが行われたと考えられることから、旧住居跡の炉跡に相当することも推測できる。規模は、石囲部分で、長径0.87m、短径0.66m、深さ0.28mである。掘り方の規模は、長径1.18m、短径0.92m、深さ0.30mである。

第273～277図は出土した遺物である。第272図の遺物出土状況に見られるように、遺物は住居跡の中央付近を中心に検出されている。床面直上のものが多く、出土遺物の時期は住居跡の時期とほぼ同じであると考えられる。

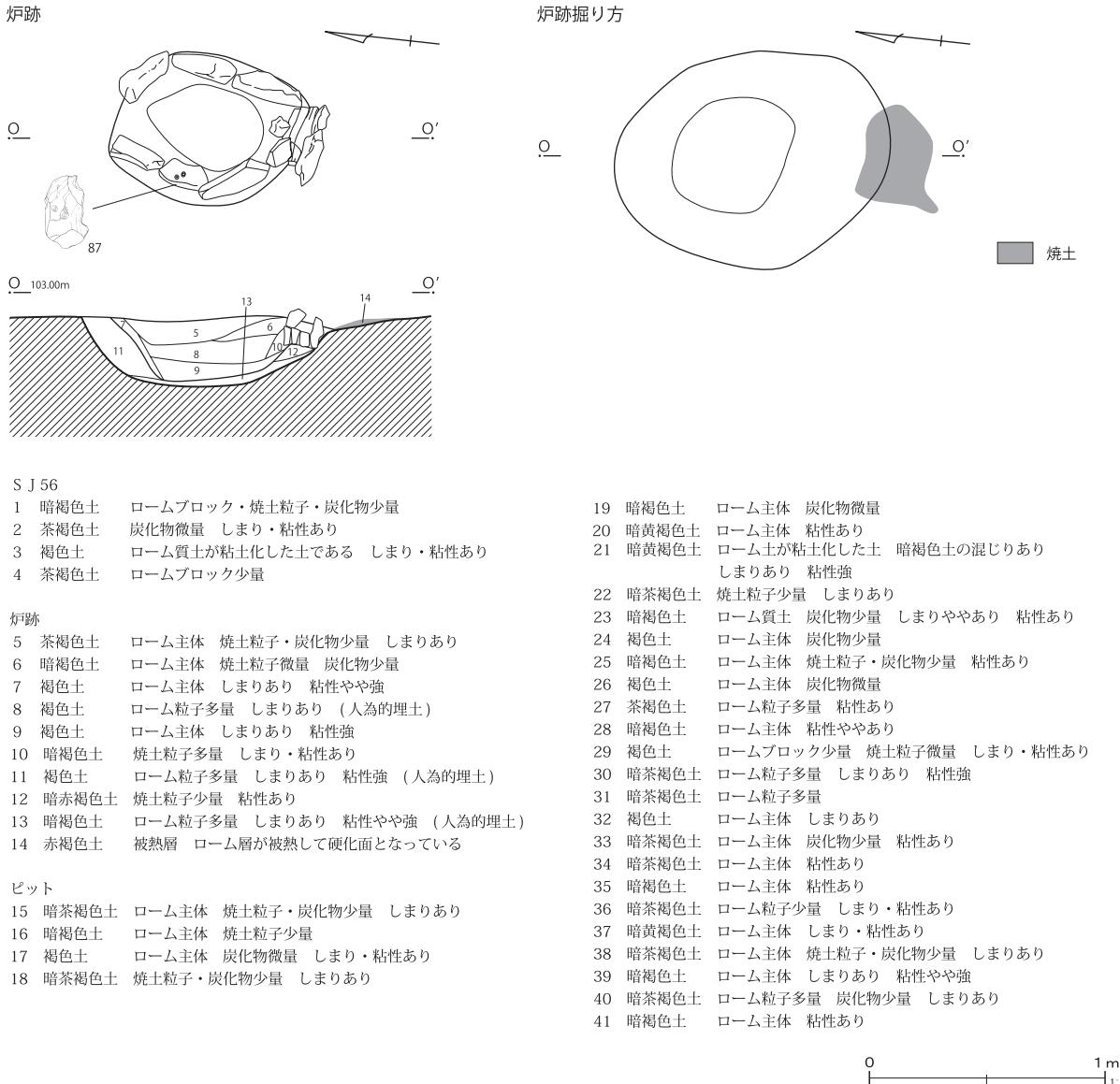
第273図1～9は復元実測した個体である。

1～8は加曽利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。

1は口縁部から胴上部が残存するもので、口縁部には2本1組の隆帯を連弧状に施文し、弧頂部には渦巻文を張り出すように貼付している。弧底部には、頸部と区画する隆帯を繋げて、短い隆帯



第270図 第56号住居跡（1）



第 271 図 第 56 号住居跡 (2)

第 52 表 第 56 号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.39	0.39	0.58	P 6	0.72	0.57	0.39	P 11	0.43	0.47	0.16
P 2	0.52	0.41	0.70	P 7	0.45	0.40	0.43	P 12	0.42	0.41	0.37
P 3	0.59	0.49	0.50	P 8	0.58	0.51	0.23	P 13	0.30	0.28	0.25
P 4	0.62	0.56	0.20	P 9	0.34	0.28	0.14	P 14	0.61	0.42	0.32
P 5	0.42	0.40	0.62	P 10	0.74	0.55	0.61	P 15	0.35	0.32	0.70

を 4 本貼付する部分と、弧底部が頸部と区画する隆帯と直接繋がる部分がある。頸部は無文で、胴部とは 2 本 1 組の隆帯を巡らしている。地文は撲糸文 L で、縦方向に施文している。推定口径は 22 cm である。

2、4 は同一個体の土器である。P 1 内から、落ち込むように検出された遺物である。4 の胴部と一緒に 2 の口縁部の破片が検出されたが、間の頸部は検出されなかった。口縁部には隆帯の一部が残存しているが、全体の文様は不明である。胴



第272図 第56号住居跡遺物出土状況

部には、2本1組の隆帯で直線的に垂下させる懸垂文と、1本の隆帯による蛇行懸垂文を交互に施文している。地文は撚糸文Lで、縦方向に施文している。推定口径は30cmである。

3は無文の内湾する口縁部である。口径は16.8cmである。

5は頸部の破片である。沈線文を使用して文様を施文している。頸部には2本の沈線を巡らし、間に波状沈線文を施文している。胴部とは1本の沈線を巡らして区画している。胴部には懸垂文の一部が認められるが、全体は不明である。地文は

器面の剥落が著しいため不明である。

6は底部の破片で、胴部には沈線によって直線的に垂下させる2本1組の懸垂文と、1本の蛇行懸垂文を交互に施文している。地文は単節RLの縄文で、縦方向に施文している。

7は胴部の破片で、隆帯で文様を施文している。頸部とは、2本の隆帯を巡らして区画している。胴部には直線的に垂下させる2本1組の隆帯による懸垂文と、細かく蛇行させる蛇行懸垂文を交互に施文している。地文は撚糸文Lで、縦方向に施文している。

8は胴部の破片で、3本1組の沈線を直線的に垂下させて懸垂文としている。懸垂文は、胴部に9単位施文している。地文は多条R Lの縄文で、縦方向に施文している。

9は浅鉢形土器で、底部を欠損している。器面は剥落が著しく、赤彩は確認できなかった。やや外反する狭い無文の口縁部を持ち、胴部とは沈線で区画している。胴部は無文である。推定口径は37cmである。

第273図10～19、第274図20～41、第275図42～66は出土した土器で、10～56は深鉢形土器、57～66は浅鉢形土器の破片である。

10～14は勝坂系土器で、10は胴部に結節沈線文を施文している。11・12は刻みを持つ隆帯脇に沈線文を施文している。11は隆帯による区内に沈線を丁寧に施文し、半浮彫状となった沈線間に刻みを密に施文している。13・14は無文の口縁部である。

15～48は加曾利E系のキャリパー形土器である。15～24は口縁部の破片で、口縁部には隆帯によって渦巻文やS字文などが施文される。18・19は口縁部文様帯を2段に分割し、楕円区画文などを施文している。地文として、16は撚糸文Lを縦方向に、17～19は単節R Lの縄文を縦方向に、20、24は単節R Lの縄文を横方向に施文している。21～23は多条R Lの縄文を横方向に施文している。25～38は隆帯を施文する頸部から胴部の破片である。25は頸部が無文となるもので、胴部とは隆帯を巡らせて区画している。26～29は撚糸文Lを地文としているもので、胴部には直線的に垂下させる懸垂文や、蛇行懸垂文を施している。30～38は地文に縄文を施文している。30～35は頸部無文部や、頸部との区画文が残存しているもので、30～33の胴部には、隆帯を直線的に垂下させる懸垂文が施文されている。34・35は渦巻文を縦方向に施文している。36～38は胴部の破片で、36は渦巻文を貼付し、渦巻文の先端には剣先文を施文してい

る。地文として、30～32、37・38は単節R Lの縄文を、33～36は多条R Lの縄文を縦方向に施文している。39～44は文様を沈線で施文する土器である。いずれも胴部に直線的な懸垂文や、蛇行懸垂文を施文している。地文として、39は撚糸文Lを縦方向に施文している。40・41、44は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。42は複節R L Rの縄文を縦方向に施文している。

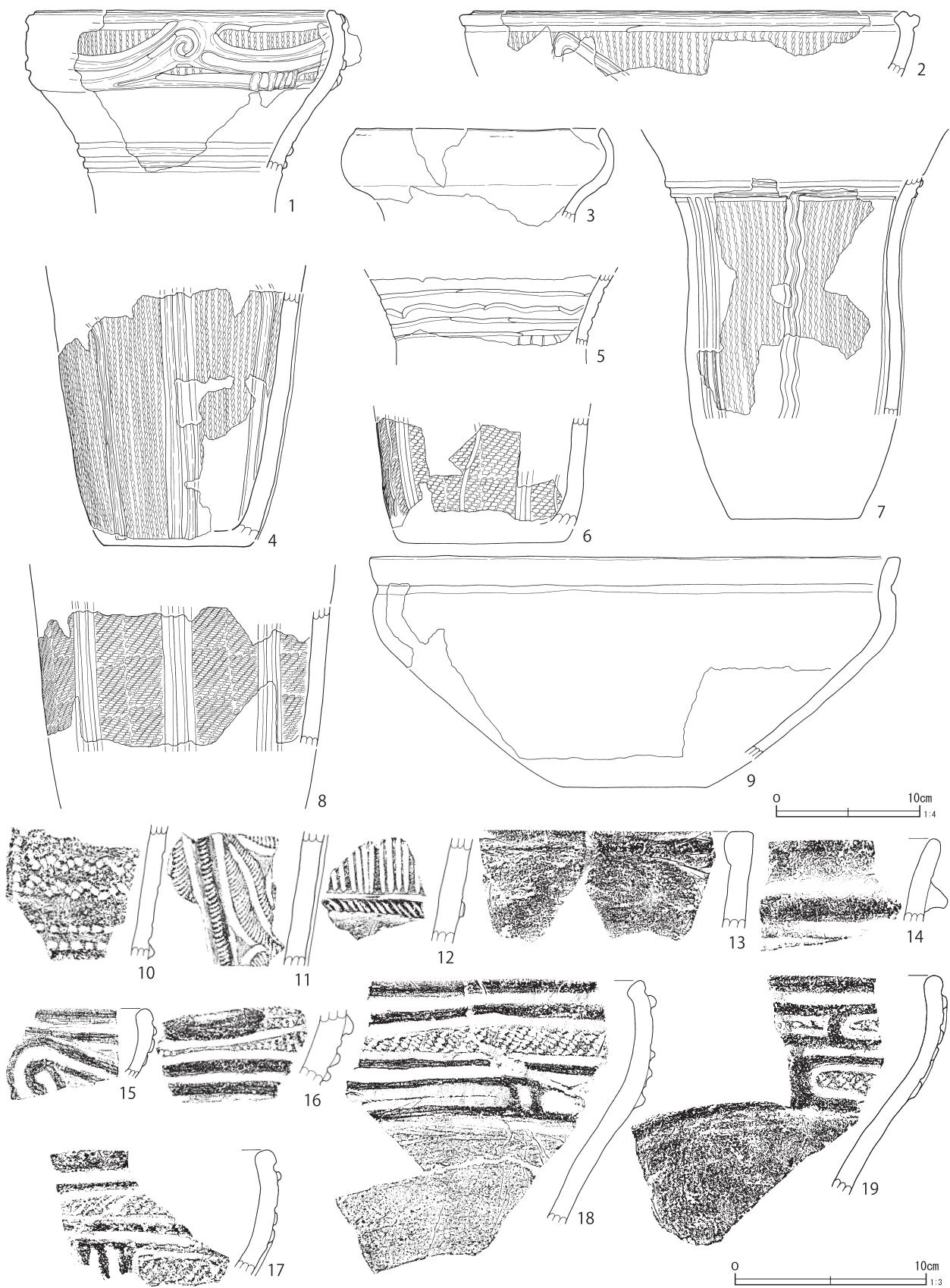
45・46は大木系の深鉢形土器で、外反する無文の口縁部と頸部が括れて、胴部が丸く張り出す器形である。頸部には細い三本の沈線を巡らせ、胴部と区画している。胴部には、地文である単節R Lの縄文のみが横方向に施文されている。

47～53は曾利系の深鉢形土器の破片である。47は重弧文系土器の口縁部である。48は地文が条線を施文する胴部の破片で、隆帯によって懸垂文が施文されている。49～51は縦方向に隆帯を貼付するもので、隆帯には交互刺突を行い波状に加工している。52は2条並列して、小波状の隆帯を貼付している。49～52の地文は、単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。53は隆線状に盛り上がる条線を施文している底部の破片である。

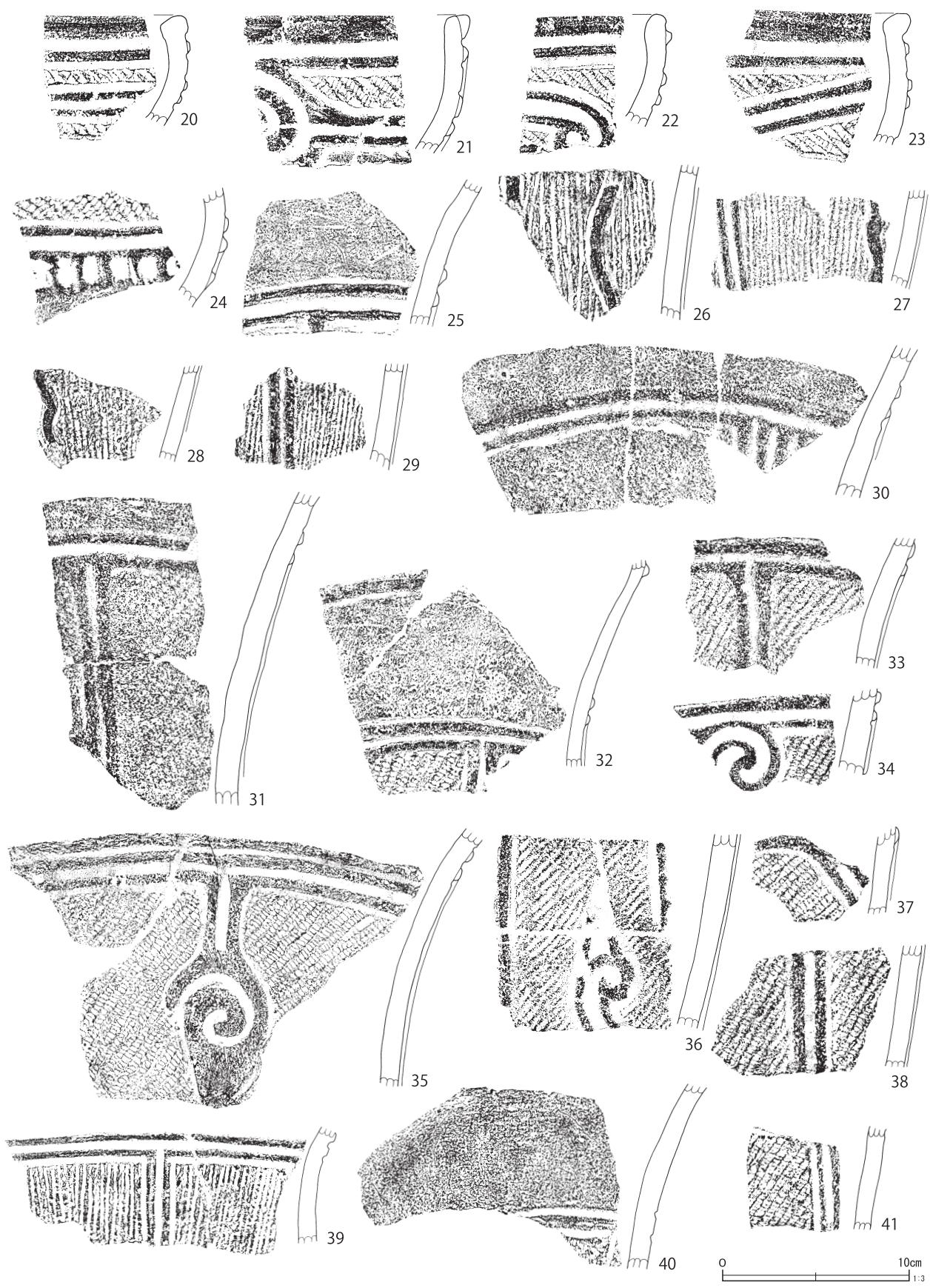
54は地文のみを施文する深鉢形土器の胴部の破片で、撚糸文Lを縦方向に施文している。

55・56は底部の破片で、沈線で懸垂文を施文する。55の地文は撚糸文Lで、推定底径11.7cmである。56の地文は単節R Lの縄文で、推定底径10.8cmである。

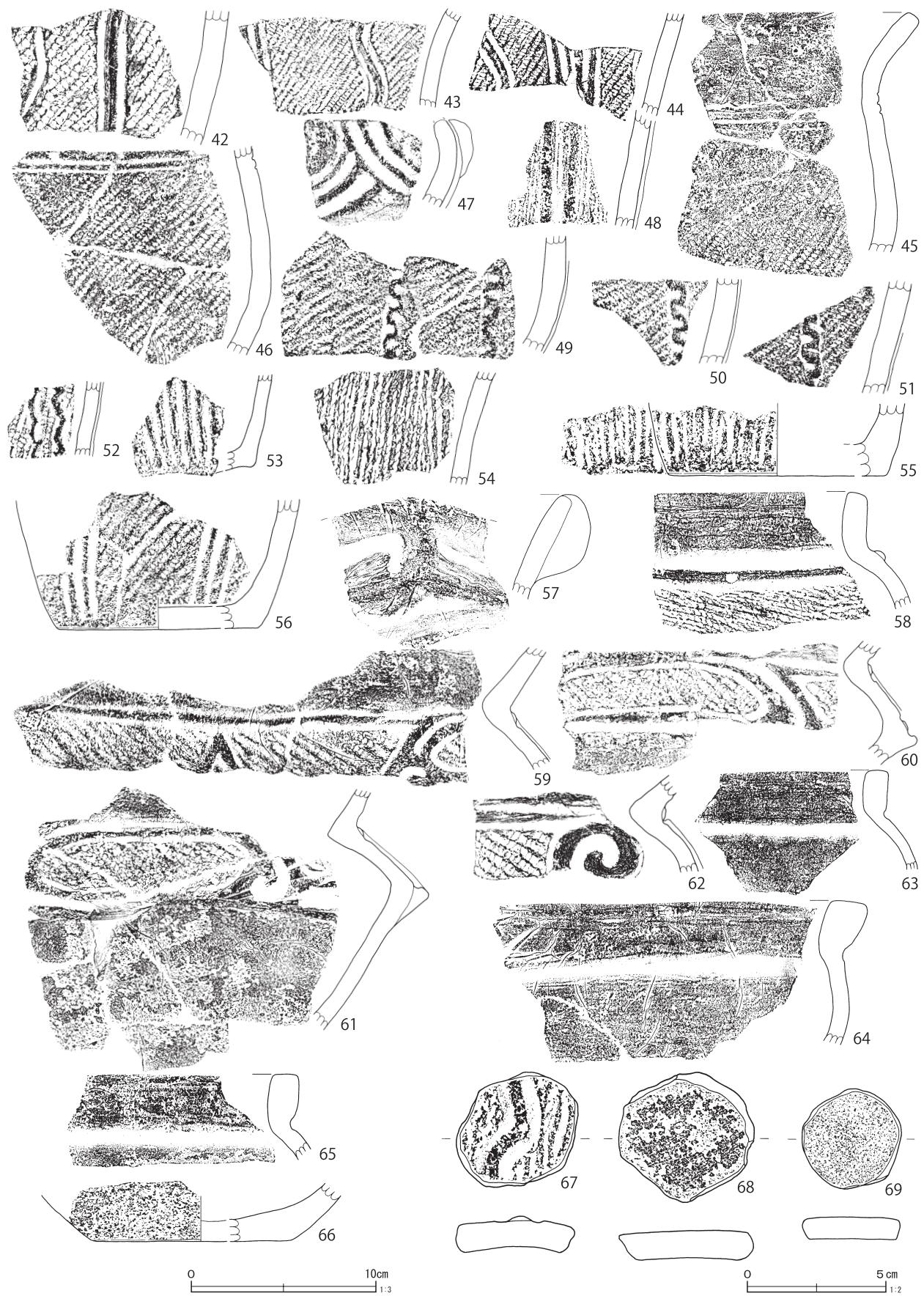
57～66は浅鉢形土器の破片である。57は波状把手部分である。58～62は口縁は無文で、屈曲する肩部に文様を施文するもので、いずれも隆帯で施文されている。59には剣先文が施文されている。60・61は楕円区画文を施文している。62は渦巻文が施文されている。地文は58が撚糸文Lを斜め横方向に、59～62は単節R Lの縄文を横方向に施文している。63～65は無文で、口唇部が角頭状になっている。66は無文の底部で、推定底径10.8cm



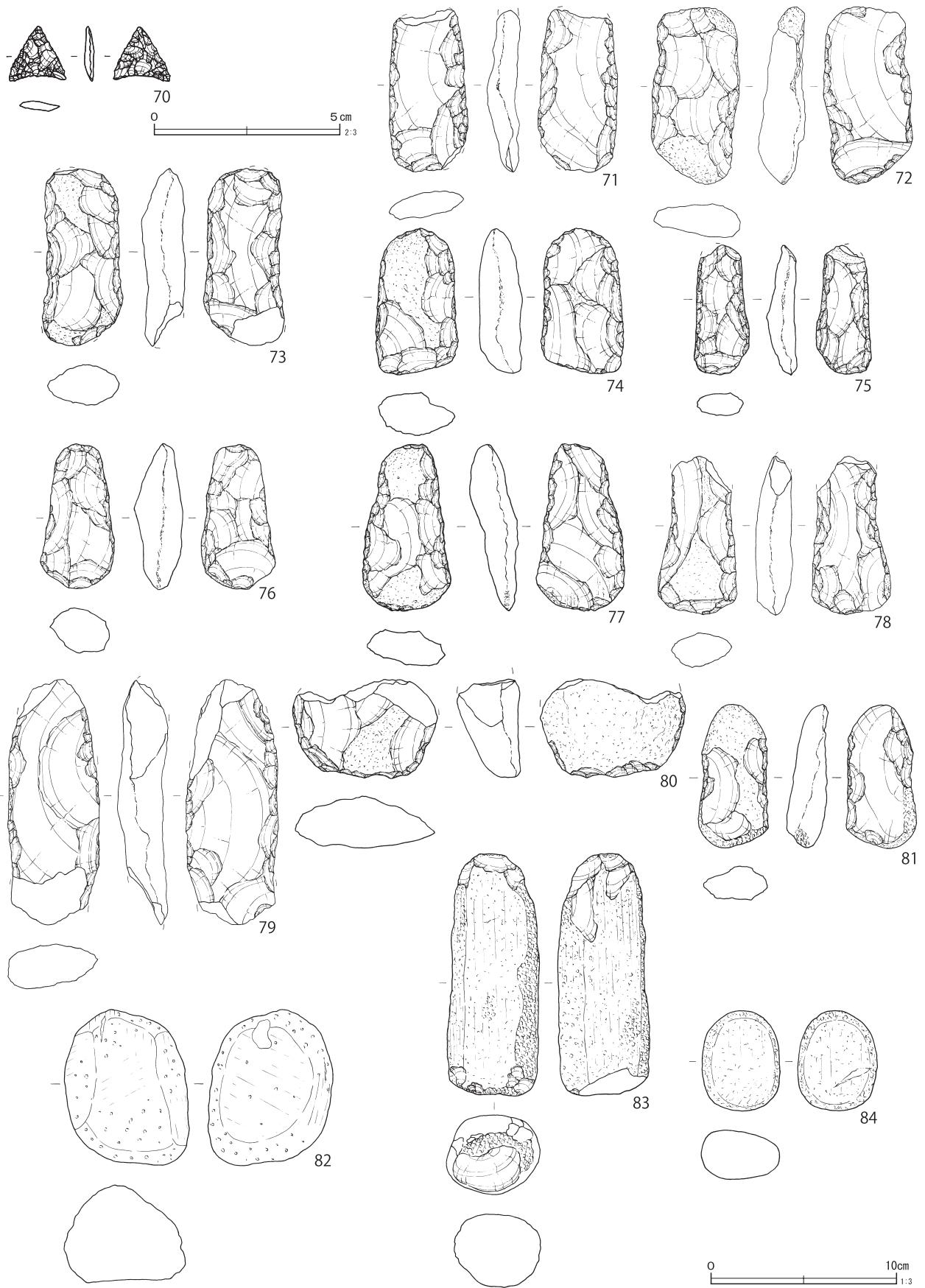
第 273 図 第 56 号住居跡出土遺物（1）



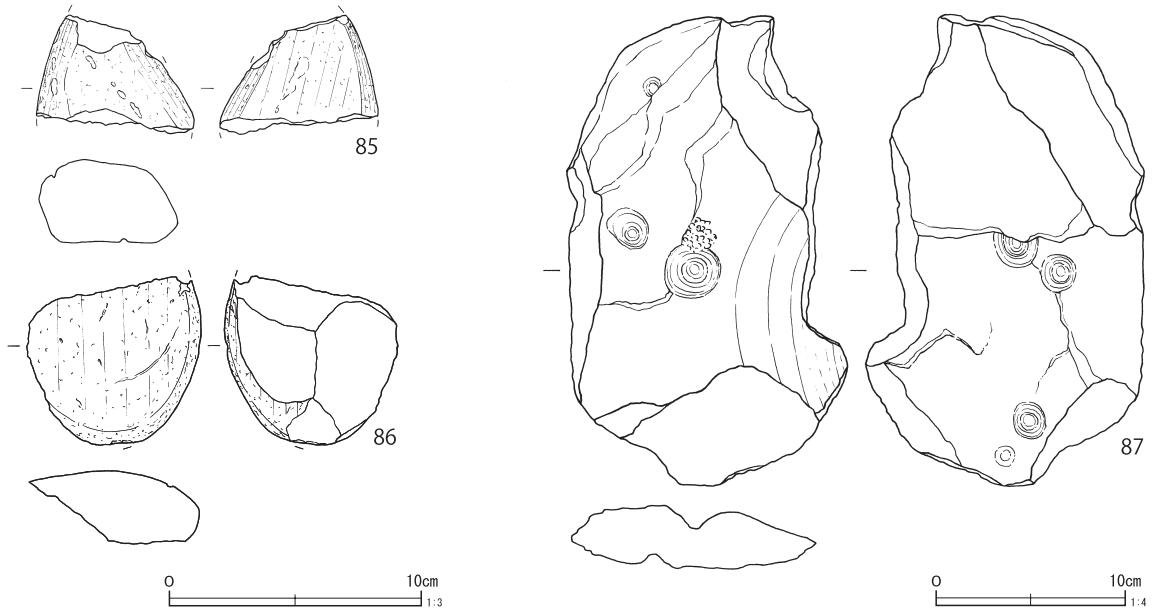
第274図 第56号住居跡出土遺物（2）



第275図 第56号住居跡出土遺物（3）



第276図 第56号住跡出土遺物(4)



第277図 第56号住居跡出土遺物（5）

である。

第275図67～69は出土した土製円盤である。いずれも、深鉢形土器の胴部の破片を使用している。破片の周縁を打ち欠いて、円形に作り出している。67は隆帯による蛇行懸垂文が器面に残存している。地文は撚糸文Lである。

第276図70～84、第277図85～87は出土した石器である。住居跡内からは150点近い石器が検出されたが、その中にはチャート製の焼礫が多く含まれていた。石器の器種別では、打製石斧の出土の割合が高い。

70は石鎌である。正三角形に近い形状で、基部はごく浅い抉りが入る。

71～79、81は打製石斧である。71～75は側縁が平行に作り出される、いわゆる短冊形の形状である。72、74・75の刃部は偏刃である。76～78は刃部に最大幅を持ついわゆる撥形の形状で、78の側縁部にはわずかに抉りが入る。刃部は丸刃である。79は基部と刃部を欠損している。81は端部に敲打痕が顕著に見られるため、敲石の可能性もあるが、剥離調整などから、打製石斧の未製品であると考えられる。

80は礫器である。両面に自然面が残存する。

82は砥石である。表裏面の使用面は、光沢を持つほど使用がされている。

83は棒状の敲石である。端部は敲打のため、剥離が認められる。右側縁部にも、敲打痕が顕著に認められる。

84～86は磨石である。84は側縁に敲打痕が認められる。84は小型の河原石を利用している。85・86は破片で、全体の形状は不明である。

87は石皿である。中央部分は楕円形の同心円状に削れて薄くなっている。また、石匂炉の、石匂いの一部に2次利用されていた。

住居跡の時期は、出土した遺物から、加曾利E I式末葉と考えられる。

第57号住居跡（第278～282図）

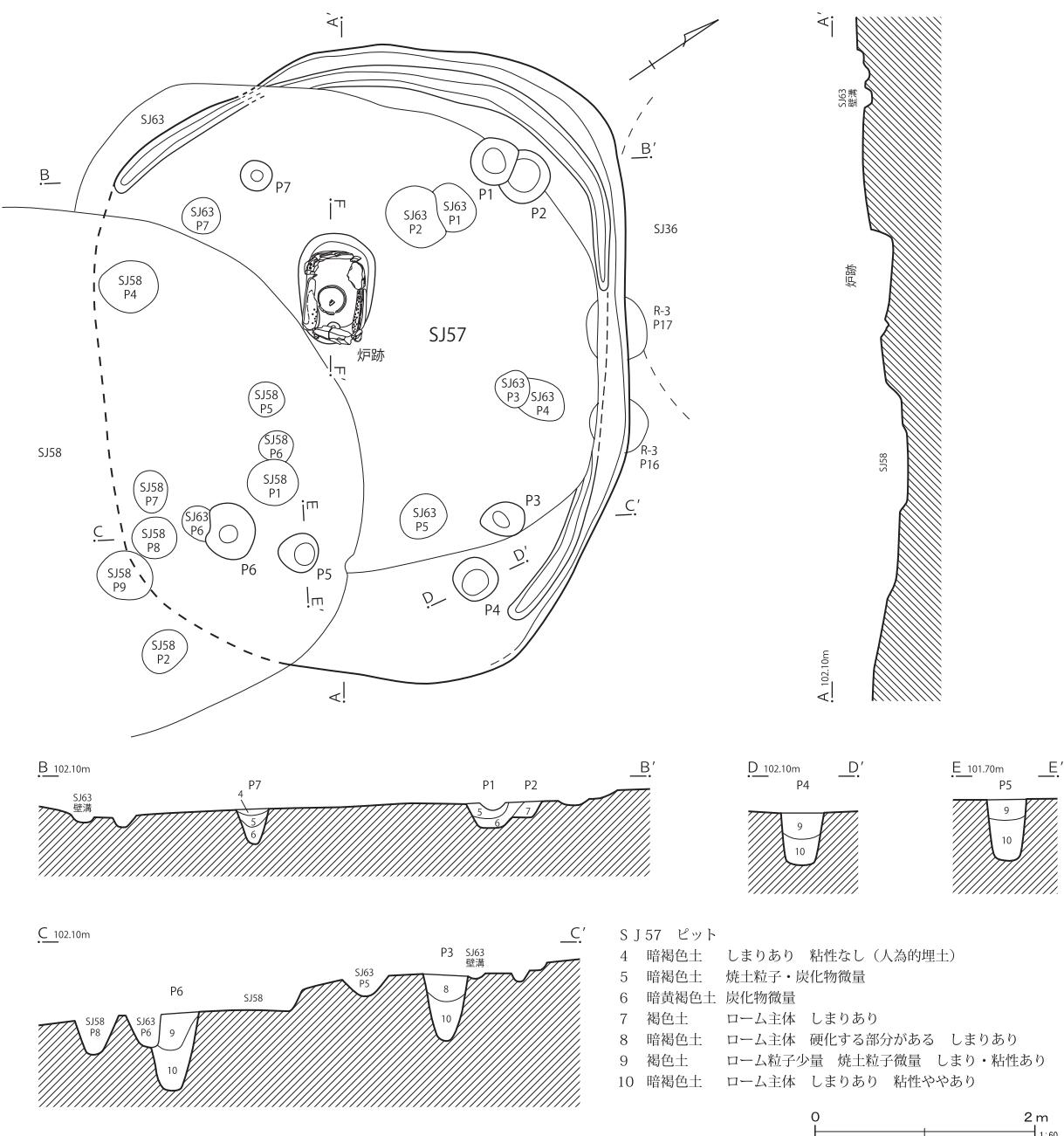
R・S-3グリッドに位置する。北から南方向に地山は緩やかな傾斜をついている。南側に重複する第58号住居跡によって、住居跡は南側が掘り込まれ、床面が3分の1程度失われている。出土遺物からも、第58号住居跡が新しい時期であることから、本住居跡は第58号住居跡よりも古い。

また、本住居跡とほぼ重なる第63号住居跡だが、床面の高さに差がない本住居跡の炉跡が、壊されていないことからすると、本住居跡は、第63号住居跡より新しいと言える。平面形は隅丸方形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-53°-Wをとる。推定される規模は長径5.72m、短径4.82m、深さ0.15mである。

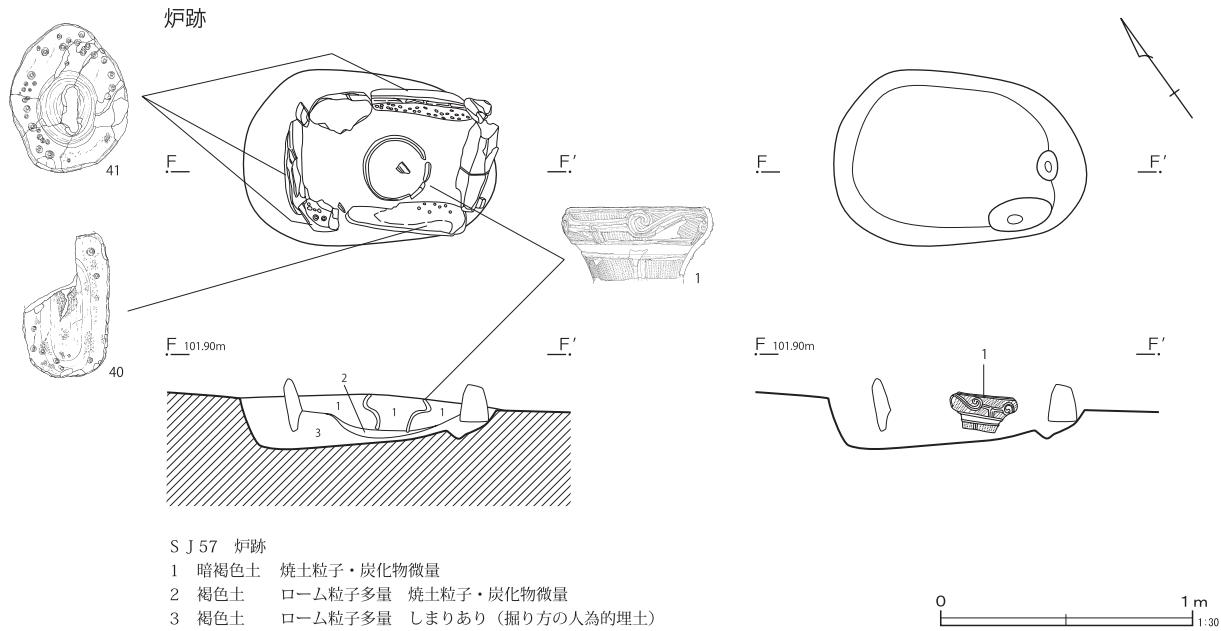
壁溝は、壁の内側から1条が検出された。この

ことから、住居跡の建て替えが、1回は行われたと考えられる。壁溝の最大幅0.20m、深さ0.10mである。最後に使用されたと考えられる壁には、壁溝は作られていなかった。

柱穴は7本が検出された。主柱穴は、P1、P3、P6、P7の4本であると考えられる。残りの柱穴もそれぞれの主柱穴の側に集中して検出されるため、壁溝の状況から考えられる建て替えは、



第278図 第57号住居跡(1)



第 279 図 第 57 号住居跡 (2)

第 53 表 第 57 号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.42	0.40	0.20	P 4	0.37	0.37	0.45	P 6	0.50	0.43	0.72
P 2	0.49	0.36	0.15	P 5	0.36	0.35	0.52	P 7	0.30	0.28	0.32
P 3	0.40	0.31	0.59	—	—	—	—	—	—	—	—

主軸方位をほぼ同じで行われたと考えられる。

炉跡は中央よりやや北西側で検出された。炉跡内には第280図1が炉体土器として使用され、その周りを石で囲っており、炉跡の形状は石囲埋甕炉となっている。石囲いに使用された石には、第281図40、第282図41の石皿があり、打ち割るなど再利用している。石囲部分の平面形状は方形で、規模は、長軸方向0.84m、短軸方向0.55m、深さ0.17mである。掘り方は橢円形状で、規模は、長径1.00m、短径0.69m、深さ0.19mである。

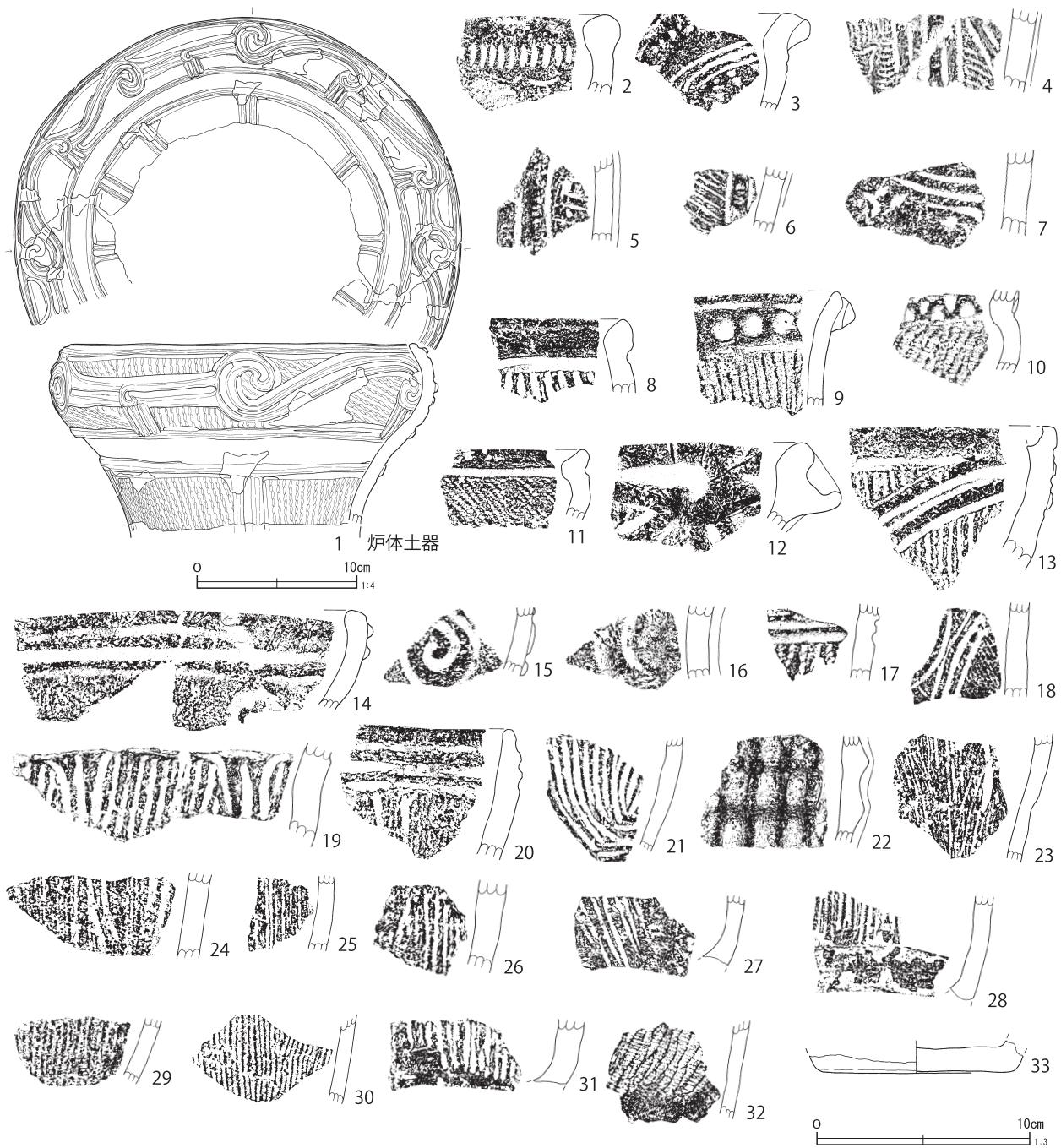
第280図1～33は出土した土器である。

1は炉体土器として使用された、加曾利E系のキャリパ一形の深鉢形土器である。頸部は狭い無文帶となっている。口縁部から胴上部を使用するもので、胴下半部は壊されている。口縁部は平縁で、口縁部の文様は、端部が渦巻状となるS字文と片側が渦巻く波状文と水平に施文する文様の3つで1セットとなり、2単位を施文している。胴

部側に巻き下げる渦巻文は、頸部の区画文と離れて施文されており、そのため渦巻下に短い隆帯を貼付し頸部の区画文と繋げている。しかし、一箇所のみ頸部区画とは繋がっていない。また、横方向に貼付した隆帯の施文範囲が広い部分には、途中3本の短い隆帯を貼付し、頸部区画の隆帯と連結させている。隆帯の連結部分には、渦巻文を施文している。胴部には隆帯によって、2本の直線的に垂下させる懸垂文を5単位施文するが、口縁部文様と合っていない。地文は撚糸文Lで、口縁部は縦方向と斜め横方向に、胴部は縦方向に施している。口径は21cmである。

2は口縁部に爪形文を施文し、波状沈線文を沿わす阿玉台系の深鉢形土器の破片である。

3～8は勝坂系の深鉢形土器の破片で、3～6は隆帯上に刻みを施文し、隆帯脇に沈線文を沿わしている。7は沈線のみを施文し、8は口縁部の破片で、区画内を短沈線文で充填している。



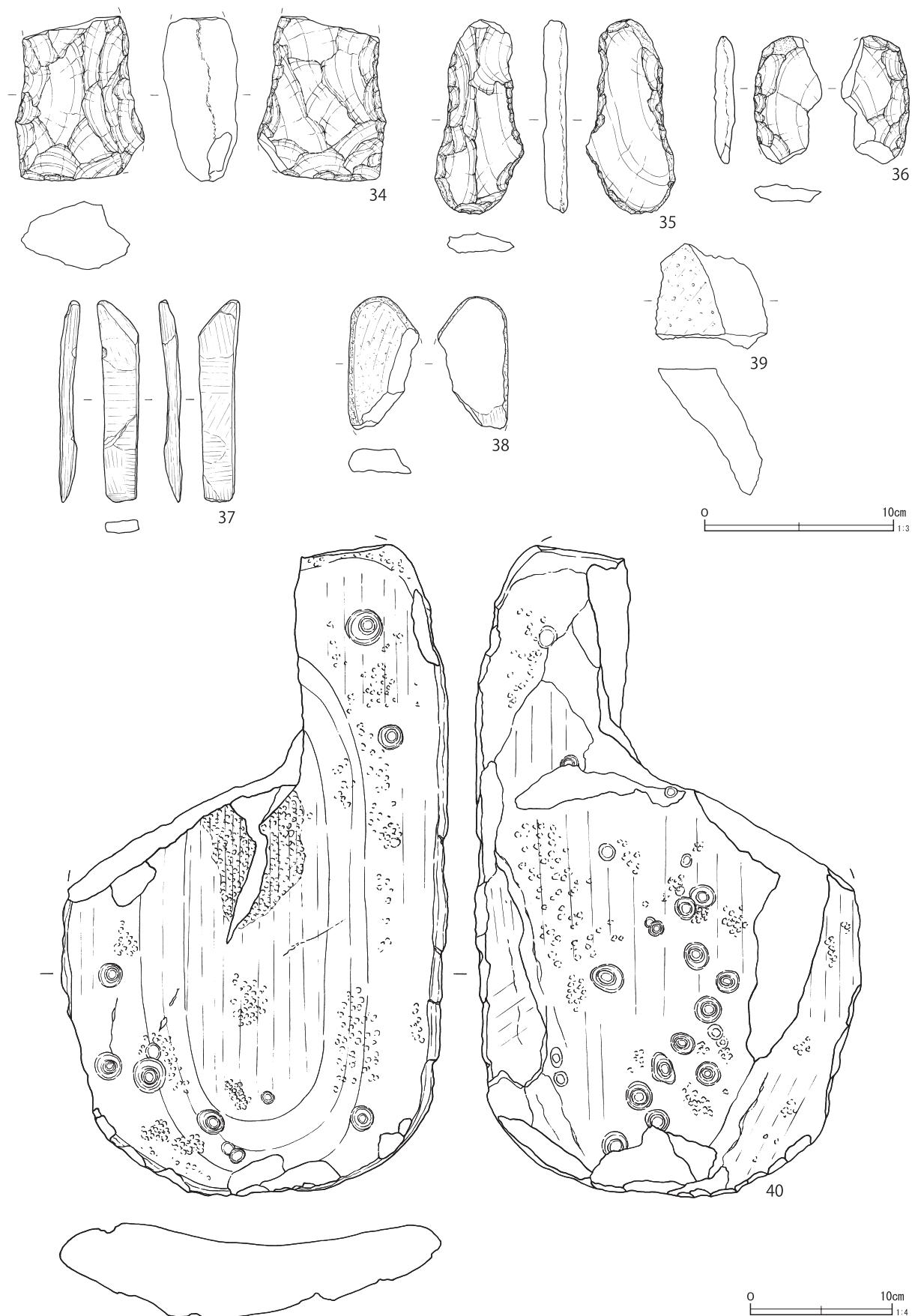
第280図 第57号住居跡出土遺物（1）

9・10は勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器で、9は口唇部直下に厚みのある隆帯を巡らすもので、隆帯上には押捺状の刺突を加えている。地文は燃糸文Lである。10は隆帯に交互刺突文を施している。地文は多条R Lの縄文である。

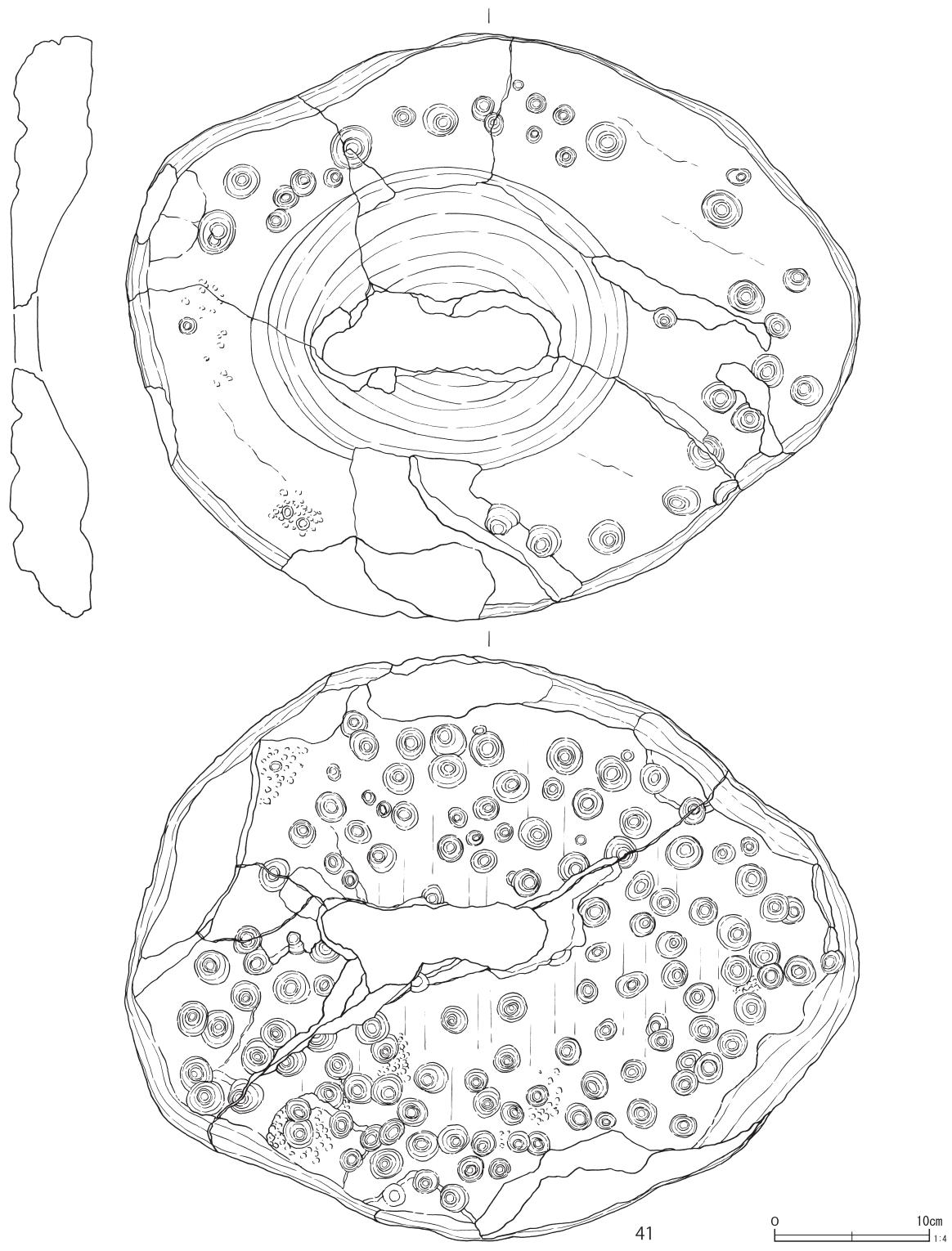
11～19は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。11～15は口縁部の破片である。12は

連弧状の隆帯の弧頂部に貼付された渦巻文の部分である。11は単節R Lの縄文を横方向に、13は撲糸文Lを縦方向に施文している。16～19は胴部の破片である。16は隆帯で文様を施文している。17～19は沈線で施文している。17、19は撲糸文Lを、18は単節R Lの縄文を施文している。

20は連弧文系の深鉢形土器の破片である。地文



第281図 第57号住居跡出土遺物（2）



第282図 第57号住居跡出土遺物（3）

は撚糸文Lと考えられる。

21~25、27~29は地文が条線となる、曾利系の深鉢形土器の破片である。21・22は重弧文系土

器の破片である。23・24の地文は条線で、胴部に沈線で懸垂文を施文している。26、30~32は地文のみが残存するもので、26、30・31は撚糸文Lを、

32は多条R Lの縄文を施文している。33は底部で、底径は9.3cmである。

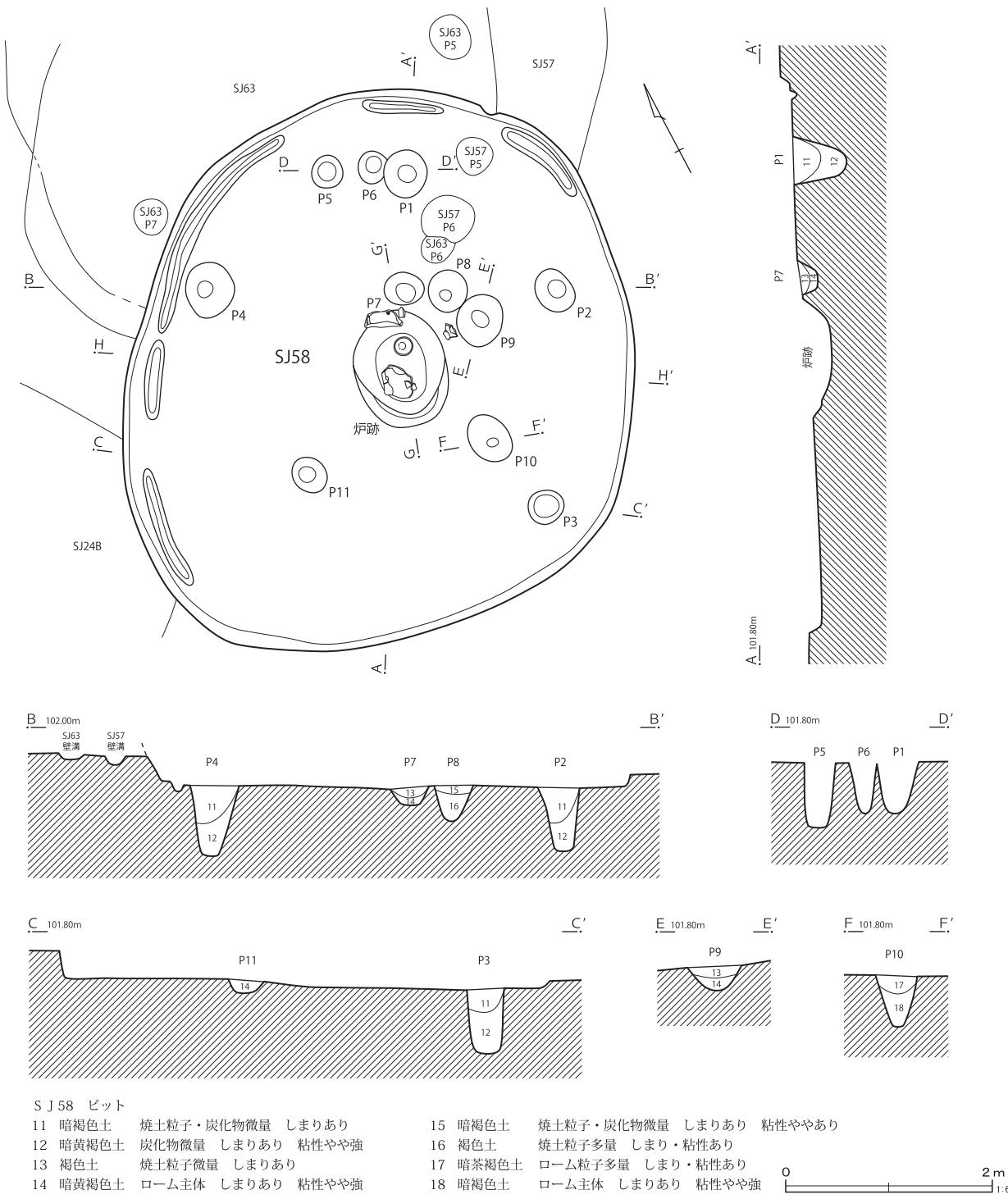
第281図34~40、第282図41は、出土した石器である。34~36は打製石斧で、37は砥石である。

38・39は磨石である。

40・41は石圓の炉石に転用された石皿である。

41は分割されて、炉石に使用されていた。大型の石皿で、両面には複数の凹部が認められる。41は中央に向けて擂鉢状に窪んでいき、最後には薄くなつた中央に穴が空いている。

住居跡の時期は、炉体土器から加曾利E I式期と考えられる。



第283図 第58号住居跡（1）

第58号住居跡（第282～286図）

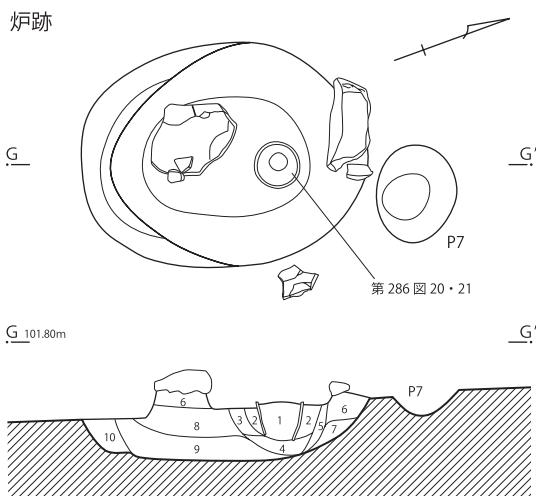
S-3グリッドに位置する。地山は南側に向かって緩やかに傾斜している。他の遺構との重複関係だが、西壁の一部では第24B号住居跡と接している。本住居跡の壁の立ち上がりが確認できることや、出土遺物から本住居跡が新しいと考えられる。第57・63号住居跡とは、北側で重複するが、第57号住居跡の項で触れたとおり、遺構の切り合い関係や、出土遺物から第57・63号住居跡よりも本住居跡が新しい時期である。平面形は北側が狭くなる不整円形で、住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方位は、N-30°-Eをとる。規模は長径5.37m、短径4.85m、深さ0.32mである。

住居跡の内側からは、壁溝の痕跡が検出された。住居跡の形状に沿って検出されたが、所々途切れたり、傾斜している南側では検出されていない。

壁溝からは、建て替えがあったと考えられる。壁溝の最大幅は0.20m、深さ0.07mである。

柱穴は11本が検出された。主柱穴は配置からすると、P1～P4、P11の5本と考えられる。残りの柱穴は住居の北側のみから検出されている。壁溝からは、建て替えが行われたと考えられるが、柱穴からは明確ではない。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡の北側よりに炉体土器が埋設されており、炉跡は埋甕炉と考えられるが、周囲からは大型の礫が検出されており、石甕炉であった可能性もある。炉跡は南側に段差があり、外側がわずかに高くなっている。土層からすると、段差部分は建て替え前の、古い炉跡の一部であった可能性が高い。炉跡の規模は、外側で長径1.14m、内側で長径1.02m、短径0.89m、深さ0.24mである。炉体土器について



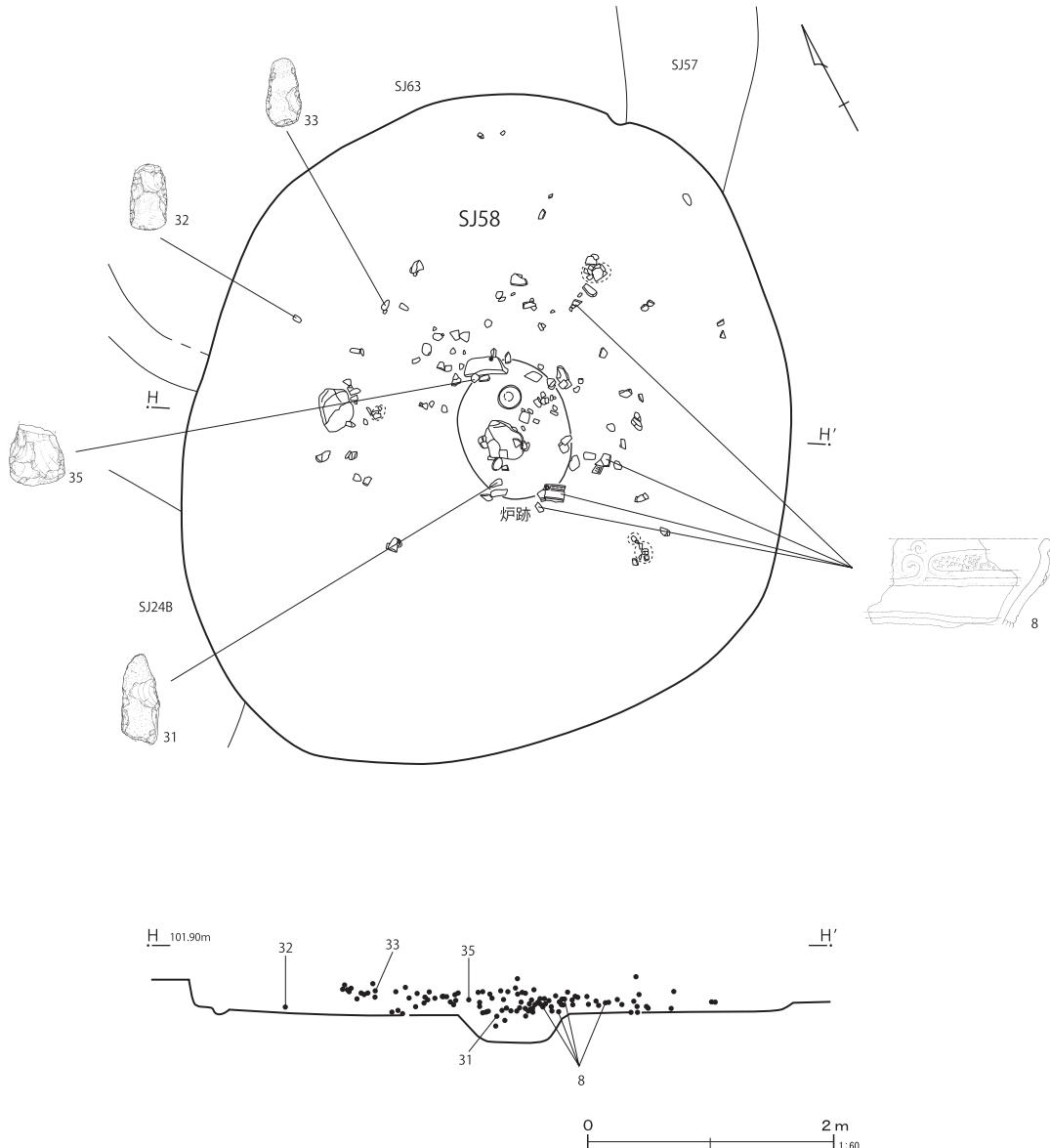
S J 58 炉跡	
1 暗褐色土	ローム粒子多量
2 暗褐色土	ローム粒子・焼土粒子多量 しまり・粘性あり
3 暗茶褐色土	ローム主体 しまり・粘性あり
4 暗黄褐色土	ローム主体 ロームブロック少量 しまりあり 粘性ややあり
5 褐色土	ローム主体 焼土粒子微量 しまりあり 粘性やや強



第284図 第58号住居跡（2）

第54表 第58号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.46	0.42	0.50	P 5	0.31	0.31	0.61	P 9	0.51	0.43	0.24
P 2	0.44	0.35	0.60	P 6	0.31	0.29	0.48	P 10	0.50	0.36	0.51
P 3	0.35	0.34	0.60	P 7	0.38	0.31	0.17	P 11	0.36	0.31	0.16
P 4	0.54	0.46	0.67	P 8	0.40	0.37	0.36	—	—	—	—



第285図 第58号住居跡遺物出土状況

は、劣化が著しく図示に耐えうるものは第286図20~22のみであった。取り上げ時の観察からも、加曾利E II式期の連弧文系土器である。

第286図は検出された遺物である。第285図の遺物出土状況に見られるように、住居跡の中央炉跡付近から、集中して検出された。

第286図1~29は出土した土器である。

1~3、5・6は勝坂系の土器である。1は爪形文を施文するもので、横方向に施文し、それに直行して縦方向に2列施文している。2はぞうり虫状の隆帯を貼付し、その周りにキャタピラ状の

爪形文を施文している。3、5は円筒形の深鉢形土器で、隆帶上には刻みが入らない。6は口縁部に刻みを施文する小突起が口縁に貼付されている。

4は中峠系の土器で、丸みを帯びる口縁部で、隆帯が連弧状に残されている。

7~16は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器の破片である。7~11は口縁部の破片である。7は口縁部の隆帯が、剥がれて無くなったものである。地文は、撲糸文Lを施文している。8は狭い口縁部と狭い無文の頸部を持っている。頸部と胴部の区画は沈線文を巡らしている。口縁部は、

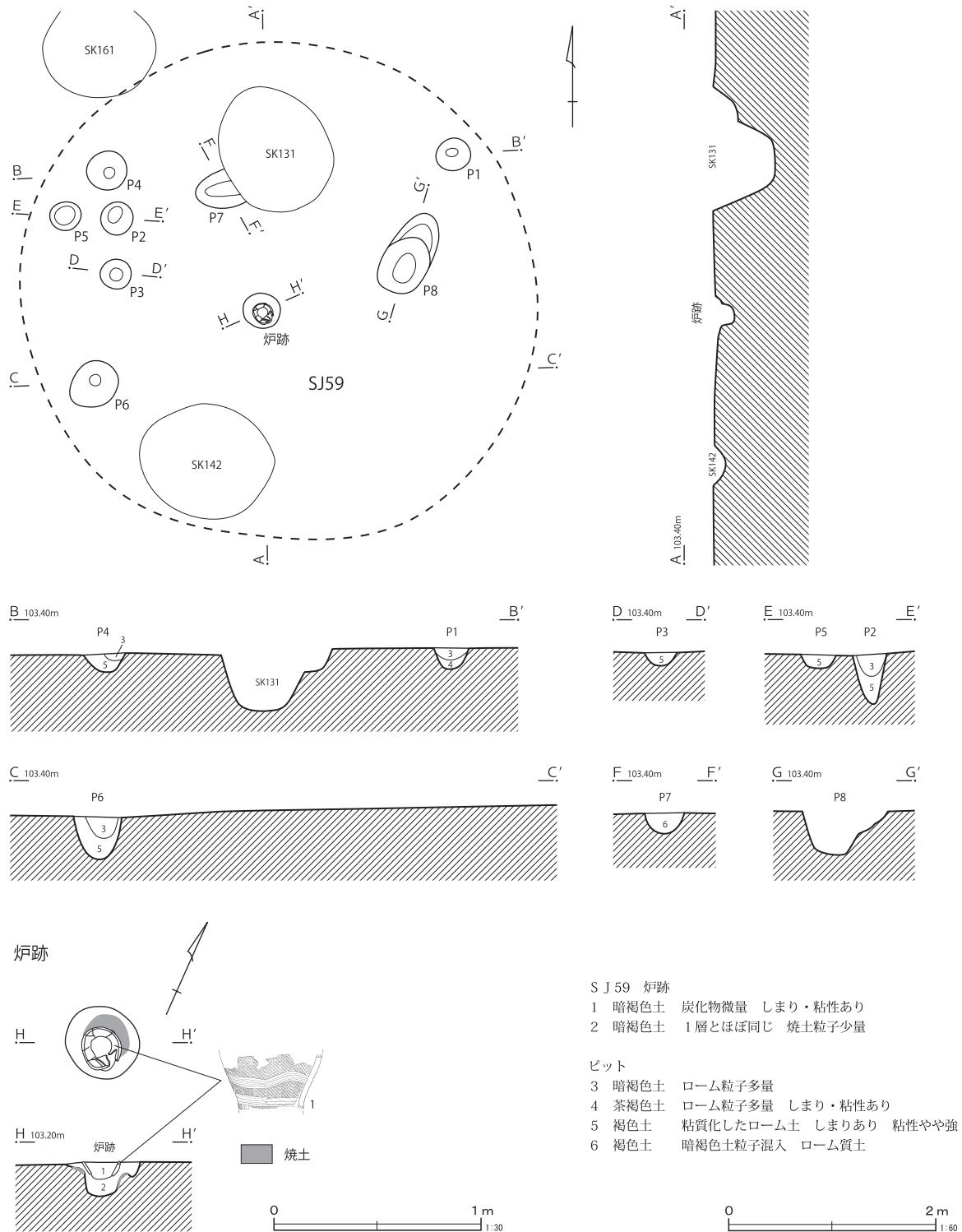


第286図 第58号住居跡出土遺物

楕円区画文を施文し、その間には渦巻文を施文している。渦巻文の口縁部側には、沈線によって小渦巻文が施文される。口縁部の楕円区画内には列点文を充填している。12・13は胴部の刃片で、隆

帶による懸垂文を施文している。12の地文は撲糸文Lで、13は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。14～16は沈線で文様を施文している。

17～19は曾利系の深鉢形土器の破片である。地



第287図 第59号住居跡

文は櫛歯状の条線を施文している。17は口縁部の破片で、口縁部の隆帯の下に隆帯で小渦巻文を施文している。

20~22は連弧文系土器の破片である。地文として条線を施文している。

23は無文の口縁部である。24~27は地文のみを施文する深鉢形土器の破片である。24・25、27の地文は撫糸文Lを、26は多条R Lの縄文を縦方向に施文している。

28・29は浅鉢形土器の破片である。

30~35は出土した石器である。30は石鏃の未製品と考えられる。31~33、35は打製石斧である。32は磨製石斧を再加工したものである。34はスクレイパーである。

住居跡の時期は、出土した遺物から加曾利E II式期と考えられる。

第59号住居跡（第287・288図）

P-6・7グリッドに位置する。掘り込みは検出されず、床面は削られていると考えられる。住居跡の範囲内に、第131・142号土壙が重複している。住居跡に覆土がないため、その新旧関係は切り合いかからは不明である。第131号土壙から遺物は出土しているが、小破片のため時期差は明確にはできなかった。第142号土壙は遺物が出土して

いないため、新旧関係はやはり不明である。北側には第161号土壙が接しているが、遺物は出土しておらず本住居跡との新旧関係は不明である。平面形は、柱穴の範囲から円形と推定している。推定範囲の規模は長径4.94m、短径4.72mである。

柱穴は8本が検出されたが、主柱穴は特定することはできなかった。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡内には、口縁部から胴上部を利用した第288図1が埋設されており、埋甕炉となっている。床面が削られているためか炉体土器の口縁部は失われていた。炉跡の規模は、長径0.36m、短径0.33m、深さ0.16mである。

図示出来る遺物は、1の炉体土器以外は第288図2の石器のみであった。

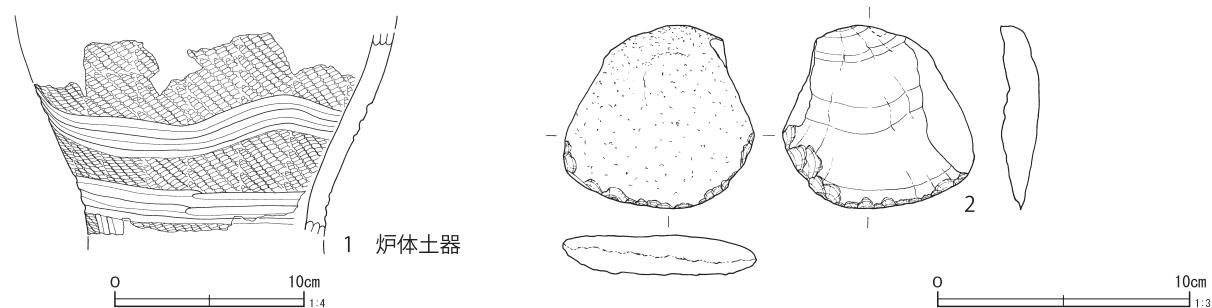
1は口唇部を欠損するが、口縁部から頸部の括れ部までの連弧文系の深鉢形土器である。口縁部には3本1組の沈線文で、緩やかな波状に文様を施文している。3本1組の沈線を巡らし頸部と胴部を区画し、胴部には懸垂文が残存している。地文は単節L Rの縄文を縦方向に施文している。

2はスクレイパーで、剥片の鋭い端部を刃部として使用している。

住居跡の時期は、炉体土器から加曾利E II式期と考えられる。

第55表 第59号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.24	0.20	0.18	P 4	0.39	0.37	0.21	P 7	0.40	0.37	0.17
P 2	0.32	0.31	0.48	P 5	0.30	0.27	0.12	P 8	0.81	0.44	0.41
P 3	0.30	0.28	0.11	P 6	0.50	0.40	0.39	—	—	—	—

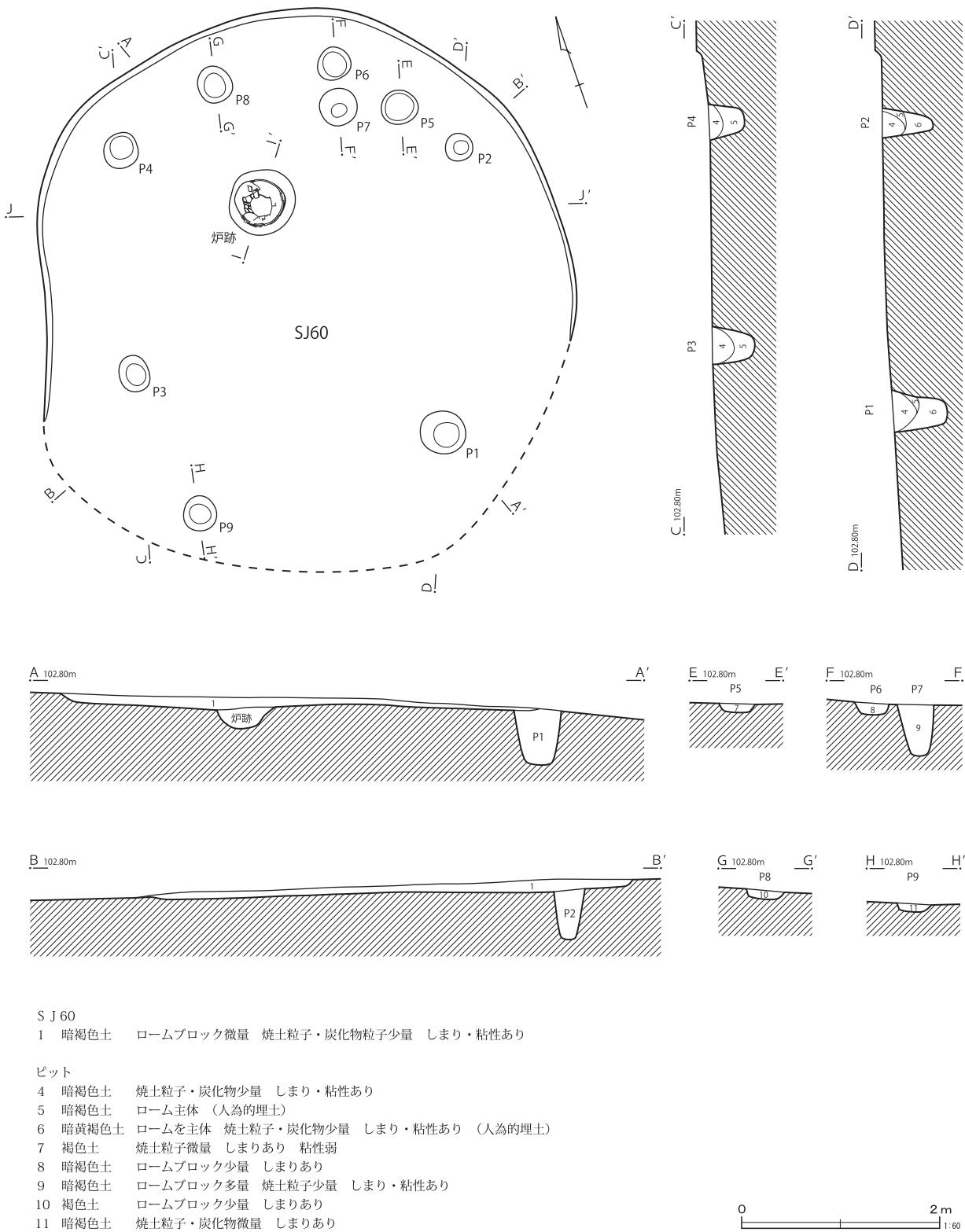


第288図 第59号住居跡出土遺物

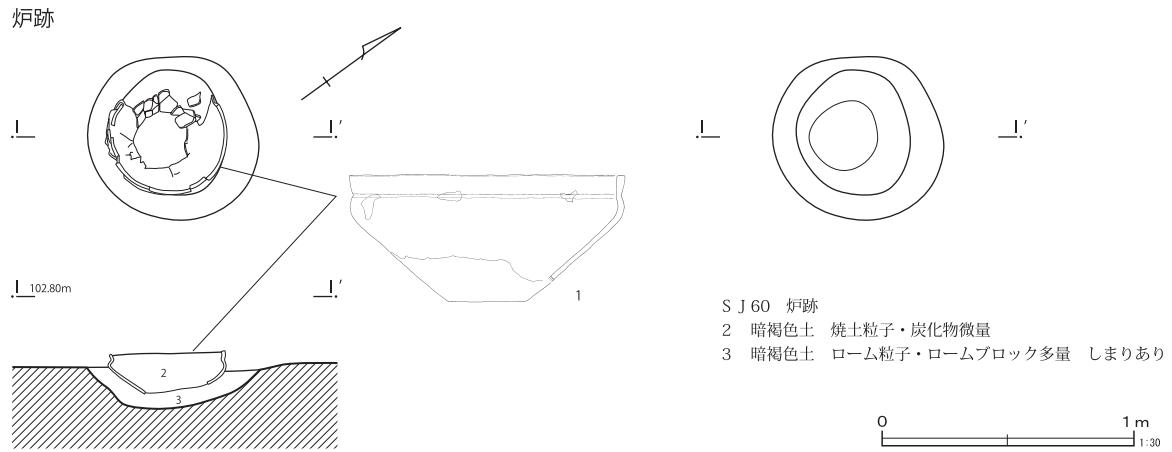
第60号住居跡（第289・290図）

R-5グリッドに位置する。地山は南に向けて緩やかに傾斜している。そのため、南側は覆土が

失われている。北側部分でも、残存する掘り込みはごく浅いものであった。炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-27°-Eをとる。残存部より



第289図 第60号住居跡（1）



第290図 第60号住居跡（2）

第56表 第60号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.45	0.42	0.55	P 4	0.37	0.33	0.35	P 7	0.37	0.37	0.53
P 2	0.28	0.26	0.50	P 5	0.37	0.33	0.08	P 8	0.37	0.33	0.10
P 3	0.36	0.30	0.40	P 6	0.34	0.33	0.13	P 9	0.34	0.33	0.10

推定すると、平面形は隅丸方形に近いと考えられる。推定される範囲の規模は、長径5.69m、短径5.44m、深さ0.21mを測る。

柱穴は9本が検出された。P 1～P 4、P 7の5本が、主柱穴と考えられる。他の柱穴は、掘り込みがごく浅いものであった。

炉跡は中央よりやや北側で検出された。炉跡の中央には、第291図1の浅鉢形土器が炉体土器として埋設されており、炉跡は埋甕炉の形状をしている。土器は底部のみを打ち欠いて、炉体土器として使用されている。炉跡の規模は、長径0.69m、短径0.66m、深さ0.13mである。

第291図1～22は出土した土器である。

1は炉体土器として使用された浅鉢形土器である。底部は失われている。口縁部と胴部は、浅い沈線で区画されている。赤彩の有無は不明である。推定口径44cmである。

2～12、14は勝坂系の土器である。勝坂終末から加曾利E I初頭の土器が主体を占めている。土器はいずれも風化が著しく、文様も不明瞭であった。2は胴部の破片で、爪形文を横方向に施文している。3～12は隆帯上に刻みを持ち、隆帯脇

に沈線文を施文する深鉢形土器の破片である。3、5～7は隆帯に沿って沈線を施文し、沈線の間に文様を施文している。5は交互刺突文を、6は刻みや小波状沈線文を、7は結節沈線文を施文している。8～12は器面が荒れており、施文された沈線が不明のものである。14は隆帯の脇に刺突を施文している。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。

13は器面に貼付された渦巻文の破片である。

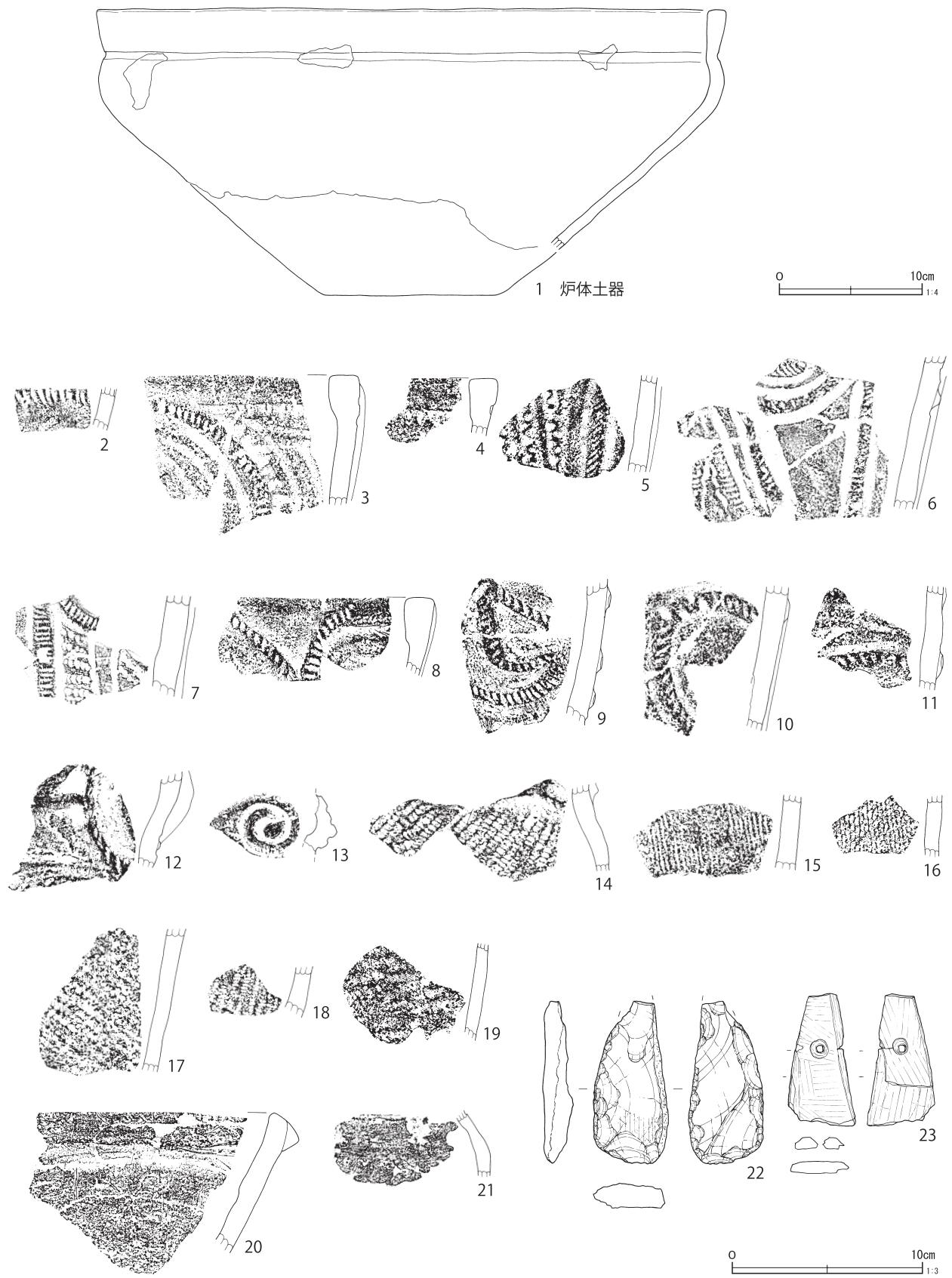
15～19は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部の破片で、15・16は燃糸文L、17は単節L Rの縄文、18は多条R Lの縄文を施文している。19は不明である。

20・21は浅鉢形土器の破片である。20は口縁部の破片である。いずれも器面の風化が著しく、赤彩の有無は不明である。

22は石器で、打製石斧である。刃部には擦痕が認められる。

23は石製品で、丁寧に研磨されて板状の石の中央に円孔を穿っている。垂飾と考えられる。

住居跡の時期は、炉体土器や出土土器から勝坂終末から加曾利E I式初頭と考えられる。



第291図 第60号住居跡出土遺物

第62号住居跡（第292～297図）

O・P-7グリッドに位置する。重複している第51号住居跡と第56号住居跡については、すでに触れたように、遺構の切り合いや出土遺物から本住居跡が古い時期である。第68号住居跡については、遺物が出土していないため、新旧関係は不明である。住居跡内には第202・203号土壙が重複しており、第203号土壙はP2を壊して作られており、住居跡の時期が古い。第202号土壙は不明である。東壁に重複している第255号土壙も、新旧関係は不明である。平面形は円形で、規模は長径4.88m、短径4.79m、深さ0.26mを測る。

住居跡の内側の床面から、途切れているが、壁溝が確認されている。本住居跡が、建て替えられていた可能性が高い。壁溝の最大幅0.25m、深さ0.12mである。

柱穴は6本が検出された。出土状況からは、主柱穴を特定することはできなかった。

炉跡は中央よりやや北側で検出された。一段低くなった窪みを囲うように石が検出された、石囲炉である。第297図65は破損後に炉石として使用されていた。炉跡の規模は、長径0.83m、短径0.67m、深さ0.32mである。

第294～297図は検出された遺物である。遺物は第293図で見られるように、重複していない部分を中心に出土している。遺物は床面直上のものもあり、間層はなく住居跡の時期と遺物の時期は差がないものと考えられる。

第294図1～7は復元実測した深鉢形土器である。住居に伴う時期と考えられる。

1はバケツ状の深鉢形土器で、底部を欠損する。把手が付くと考えられる口縁部は波状に盛り上がっている。口縁部には沈線を巡らし、その下に

隆帯を巡らしている。隆帯は上下交互に押捺を加え、波状に立体的に盛り上げている。胴部には半截竹管による、平行沈線文を施文している。把手の下には2組、沈線を縦方向に垂下させる。1組は短く施文し、そこから直角に曲げて、2本2組の沈線文を横方向に施文し、途中円文を施文し横方向に沈線文を施文している。もう1組の縦方向の沈線は、途中に直行する横方向の沈線文の上を通り、底部に向けて施文を続けている。直行した横方向の沈線文は、上部の沈線文と同じく途中円文を施文しているが、裏面は欠損しており、全体の形状は不明である。地文は多条R Lの縄文で、条が縦方向に垂直に揃うよう、斜め方向に施文している。推定口径28cmである。勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器である。

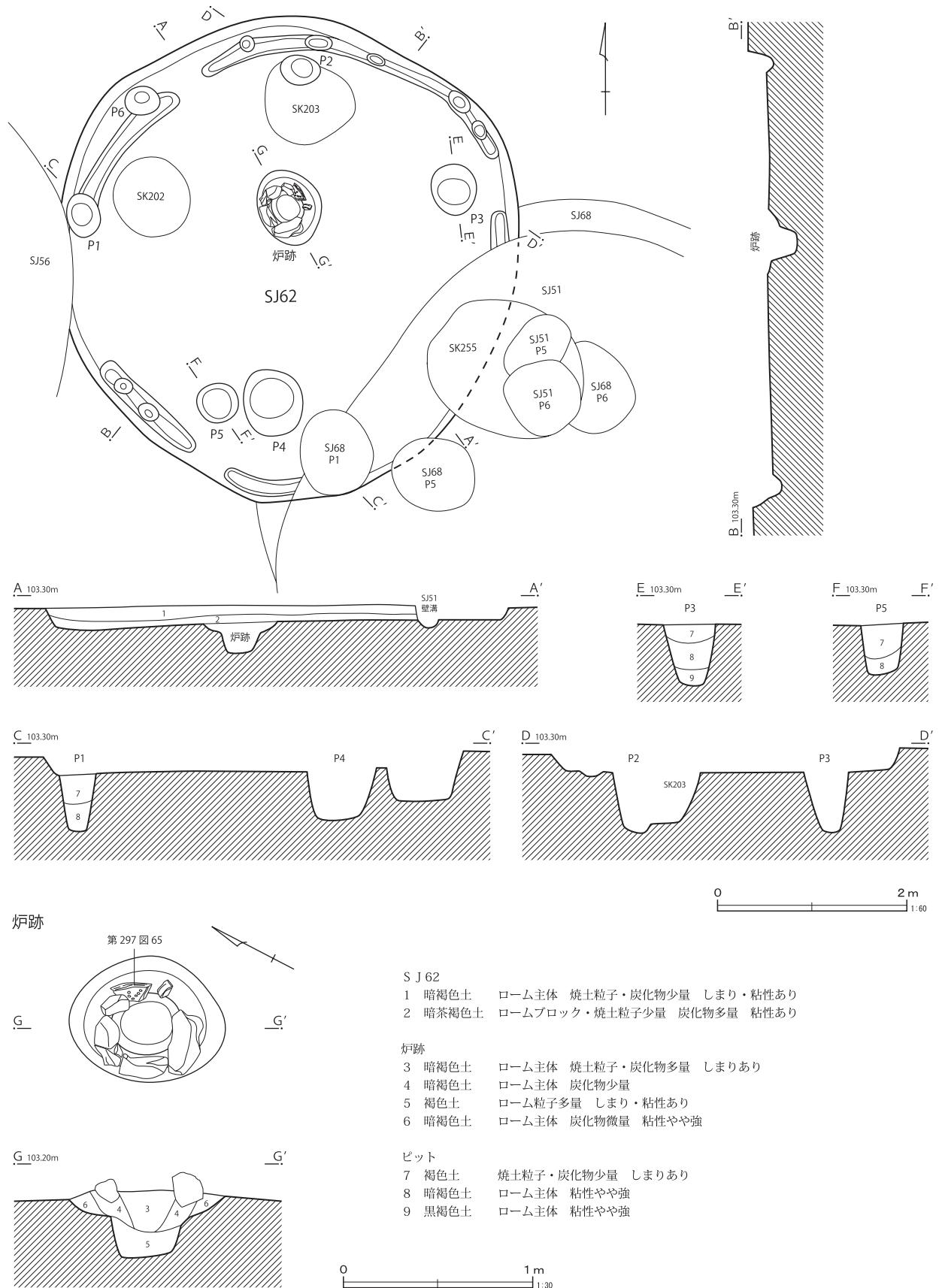
2～6は勝坂系の土器で、勝坂式終末から加曾利E式初頭と考えられる。

2・3は円筒形の深鉢形土器である。口縁部と底部を欠損している。2は隆帯で区画された頸部文様帶は幅広となっている。文様帶内には、隆帶主導で文様が施文される。隆帶上には、ハの字状に刻みが入る部分が多い。胴部には地文のみを施文している。地文は、単節R Lの縄文で、1と同様に条の方向が、縦方向に施文されるよう、原体を斜め方向に施文している。3は頸部に文様帶を持つが、胴部との区画は沈線文を施文している。文様帶は、幅広の沈線で文様を施文している。偏平な幅広の隆帯で円文を貼付する。円文の縁には刺突文を施している。胴部には地文のみを施文し、撲糸文Lを縦方向に施文している。

4は頸部から胴部の破片である。頸部に巡らす隆帯には、矢羽根状に短沈線を施文している。間には、4単位の上下の交互刺突を施文している。

第57表 第62号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.47	0.33	0.62	P 3	0.53	0.48	0.64	P 5	0.44	0.42	0.52
P 2	0.40	0.28	0.64	P 4	0.69	0.62	0.53	P 6	0.36	0.32	0.32



第292図 第62号住居跡



第293図 第62号住居跡遺物出土状況

地文は、単節R Lの縄文で、条の方向が、縦方向に施文されるよう、原体を斜め方向に施文している。底径9cmである。

5は底部が算盤玉状となる深鉢形土器である。胴部には地文のみが施文される。地文は0段多条の縄文で、条の方向が、縦方向に施文されるよう、原体を斜め方向に施文している。

6は丸みを帯びる胴部から底部が残存するもので、胴部には隆帯が貼付されるが、大部分が剥落している。地文は単節R Lの縄文である。

7は小型の深鉢形土器の胴部から底部が残存す

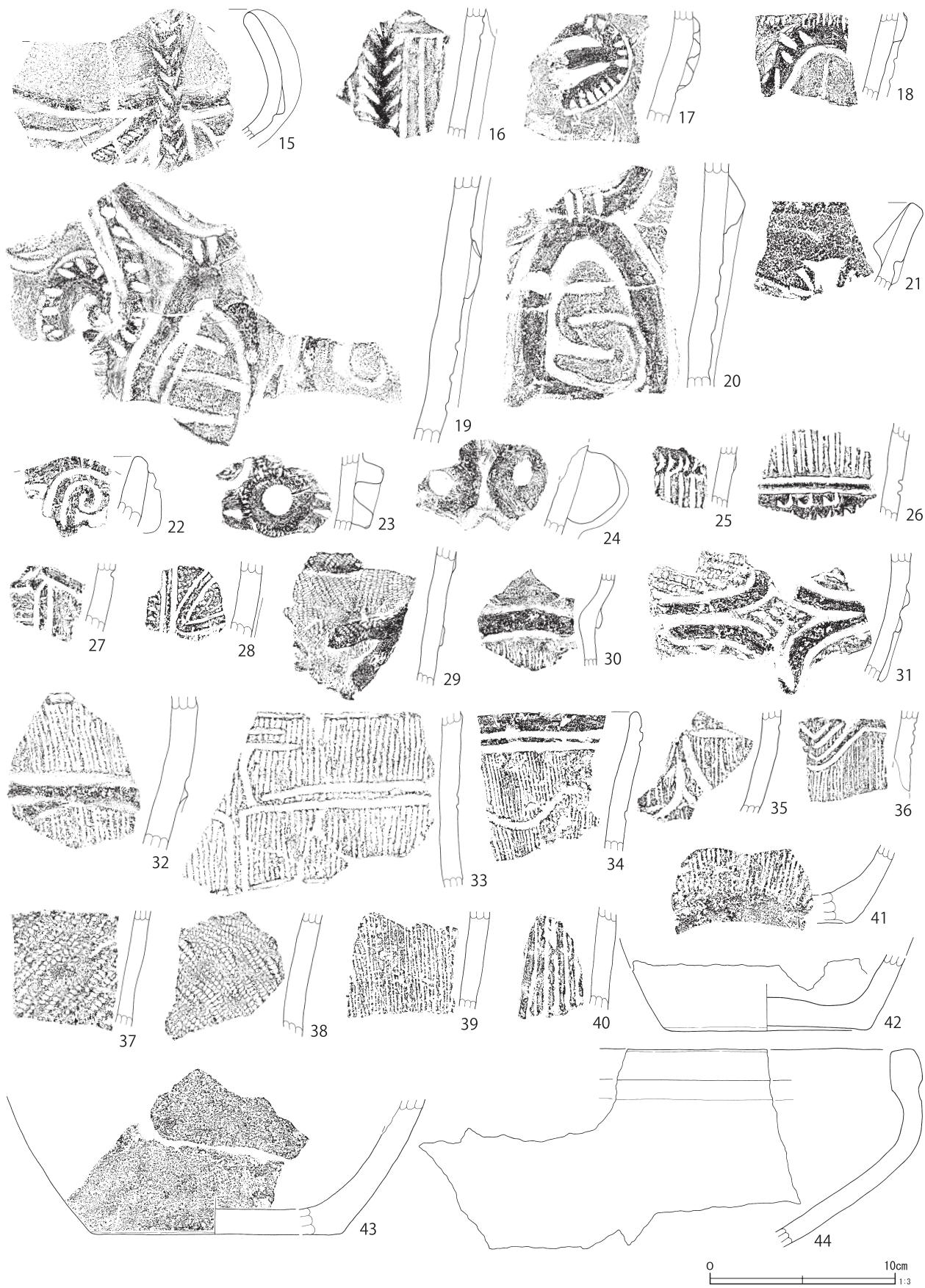
るもので、器面には整形痕が残存している。底径5.5cmである。

8は隆帯脇にキャタピラ状爪形文を施文する勝坂系土器である。

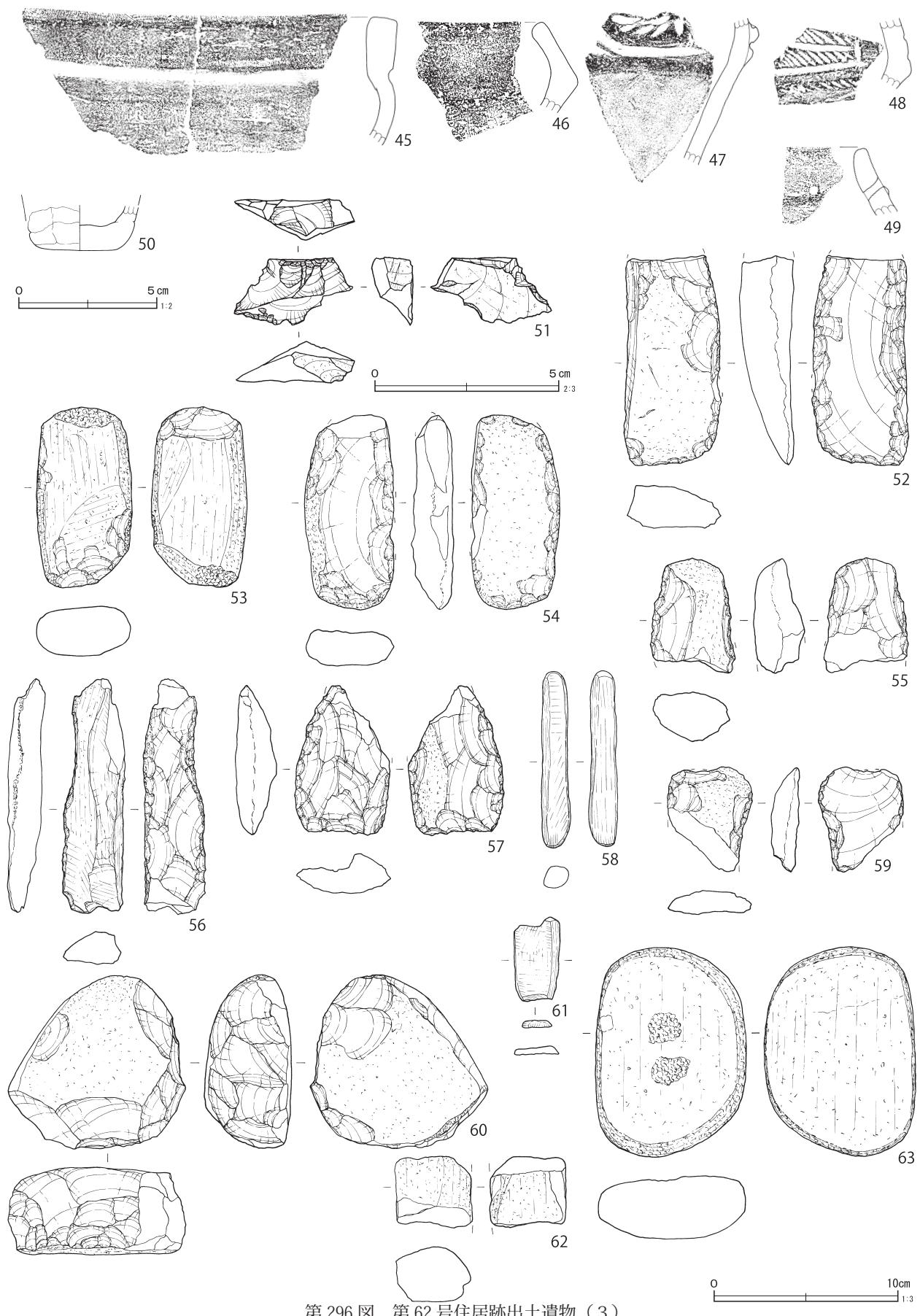
9～31は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器である。いずれも深鉢形土器の破片である。9～14、28は隆帯で区画された内側に、沈線文などの文様を細かく充填する土器である。9は円形刺突文を、14はペン先状結節沈線文を施文している。15～21は隆帯上の刻みに、



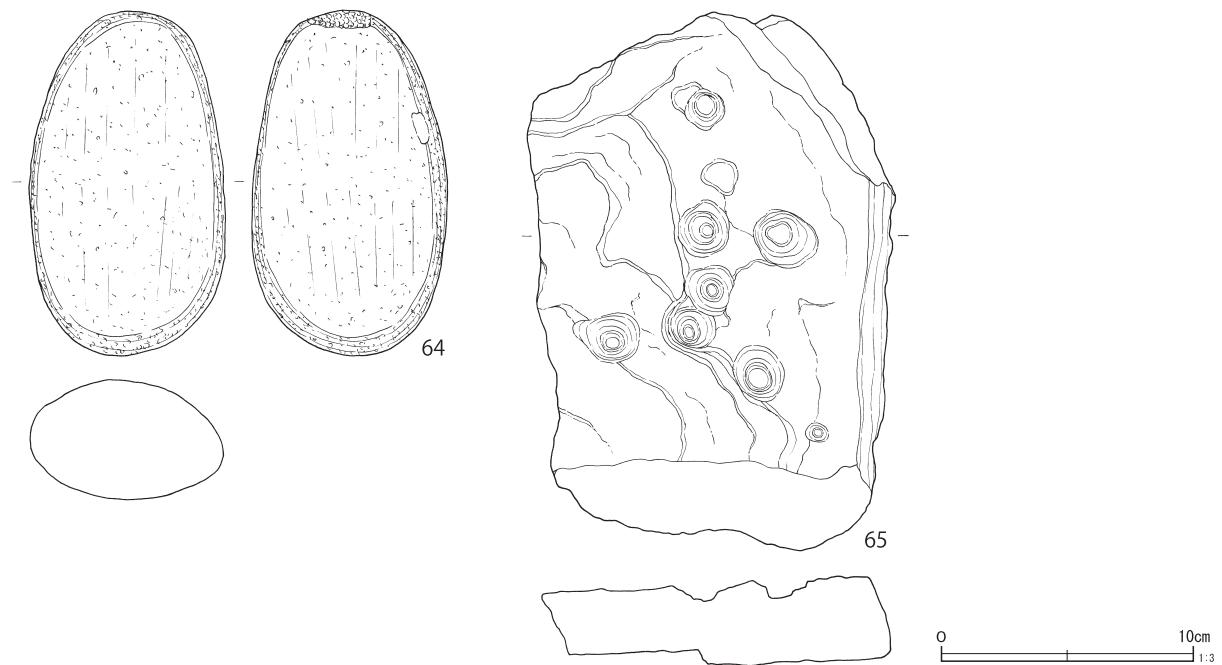
第294図 第62号住居跡出土遺物（1）



第295図 第62号住跡出土遺物（2）



第296図 第62号住居跡出土遺物（3）



第297図 第62号住居跡出土遺物（4）

細かい刻みは施されないので、対向する矢羽根状文や、交互刺突文を施文している。隆帯以外の文様も簡素化し、細かい文様は施文されない。22～24は口縁部の把手部分である。25～27は沈線文のみで文様を施文している。29～31は地文を施文するもので、貼付される隆帯には刻みは施文されていない。29は隆帯上にも地文を施文する土器で、地文は単節R Lの縄文で、横や縦方向に施文している。大木系と考えられる。30は撚糸文Lを、31は単節R Lの縄文を施文している。

32は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器の口縁部の破片である。地文は撚糸文Lである。

33は大木系の深鉢形土器の胴部破片で、平行する沈線文を、縦方向と横方向に直行するように組み合わせて施文している。地文は多条R Lの縄文で、条が縦方向に垂直に揃うよう、斜め方向に施文している。

34～36は連弧文系の深鉢形土器の破片である。地文は櫛歯状の条線である。

37～40は地文のみを施文する胴部の破片で、

37・38は単節R Lの縄文を、37は縦方向に、38は横から斜め方向に施文している。39・40の地文は条線である。

41～43は底部の破片である。41は胴部に撚糸文Lを地文として施文している。42・43は無文の底部である。底径は42が11cm、43は推定で13.5cmである。

44～48は浅鉢形土器の破片である。47・48は屈曲する肩部に文様を施文している。

49は有孔鍔付土器の口縁部の破片で、円孔は鍔部分ではなく、器面に穿たれている。

50はミニチュア土器で、深鉢形土器の底部と考えられる。底径2.8cmである。

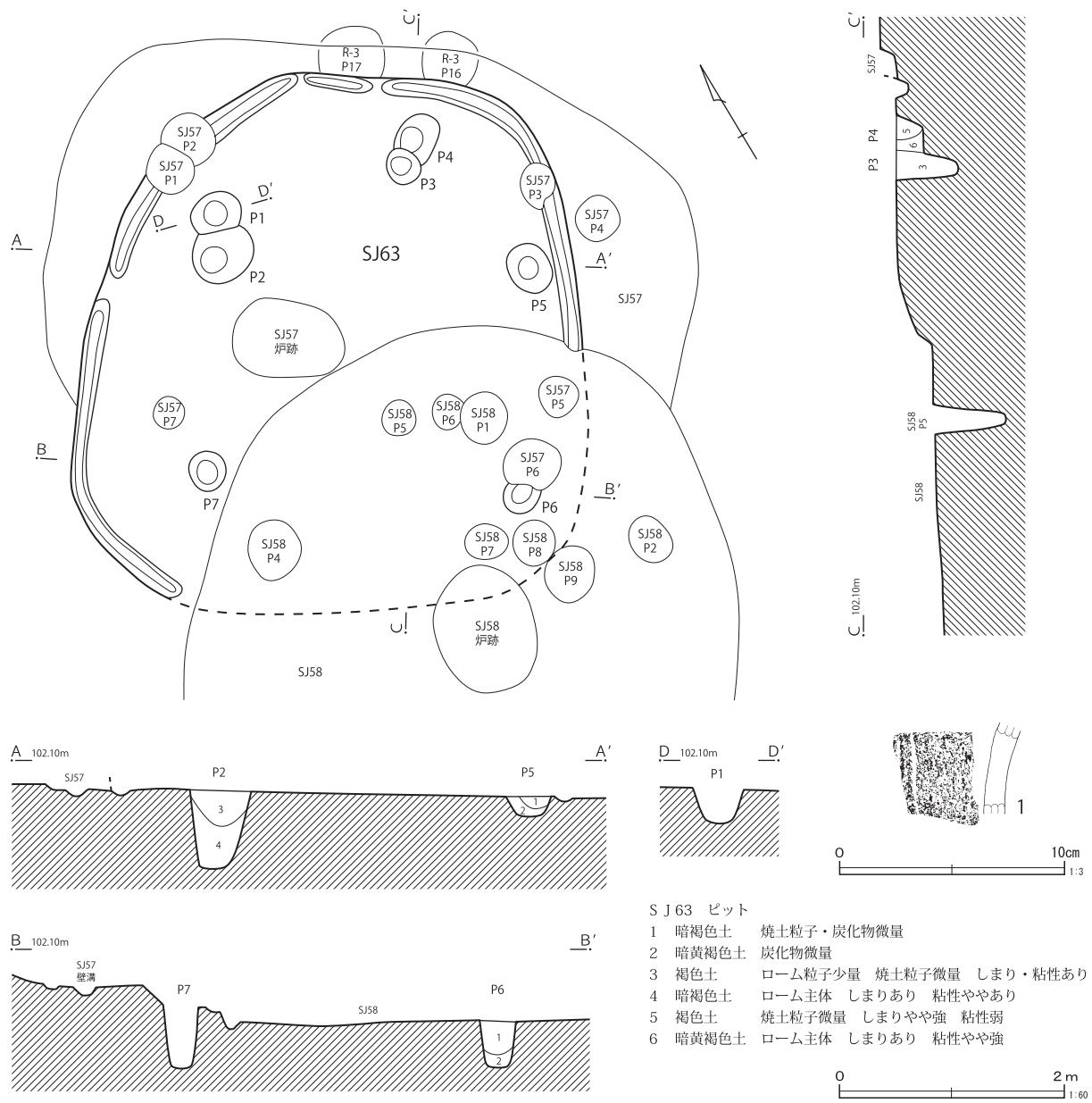
第296図51～63、第297図64・65は出土した石器である。51は黒曜石製の石核である。風化面が器面に残存している。52、54～57、59は打製石斧である。完形のものではなく、基部や刃部を欠損している。56は表面に研磨の痕跡があり、磨製石斧の未製品の可能性がある。53は敲石である。端部には敲打痕が顕著に認められる。58、61は砥石で

ある。60は礫器である。刃部は鈍角になっている。62~64は磨石である。63は表面に、敲打による浅い凹みが残されている。65は炉石に転用された石皿の破片である。裏面は剥落しており、表面には凹部が複数残されている。

住居跡の時期は、出土した土器から勝坂式終末から加曾利E式初頭である。

第63号住居跡（第298図）

R・S-3グリッドに位置する。重複する第57号住居跡、第58号住居跡の項で述べたとおり、遺構の切り合いなどから第63号住居跡が一番古い時期に構築されている。平面形は、残存している壁溝から、上辺が短い隅丸方形状となっている。推定範囲の規模は長径4.74m、短径4.27mである。



第298図 第63号住居跡・出土遺物

第58表 第63号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.45	0.35	0.30	P 4	0.38	0.36	0.28	P 6	0.33	0.25	0.36
P 2	0.57	0.48	0.71	P 5	0.44	0.44	0.17	P 7	0.35	0.33	0.51
P 3	0.31	0.29	0.53	—	—	—	—	—	—	—	—

壁溝は1条が検出された。壁溝の最大幅0.24m、深さ0.12mである。

柱穴は7本が検出された。P2、P3、P7が主柱穴に相当すると考えられるが、北側から柱穴は検出されておらず、明確ではない。

重複する第57・58号住居跡によって、床面は失われたため、炉跡は検出されなかった。

遺物はピット内から検出された第298図1のみだが、風化が著しく他遺構からの流れ込みの可能性が高い。1は深鉢形土器の胴部の破片で、地文として撲糸文Lを施している。

住居跡の詳細な時期は不明である。

第64号住居跡（第299～302図）

R-5・6グリッドに位置する。掘り込みは検出されず、壁に沿って掘り込まれた壁溝が残存している。西側に重複する第65号住居跡は、覆土はなく現状では床面は同じレベルであるが、出土遺物からすると本住居跡が新しい。南側に重複する第69号住居跡は、本住居跡よりも床面が深いが出土遺物からは本住居跡が新しく、第69号住居跡の廃絶後に本住居跡が建てられたと考えられる。同時に調査をしたため、住居跡の重複部分は失われている。平面形はおにぎり形の橿円形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-60°-Eをとる。規模は長径5.43m、推定される短径4.47m、深さ0.18mを測る。

壁溝は、出入り口側部分で途切れて検出されている。壁溝の最大幅0.32m、深さ0.06mである。

柱穴は4本が検出された。P1～P3が主柱穴と考えられるが、他の主柱穴は第69号住居跡と重複部分にあり、調査時に失われた可能性もある。P4は出入り口部のピットと考えられる。

炉跡は中央よりやや東側で検出された。炉跡は掘り方の内側に、石を方形に配置する石囲炉である。炉跡の中央部分には、円形の落ち込みがあり炉体土器が設置されていた可能性もある。炉跡の

規模は、石囲部分の長径0.98m、幅0.60mである。掘り方の長径1.15m、短径0.71m、深さ0.22mである。

第301図1～38は出土した土器である。

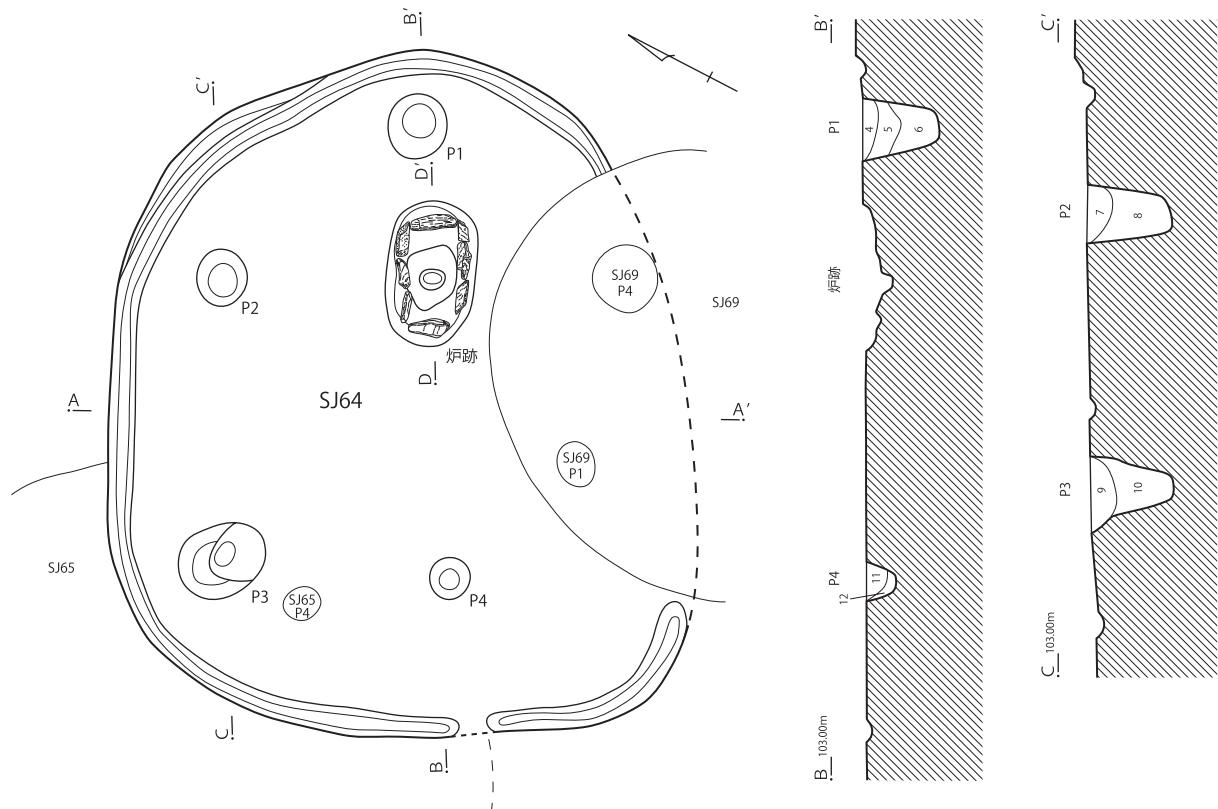
1・2は勝坂系の深鉢形土器の破片である。1は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線を沿わしている。2は沈線で文様を施文している。

3～28は加曾利E系の深鉢形土器の破片である。3～14は口縁部の破片である。口縁部には、隆帶でS字文や渦巻文を施文している。地文は、器面の剥落が著しいため、不明なものもあった。3は撲糸文Lを縦方向に施文している。4～6は縄文を施文すると考えられるが、詳細は不明であった。7、9は単節R Lの縄文を横方向に施文している。8は多条R Lの縄文を横方向に施文している。11～14は頸部の無文部が残る。15～27は隆帯を貼付する頸部から胴部の破片である。15、22は頸部の破片で、無文の頸部と胴部を隆帯で区画している。16～21、25・26は頸部から胴部の破片で、胴部には隆帶による直線的な懸垂文や蛇行懸垂文を施文している。23・24は胴部を縦に分割し、その中に文様を施文すると考えられる。23は大型渦巻文や、U字文様を貼付している。地文は、16～20は撲糸文Lを縦方向に施文している。21、23、25は多条R Lの縄文を縦方向に施文している。24、26は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。27・28は沈線で文様を施文するもので、直線的な懸垂文や蛇行懸垂文を施文している。地文として、27は撲糸文Lを縦方向に施文している。28は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。

29～34は地文のみを施文する深鉢形土器の胴部の破片である。30は撲糸文L、31は撲糸文Rを縦方向に施文している。32は単節R Lの縄文を、33は無節Rの縄文を、34は単節R Lの縄文を施文している。

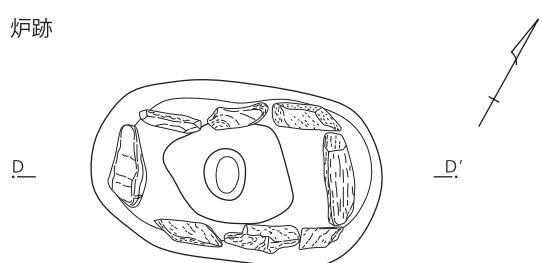
35は底部の破片で、地文は撲糸文Lである。

36・37は浅鉢形土器の口縁部の破片である。



S J 64 ピット

4	褐色土	ローム質土	焼土粒子・炭化物少量
5	暗褐色土	焼土粒子・炭化物少量	しまりあり
6	暗褐色土	焼土粒子・炭化物少量	
7	褐色土	焼土粒子・炭化物少量	
8	暗褐色土	焼土粒子少量	炭化物やや多い
9	褐色土	ロームが点在	焼土粒子・炭化物少量
10	暗褐色土	焼土粒子・炭化物少量	
11	褐色土	ローム質土	焼土粒子・炭化物少量 しまりあり 粘性弱い
12	暗褐色土	焼土粒子・炭化物少量	しまりあり

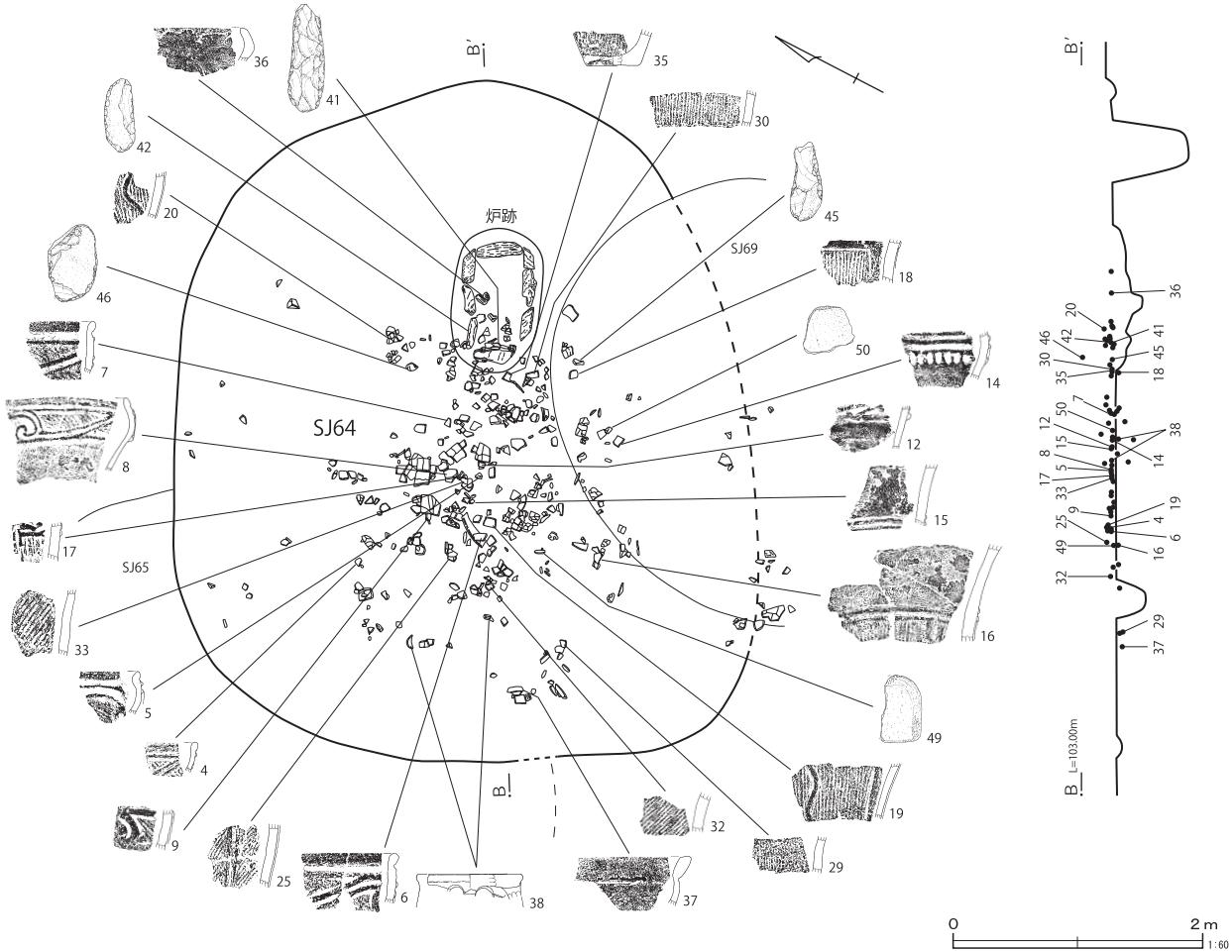


S J 64 炉跡

1	暗褐色土	ローム粒子多量	焼土粒子・炭化物少量	しまり・粘性あり
2	褐色土	ローム粒子少量	しまり・粘性あり	
3	暗褐色土	ローム粒子多量	焼土粒子少量	しまり・粘性あり



第299図 第64号住居跡



第300図 第64号住居跡遺物出土状況

第59表 第64号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.52	0.47	0.63	P 3	0.72	0.55	0.64	P 4	0.33	0.33	0.22
P 2	0.43	0.40	0.69	—	—	—	—	—	—	—	—

38は器台の破片である。

認められる。

第302図39~51は出土した石器である。

住居跡の時期は、出土した遺物から加曾利E I

39は使用痕のある剥片である。両側縁の鋭い端部を、刃部として使用すると考えられる。

式期と考えられる。

40~46は打製石斧である。40~42は短冊形で、43は刃部に最大幅を持つ撥形である。44・45は片側縁部に抉りが入り、形側縁部が外湾する形状のもので、41・42も抉りは入らないが、似たような形状を持っている。

第65号住居跡 (第303~305図)

47・48は砥石である。小型のもので、器面はよく磨かれている。

R-5・6グリッドに位置する。前項でも触れたとおり、出土遺物から重複する第64号住居跡よりも古い住居跡であると考えられる。住居跡の北側には住居廃絶後に、第18号集石土壙が掘り込まれている。壁に沿って壁溝が巡るが、北側と南側で部分的に途切れている。平面形は円形に近いもので、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-

49~51は磨石である。いずれも端部に敲打痕が



第301図 第64号住居跡出土遺物(1)



第302図 第64号住居跡出土遺物（2）

38°-Wをとる。規模は長径4.95m、推定される短径4.47m、深さ0.11mを測る。壁溝の最大幅0.24m、深さ0.06mである。

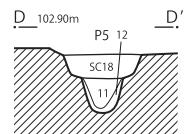
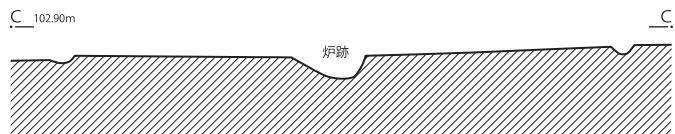
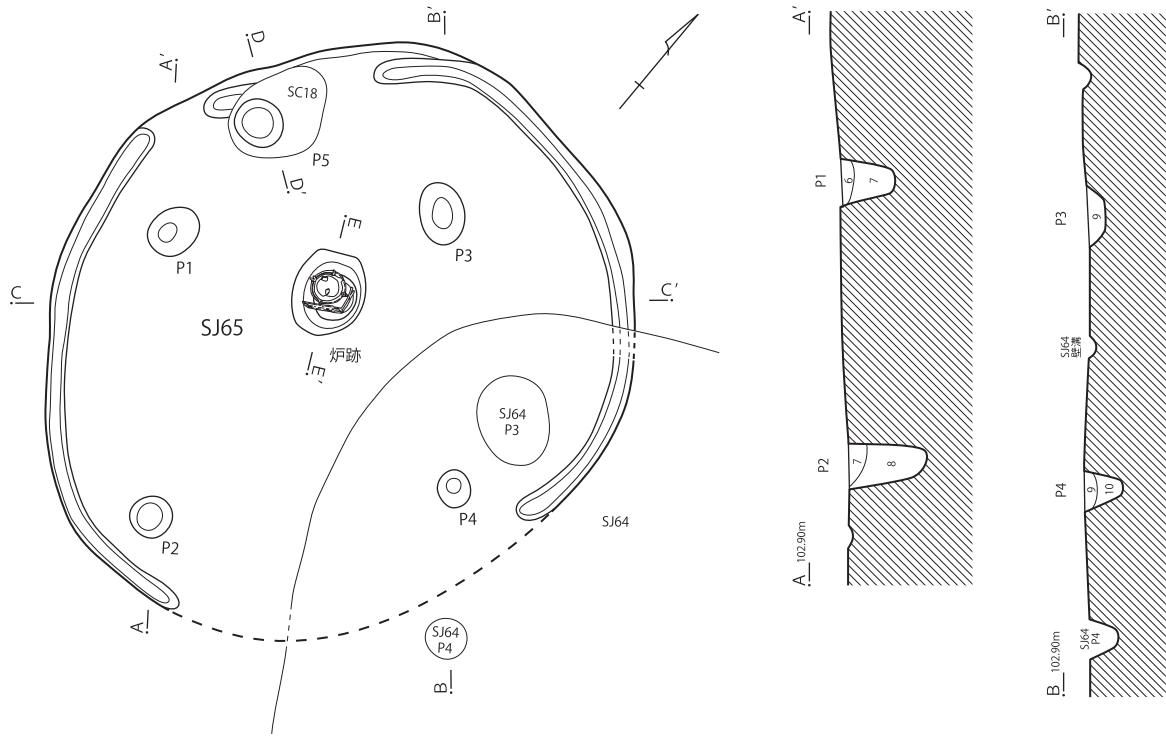
柱穴は5本が検出された。それぞれ主柱穴として使用されたものと考えられる。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡の中央からは、第305図1の深鉢形土器が炉体土器として埋設されていた。土器は口縁部から胴部上半を利用しており、胴部下半は失われていた。また炉体土器の周りには方形状に第305図10の石皿

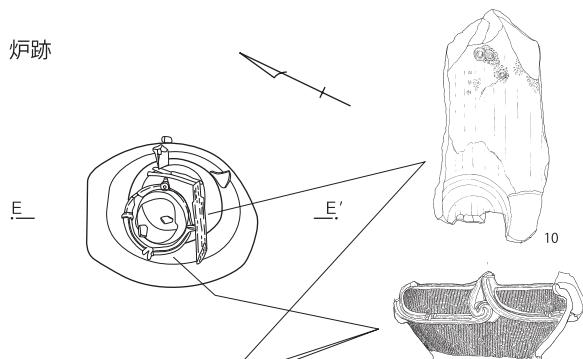
の破片など使用して囲む、石囲埋甕炉の形状をしている。炉跡の掘り方の規模は、長径0.68m、短径0.57m、深さ0.15mである。

第305図1～8は出土した土器である。いずれも勝坂式終末から加曾利E式初頭の深鉢形土器である。

1は炉跡に埋設された炉体土器である。口縁部が内湾し、胴上部で括れる器形である。口縁部には4単位の方形区画を隆帯で施し、連結部には渦巻文を配している。正面と裏面の口縁部には渦

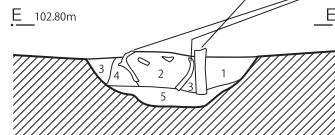


炉跡



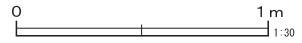
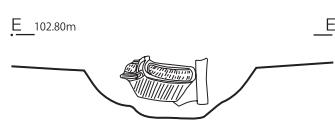
S J 65 ピット

- 6 暗褐色土 焼土粒子少量 炭化物微量
- 7 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少量
- 8 褐色土 炭化物微量 7層より明るめ
- 9 褐色土 暗褐色ローム質土多量 しまりあり
- 10 暗褐色土 ローム質土主体層 しまり・粘性あり
- 11 暗褐色土 焼土粒子微量 炭化物少量
- 12 褐色土 ロームブロック少量 焼土粒子・炭化物微量



S J 65 炉跡

- 1 褐色土 ローム粒子少量 しまり・粘性あり
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物少量 しまり・粘性あり
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量 しまりあり 粘性弱い (石を設置してあった部分か)
- 4 黄褐色土 ローム主体 しまりあり 特に硬化し被熱を受けている 部分的に赤色化する
- 5 黄褐色土 ローム主体 しまりあり



第303図 第65号住居跡

第60表 第65号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.43	0.33	0.49	P 3	0.49	0.35	0.13	P 5	0.40	0.38	0.30
P 2	0.34	0.33	0.63	P 4	0.30	0.26	0.28	—	—	—	—

巻状に盛り上がる突起を貼付している。正面の突起からは、隆帯を垂下させ先端を渦巻状に施文している。地文は多条R Lの縄文を、条が直線的に垂下させるように、原体を斜め方向に施文している。口径22cmである。

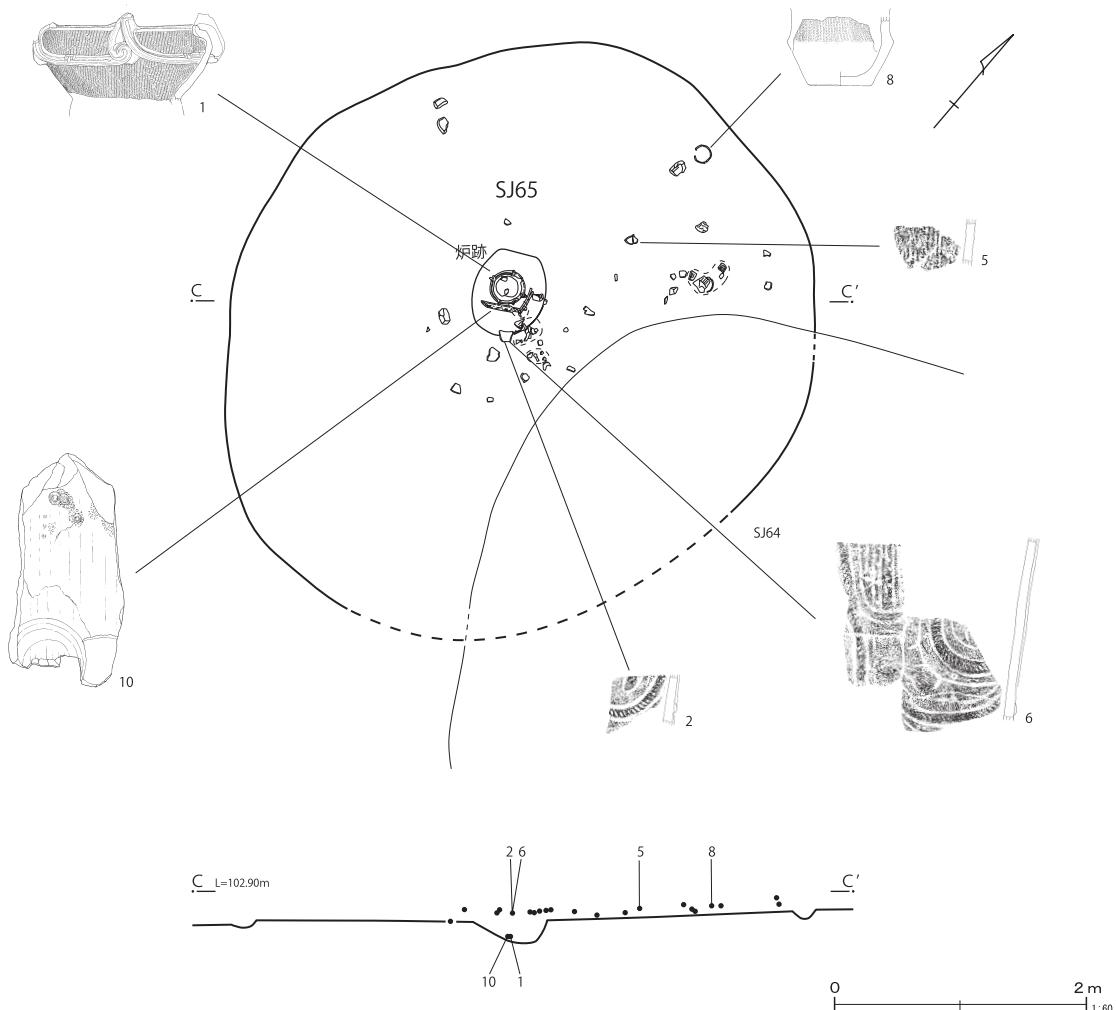
2・3、6は深鉢形土器の頸部から胴部である。隆帯上に刻みを持つもので、隆帯脇には沈線を沿わしている。2、6は隆帯で施文された文様間に、沈線文を施文している。4は深鉢形の口縁部の破片で、隆帯に交互刺突を加えている。5は深鉢形土器の胴部の破片で、多条R Lの縄文を斜め方向

に施文する。7・8は底部で、8は算盤玉状となっている。7の地文は単節L Rの縄文で、8は撫糸文Rを縦方向に施文している。

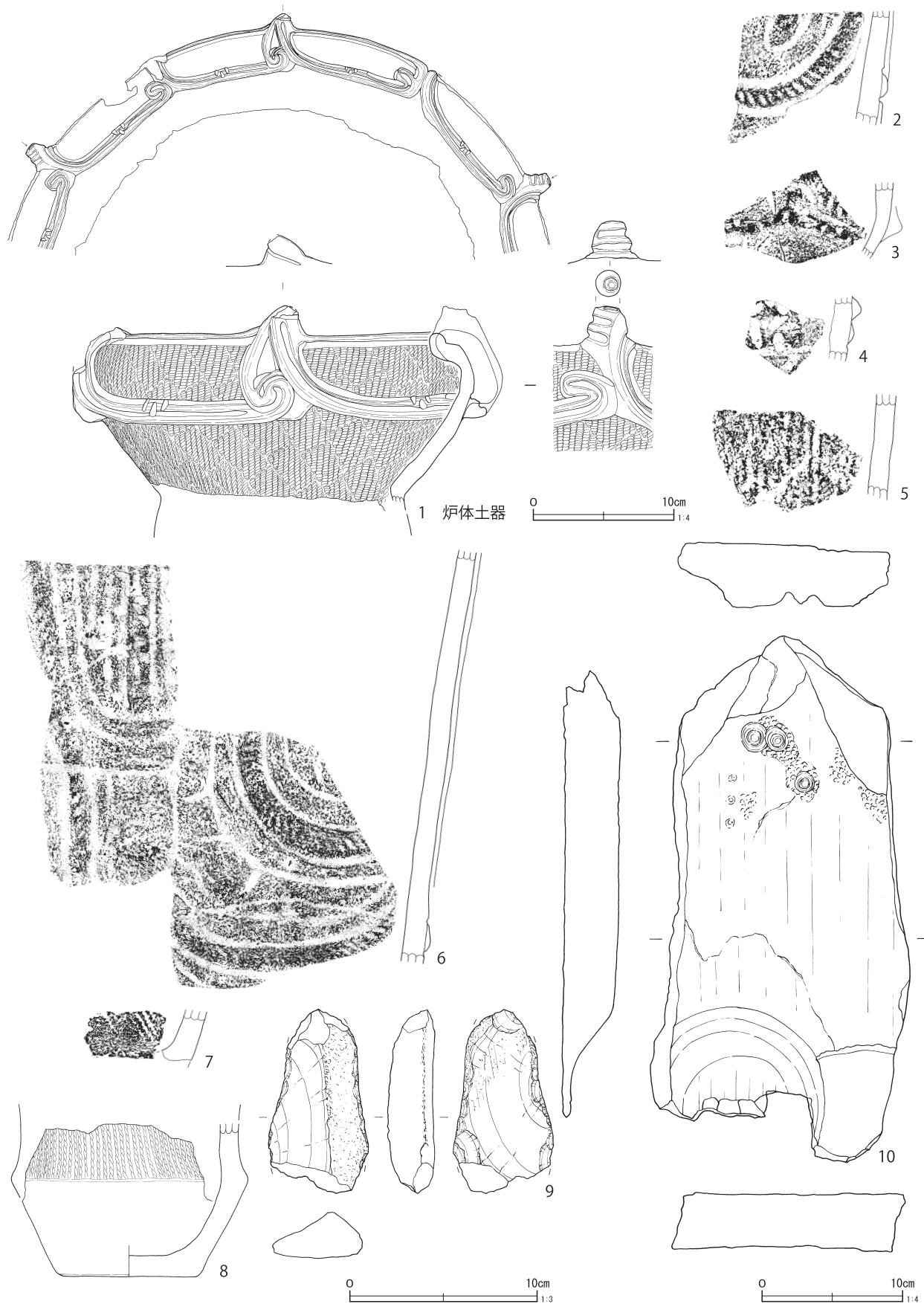
第305図9・10は出土した石器で、9は打製石斧で、基部と刃部を欠損する。

10は炉石に転用された石皿で、裏面は剥落している。表面には凹部や敲打痕が残存している。器面は被熱により赤化している。

住居跡の時期は、炉跡に埋設された第305図1の炉体土器から、勝坂終末から加曾利E式初頭と考えられる。



第304図 第65号住居跡遺物出土状況



第305図 第65号住居跡出土遺物

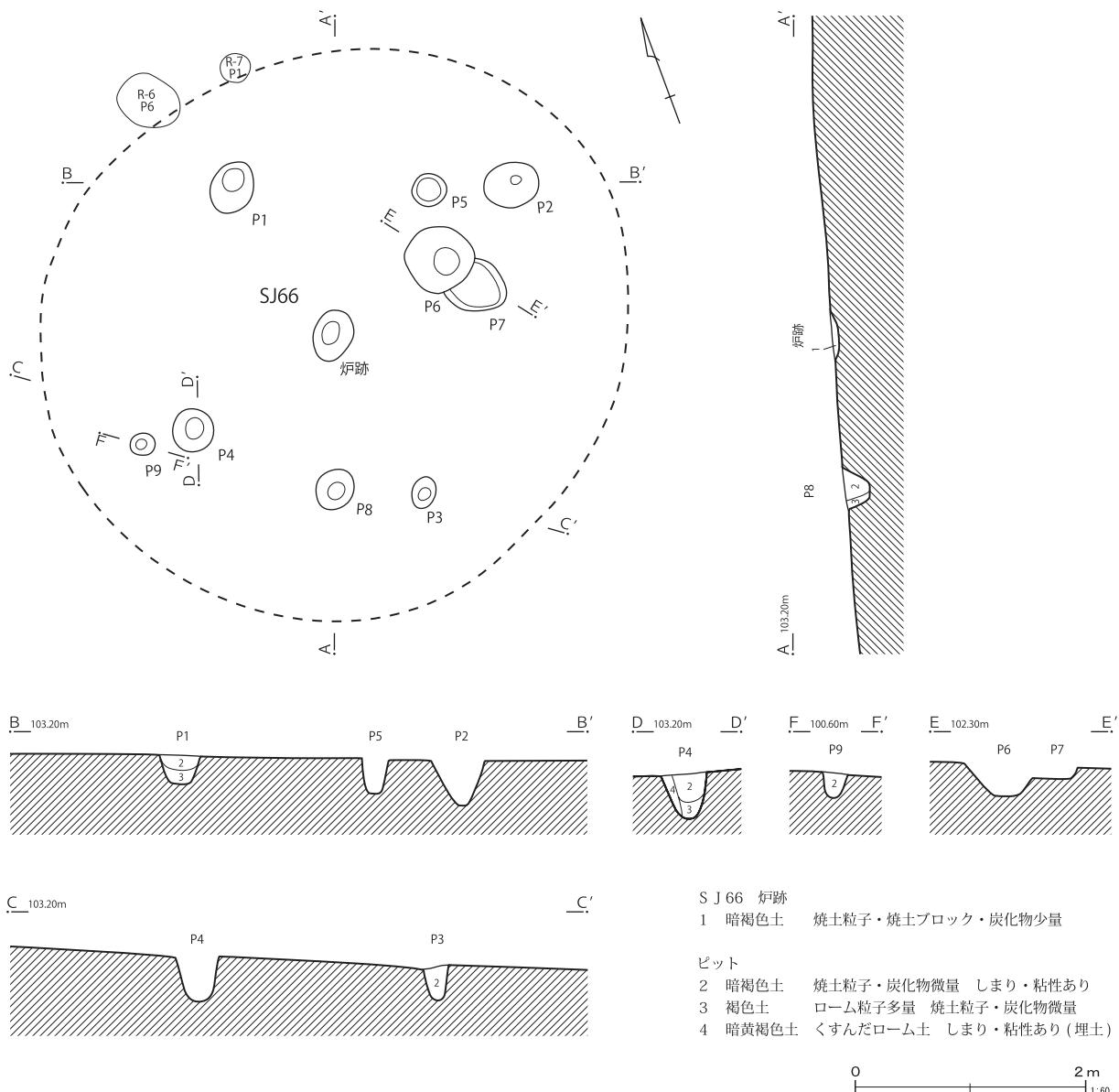
第66号住居跡（第306図）

R-6・7グリッドに位置する。東側に第67号住居跡が近接している。地山は南に向かって緩やかに傾斜している。掘り込みは検出されず、そのため柱穴と炉跡のみが残存している。平面形は柱穴の配列から、円形に近いと推定される。推定さ

れた範囲の規模は、長径5.18m、短径4.89mである。

柱穴は9本が検出された。そのうち、P1～P4の4本が主柱穴と考えられる。

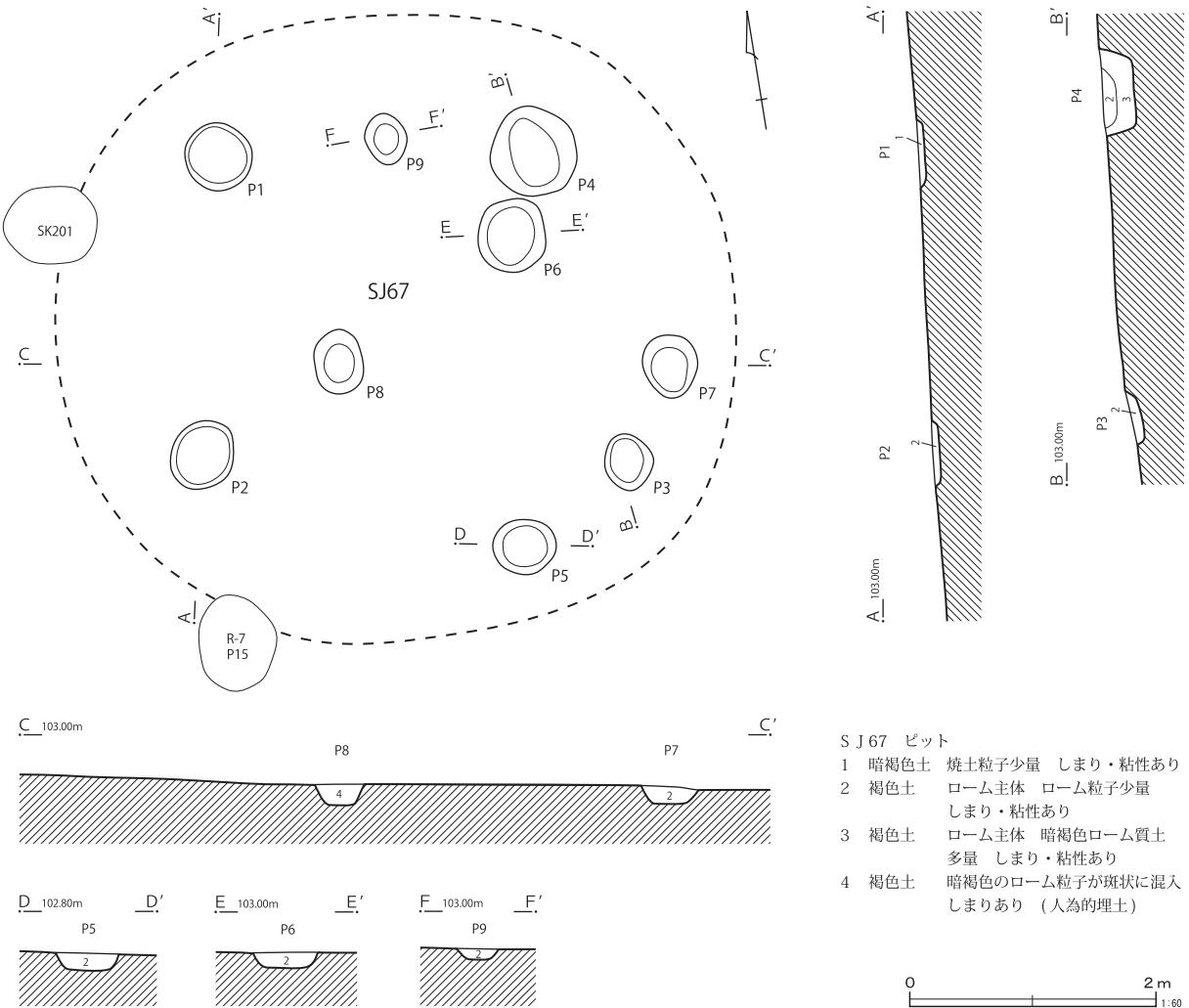
炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡はほぼ底面に近く、現状での形状は地床炉である。



第306図 第66号住居跡

第61表 第66号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.47	0.36	0.24	P 4	0.37	0.35	0.38	P 7	0.46	0.40	0.09
P 2	0.48	0.39	0.39	P 5	0.30	0.29	0.29	P 8	0.37	0.32	0.22
P 3	0.28	0.21	0.29	P 6	0.62	0.57	0.29	P 9	0.22	0.20	0.21



第62表 第67号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.55	0.44	0.04	P 4	0.72	0.71	0.27	P 7	0.54	0.43	0.13
P 2	0.55	0.50	0.04	P 5	0.51	0.44	0.12	P 8	0.53	0.38	0.16
P 3	0.47	0.40	0.07	P 6	0.60	0.54	0.11	P 9	0.41	0.34	0.08

規模は、長径0.45m、短径0.34m、深さ0.06mである。

住居跡に確実に伴う遺物が検出されなかった。そのため、住居跡の詳細な時期は不明である。

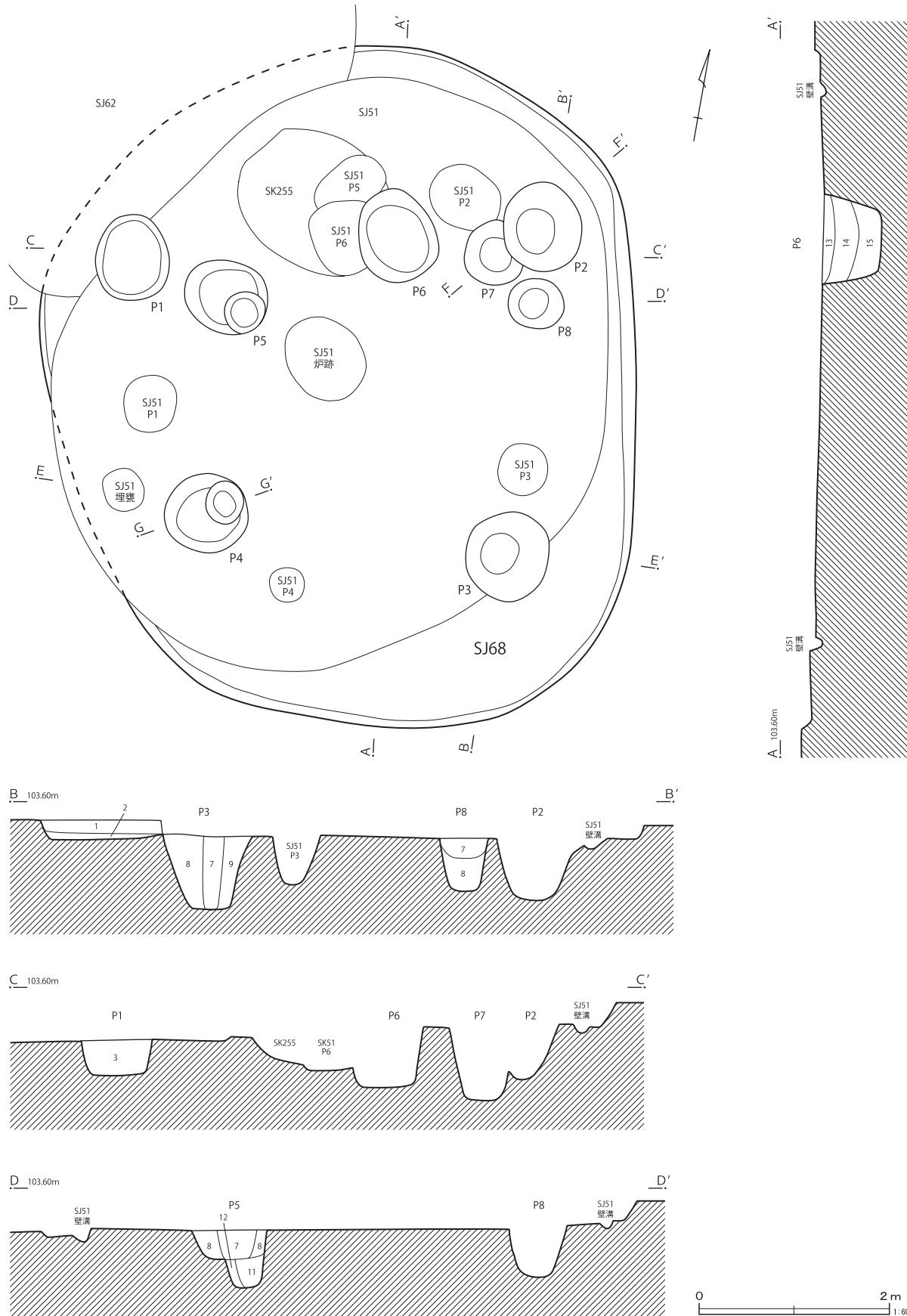
第67号住居跡（第307図）

R-7グリッドに位置する。西側に第66号住居跡が近接している。地山は南に向かって緩やかに傾斜している。掘り込みは検出されず、床面も削られており、そのため柱穴のみが残存してい

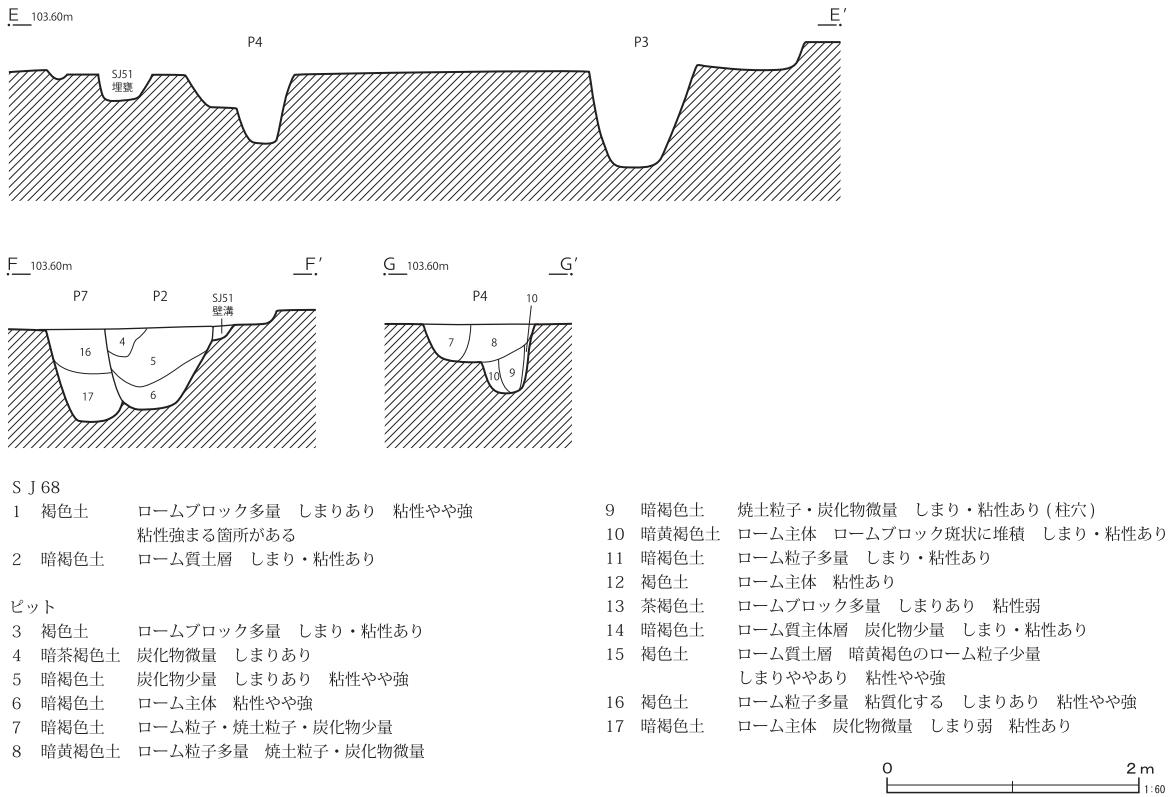
る。平面形は柱穴の配列から、円形に近いと推定される。推定された範囲の規模は長径5.48m、短径5.17m、深さ0.19mである。

柱穴は9本が検出された。柱穴はごく浅いものが多い。床面が大きく削られた可能性がある。痕跡に近い柱穴もあるが、配置から考えると、P 1、P 2、P 4、P 5の4本が主柱穴である可能性が考えられる。

炉跡は検出されなかった。床面とともに削られたと考えられる。



第308図 第68号住居跡（1）



第309図 第68号住居跡（2）

第63表 第68号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.90	0.77	0.39	P 4	0.86	0.82	0.54	P 7	0.67	0.46	0.77
P 2	0.92	0.83	0.62	P 5	0.89	0.79	0.60	P 8	0.60	0.52	0.57
P 3	0.92	0.88	0.76	P 6	0.97	0.81	0.61	—	—	—	—

遺物は、住居跡に確実に伴うものは検出されなかった。そのため、住居跡の詳細な時期は不明である。

第68号住居跡（第308・309図）

O・P-7グリッドに位置する。部分的に覆土が残存している。住居跡内に重複している第51号住居跡は、遺構の切り合い関係から本住居跡よりも新しい。北西側に重複する第62号住居跡は、本住居跡が遺物を出土しなかったため、新旧関係は明確にできなかった。また、住居跡内の北西側には第255号土壙が重複している。比較する出土遺物もなく、新旧関係は不明である。住居跡の規模は、平面形が橿円形で、柱穴を基準とした主軸方位は、N-7°-Wをとる。規模は長径7.13m、短径6.17m、深さ0.17mである。

柱穴は8本が検出された。P 1～P 4が主柱穴であると考えられる。

重複している第51号住居跡によって、床面が掘削されているため、炉跡は検出されなかった。

確実に本住居跡に伴う遺物は検出されなかったため、詳細な時期は不明である。

第69号住居跡（第310～313図）

R-6グリッドに位置する。地山は南に向かって傾斜している。そのため、南側の掘り込みは確認することができなかった。北側では、第64号住居跡と重複している。本住居跡の床面の方が深いが、第64号住居跡の出土遺物の方が新しいため、本住居跡の廃絶後に、第64号住居跡が構築されたと考えられる。東壁では第205号土壙と重複する。土壙の土層断面図から、本住居跡が新しい時期で

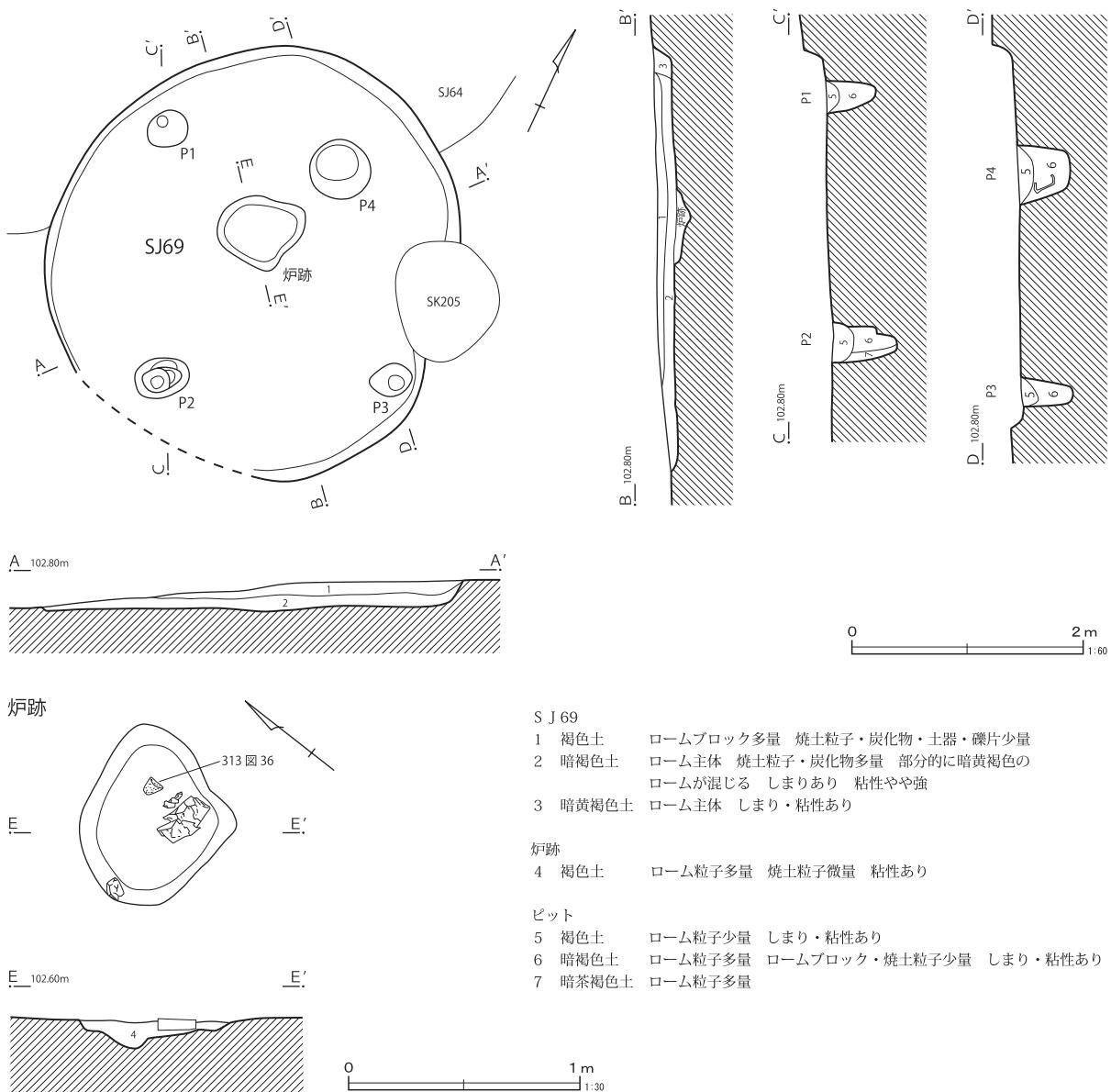
あることがわかっている。平面形は円形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-23°-Wをとる。規模は長径3.66m、短径3.62m、深さ0.24mを測る。

柱穴は4本が検出され、それぞれ主柱穴として使用されたと考えられる。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡内

からは、石が検出されており、炉跡が石囲炉の形状をしていた可能性もある。炉跡の規模は、長径0.78m、短径0.68m、深さ0.12mである。

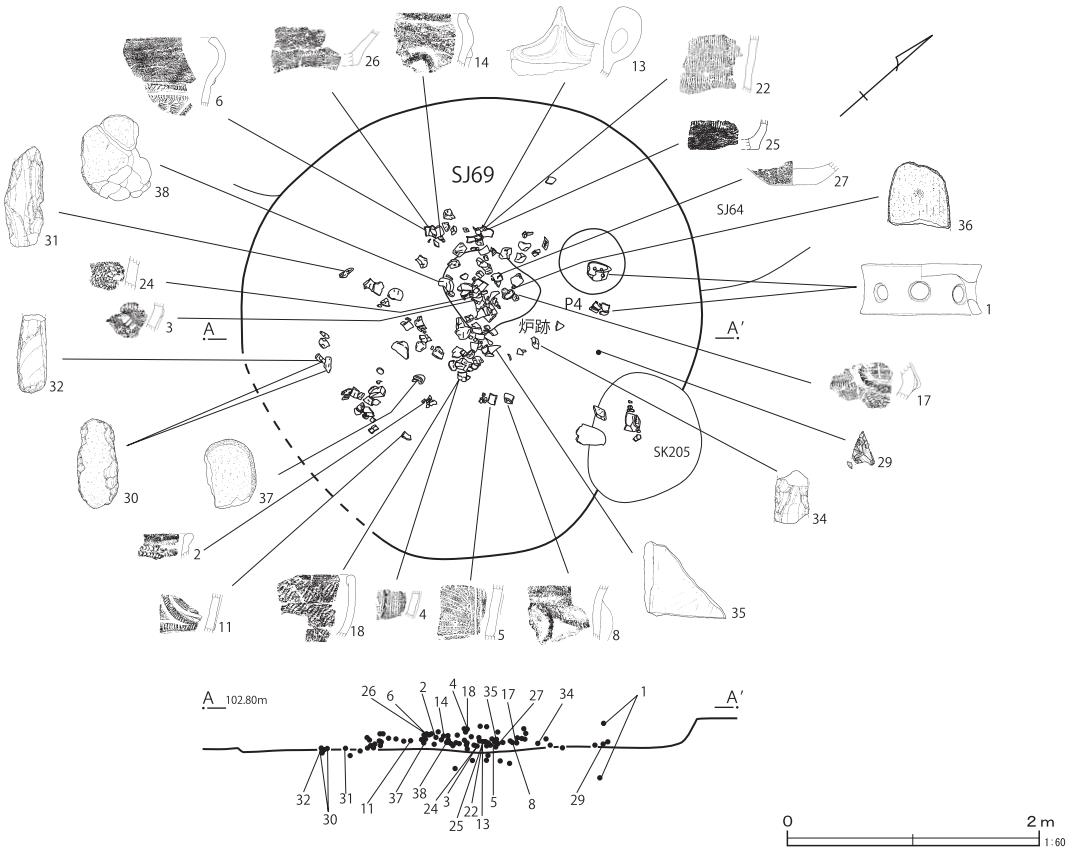
第312・313図は検出された遺物である。遺物は、第311図の遺物出土状況で見られるように、床面直上から検出されており、遺物の時期は住居跡の時期と同じだと考えられるが、出土している土器



第310図 第69号住居跡

第64表 第69号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.36	0.30	0.44	P 3	0.36	0.27	0.34	P 4	0.52	0.52	0.48
P 2	0.48	0.34	0.59	-	-	-	-	-	-	-	-



第311図 第69号住居跡遺物出土状況

のほとんどが小破片で、器形が復元できる土器は出土していない。

第312図1~28は出土した土器である。28以外は、勝坂終末から加曾利E式初頭の土器であると考えられる。

1は器台である。脚部には円孔が、7孔穿たれている。器台の上面の径18.8cm、脚部の径19cmである。

2、4は阿玉台系の深鉢形土器の破片である。2は口縁部で、隆帯による楕円区画文内に爪形文が2列施文されている。4は胴部で、隆帯脇に櫛歯状の条線が施されている。

3は隆帯脇にキャタピラ状の爪形文を施文する勝坂系の土器である。

5は隆帯脇に半截竹管で平行沈線を施文するもので、沈線文に沿って、半円状の蓮華文を施文している。

6~12は隆帯上に刻みを施すもので、隆帯脇

には沈線が施文されている。6は内湾する無文の口縁部を持つもので、隆帯脇の沈線文に沿って爪形文を施し、爪形文には蓮華文を施文している。7は突起を持つ円筒形の深鉢形土器の口縁部で、区画内には、短沈線や爪形文を施文している。

13~15は隆帯に刻みが施文されないものである。13は把手部分である。14・15は文様が簡素化し隆帯のみ施文される。

16は小波状沈線文を施文するものである。3の爪形文を施文する土器に伴うと考えられる。

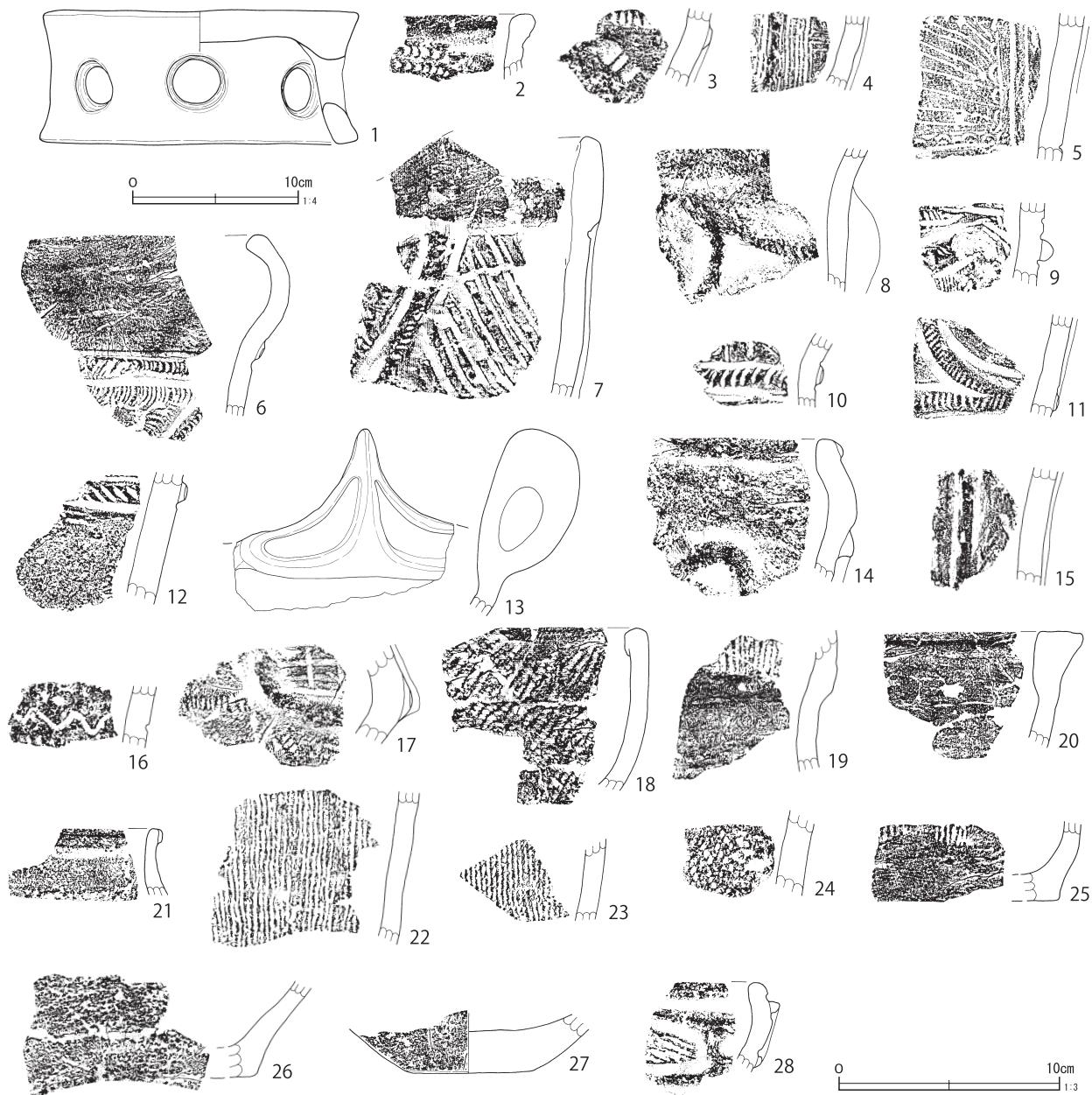
17は屈曲部に刻みを施すものである。

18は地文のみを施文する口縁部の破片で、地文は単節R Lの縄文で、横方向に施文している。

19は区画内に条線を施文している。

20~24は無文や地文のみ施す深鉢形土器の破片で、22・23は撚糸文Lを、24は単節R Lの縄文を施文している。

25~27は底部の破片で、25は深鉢、26・27は



第312図 第69号住居跡出土遺物（1）

浅鉢形土器と考えられる。

28は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器の口縁部の破片で、地文は撚糸文Lを横方向に施している。

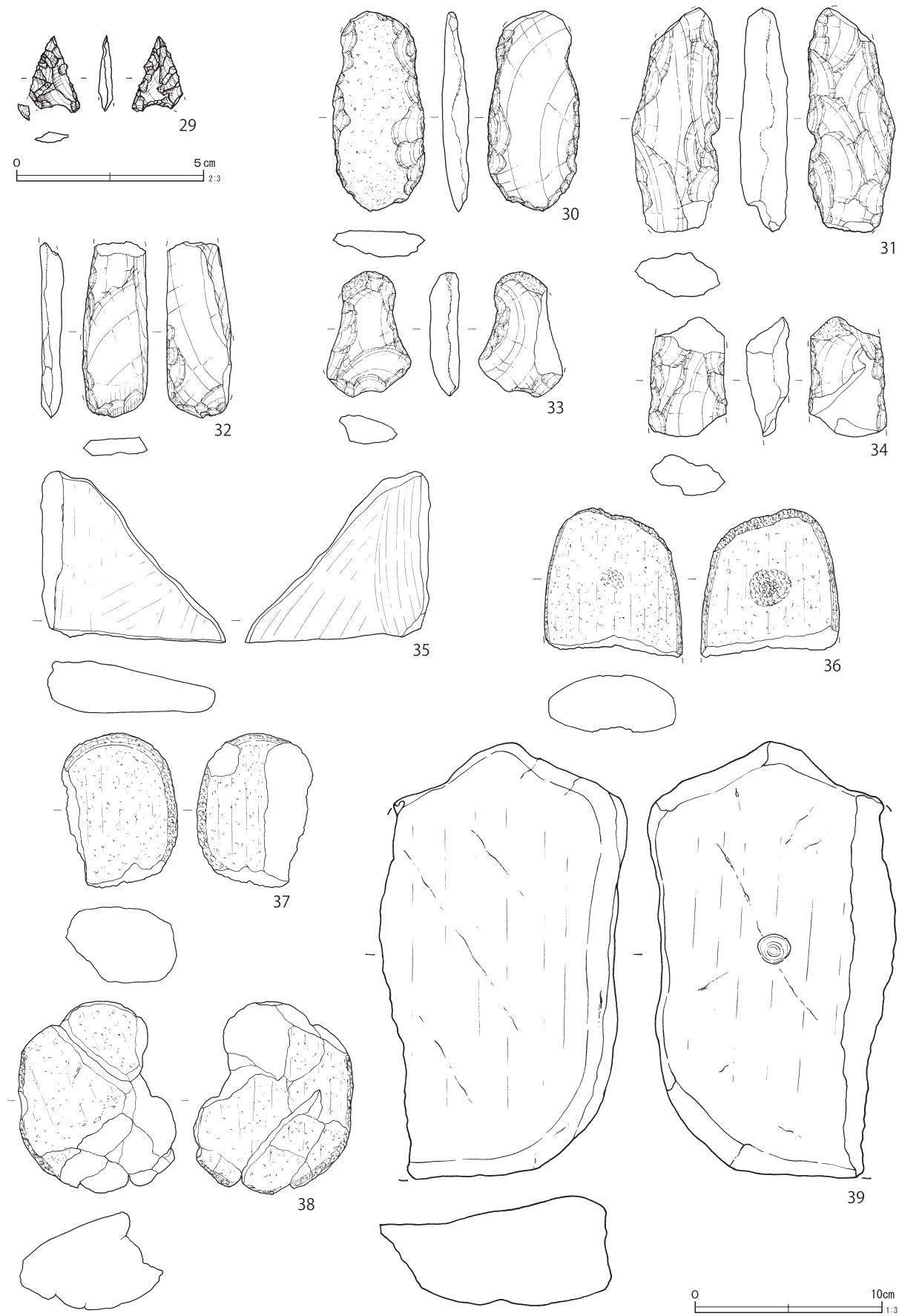
第313図29~39は出土した石器である。29は石鏃で、左脚部の先端を欠損する。基部には緩やかな抉りが入っている。30~34は打製石斧である。30は基部近くの側縁に浅い抉りを入れるものである。31は片側側縁が直線的で、片側側縁が外湾する形状である。32は刃部に擦痕が認められる。35

は砥石で、両面を使用している。36~38は磨石で、側縁に敲打痕が認められる。36は炉跡内から検出され表裏面には、敲打による凹部ができる。39は石皿である。左半部を欠損している。裏面に1個所、凹部が認められる。

住居跡の時期は、出土遺物から勝坂式終末から加曾利E式初頭である。

第70号住居跡（第314・315図）

O-5グリッドに位置する。住居跡の北側には



第313図 第69号住居跡出土遺物(2)

わずかに掘り込みと覆土が残存しているが、南側は、住居跡に伴う柱穴などは残存していない。第31・32号住居跡と、北側で重複しているが、本住居跡は、第31・32号住居跡の廃棄後構築され、床面の高低差が30cm程ある。そこから本住居跡が一番新しいと考えられる。北側には第212号土壙と重複するが、土壙の土層断面には住居跡の切り合はない、本住居跡が古い。南側には本住居跡と重複する位置に第110、165号土壙が位置するが、新旧関係は不明である。部分的に残存する壁溝から、平面形は円形に近いと推測される。検出された規模は長径4.57m、深さ0.25mである。壁溝の最大幅0.36m、深さ0.06mである。柱穴、炉跡は検出されなかった。

第315図1～24は出土した土器である。

1～7・17は加曾利E系の深鉢形土器の破片である。1～3は口縁部の破片である。3の地文は単節R Lの縄文で、斜め方向に施文している。4～7は胴部の破片で、4は沈線で蛇行懸垂文を施文している。5～7は沈線間を磨り消す磨消縄文

を施している。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。17は隆帯を連弧状に施している。

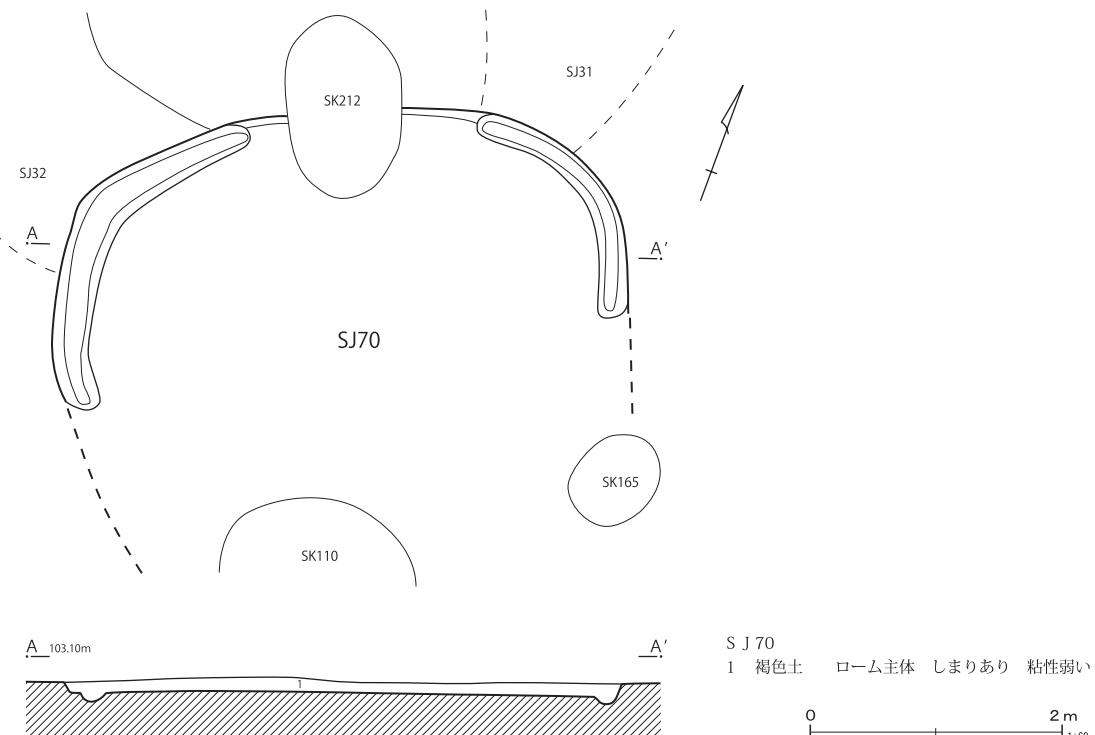
8～10は曾利系の重弧文系の深鉢形土器の破片である。いずれも口縁部の破片で、9は隆帯を貼付している。

11～16、18は連弧文系の深鉢形土器の破片で、器面には沈線を連弧状に施文している。11は口唇部に、2列円形刺突文を2列施文している。11、13の地文は撚糸文Lである。12は単節L Rの縄文を縦方向に施文する。14・15の地文は櫛歯状の条線である。16は連弧文内を磨り消すもので、地文は無節Lである。18は3本の沈線文を横方向に施文し、沈線文内には連続刺突文を施文している。

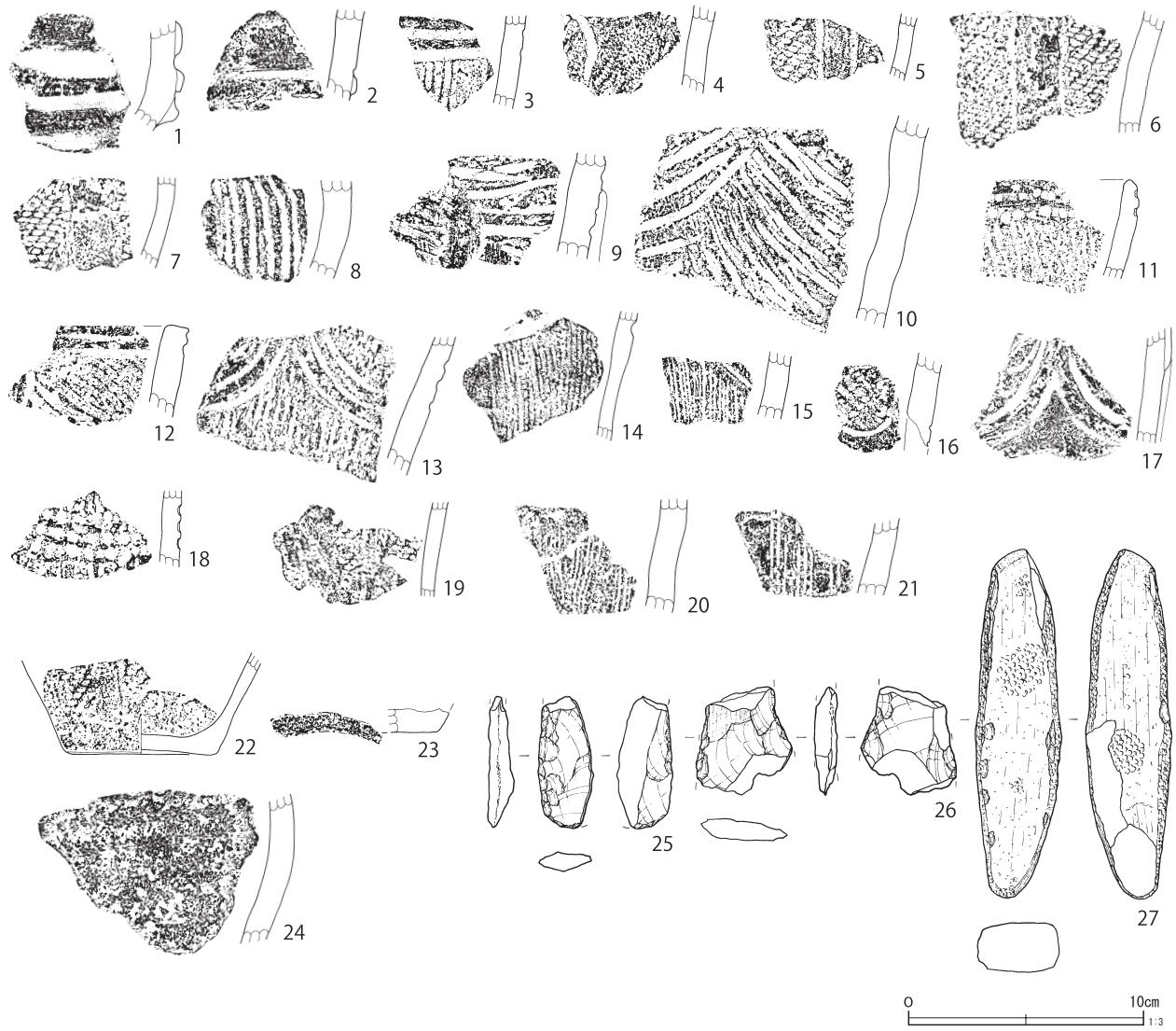
19～21は地文のみ施す胴部片で、19は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。20・21は条線を縦方向に施文している。

22・23は底部の破片で、22は胴部文様が懸垂文間を磨り消す磨消縄文で、地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。底径6.5cmである。

24は浅鉢形土器の破片である。



第314図 第70号住居跡



第315図 第70号住居跡出土遺物

第315図25～27は出土した石器である。

25・26は打製石斧で、25は側縁から刃部の破片、
26は側縁に抉りの入った脣部の破片である。

27は敲石である。棒状で、側縁部全体に敲打痕
が顕著に認められる。表裏面には、敲打による浅
い凹部が認められる。

住居跡の時期は、出土遺物から加曾利E III式と
考えられる。

第72号住居跡（第316・317図）

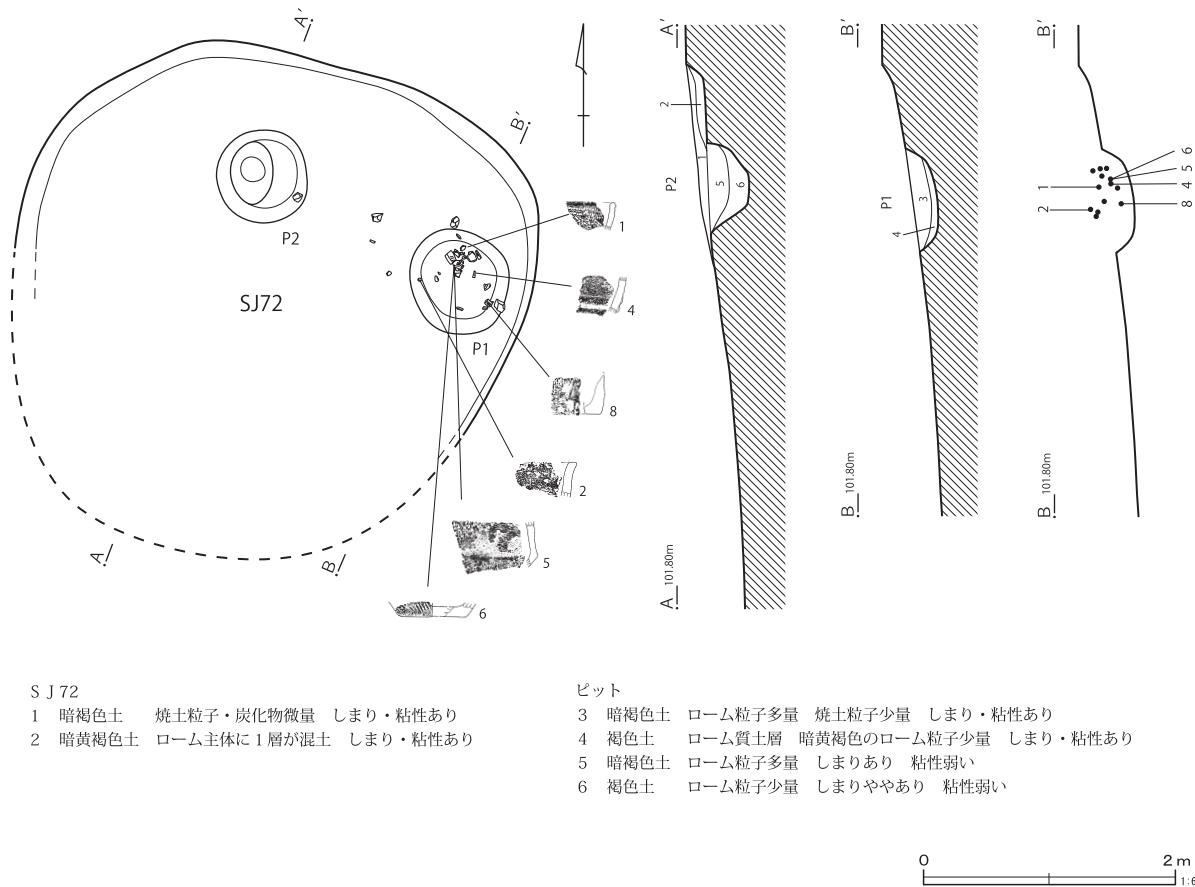
S-6・7グリッドに位置する。住居跡周辺の
地山は南に向かって傾斜を持っており、そのため
住居跡は北側の一部のみ残存している状況である。

残存部より平面形は円形に近いと考えられる。残
存部の長径4.04m、深さ0.33mである。

柱穴は、住居跡の北側から2本が検出されたが、
炉跡は検出されなかった。

遺物は、P 1内やその周辺から僅かに出土した
のみである。

第317図1～8は出土した土器である。1は深
鉢形土器の口縁部の破片で、結節沈線文を口縁部
に2本横方向に施し、その下に結節沈線による、
小波状文を施している。2～4は口縁部が無文
となる、深鉢形土器の破片である。2は口唇部が
角頭状となっている。3・4は無文の頸部と脣部
を区画する隆帯が、施文されている。5は算盤玉



第316図 第72号住居跡・遺物出土状況

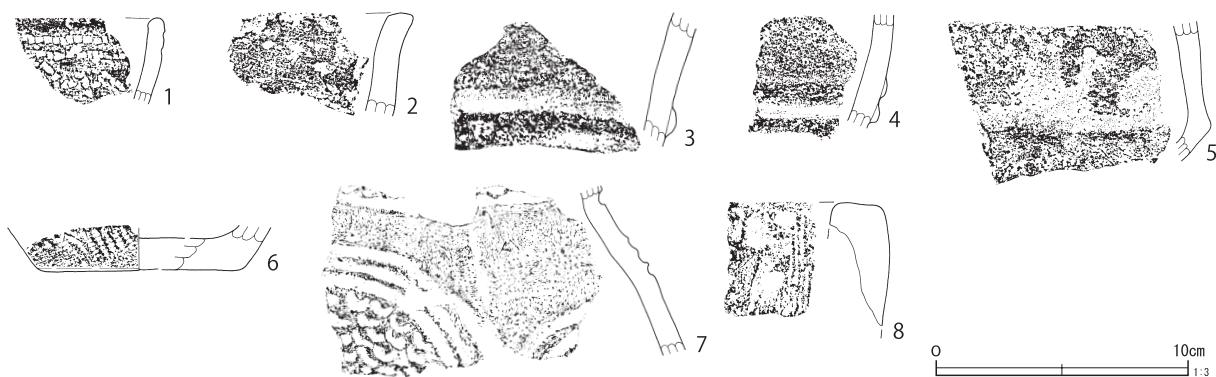
第65表 第72号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.86	0.77	0.22	P 2	0.74	0.74	0.31	-	-	-	-

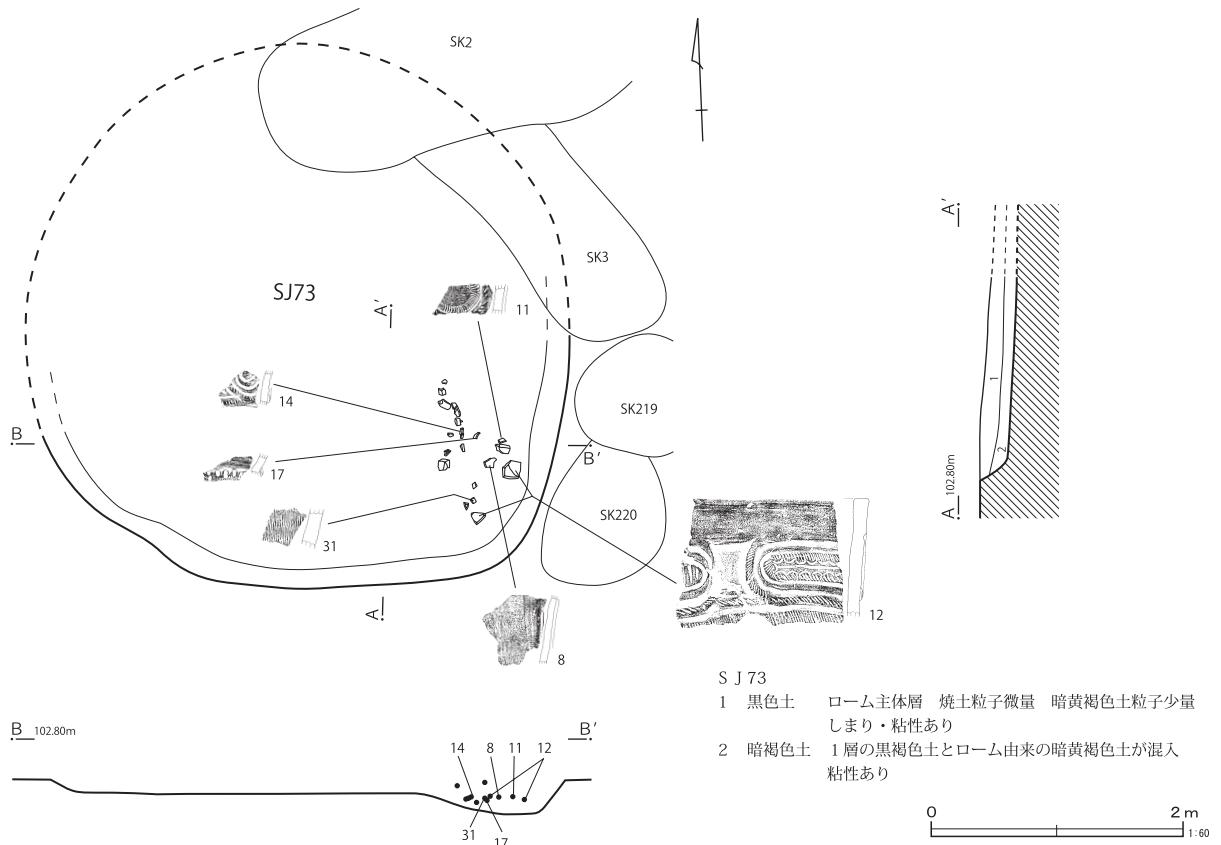
状の器形を持つ底部の破片である。6は底部の破片で、器面には地文として単節R Lの縄文が横方向に施文されている。推定底径5.1cmである。7は頸部で括れ、胴部で張る器形の土器で、頸部には交互刺突による波状の隆帯を巡らしている。胴

部には3本沈線で文様を施文し、文様内には半截竹管による、刺突文を充填している。8は口縁部の破片で、地文として撚糸文Lが施文されている。

住居跡の時期は、出土遺物からは確定できないため、詳細な時期は不明である。



第317図 第72号住居跡出土遺物



第318図 第73号住居跡・遺物出土状況

第73号住居跡（第318・319図）

N-7・8グリッドに位置する。北側に向かって地山が傾斜しており、そのため住居跡は南側の一部のみ掘り込みや覆土が残存している。西側には第53号住居跡が隣接している。また、南東側の壁に接して第219・220号土壙が所在している。覆土が残存していない北側では、第2・3号土壙と重複している。土壙からは遺物は出土しておらず、新旧関係は不明である。平面形は不明である。規模は残存部の長径4.27m、深さ0.25mである。

柱穴や炉跡は検出されなかった。

第319図は出土した遺物である。南側に残存していた覆土内から検出されたものである。

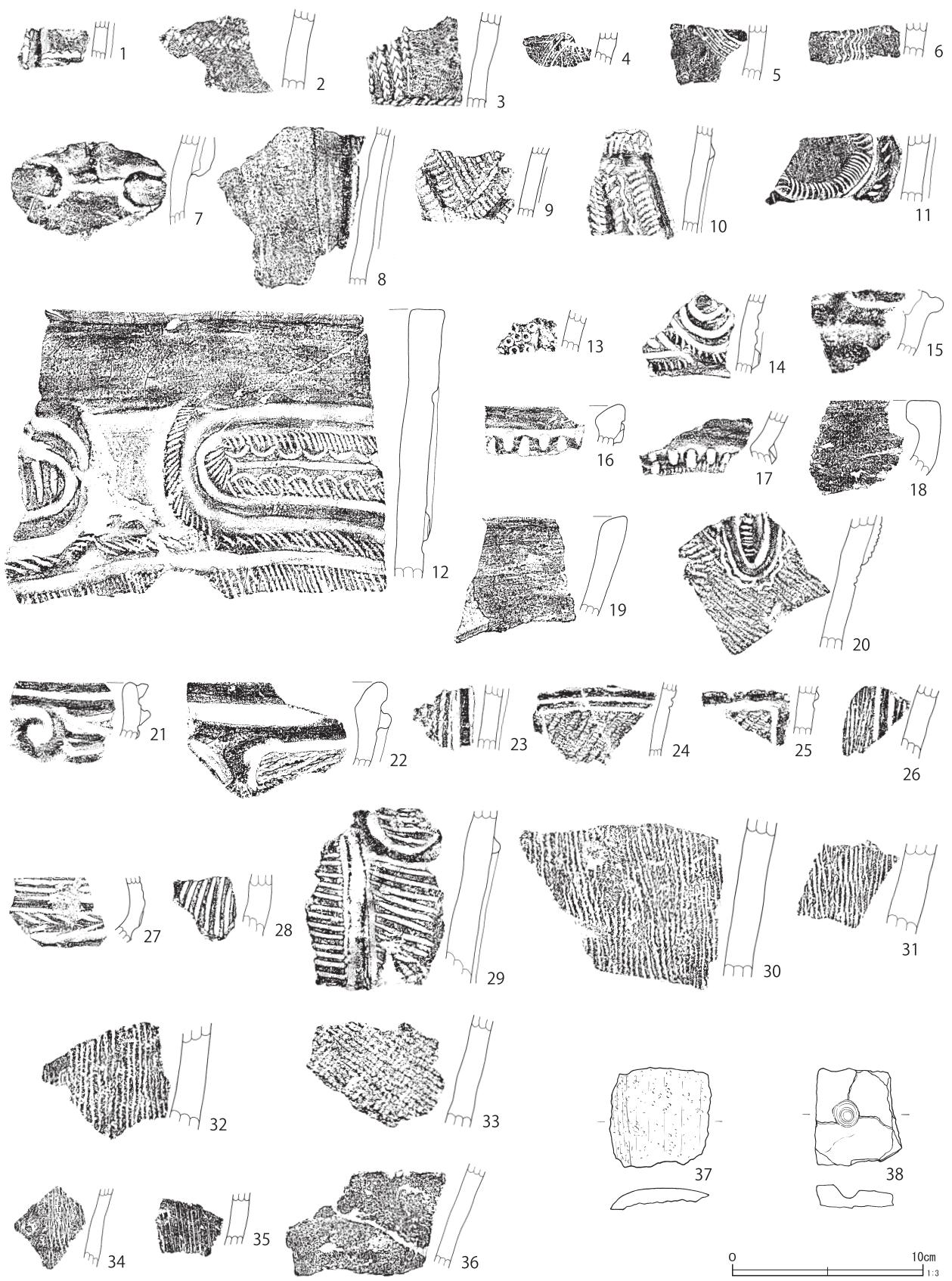
第319図1～36は出土した土器である。

1～8は角押し状の結節沈線文などを施文する土器で、阿玉台系の土器を含んでいる。1～3は結節沈線文を施文する土器である。4～6は櫛歯状の条線を施文する土器である。7・8は断面三

角形状の隆帯を貼付する土器である。7は横方向に巡る隆帯に楕円状の隆帯を貼付している。

9・10は隆帯脇にキャタピラ状爪形文と、爪形文に沿って小波状沈線文や、三角押文状のペン先状結節沈線文を施文する勝坂系土器である。

11～20は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器である。11～14は円筒形の深鉢形土器の破片で、隆帯によって施文された区画内に文様を施文するものである。11は隆帯脇の沈線文に沿って、爪形文を施文している。12は角頭状の口唇部を持つ口縁部で、狭い無文部を持っている。頸部には隆帯によって、楕円区画文を施文し、その内側には隆帯脇の沈線に沿って爪形文を施文し、爪形文には蓮華文を沿わせ中央の空いている部分には横方向に沈線文を施文している。もう一方の区画内には単沈線を充填している。胴部には、地文である撲糸文Lを縦方向に施文し



第319図 第73号住居跡出土遺物

ている。13は円形刺突文を施文している。14は隆帯の形状に沿って沈線文を施文している。15は口唇部に面を持ち、上面には沈線を施文している。16・17は口縁部下に、交互刺突を施す隆帯を巡らす口縁部の破片である。18・19は無文の口縁部の破片である。20は胴部にぞうり虫状の隆帯を貼付するもので、隆帯の周りを半截竹管による平行沈線文で囲み、さらに小波状沈線文を沿わしている。地文は無節Lである。

21～25は加曾利E系のキャリバー形の深鉢形土器の破片である。21・22は口縁部の破片で、隆帯で渦巻文などが施文されている。地文は撚糸文Lである。23～25は胴部の破片で、23は隆帯で懸垂文を施文している。24・25は沈線文で文様を施文するもので、懸垂文を施文している。地文として23は撚糸文Lを、24・25は多条R Lの縄文を縦方向に施文している。

26～29は地文に条線を施す曾利系の深鉢形土器である。26は胴部の破片で、沈線による懸垂文を垂下させている。地文は櫛歯状の条線である。27・28は口縁部の破片で、27は隆帯上に矢羽根状に刻みを施文している。28は重弧文系の口縁部である。29は短沈線文を地文とするもので、隆帯で文様を貼付している。

30～35は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部の破片で、30・31は同一個体で、原体の違う2種類の撚糸文Lを、地文としている。32は撚糸文Lを施文し、33は単節R Lの縄文を斜め方向に施文している。34・35の地文は条線である。

36は浅鉢形土器の胴部の破片である。

第319図37・38は出土した石器で、37は磨石、38は石皿の小破片である。

住居跡の時期は、遺物出土状況から勝坂式末葉と考えられる。

第74A号住居跡（第320・321図）

O-6グリッドに位置する。東壁の一部が第50

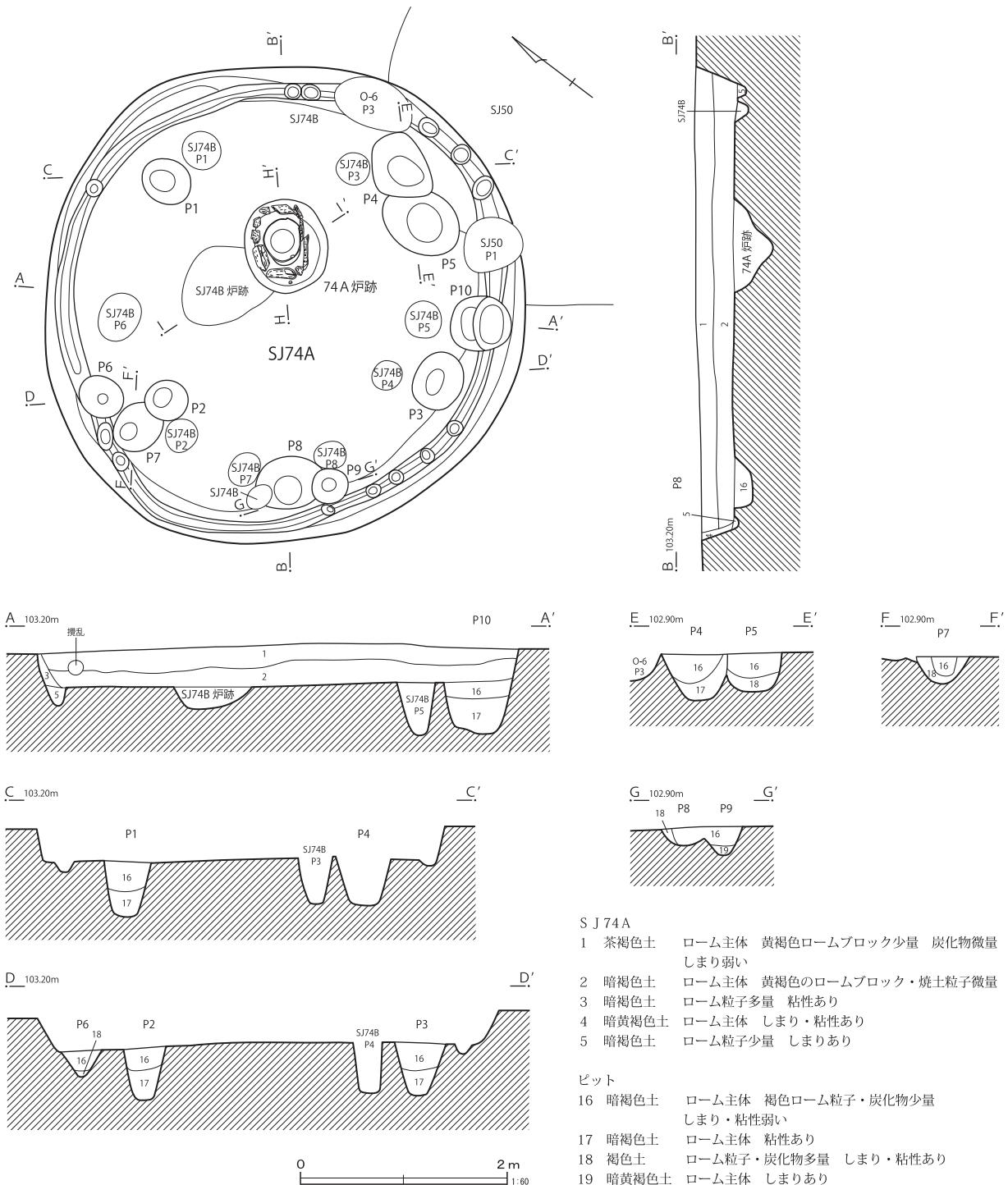
号住居跡と重複している。本住居跡が深いため、第50号住居跡の壁面を壊す形となっている。新旧関係は遺物からは、本住居跡が新しいと考えられる。また、本住居跡は、第74B号住居跡を拡張して建て替えられたもので、床面下には第74B号住居跡の炉跡や、柱穴、溝跡が埋まっている。床面には、壁に沿って壁溝を1条巡らしている。壁溝内には小穴が複数認められる。また、壁溝は一部住居跡の内側を巡っており、検出された柱穴の数からも、さらに建て替えが行われた可能性がある。平面形は円形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-54°-Eをとる。規模は長径4.62m、短径4.57m、深さ0.35mを測る。壁溝の最大幅は0.18m、深さ0.18mである。

柱穴は10本が検出された。P1～P4の4本が主柱穴と考えられる。またP8は出入り口部のピットと考えられる。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡の中央には第325図5の深鉢形土器の頸部から胴上部が炉体土器として埋設されていた。炉体土器の周りは、片岩製石皿の破片などの石を使用して方形に囲んでおり、炉跡は石囲埋甕炉の形状を持っている。炉跡の規模は、石囲部分長径0.72m、短径0.51m、掘り方の長径0.92m、短径0.81m、深さ0.37mである。

第74B号住居跡（第322図）

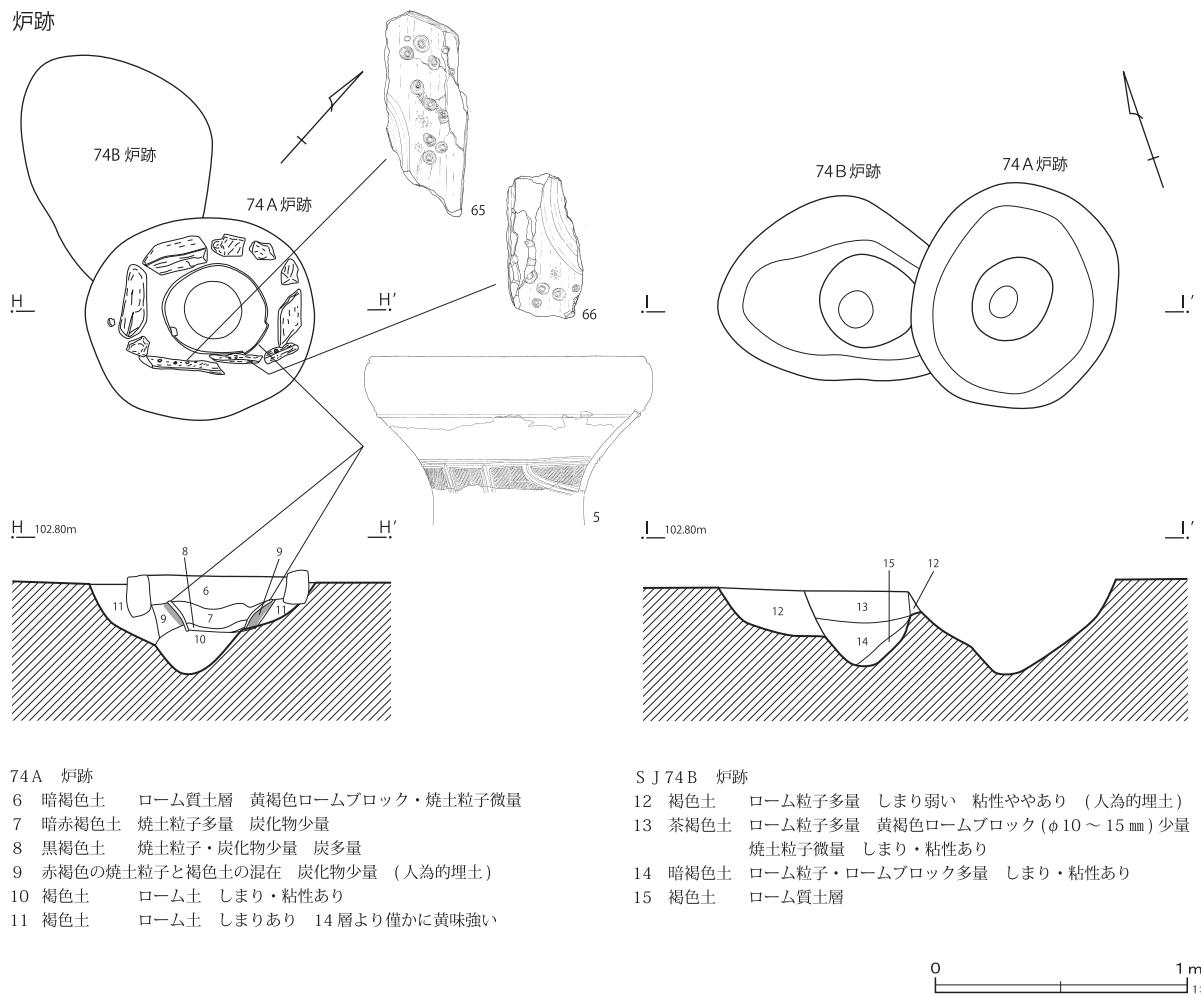
O-6グリッドに位置する。第74A号住居跡の床面下から検出された住居跡である。壁に沿って巡っていたと考えられる壁溝が一部失われるが、一条検出され、それからすると平面形は円形であると考えられる。拡張前である本住居跡の主軸方位は、第74A号住居跡より北寄りである。柱穴を基準とした主軸方位は、N-29°-Wをとる。推定される範囲内の規模は、長径4.23m、短径4.08mである。壁溝の最大幅は0.24m、深さ0.12mである。



第320図 第74A号住居跡(1)

第66表 第74A号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.48	0.42	0.54	P 5	0.80	0.60	0.37	P 8	0.54	0.49	0.19
P 2	0.42	0.40	0.52	P 6	0.44	0.37	0.29	P 9	0.34	0.33	0.27
P 3	0.57	0.48	0.50	P 7	0.45	0.42	0.26	P 10	0.58	0.52	0.45
P 4	0.71	0.55	0.44	—	—	—	—	—	—	—	—



第321図 第74A号住居跡(2)

柱穴は8本が検出された。P 1～P 3、P 5・P 6の5本が主柱穴として使用されたと考えられる。またP 8は、入口部のピットと考えられる。

炉跡は、住居跡の中央よりやや北側から検出された。東側の一部が第74 A号住居跡の炉跡に壊されている。炉跡内からは、炉体土器などは検出されなかったが、炉跡内には一段低い部分があり、炉体土器が抜き取られた可能性も考えられる。

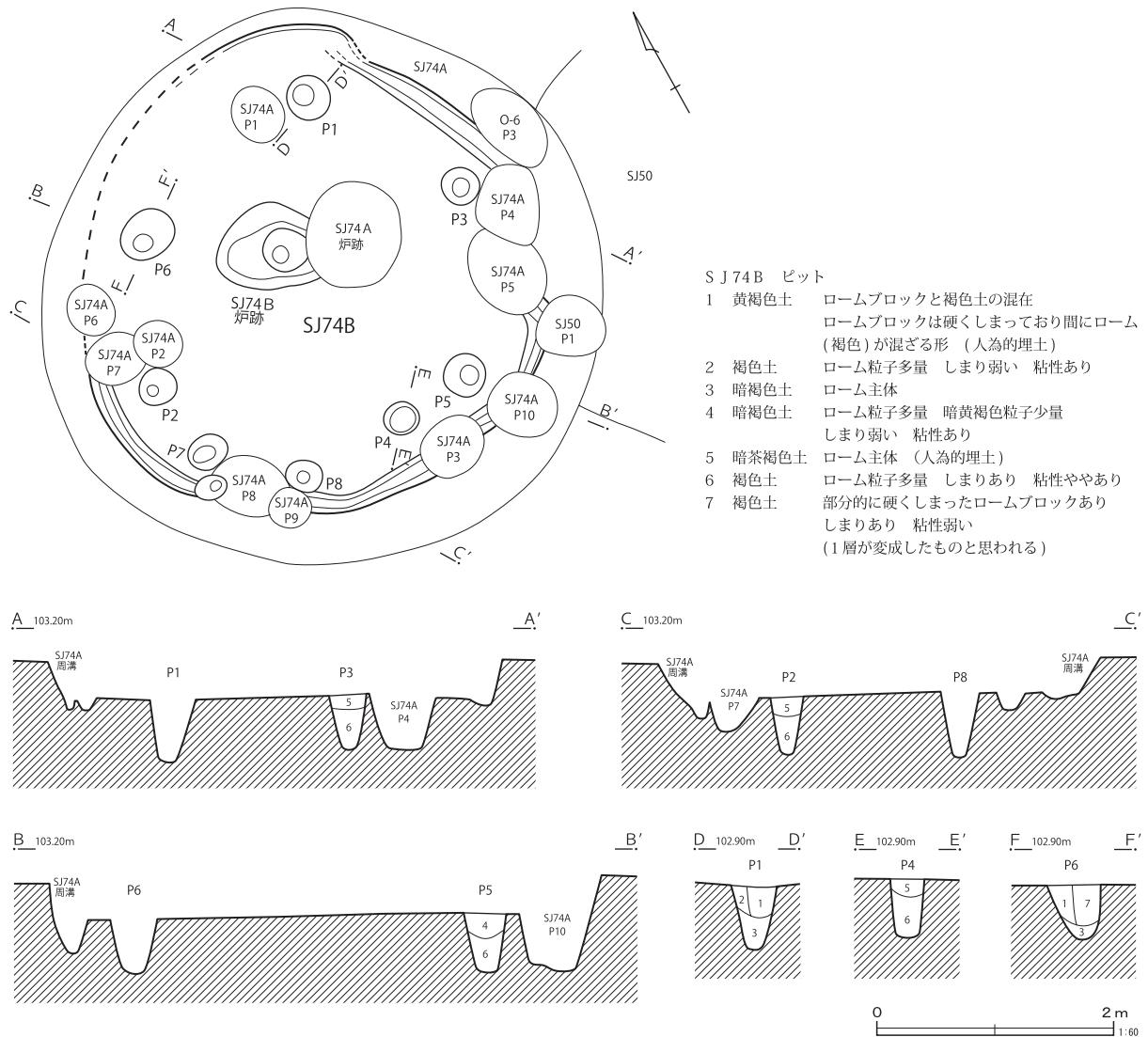
第74号住居跡出土遺物（第324～329図）

出土遺物は、第74号住居跡として検出されている。第74 B号住居跡が、柱穴や壁溝や炉跡のみ残存するため、覆土内の出土遺物については第74 A号住居跡に帰属すると言え、図示した実測遺物はすべて第74 A号住居跡出土遺物である。

第323図の遺物出土状況から、炉跡を中心に覆土内から遺物が検出されている。床面直上からも出土しており、住居跡との時期差はほとんどないと考えられる。

第324図1、第325図2～6、第326図7～9は、加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器である。

1は住居内に散乱して検出されたもので、ほぼ完形に近い大型土器である。口縁部の内湾は緩く、頸部には無文帯を持ち、胴部が細長く作られている。口縁部文様は、大きく2単位を施文している。単位は、口縁部側からクランクして隆帯を貼付し、最後は頸部側に隆帯をクランクさせるもので、口縁部と頸部の隆帯と接する部分は、渦巻文を施文している。長いクランク文間には、口縁部側と頸



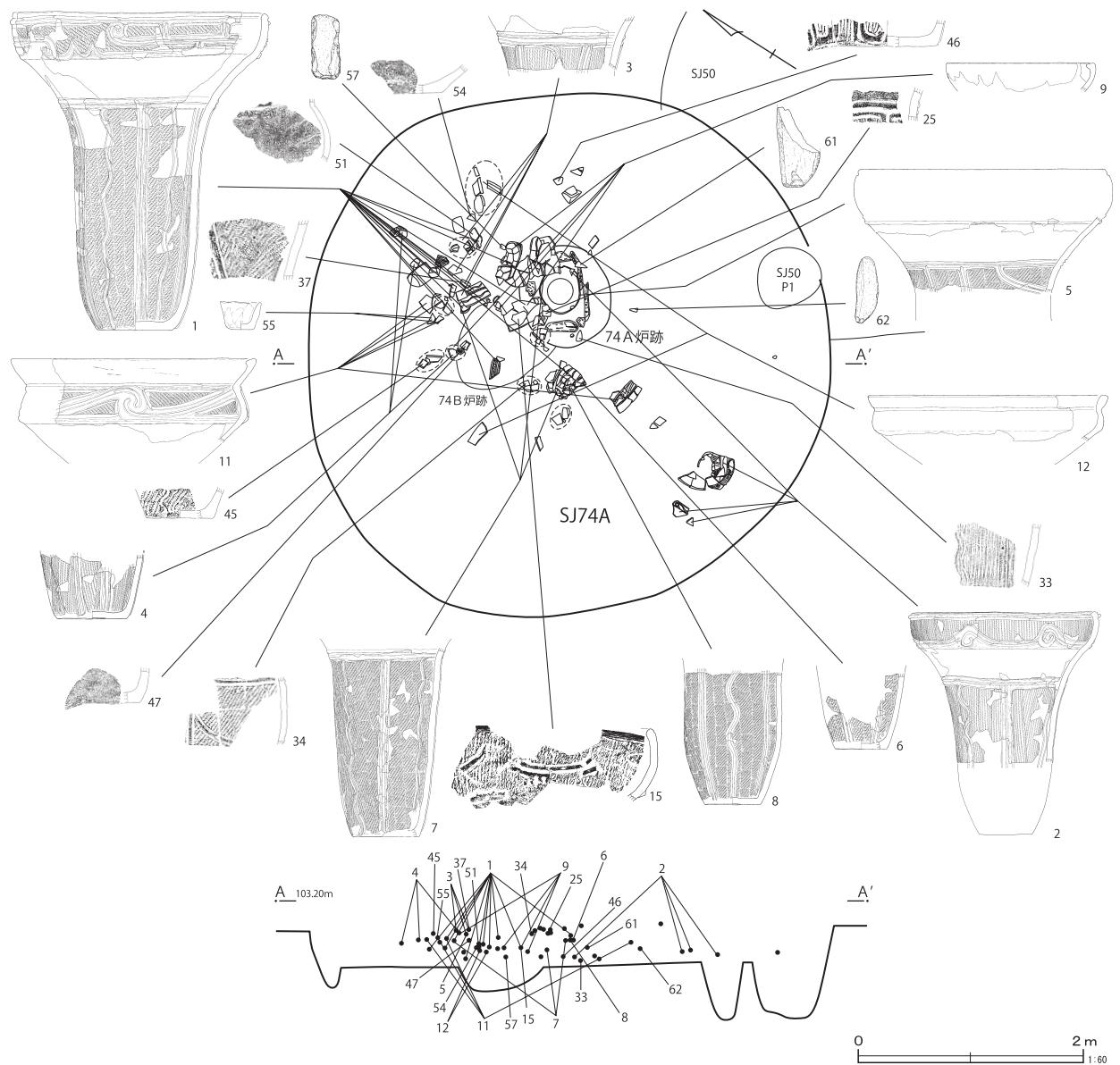
第67表 第74B号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.37	0.36	0.53	P 4	0.30	0.28	0.49	P 7	0.34	0.28	0.12
P 2	0.32	0.29	0.48	P 5	0.37	0.36	0.49	P 8	0.32	0.28	0.54
P 3	0.32	0.31	0.46	P 6	0.47	0.38	0.45	—	—	—	—

部側それぞれを分割し、方形区画などを作り出している。正面のクランク文間は、先端が剣先状の波状文を貼付して繋げている。胴部は頸部と2本隆帯を巡らして区画し、下側の隆帯から懸垂文を底部ぎりぎりまで垂下させている。懸垂文は2本1組の直線的に垂下させるものと、蛇行懸垂文をそれぞれ6単位交互に施文している。地文は単節R Lの縄文を、口縁部は横方向に胴部は縦方向に

施文している。口径44.6cm、底径13cm、器高57cmである。

2は底部を欠損する。口縁部文様は頸部と区画する隆帯に沿って、波状に隆帯を施文し、波頂部には渦巻文を頸部側に貼付し、頸部区画隆帯と繋げている。現状では波長部が、5単位ほぼ均等に配置されているが、欠損部分に波状の盛り上がりが残存し、もう1単位狭い範囲内で波頂部が貼付



第323図 第74A号住居跡遺物出土状況

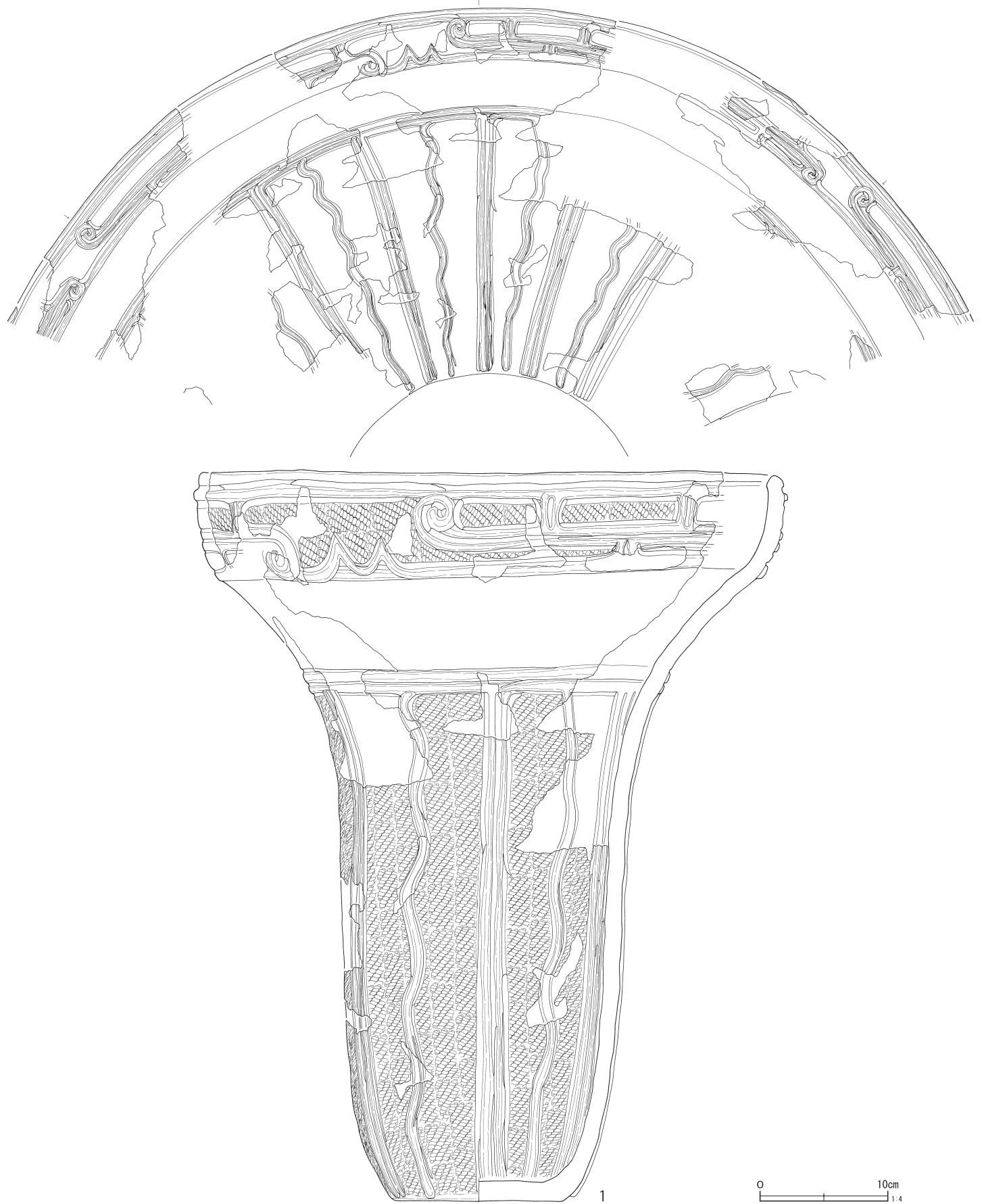
された可能性がある。また波頂部の渦巻文は一箇所口縁部と2本の短い隆帯で繋げている。頸部と胴部は2本隆帯で区画し、下側の隆帯からは2本1組の直線的に垂下する懸垂文と、蛇行懸垂文を交互に施文するが、1単位のみ1本の直線的な懸垂文と、1本の蛇行懸垂文を1組の懸垂文として施文している。地文は撚糸文Lを縦方向に施文するが、胴部ではやや斜め方向のものもある。口径32.5cmである。

3は無文の頸部から胴部が残存するもので、胴部には隆帯で懸垂文を施文している。地文は撚糸

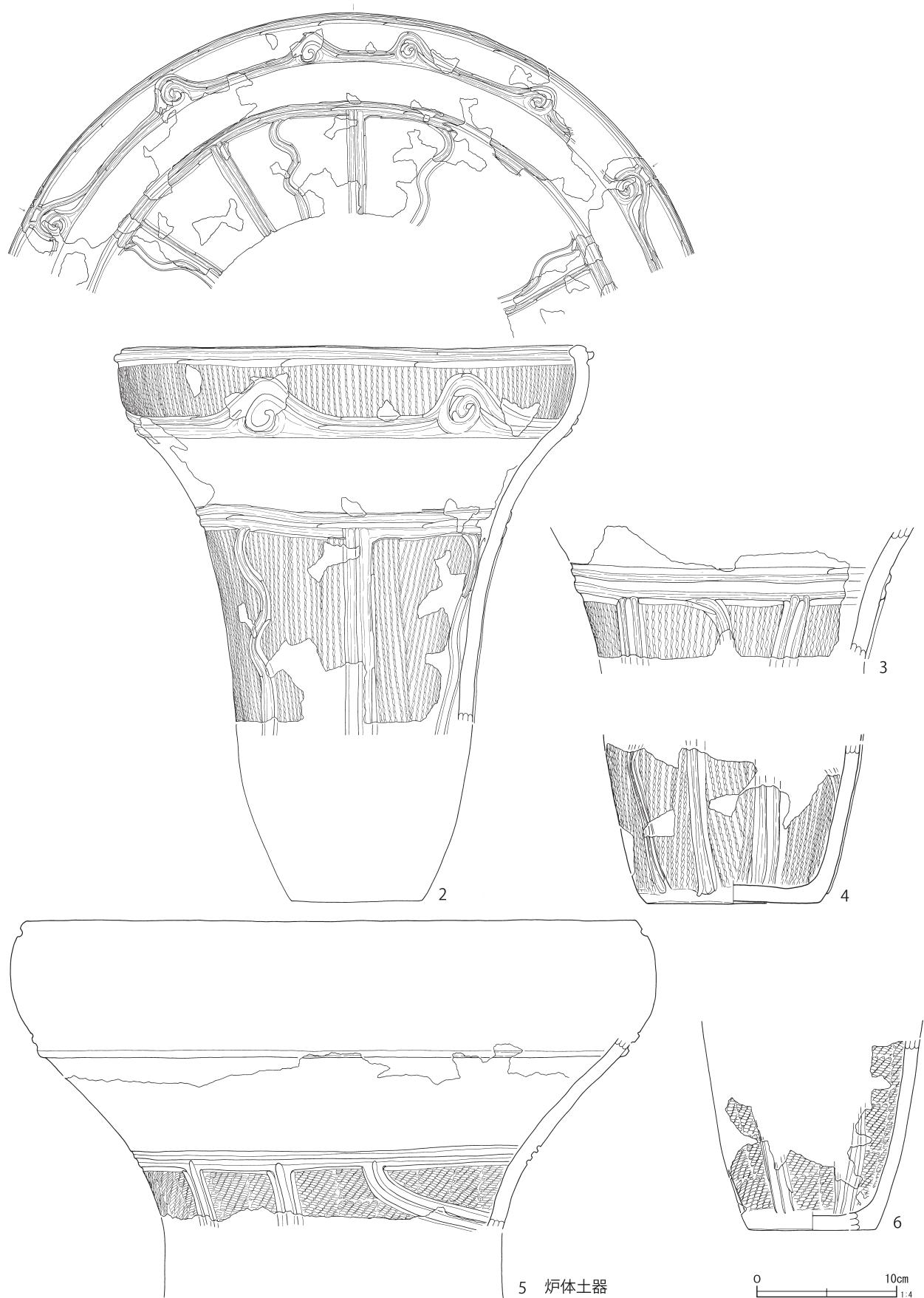
文Lで縦方向に施文している。

4は胴部から底部が残存するもので、胴部には隆帯で懸垂文を施文している。地文は撚糸文Lで縦方向に施文している。底径12.5cmである。

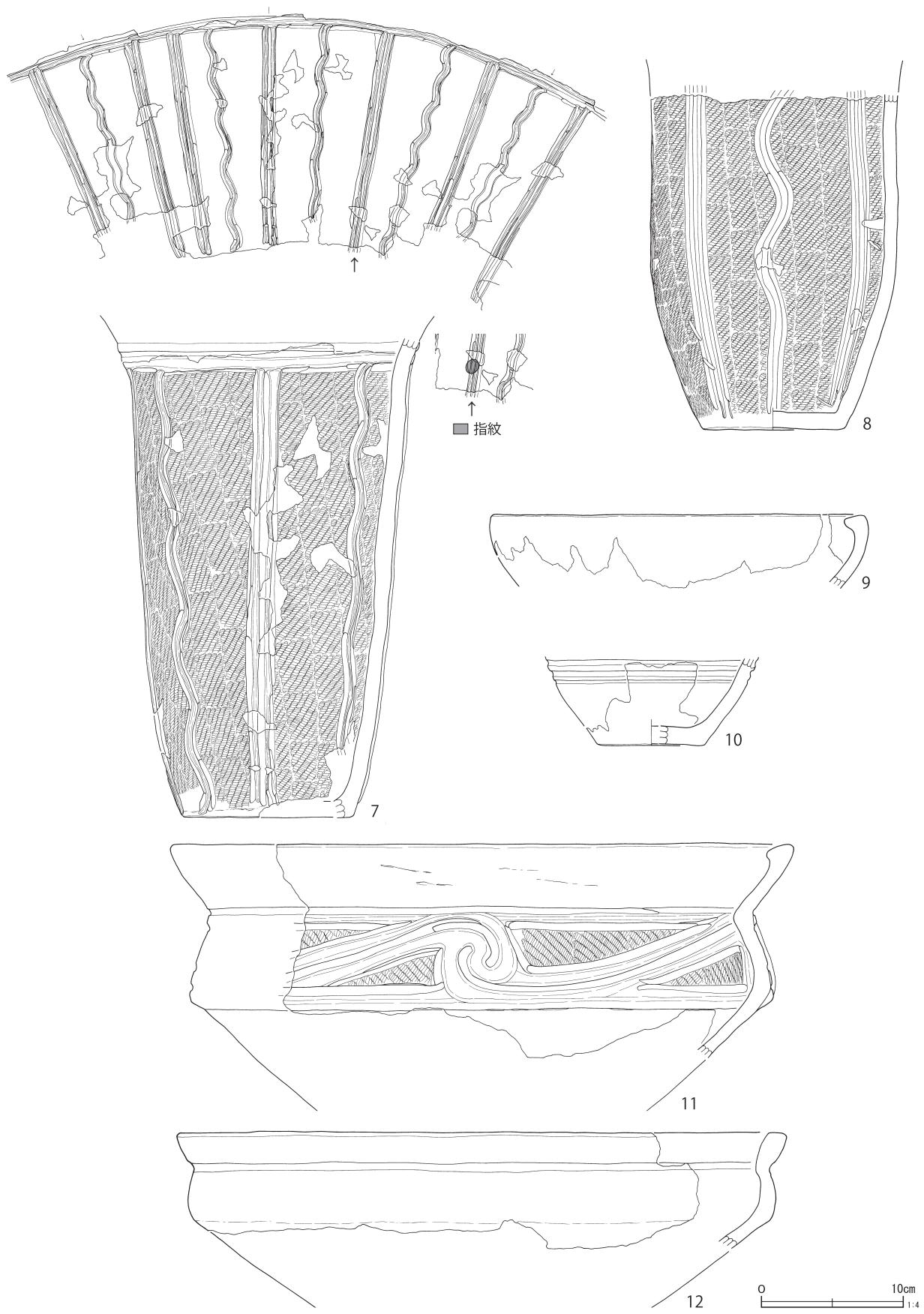
5は炉体土器として、炉跡に埋設された土器である。部分的に煤は付着しているが、残存状態は良好である。頸部から胴部上部が残存している。無文の頸部を持ち、頸部と口縁部は隆帯で区画している。頸部と胴部は3本1組の沈線で区画し、胴部にも3本1組の沈線で文様を施文している。胴部は、縦方向に施文する沈線文で広い区画



第324図 第74号住居跡出土遺物（1）



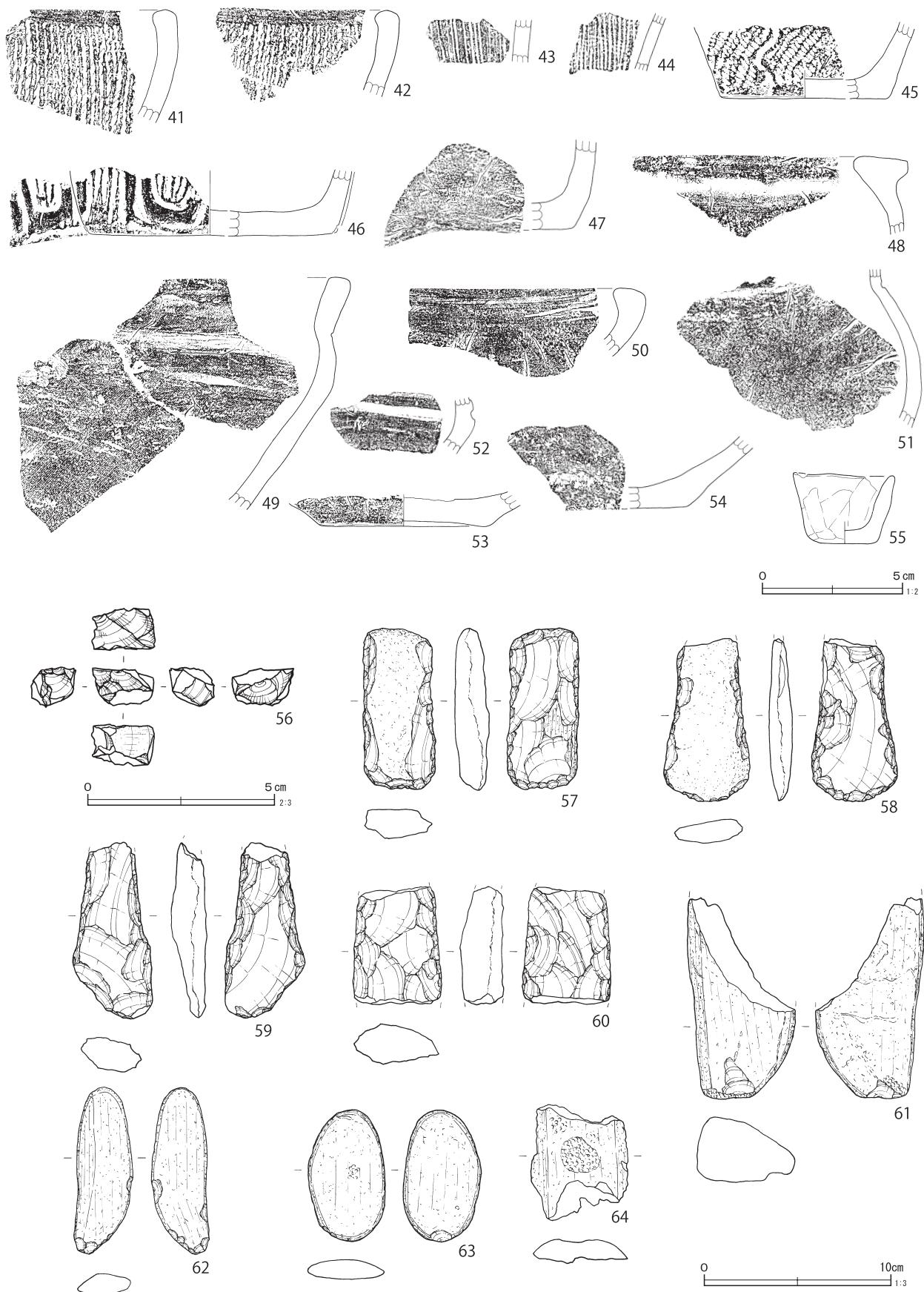
第325図 第74号住居跡出土遺物（2）



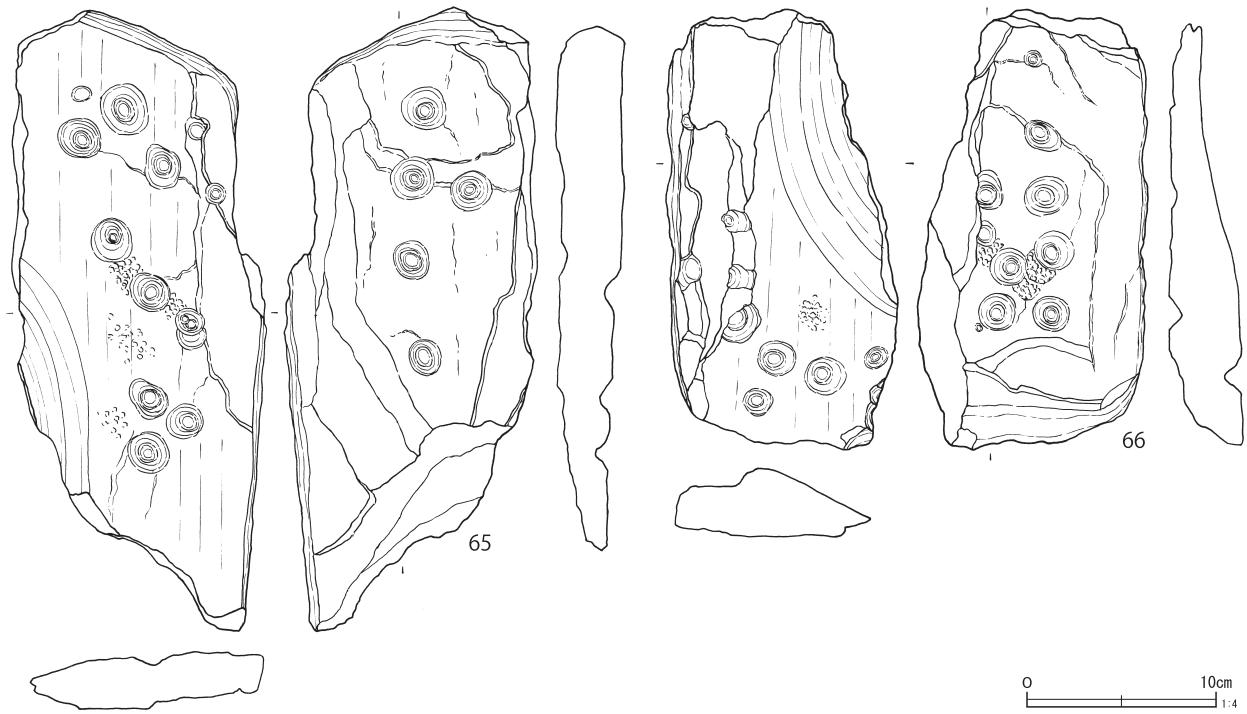
第326図 第74号住跡出土遺物（3）



第327図 第74号住居跡出土遺物(4)



第328図 第74号住居跡出土遺物（5）



第329図 第74号住居跡出土遺物（6）

と狭い区画に分割したと考えられ、大区画には渦巻文などを施文したと考えられる。地文は多条R Lの縄文で、縦方向に施文している。

6、8は胴部に沈線文で懸垂文を施文する胴部から底部が残存するもので、6は8単位の直線的な懸垂文を施文し、8は直線的な懸垂文と蛇行懸垂文を交互に5単位ずつ垂下させている。6の地文は単節R L、8は多条R Lの縄文である。6は推定底径9cm、8は底径10cmである。

7は頸部区画から胴部が残存する。胴部に2本1組の隆帯で直線的に垂下させる懸垂文と、1本隆帯の蛇行懸垂文を交互に4単位施文させ、最後に2本1組の直線的な懸垂文を1単位のみ追加している。隆帯上には一箇所指紋が残存している。地文は多条R Lの縄文で、推定底径12cmである。

9は無文の口縁部の破片である。推定口径26cmである。

第326図10は小型の鉢形土器の底部である。胴部には横方向に沈線が施文される。推定底径7.6cmである。

第326図11・12は浅鉢形土器である。11は屈曲

する肩部に、隆帯で渦巻文などを施文している。地文は多条R Lの縄文で、横方向に施文している。推定口径43cmである。12は無文で、内外面に赤彩の痕跡が認められる。推定口径43cmである。

第327図13～40、第328図41～54は出土した土器片である。

13は阿玉台系、14は勝坂系の深鉢形土器の破片である。

15～37は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器の破片である。15～22は口縁部の破片である。隆帯で文様が施文されている。15・16は同一個体で、施文する隆帯が剥がれている部分には、下書きと推測される沈線文が施文されている。17、20は連弧状に施文した隆帯の弧頂部に、舌状の突起を添付し渦巻文を施文している。18、21は渦巻文を施文している。22は無文の頸部を持つもので、口縁部には剣先文が施文される。地文は15～19が撚糸文Lで、19は斜め横方向で他は縦方向に施文している。20、22は単節L Rの縄文を、21は単節R Lの縄文を横方向に施文している。

23・24は無文の頸部の破片である。

25～31は、胴部に隆帯で懸垂文などを施文するもので、25・26は頸部の無文部分が残っている。28は隆帯による文様の他に、地文の上から半截竹管で平行沈線文をなぞるように施文している。地文は25～30が撚糸文Lを縦方向に、31は単節R Lの繩文を縦方向に施文している。

32～37は胴部に沈線で懸垂文などを施文するものである。地文として32・33は撚糸文Lを、34～37は単節R Lの繩文を縦方向に施文している。

38は無文の波状口縁部の破片である。

39・40は連弧文系の胴部破片で、地文は櫛歯状の条線である。

41～44は地文のみが残存するもので、41・42は口縁部、43・44は胴部の破片である。地文として41・42、44は撚糸文Lを、43は櫛歯状の条線を施文している。

45～47は底部の破片で、45は沈線で蛇行懸垂文を施文する。46の隆帯は文様を区画している。地文として45は多条R Lの繩文を、46は撚糸文Lを縦方向に施文している。

48～54は浅鉢形土器の破片である。いずれも無文である。48は口唇部に広い面を持っている。

第328図55はミニチュアの鉢形土器である。手捏状の整形となっている。口径3.4cm、底径2.2cmである。

第328図56～64、第329図65・66は出土した石器である。56は石核で1面に風化面が認められる。57～60は打製石斧で、57は側縁が基部から刃部まで平行に作り出され、58・59は刃部に最大幅を持っている。60は基部と刃部を欠損している。61・62は敲石で、棒状のもので、端部には敲打のため打ち欠かれた剥離痕が認められる。63・64は磨石である。64の表面には敲打による浅い凹部が認められる。65・66は石皿である。いずれも方形状の破片で、炉石として再利用されていた。

住居跡の時期は炉体土器や出土遺物から、加曾利E I式の最終末と考えられる。

第75号住居跡（第330・331図）

T・U-5グリッドに位置する。住居跡内には近世の第221号土壙が位置している。近世の建物跡周辺から検出されているため、地山が削平されており掘り込みはなかった。壁に沿って巡っていたと考えられる壁溝が残存しており、住居跡の規模や形状を確認することができた。平面形は円形で、炉跡と柱穴を基準とした主軸方位は、N-13°-Wをとる。規模は長径4.29m、短径4.47m、深さ0.25mである。壁溝の最大幅0.30m、深さ0.09mである。

柱穴は6本が検出された。P1～P4が主柱穴であると考えられる。P6は入り口部に関連するピットと考えられる。

炉跡は住居跡のほぼ中央で検出された。炉跡は2基検出され、炉跡1が炉跡2を壊して構築している。炉跡1・2ともに、炉跡内には浅鉢形土器を炉体土器として埋設する、埋甕炉の形状となっている。炉跡1の炉体土器は第331図1、炉跡2の炉体土器は第331図2である。炉跡2の炉体土器は、炉跡1側に重複していた半分が失われている。炉跡1の炉体土器は、検出時には底部も認められたが、劣化が進んでおり、整理時に復元することができなかった。炉跡1の規模は、長径0.62m、短径0.48m、深さ0.16mで、炉跡2の規模は、残存部で長径0.48m、短径0.24m、深さ0.14mである。

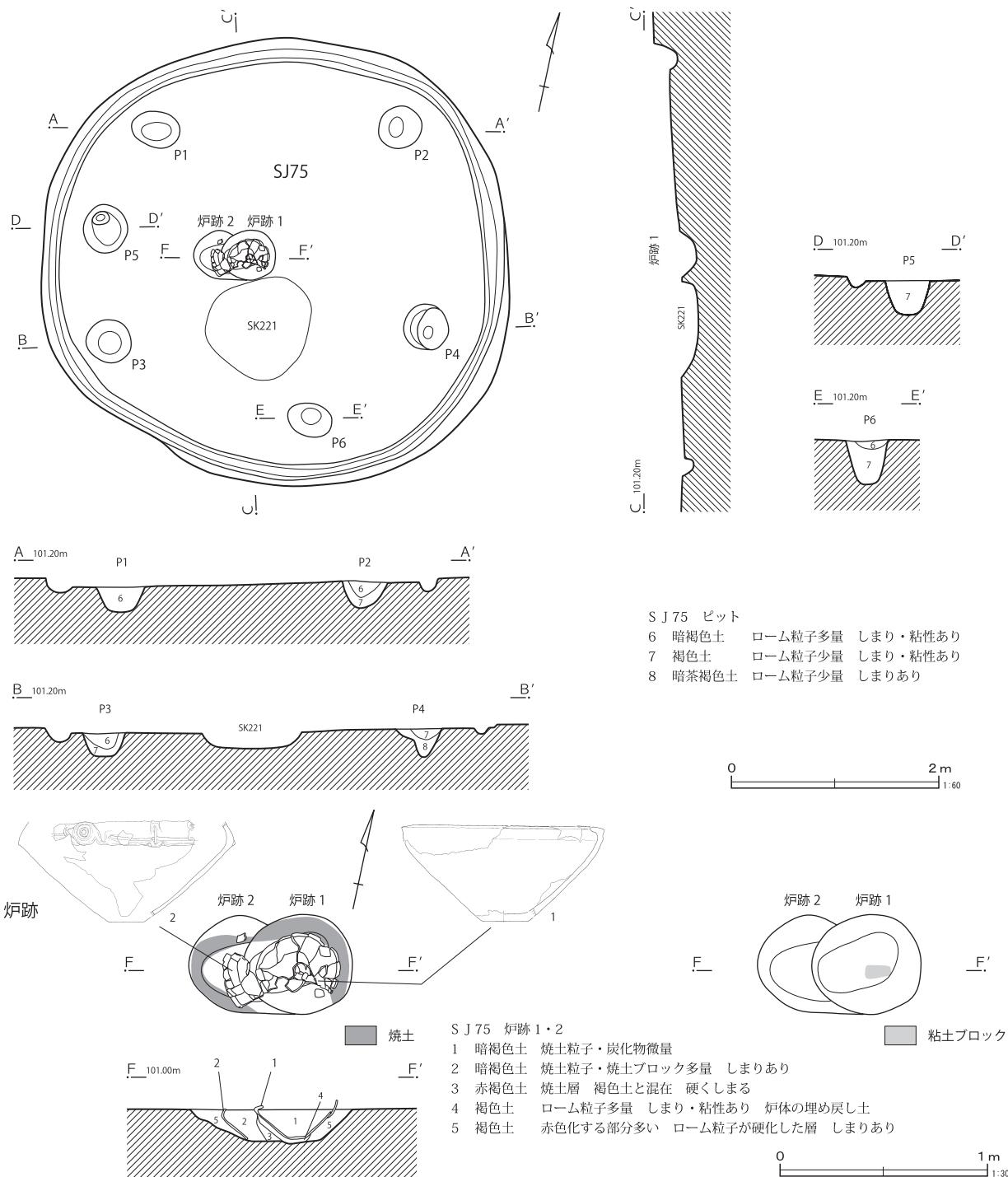
炉跡が2基あることから、建て替えが行われたと考えられるが、柱穴は同じものをそのまま利用したと思われる。

第331図1と2は、炉体土器として使用された浅鉢形土器である。1は炉跡1の炉体土器で、口縁部の一部を欠損するものである。口縁部は内屈している。底部も土器検出時には確認できたが、器面の風化が進んで劣化した結果、整理時には復元することができなかった。口径37cmである。2は炉跡2の炉体土器で、胴部の一部のみが残存し

ている。器面の劣化が著しく、肩部に施文される文様も磨滅のため、明瞭ではなかった。

第331図3～17は出土した土器である。いずれ

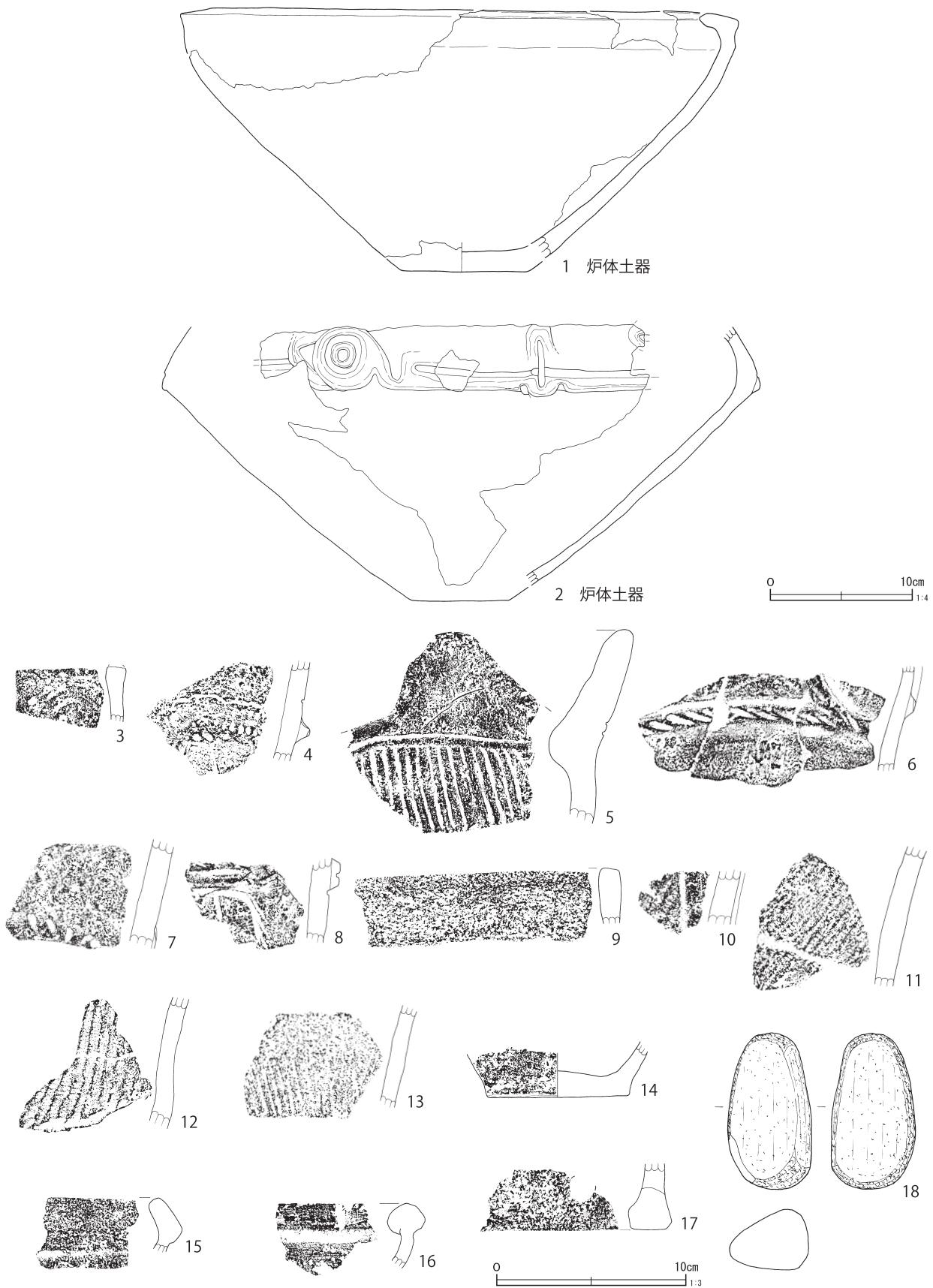
も器面の劣化が著しい。3は阿玉台系の深鉢形土器で、角押し状の結節沈線文を施す土器である。4～9は勝坂系の深鉢形土器で、4、6・7は隆



第330図 第75号住居跡

第68表 第75号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.46	0.45	0.23	P 3	0.43	0.41	0.22	P 5	0.46	0.42	0.37
P 2	0.42	0.40	0.25	P 4	0.43	0.40	0.26	P 6	0.41	0.31	0.43

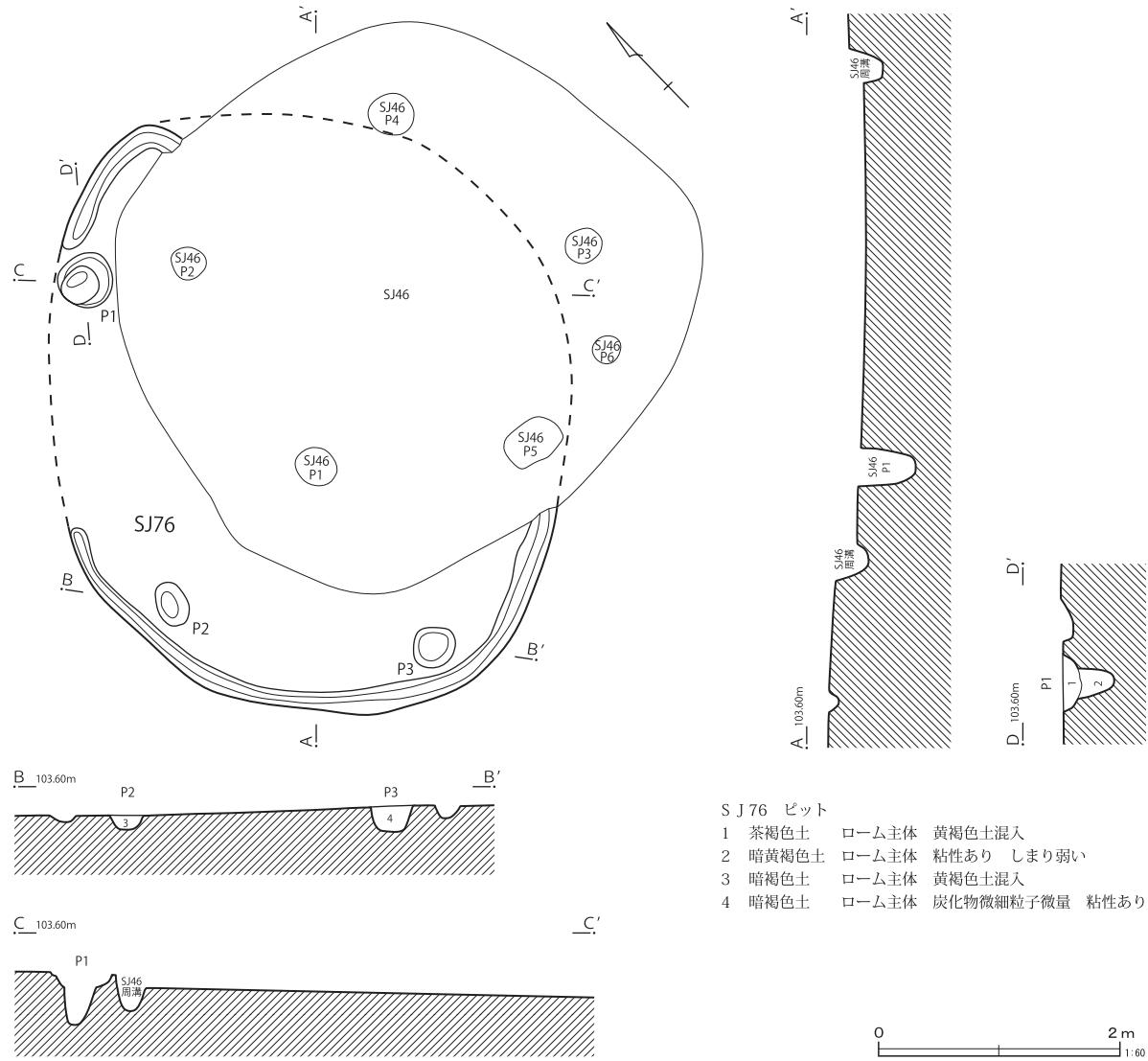


第331図 第75号住居跡出土遺物

帶に刻みを持つもので、4は小波状沈線文が施文される。5は波状口縁部の破片で、沈線による区画内に平行沈線文を充填している。8は隆帶脇に刻みを施文している。9は角頭状の口唇部を持つ、無文の口縁部の破片である。

10は加曾利E系のキャリパ一形の深鉢形土器の胴部の破片で、隆帶による懸垂文を施文している。地文は単節R Lの縄文である。

11～13は地文のみを施文する深鉢形土器の胴部



第332図 第76号住居跡

第69表 第76号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.44	0.43	0.41	P 2	0.36	0.24	0.12	P 3	0.37	0.33	0.21

の破片で、11・12の地文は単節R Lの縄文で、13は条線である。14は無文の底部である。

15・16は浅鉢形土器の破片である。

17は器台の脚部の破片である。脚部には円孔が認められる。

第331図18は出土した石器で、磨石である。側縁には敲打痕が認められる。

住居跡の時期は、明確ではないが勝坂式終末と考えられる。

第76号住居跡（第332図）

O-7・8グリッドに位置する。周囲に多数の住居が隣接している。掘り込みはなく、住居跡の大半は重複する第46号住居跡によって失われている。本住居跡からは遺物が出土していないため、遺物から新旧関係は不明であるが、第46号住居跡からは遺物が多量に出土しており、それからすると本住居跡の方が古いと考えられる。床面には壁溝が1条検出されたが、第46号住居跡の重複部分と西側では壁溝は検出されなかった。壁溝の形状から、平面形は橢円形であると推定される。推定される範囲内の規模は長径4.91m、短径4.28mである。壁溝の最大幅0.24m、深さ0.03mである。

柱穴は、壁溝に近接して3本が検出された。主柱穴であるかは、確認できなかった。

炉跡は、おそらく第46号住居跡によって壊されたと考えられ、検出されなかった。

図示可能な遺物は検出されなかった。

第77号住居跡（第333～342図）

I-5グリッドに位置する。調査区の最北端に位置している。地山は、北方向に緩やかに傾斜している。住居跡の北側では、第26号集石土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は円形で、掘り込みは中央に向かって深くなっている。断面形状が擂鉢状となっている。規模は長径3.62m、短径3.37m、深さ0.42mである。

床面からは柱穴が1本検出されたのみである。炉跡の位置であることや、掘り込みの様子から炉跡であった可能性も考えられる。

遺物は大量に検出されている（第334～336図）。遺構確認時から、住居跡は大量の遺物が分布していた範囲内に検出された。遺物出土状況からもわかるように、床面直上の遺物は少なく、住居跡がやや埋まってから、土器などを大量廃棄したと考えられる。また、遺物の垂直分布には、高低差が認められるが、復元実測した出土土器には明確な

時期差は認められず、ほぼ一括して廃棄されたと考えられる。

第337～342図は出土した遺物である。

第337図1・2、第338図3～5、第339図6～9は復元実測した土器で、勝坂式終末から加曽利E式初頭の土器である。

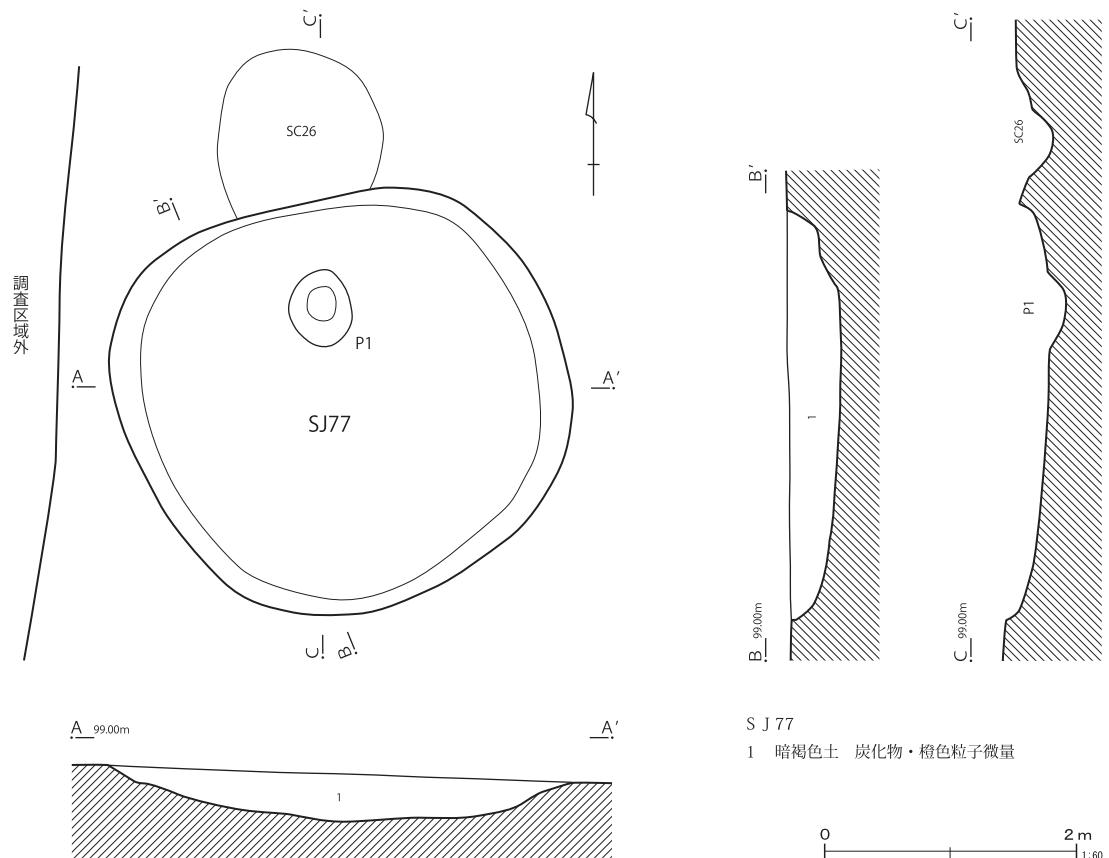
1は大型の深鉢形土器である。口縁部は緩やかに内湾して丸みを帯び、底部が算盤玉状となる器形である。口縁部には正面に大型把手を貼付し、裏面にはやや小ぶりとなる把手を貼付する。その間に、口縁部を波状にして小突起が6単位貼付される。正面の大型把手は、先端が円形の板状となり、外側に円形の窪みを着けている。先端からは橋状に口縁部に施文し、口縁部とは眼鏡状把手を貼付して繋げている。先端の円文下から刺突状の刻みがある隆帶を垂下させて眼鏡状突起に結び、その間には隆帶を挟み1対の円孔を穿っている。把手の内面側には、先端から刺突状の刻みがある隆帶を垂下させ、眼鏡状把手を貼付している。先端の円形部分には、隆帶を挟み対向する渦巻文を沈線で施文している。裏面の把手は先端を欠損している。間の小把手は山状のものと、円形状のものが施文されている。口縁部は頸部と隆帶で区画し、口縁部は4単位に分割されると考えられ、その間に隆帶で文様を施文している。隆帶周辺の空間には、沈線文を充填している。また小突起下には波状文を施文するが、円形の突起には隆帶で渦巻文を、その横の突起下には沈線で渦巻文を施文している。口縁部の隆帶上には、刺突状の刻みを施文するが、偏平な板状となる部分や、刻みが施されない部分がある。胴部には細い条で撚糸文Lを縦から斜め方向に施文している。底部は算盤玉状となるもので、外反する部分を隆帶で区画して、区画内を方形状に4単位に分割している。区画内には短沈線文を充填するものと、結節沈線文を充填するものを交互に施している。隆帶上には刺突状の刻みが施されている。底部は無文となってい

る。口径32cm、底径13.5cm、把手先端までの器高56.3cmである。

2は小型の深鉢形土器である。無文のやや内湾する口縁部を持ち、胴部は緩やかに張り出している。正面には眼鏡状把手を貼付し、その中央に刺突状の刻みを持つ隆帯を口縁部に向けて施文し、その先端は蛇頭状の意匠文を貼付している。蛇頭の付け根部分には円形の玉状の隆帯を貼付し、その表面に沈線文を施文している。頸部には沈線文を巡らし、胴部と区画している。胴部は縦に垂下させる隆帯で2分割し、それぞれの区画内を逆U字状の沈線で囲み、その中を沈線文で文様を充填するように施文している。口径12.2cm、推定底径5.6cm、器高13.5cmである。

3・4は頸部の文様帶に、楕円区画文を施文す

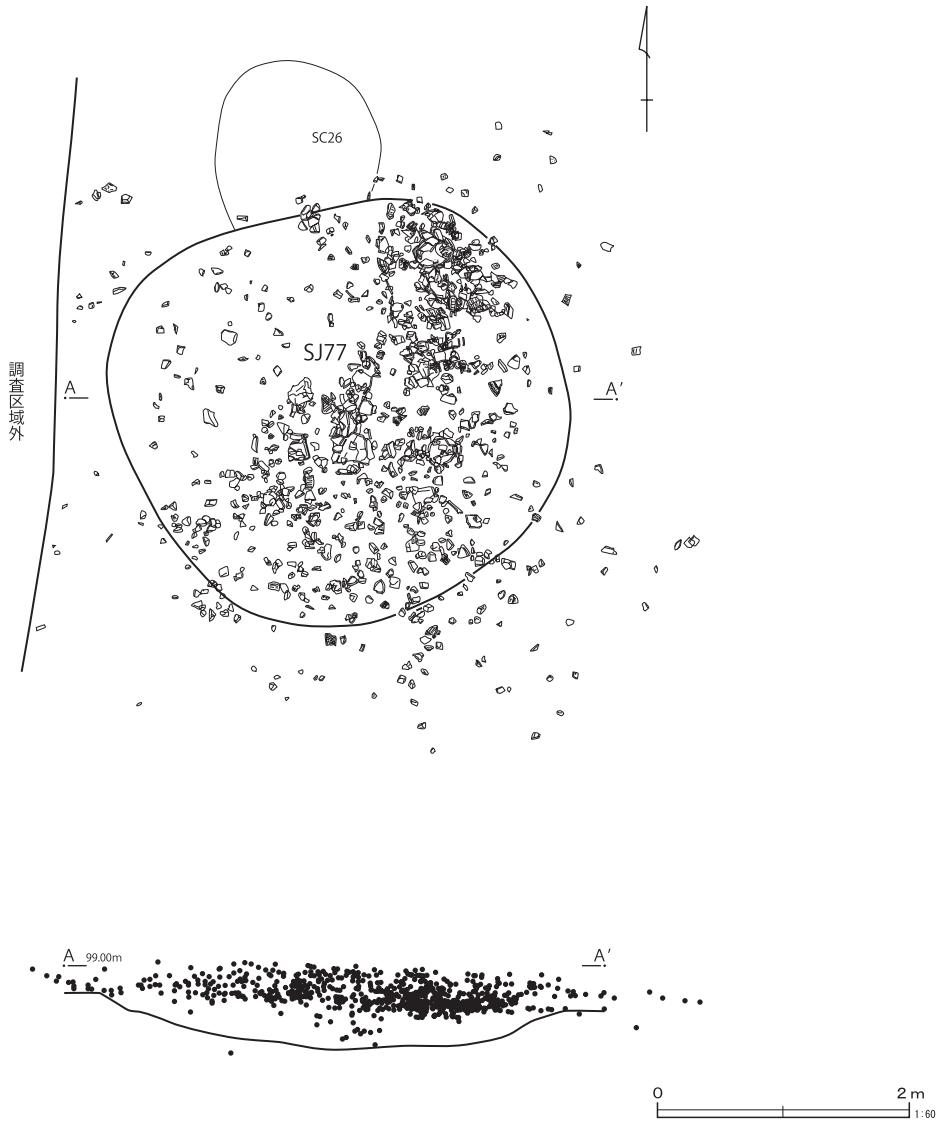
る深鉢形土器である。楕円区画の左右部分は耳たぶ状となっており、隆帯の先端を薄く引き延ばしている。3はほぼ完形の土器で、口縁部の破損部分には把手が貼付されていたと考えられる。口縁部は内湾し、隆帯で区画された頸部には、楕円区画文を隆帯で3単位施文している。区画内は短沈線文を充填している。胴部には単節R Lの縄文を斜め方向に施文し、頸部の隆帯上に重ねて施文している。隆帯には刺突状の刻みを施文している。底部は算盤玉状となり、張り出し部より下は無文となっている。口径19cm、底径9.2cm、器高28cmである。4は円筒形の深鉢形土器の頸部で、楕円区画は2単位施文され、1単位内に楕円区画文が重なって施文されている。正面の区画内は短沈線文を充填しているが、裏面は何も施文されていな



第333図 第77号住居跡

第70表 第77号住居跡 柱穴計測表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P 1	0.59	0.49	0.12	—	—	—	—	—	—	—	—



第334図 第77号住居跡遺物出土状況（1）

い。

5・6は同一個体であるが、接点がなく復元実測も文様があるため困難であることから、上下別に実測したものである。5は口縁から胴上部で、丸みをおびる無文の口縁部には、把手が貼付されていたと考えられる。頸部は隆帯で区画し、その内側を沈線文で施文している。隆帯上には刻みの他、刺突文や交互刺突文が施文されている。胴部は地文のみが施文される。地文は多条R Lの縄文で、条が垂直に施文されるよう、原体を斜め方向

に施文している。6は胴部下半から底部で、底部は算盤玉状となっている。底部の張り出し部には隆帯で区画し、帯状の文様帶内に楕円区画文を3単位施文している。区画内には沈線で、U字状の文様を交互に組み合わせて施文を行っている。隆帯上には刻みの他、楕円区画文と横方向の隆帯の接点部分に交互刺突文を、アクセントのように施文している。楕円区画内の沈線文にも、刺突文を施文している。底部は無文である。推定口径43cm、底径16.5cmである。

一面



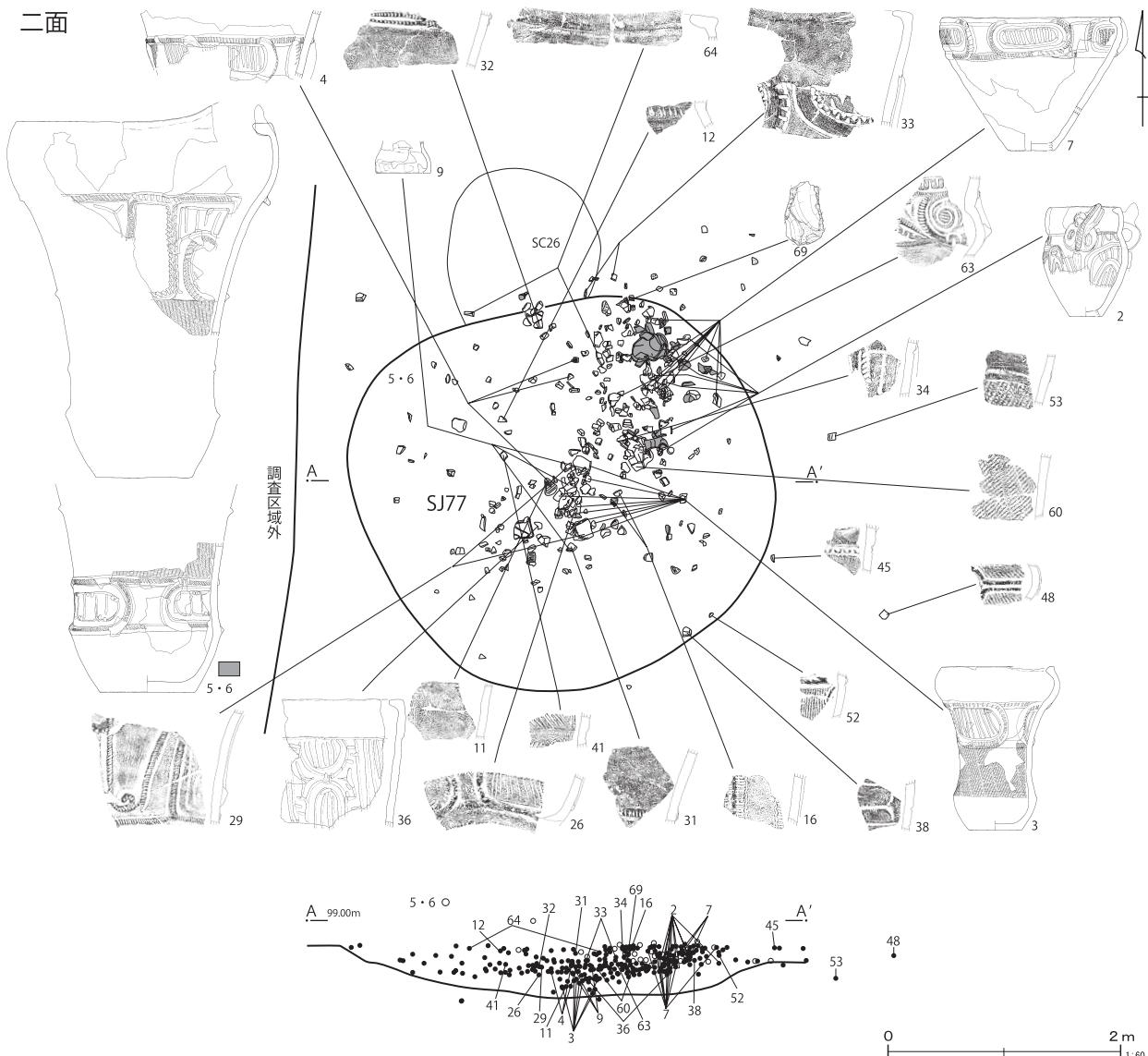
第335図 第77号住居跡遺物出土状況（2）

7・8は浅鉢形土器である。7は口縁部に文様帯を隆帶で施文し、楕円区画文を6単位施している。楕円区画文の隆帶の左辺は偏平に施文し、右辺を耳たぶ状に摘み上げている。区画内は楕円形状に沿って2重に沈線文を施文し、その内側を幅広の短沈線文を充填するが、短沈線文を結節沈線文に置き換える区画もある。楕円区画文間にも沈線文を施文し、区画化している。隆帶上には刻みを施すが、右辺に隆帶外側の側面に刺突文を加えている。器面は剥落が著しく、赤彩の有無は不明である。推定口径30.2cm、推定底径7.8cmである。

8は無文で、角頭状の口唇部下に狭い口縁部を持ち、胴部とは沈線で区画している。器面は剥落著しいが、内面のごく一部に赤彩の痕跡が認められる。推定口径48cmである。9は小型の深鉢形土器の口縁部である。口径9cmである。

第340図10～32、第341図33～59、第342図60～67は出土した土器である。

10～12は角押し状の結節沈線文などを施文する阿玉台系の深鉢形土器である。10は波状口縁部で、口唇部に刻みを施文し、それに沿って2列の結節沈線文を施文する。胴部には爪形文を施文し、そ



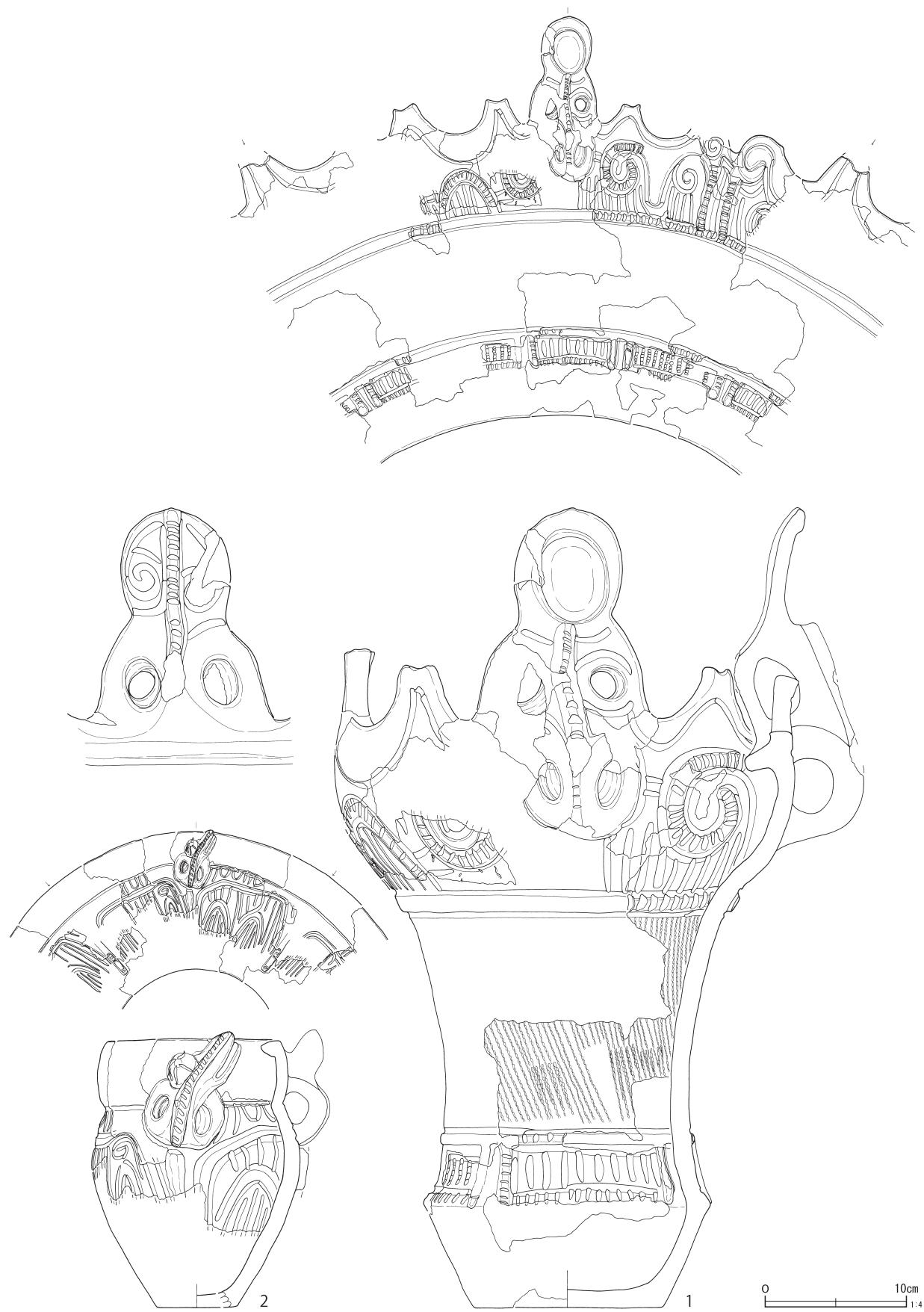
第336図 第77号住居跡遺物出土状況（3）

の下には2列の結節沈線による小波状沈線文を施文している。11は櫛歯状の条線で文様を施文している。12は爪形文を施文している。

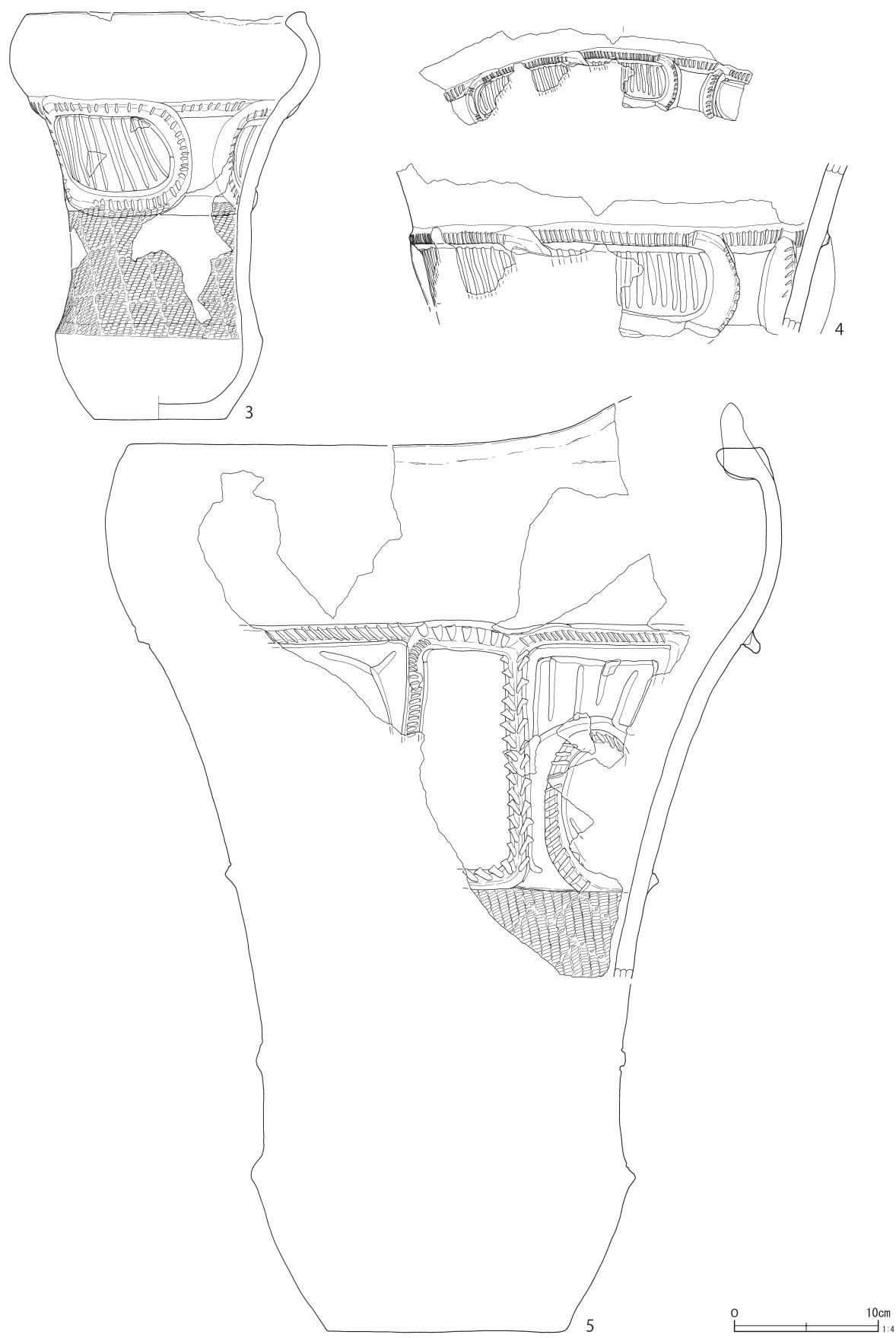
13~16、41・42は隆帶脇にキャタピラ状爪形文と、爪形文に沿って小波状沈線文や三角押文状のペン先状結節沈線文を施文する勝坂系の深鉢形土器である。41・42は地文を施文する土器で、41は胴部に多条R Lの縄文を横方向に施文している。42は器面にぞうり虫状の隆帯を貼付するもので、隆帯の周りをキャタピラ状爪形文で囲んでいる。単節R Lの縄文を斜め方向に施文している。

17は隆帶脇に半截竹管による平行沈線文を沿わせる勝坂系の深鉢形土器で、平行沈線文に沿って爪形文を施文している。爪形文には蓮華文や小波状沈線文を沿わしている。

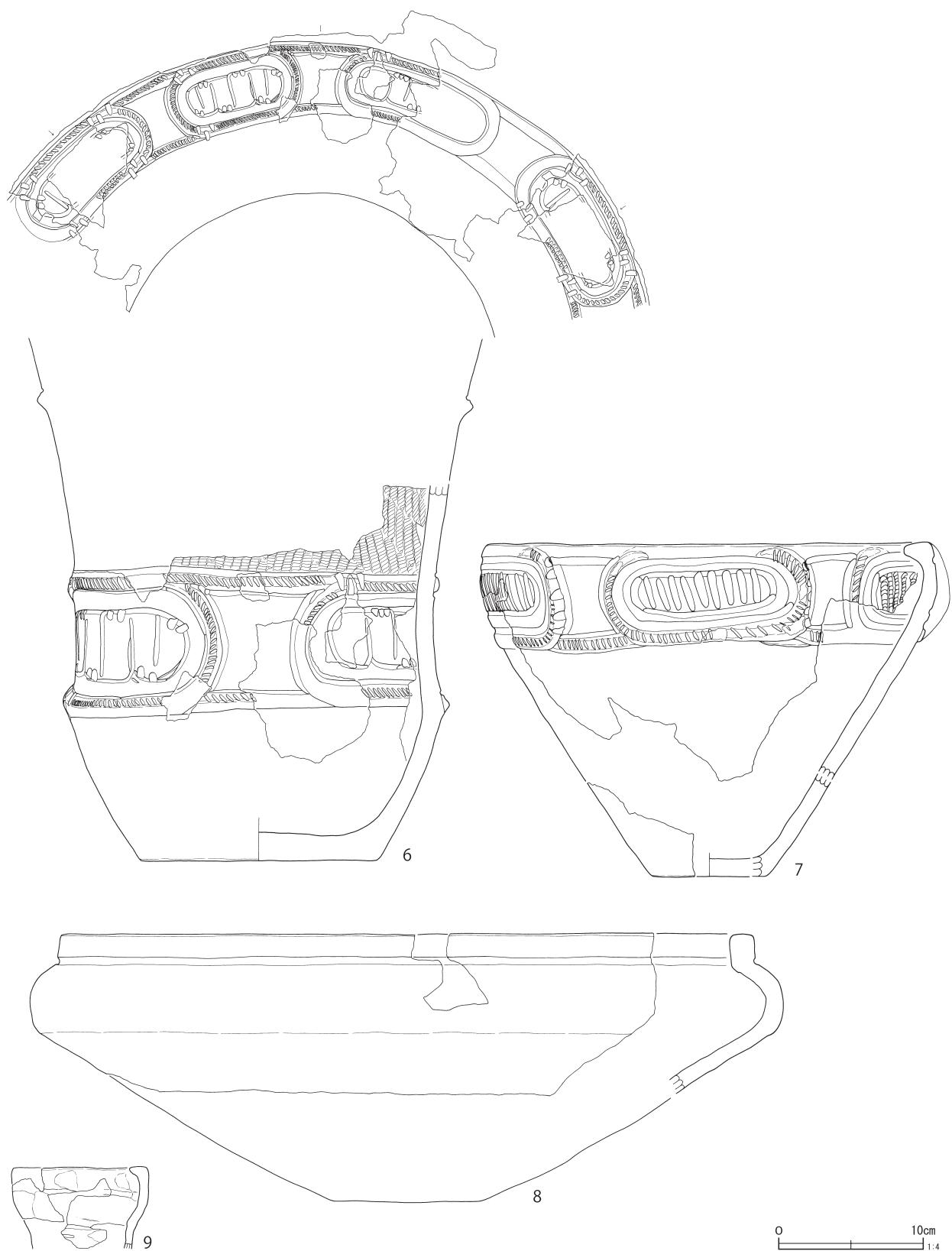
18~46は隆帯に刻みを持ち、隆帶脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器群である。18~32は隆帯に、刻みを持つものである。18は隆帶脇の沈線文に沿って爪形文を施文し、爪形文に沿って小波状沈線文を施文している。19は把手部分の破片である。20・21、24は隆帯による区画内に三叉文など



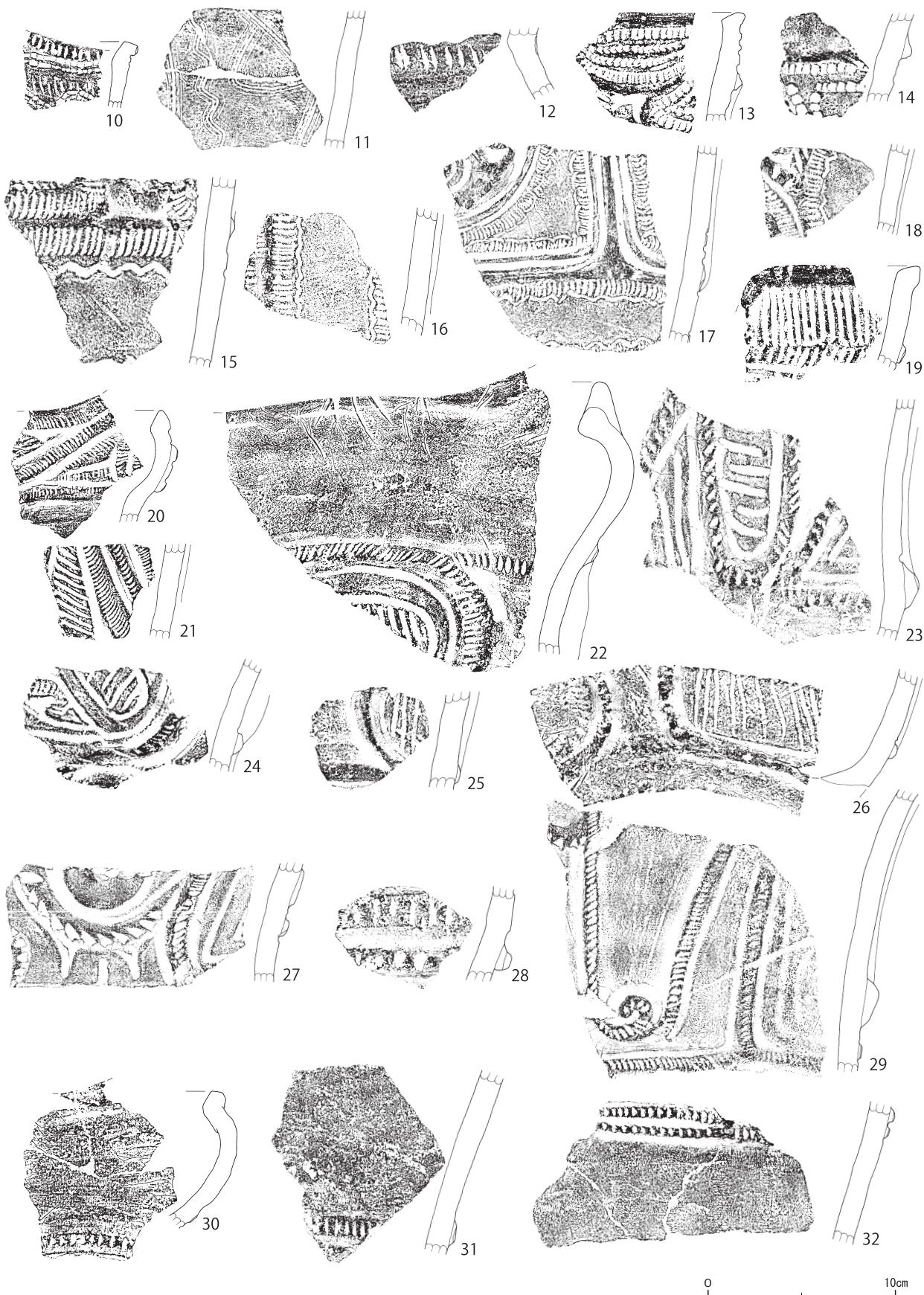
第337図 第77号住居跡出土遺物（1）



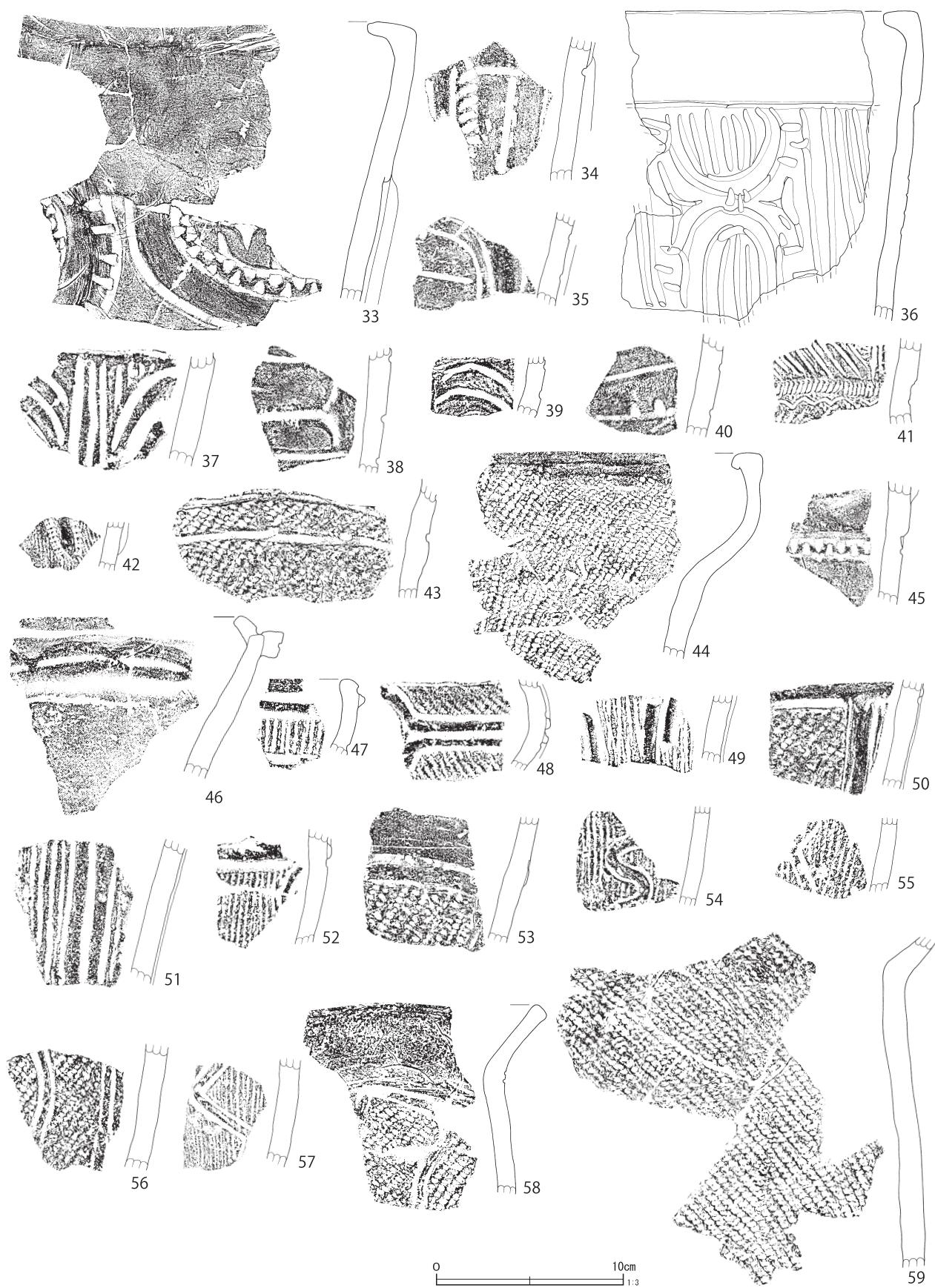
第338図 第77号住居跡出土遺物(2)



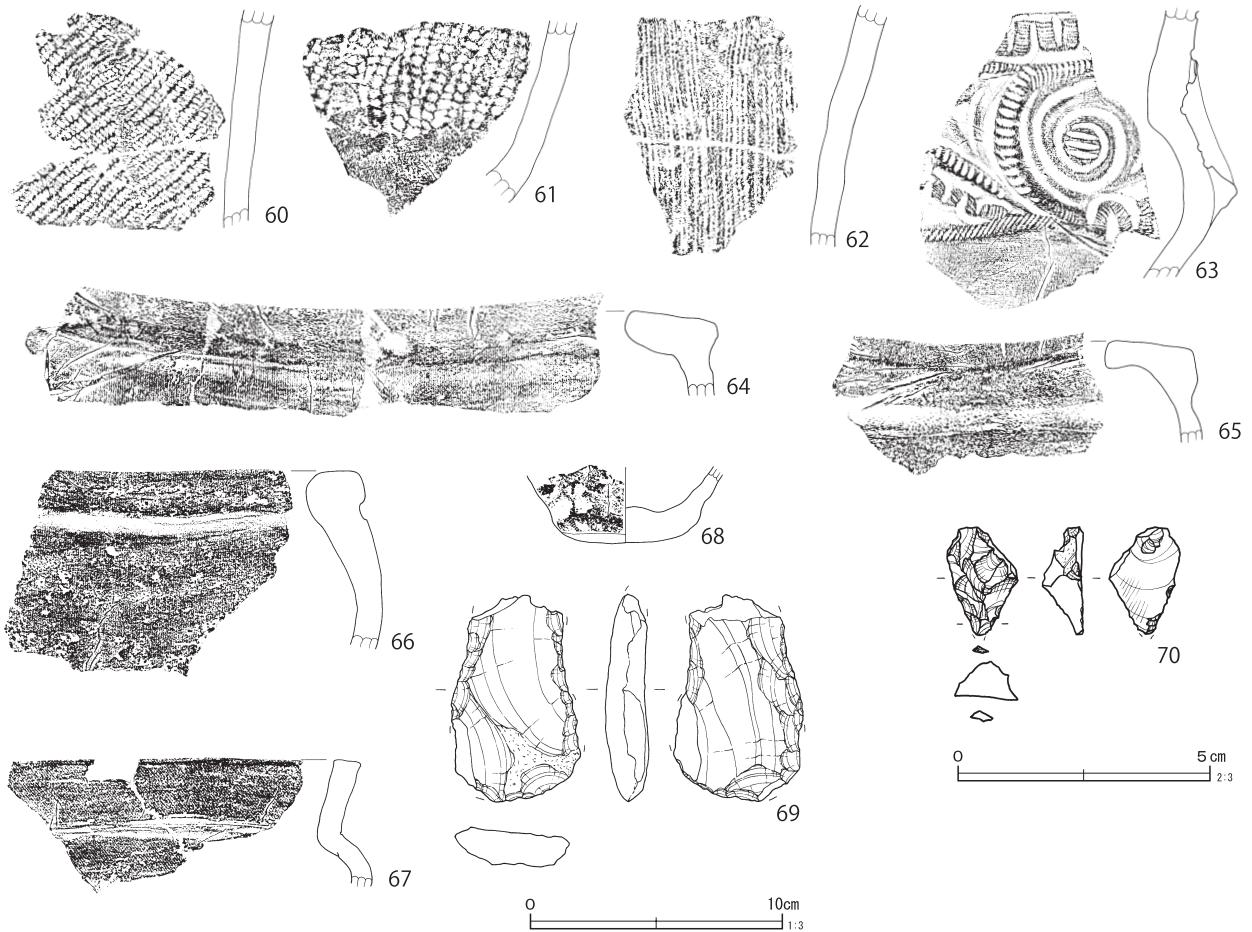
第339図 第77号住居跡出土遺物（3）



第340図 第77号住居跡出土遺物（4）



第341図 第77号住居跡出土遺物（5）



第342図 第77号住居跡出土遺物（6）

の沈線文を施し、沈線文間に細かい爪形文などを施す。20はキャリパー形土器で、口縁部の破片である。22・23、25・26は隆帯による区画内に短沈線文を充填するもので、沈線文間に文様は施していない。22は無文の内湾する口縁部を持つもので、頸部に楕円区画文を施している。26は底部に楕円区画文を施している。27～29は隆帯間の沈線文がさらに簡素化しているもので、27の隆帯には刺突文が施されている。30～32は区画のために刻みのある隆帯を巡らすもので、他は無文の土器である。30は内湾する無文の口縁部の破片である。33～35は隆帯上に刻みはなく、33・34は隆帯脇に刺突文を施している。36～40は沈線文を主体に施す円筒形の深鉢形土器である。43・44は、単節R Lの縄文を横方向に施す深鉢形土器の破片である。45・46は無文の土器で、

45は頸部の沈線文内に交互刺突文を施している。46は口唇下に隆帯を鍔状に貼付するもので、鍔の前面は波状に加工し、中央に短沈線を施している。

47～56は加曾利E系のキャリパー形の深鉢形土器の破片である。47・48は口縁部の破片で、47は撚糸文Lを縦方向に、48は多条R Lの縄文を横方向に施している。49～51、53は隆帯で懸垂文を施す胴部の破片である。49、51は撚糸文Lを、50、53は単節R Lの縄文を縦方向に施している。52、54～56は沈線で懸垂文を施す、胴部の破片である。52、54・55は撚糸文Lを縦方向に、56は単節R Lの縄文を、縦方向に施している。

57は条線を地文とする、曾利系の深鉢形土器の胴部の破片である。平行沈線文を鋸歯状に施すし

ている。

58は無文の開く口縁部と、丸みを帯びる胴部を持つ大木系の小型の深鉢形土器で、口縁部と胴部は沈線文で区画し、胴部には蛇行懸垂文などを沈線で施文している。

59～62は地文のみを施文する深鉢形土器の胴部の破片である。59は複節L R Lの縄文を、60は多条R Lの縄文を、61は単節R Lの縄文を施文している。62は条線を地文としている。

63～67は浅鉢形土器の破片である。63は屈曲する肩部に文様を施文するものである。64～67は無文である。

68は手捏土器の底部である。底径5.7cmである。

第342図69・70は出土石器である。

69は打製石斧である。基部と刃部の一部を欠損している。

70は石錐である。錐部の先端は欠損している。

住居跡の時期は、出土している遺物から、勝坂式終末加曾利E式初頭と考えられる。

第78号住居跡（第343～347図）

J-5グリッドに位置する。住居跡西側の半分以上が調査区域外で、検出することができなかった。床面は水平に作られ、壁溝は検出されなかつた。平面形は円形に近いと残存部から推測される。検出された部分の規模は長径4.32m、短径1.68m、深さ0.51mを測る。

柱穴や炉跡は、調査区域外に所在すると考えられ、検出することはできなかつた。

住居跡の範囲内には、多量の遺物が検出された（第344図）。遺物は残存する住居跡の中央に遺物が集中して検出された。土器については、器形復元することができたものは、ほとんどなかつた。

第345図1・2は、器形復元することができた土器である。

1はやや外反する無文の口縁部が括れ、その下に内湾する無文部を持ち胴部に到る土器で、残

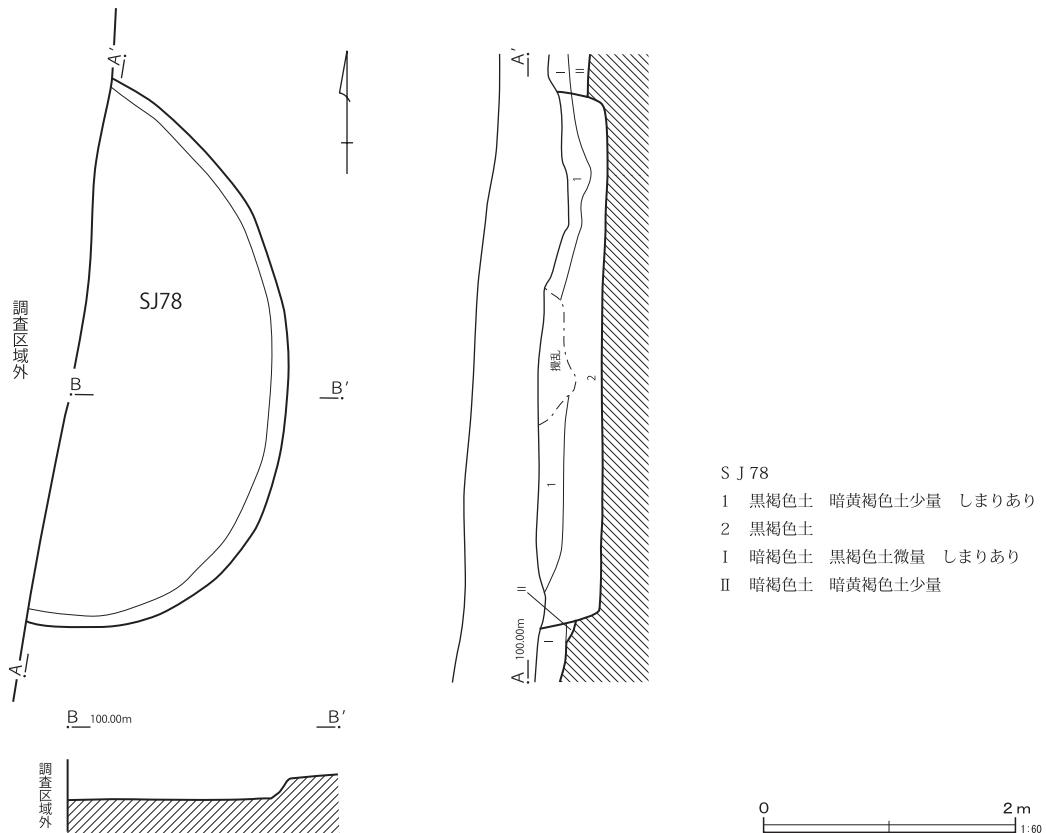
存している胴部の形状から、底部は算盤玉状になると推測される。口唇部は内屈し面を持つもので、上面の一箇所に小突起状の盛り上がりを貼付している。口縁の括れ部には、隆帶を1本巡らしている。隆帶の上下に交互刺突文を施文するが、部分的に、隆帶上に刺突を施している。括れ部下の内湾する無文部と胴部とは、刻みを施す隆帶を1本巡らして区画している。括れ部と胴部区画の隆帶間を4分割するよう、4単位の隆帶を垂下させ胴部側と繋げている。4単位の内3単位は、1本の隆帶を垂下させるが、1単位は楕円区画状に隆帶を施文すると考えられる。3単位の垂下させた隆帶は端部を円文状に施文し、2単位は隆帶上に矢羽根状の刻みを施し、円文上には刺突を施文している。1単位の隆帶上には、何も施文されていない。胴部には単節R Lの縄文を斜めから縦方向に施文している。口径23.4cmである。

2はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部である。口唇部には刻みを入れている。口縁部は刻みを持つ隆帶を半円状に口縁部に連結して貼付し、楕円状の区画文を施文している。楕円区画内には沈線によるU字文などを施文し、沈線に沿った形状で爪形文を充填している。楕円区画文間には、縦方向の短沈線を充填している。頸部は狭い無文帯を持ち、頸部と胴部の区画に隆帶を巡らし、隆帶脇の沈線に沿ってキャタピラ状爪形文を施文している。推定口径18cmである。

第345図3～21、第346図22～48、第347図49～78は、出土した土器片である。

3～9は角押し状の結節沈線文などを施文する土器で、阿玉台系の土器を含んでいる。いずれも深鉢形土器の破片である。3・4は結節沈線文を施文している。5・6、8は櫛歯状の条線を施文している。7は口縁部の把手部分で、把手の端部には押捺状の刺突が施されている。9は爪形文を横方向に施文している。

10～18、40は隆帶脇にキャタピラ状爪形文と、



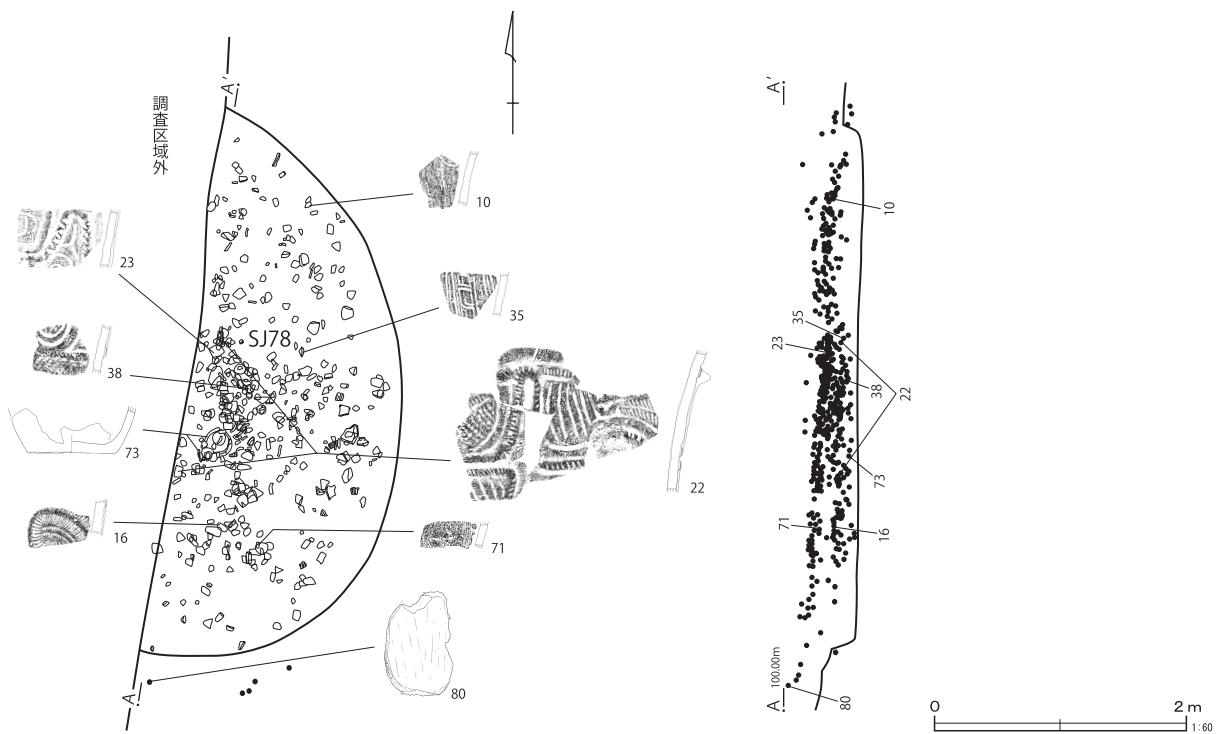
第343図 第78号住居跡

爪形文に沿って小波状沈線文や、三角押文状のペン先状結節沈線文を施文する勝坂系土器である。深鉢形土器の破片である。10・11は三角押文状のペン先状結節沈線文が残存する。12・13は隆帯脇に爪形文のみが施文されている。40は地文を施すもので、単節R Lの縄文を横方向に施している。

19~36、38・39、42~48、60は隆帯に刻みを持ち、隆帯脇に沈線文を施文する勝坂系土器を主体とする、勝坂式終末から加曾利E式初頭の深鉢形土器である。19~27、38は隆帶上に刻みを施文する土器で、隆帯脇の沈線文に区画された文様内に、沈線文や刻みや結節沈線文などを充填する土器である。20は隆帯脇の沈線に沿って、爪形文や小波状沈線文、蓮華文を施文している。23は隆帶上の刻みが、交互刺突文に代わっている。38は胴部に地文を施文するもので、器面が劣化して明瞭ではないが単節R Lの縄文を縦方向に施文している。28は把手部分で、器面から剥落したもので、橋状に作られている。29~33、39、60は隆帶上に

刻みがなくなるものである。29、32は隆帯脇に刺突を加えている。区画内の文様も簡素化し、33や60は隆帯のみが施文されている。39は胴部に地文を施文するもので、多条R Lの縄文を条が垂直になるよう、原体を斜め方向に施文している。34~36は沈線文のみが施文される円筒形土器の胴部破片である。42はぞうり虫状の貼付文を施文するもので、地文として単節R Lの縄文を横方向に施文している。43は小波状沈線文を2条施文し、その内側は無文となっている。地文として単節R Lの縄文を横方向に施文している。44~46は無文の口縁部を持つものである。44は口縁が内湾している。45・46の口縁は外反している。47・48は口縁部下に、交互刺突や刺突を加える隆帯を貼付するものである。

37、41、49~59、61・62は加曾利E系の深鉢形土器の破片である。37、41、49~58は口縁部の破片である。口縁部には隆帯でS字文や渦巻文が施文される。37は口縁部の隆帯に矢羽根状の刻



第344図 第78号住居跡遺物出土状況

みが入る。頸部に無文帯はない。49は口縁部に波状の突起を貼付している。55は頸部に無文帯を持たない土器である。地文として、37、50~57は撲糸文Lを施文している。37、50・51は口縁部は横方向に施文するもので、50・51の胴部は縦方向に施文している。他のものは縦方向に施文している。41は多条R Lの縦文を横方向に、58は単節R Lの縦文を縦方向に施文している。59は口縁部から胴部の破片で、頸部に無文帯はない。地文は多条R Lの縦文を縦方向に施文している。61・62は胴部の破片で、隆帯によって懸垂文を施文している。地文は撲糸文Lである。

63は曾利系の深鉢形土器の口縁部の破片である。重弧文系の土器である。

64~71は地文のみを施文する深鉢形土器の胴部の破片である。64は撲糸文Rを、65、67は撲糸文Lを、67・68、70は多条R Lの縦文を、69は多条

L Rの縦文を施文している。71の地文は条線である。

72・73は深鉢形土器の底部の破片である。73は無文の底部で、底径は10.5cmである。

74~78は浅鉢形土器の破片で、74は口縁に刻みを施文し、口縁の形状に沿って結節沈線文を施文している。75は爪形文とそれに沿って蓮華文を施文している。76は屈曲する肩部に斜め方向に沈線を施文している。

第347図79・80は出土した石器である。

79は石鏃である。右脚部を欠損している。基部には逆V字状に深い抉りを入れている。

80は砥石である。側縁の一部に敲打痕が認められる。

住居跡の時期は、出土した遺物の主体的な時期から、勝坂式終末から加曾利E式初頭の時期と考えられる。